

## DI者の権利擁護 ナラティブ・アプローチによる人権侵害からの解放

著者	宮嶋 淳
学位授与大学	東洋大学
取得学位	博士
学位の分野	ソーシャルワーク
報告番号	甲第248号
学位授与年月日	2010-03-25
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00005538/">http://id.nii.ac.jp/1060/00005538/</a>

## V. DI 者の解放のための理路の構築

### —DI 者を取り巻く人的環境に対する調査からの示唆—

本論は、DI 者へのインタビューを通して得た、DI 者の発話を分析するという質的研究の手法をとり、その理論的基盤として社会構築主義の立場をとることを標榜している。各調査の結果を考察する前提として、社会構築主義とは何かを再度確認しておきたい。

K・J・ガーゲン(2004: 62)は、社会構築主義の前提を①世界やわれわれ自身を説明する言葉は、その説明の対象によって規定されない、②世界やわれわれ自身を理解するための言語や形式は、社会的産物である。すなわち、歴史的・文化的に埋め込まれた、人々の交流の産物である、③世界や自己についての説明がどのくらいの間支持されるかは、その説明の客観的妥当性ではなく、社会的過程の変遷に依存して決まる、④言語の意味は、言語が関係性のパターンの中で機能するあり方の中にある、⑤既存の言説形式を吟味することは、社会生活のパターンを吟味することに他ならない、としている。そして、社会構成主義は、「自己」概念から「関係性」概念への脱構築であるとし、「頭の中の知」という常識を超えて、「関係性が現実を作る」ことを主張する関係性理論の立場から、人が多様な他者と多様な関係性の中でアイデンティティを形成していくものであり、アイデンティティの確立を「関係性による達成」と捉えている。

本論の考察は、DI 者の発話によって DI 者の「自己」概念を明確にし、そこから構成される多様な「関係性」を、DI 者の発話によって再構築していく視座からすすめていくものである。換言すれば、DI 者が自ら「DI 者である」と知ることによって、「DI 者としての物語」が始まり、そこから「脱構築—再構築」を経て、「DI 者固有の新しい物語」が構成される。この DI 者自身によるオルタナティブ・ストーリーがいかなる関係性を構築し、構築させようとしているのかを明らかにし、ソーシャルワークがここで構築されようとしている新たな関係に、いかに寄与していけるのかを考察していくものである。

前章で得た「DI 者の苦悩が人権侵害である」という結論を吟味するため、本章では5つの調査の結果から考察を行っていくものである。第3・第4調査では、DI 者へのインタビューを継続させ、第2調査を実施した時点から DI 者の発話がいかに変化したのか、あるいは変化していないのかに焦点をある。そして、DI 者自身がセルフ・ヘルプ・グループに対して行った国際的な調査の結果についても二次的調査として位置づけ分析する。第5・第6調査では日米の対人援助職のレスポンスを分析する。第7調査では、DI 者からみて第三者であるにとらえられる者に対する量的調査を実施し、それらの認識を問うている。



## 1. DI 者の発話の変化に関する調査

この節では、2つの質的調査と1つのワークショップ実践の記録を検討する。

### (1) 日本のDI 者の声の変化（第3調査）

DI 者は、自身の出生の真実を秘密にされたまま育てられ、出自を知る権利が奪われている。成人してその事実を知った時、自らのアイデンティティが崩れ、苦悩は大きい。AID という医療では子どもの知る権利が奪われ、親も医療者も社会もこれを放置してきた。親がDI で生まれたことを子どもに明かしていないので、アクセスできる当事者は少なく、この研究はその少ない当事者へのインタビューに成功しており、その問題の本質に迫ることを試みた。

「調査の目的、対象及び方法・手順、調査上の留意点」については、「Ⅲ. 研究の方法 2. 調査の枠組み (5) 第3調査」で示した。

#### 1. 調査の結果

6回にわたるDI 者へのインタビュー調査から得た発話のうち、「対社会」「対親」「対自己」に対して投げかけられていると解釈できる発話を取り上げ、その意味・内容並びに発話が発せられている方向性から吟味しセクション化し、さらに名づけを検討した。また、DI 者個々人と個々の発話を照合させることは、発話内容から個人が特定されるおそれがあるため、DI 者のプライバシーに配慮し差し控えた。

得られた結果のうち、分析上の必要から各発話には順に番号を付し、【名づけ】をおこなっている。具体的なデータは「参照データ③：DI 者の発話と【名づけ】」として示した。

#### 2. 結果の解釈

同一のDI 者に時期を隔てて繰り返しインタビューを行い、発話記録を作成した。6回にわたる各インタビューで得られたDI 者の発話は、発話が発せられた時期を発話記録の分析上の変数とし、DI 者の発話に包含された意味・内容・方向性の変化を検討していくこととする。

ここではDI 者が被っている人権侵害から、DI 者がいかに解放されていくのかに焦点をあてて結果の解釈を行う。それは、DI 者の変化のプロセスを把握することによって、ソーシャルワークが関わる焦点を明らかにすることが可能となると考えるからである。この際に重視したのは、ナラティブ・アプローチという「外在化」である。つまり、DI 者の自己認識の「外在化」がいかなる方向・構成で進展していくのかを、DI 者の発話から分析していくことで、ソーシャルワークの関わる焦点を明らかにしようとするものである。なお、DI 者を取り巻く社会状況にかかる考察は「Ⅱ. 先行研究調査」並びに前章で行っており、本節での考察においては、AID やART のトータルな議論や検討、その分析結果との照合については他論に委ねることとし、DI 者の発話の変化を射程とすることにする。

### ① 図V-1の図式化の意図と意味

本稿では、DI者の発話の質に着目し、たとえ1回であっても記録できた発話については、DI者自身の自己洞察や気づきの顕在化であると考え、図V-1上に反映させることとしている。なぜなら、わが国においてDI者の発話を記録すること自体が非常に稀なケースであり、本研究のようなアプローチによる研究が他に存在し得ないからである。さらにいえば、本論を継続させてきた2003年～2007年という時期は、人工生殖をいかにとらえ、生殖補助医療をどのように制度化していくのが、わが国で検討された、今後めぐり合わせるものない貴重な時期における研究成果であると認識するからである。図V-1を作成した意図は、第一に、筆者がDI者へのインタビューを何時実施し、どのような発話を記録したのかを明らかにし、その全体像を鳥瞰的に理解できることを目指した。そして、第二にDI者の語りが「外在化」し、かつ、語りの内容が深化していることを、視覚的に了解できるものとするためであり、さらに研究としての質と到達点を科学的な評価に耐えうるものとしていくことをめざしたものである。

### ② 図V-1の解説

ここでは図V-1に掲載したDI者の発話のうち、筆者の仮説に関係する、DI者を「社会的虐待」から解放する要素となり得る、当事者の語りの変化を図示したフローについてのみ、簡潔に筆者の視点を提示することとする。

#### 1) [発話1→2→3→4→7～11→60と61]について

この物語は、自らの悩みをありのままに聞き、自らの悩みを認めてくれる人に出会うまでの間に生じる、悩からはじまる。そして、自らの悩みの深刻さを認めてくれる人に出会うことにより、人を信じることができ(1～4)、物語を「言葉にすること」は、次の出会いを導き、ある種の「波」のような気持ちの変化に気づき、自分なりの到達点を明確な言葉で表現できるところに至る(7～11)。そして、「語り」続けることの必要性に気づく(60～61)。

#### 2) [発話5→12→21～23]について

第三者に語ることで自らの自己洞察や気づきが深まり、立場の違いに気づく(5～12)。養子とDI者とでは根本的な大きな相違があることをDI者自身が、養子のお話を聞くなかで自己洞察し、DI者の問題の固有性を明確にしていく(21～23)。

#### 3) [発話6→13→15→24～25→33→39→44～46と47～49→62]について

「怒り」は、親への助言へと変化する(6～15)。親と子の公平さを指摘するような物語が発せられている(24～25)。さらに、親子関係に関するDI者の物語は多用な表現で語られる(33～39)。自らの悩みを解決するための語りから、DI者という社会的存在の悩みを解決するための親子関係のあり方への語りへと一般論が語られるに至り(44～49)、第三者に語るとき、自らの悩みとDI者としての悩みが明確に区分されるようになる(62)。

#### 4) [発話16と17, 18と19, 20]について

DIという行為に対する「絶対反対」から、明快な理由を明らかにし、私を納得させて欲

しいという社会への注文へ（16 と 17），そして，否定的な反応を示す者からの回避が理解へと広がり（18 と 19），その広がりが明確な社会への助言として物語られている（20）。

5) 【発話 26 と 27～28→50～52】について

社会に対する受け止め方が二方向から語られている（26 と 27～28）。その後，DI を取り巻く環境が変化し，DI が「ポピュラー」になってきたと語る一方で，日本社会の変化が期待できないと語られ，かつ，社会への注文が語られている（50～52）。

6) 【発話 29→40～41】について

「人権」という言葉で自らの苦悩を言い尽くせるものではないと当事者は語る（29）。産む権利を主張するならば，生まれて来た子どもへの責任をはたすべきだと（40～41）。

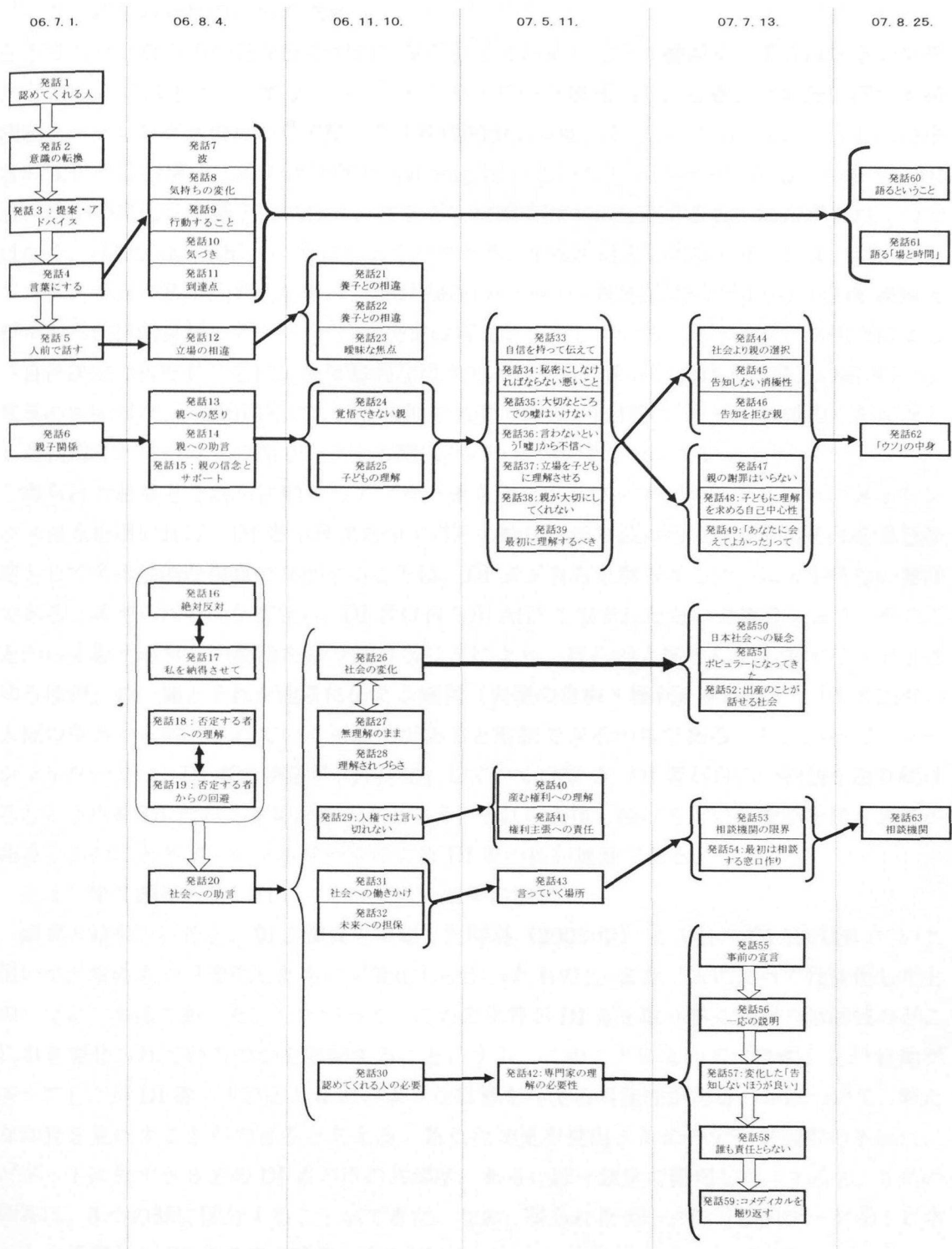
7) 【発話 31～32→43→53～54→63】について

全面的な反対ではなく，これから生まれてくる DI 児が自らと同じような苦悩を繰り返し経験することを避けるために，社会がすべきことへの提言へ（31～32）。社会がすべきことは，苦悩を受け止める相談窓口を作っていくことである（43，53～54，63）。

8) 【発話 30→42→55～59】について

認め，信じられる人に出会うまでの経験を踏まえて，これからも DI 者の声，語りを認めてくれる人が必要であり，専門家が DI 者の苦悩を理解する必要性を指摘（30，42）。医療現場で DI 希望者へのカウンセリングの仕方が変化し，医者が出自を知る権利や真実告知について説明するようになった。逆に医者も両親も誰も責任を取らなくなったので，専門家が DI や DI 者の苦悩に対する理解をし，コメディカルの意識を掘り返す必要があると語られている（55～59）。

図 V・1 に即して，DI 者の語りの変化を 8 つの領域に分解し概説した。これらの概説から，次のような新たな知見を得ることができ，これは更なる DI 者支援のために様々な示唆を含むものとなっていると考える。筆者が DI 者へのインタビューを繰り返していく中で，DI 者に関わる物語は，「対自己」から「対両親」へ，そして「対社会」へと広がり，確実に変化していることが明らかになった。また，その変化は物語の外在化であり，自己の物語から DI 者の物語へと一般化並びに客観化する傾向が認められた。



図V-1 DI者の発話の意味・内容・方向性の変化

### 3. 結果の考察のための視座

こうした「自らの物語を自らの力で変化させていく」という側面を、筆者はストレングスととらえておきたい。すなわち、ソーシャルワーク研究における価値と倫理に関する諸問題をストレングス視点から考察した小松(2000)が示唆したところによれば、こうした当事者の変化を社会構成主義では「強さ (strength)」とみなしているのである。つまり、DI 者の発話の変化を生態学的に捉え、さまざまな環境因子を分析することに力点をおくのではなく、「健康 (health)」に力点をおくのである。小松が紹介したウェイクによれば、ストレングス視点の基本的構成要素は、「疾病志向モデルから健康志向モデルへ」「発達・課題モデルから代替的見解モデルへ」「自己決定の再発見」としている。ストレングス視点による「自己決定の再発見」とは、全体論的な視点であり、自己決定における「活力の回復」「出来事の意味づけ」「援助過程における援助の強要の排除」「過程(プロセス)の重視」を要点とした利用者とワーカーの間で交互する関係という媒体であるとしている。

得られた結果とそれらに関わるアプローチをナラティブ・アプローチとともにストレングス視点を用いれば、DI 者が真実の中で自らの物語を語り続けること並びにそれを自己決定として全体論的な視点で支援することは、DI 者が自らを解放するために欠かせない要件であると考えられる。なぜなら、DI 者は自らが AID で生まれたという事実を知り、そのことから生起する自らの物語を語り続けることにより、自らの人権として主張する「出自を知る権利」の一部とそれを他者に伝える権利（表現の自由・権利）を回復し、DI 者固有の人権の侵害から解放されていく可能性があると解釈できるからである。したがって、ソーシャルワークは、DI 者の物語が「外在化」していく段階で、DI 者が自らの物語を語り続けるという点を DI 者のストレングスととらえ、それを支援し続けるという機能を担う必要がある。このことがソーシャルワークによる DI 者の権利擁護である。

### 4. 第3調査の7回目のインタビュー結果の解釈

調査の結果をみると、第2調査を実施した時点（2003年）で3名のDI 者が抱いていた思いが、現時点で「変化したもの／変化しなかったもの」、また「人によっては変化したもの」など、多様であった。したがって、この変化等がDI 者を取り巻く構図の諸領域のどこに引き寄せられているのかを考察することにする。このことによって「時間」と「自助グループ」とがDI 者一人ひとりにどのような影響を与える可能性があるのかについて、新たな知見を見出すことができると考える。新たな知見を見出すためのデータ分析の手順は、ビネットに対する3名のDI 者の声の共感度、あるいは一致度で整理した。すると、3名の回答は、3つの群に区分することができた。なお、得られたデータは「参照データ④：ビネットを活用したDI 者の声の変化」として示した。

第1群は、回答が困難、あるいは応える術を持たない設問群であり、この第1群については、設問としての妥当性を欠き、削除した上で考察を進めることが望ましいと考えられるビネット No18&19&22 である。

第2群は、3名の回答が「完全に一致」または「ほぼ一致」しており、回答者が記述し



た、選択上の理由を加味すると、3名の回答の共通項が見出せるものである。第2群に分類できるビネットは、表V-2で整理したとおりである。表中左の列から順に[NO=第5調査の設問5のビネットに付した番号と共通]し、[質問項目=ビネット]であり、[回答=3人のDI者が選択した、選択肢の番号]で、便宜的に左から順に昇順で並べた。そして、[選択に対する理由(条件)を加味したビネット]欄が、ここでの考察のポイントとなる。下線部・イタリック体で表示した部分が、DI者の記述した「理由」の趣旨のうち、当初用意したビネットには見当たらなかった部分である。

表V-1中には、3人の回答が一致し、かつ、回答が「1」であるビネットは、[真実告知から数年という時間の経過に左右されることのないビネットであるといえる ([3 & 6 & 17 & 24])。また、3人のうち一人が異なる、または3人とも不一致な回答を寄せていながら、その回答理由をみると、ビネットを部分的に加筆修正することにより、3人の意向が一致していると判断できるビネットは、[1 & 2 & 4 & 5 & 9 & 10 & 12 & 14 & 16 & 21 & 23 & 26 & 27]の13項目に及ぶ。

DI者の回答理由を加味して修正した表V-1中のビネットの下線部・イタリック体部分を抽出し、その意味を手繰って見ると、まず2つに分類することができる。第1に他者に関する認識であり、第2に自己に関する認識である。

表 V-1 回答者の選択上の条件を加味した結果

NO	質 問 項 目	回答			選択に対する理由(条件)を加味したビネット
17)	母親は、真実を告げなかった理由を「子どもが知ったら可哀想」と言っていますが、同意できません。	1	1	0	母親は、真実を告げなかった理由を「子どもが知ったら可哀想」と言っていますが、同意できません。
24)	いろいろと考えたことを聞いてもらおうと、気持ちが楽になることがあります。	1	1	1	いろいろと考えたことを聞いてもらおうと、気持ちが楽になることがあります。
14)	両親は、私が A I D で産まれたという事実を隠して「ウソ」で生きてこられたのです。	2	1	1	<u>家庭での生活がすべてウソの上に成り立っていたとは言いきれないが</u> 、両親は、私が A I D で産まれたという事実を隠して「ウソ」で生きてこられたのです。
3)	医者は、配偶子提供を希望するカップルに、「真実告知」の必要性を説明するべきです。	1	1	1	医者は、配偶子提供を希望するカップルに、「真実告知」の必要性を説明するべきです。
6)	カウンセラーやソーシャルワーカーは、「DI者の怒り」を受け止めてくれる人であってほしい。	1	1	1	カウンセラーやソーシャルワーカーは、「DI者の怒り」を受け止めてくれる人であってほしい。
4)	医者は、配偶子提供を希望するカップルに、医療がやるべき「アフターケア」について、説明すべきです。	2	1	1	医者は、配偶子提供を希望するカップルに、医療がやるべき「アフターケア」について、 <u>どこまでできるか疑問ではあるが</u> 、説明すべきです。
26)	「親子のつながり」という言葉に「ビクッ」としてしまうくらい、いつも敏感になっています。	2	1	1	「親子のつながり」という言葉に、 <u>例えば</u> 「ビクッ」としてしまいうくらい、いつも敏感になっています。
2)	配偶子提供で産まれたということは、本人にしかわからない、体験です。	3	1	1	配偶子提供で産まれたということは、本人にしかわからない体験である部分と <u>そうでない部分がある</u> 。
23)	私は「ウソ」を感じながら「親子」のそぶりはできないと感じています。	3	1	1	私は「ウソ」を感じながら「親子」のそぶりはできないと感じるし、 <u>「親子」のそぶりは苦しい</u> 。
21)	A I D のことを知ってから私は、家族に気を遣いすぎて、自分を失くしていました。	2	2	2	A I D のことを知ってから私は、家族に気を遣いすぎて、自分を失くして <u>しまいそうでした</u> 。
27)	A I D で生まれたことを知ってから、自分のことがわからなくなることがあります。	2	2	2	A I D で生まれたことを知ってから、自分のことがわからなくなることが今もあるが、 <u>コントロールもできます</u> 。
1)	AIDは、私の親を「自信が持てない親」にしてしまった。	3	2	1	<u>はっきりとしたことは言えないが</u> 、AIDが私の親を「自信が持てない親」にしてしまった <u>かもしれない</u> 。
12)	父が「妻とせめてつながっていれば良い」というのは、口先だけじゃないのかと思います。	3	2	1	<u>はっきりとしたことは言えないが</u> 、父が「妻とせめてつながっていれば良い」というのは、 <u>子育てを放棄したという事実から</u> 、口先だけじゃないのかと思います。
16)	A I D は、夫婦の関係が壊れていくきっかけを作ったと感じています。	3	2	1	<u>それがすべてかどうかは判断できないが</u> 、A I D は夫婦の関係が壊れていくきっかけを作ったと感じています。
9)	AIDのことを話すと、「聞かなかったことにする」という態度をとる人がおり、悲しくなります。	3	2	1	AIDのことを話すと、「聞かなかったことにする」という態度をとる人がおり、悲しくなり、 <u>かつ、悔しさを感じます</u> 。
10)	AIDの話を2度すると、「その話はもういいよ」と聞いてくれない人がおり、諦めを感じます。	3	2	1	AIDの話を2度すると、「その話はもういいよ」と聞いてくれない人がおり、諦めを感じます。 <u>が、広めていく必要も感じます</u> 。
5)	カウンセラーやソーシャルワーカーが、「DI者の苦悩」が理解できない人では困ります。	6	1	1	カウンセラーやソーシャルワーカーは、「DI者の苦悩」を <u>理解し、傾聴し、共感</u> できない人では困ります。



他者に関する認識に関しては、「はっきりとしたことは言えないが、どこまでできるか疑問ではあるが1)&4)」「はっきりしたことは言えないが 12)」「それがすべてかどうかは判断できないが 16)」「家庭での生活がすべてウソの上に成り立っていたとは言い切れないが 14)」が抽出できる。これらの記述の意味の共通性を概念化すると、他者との関係に関する受け止め方が断定的ではなくなっていると解釈できる。また、援助者に対しては理解に加え「傾聴し、共感5)」が追加され、求めていることが明確化していると解釈できる。さらに他者から向けられている感情に対して「侮辱されている 9)」という深いレベルでの感情が明確化されているのと同時に、「が、広めていく必要も感じます 10)」と社会化されている。つまり、向けられている感情の受け止め方が深化し、かつ外的な働きかけの方向が明確化していると解釈できる。

自己に対する認識では、「そうでない部分がある2)」「例えば(26)」と表現されているように、自己に対する認識が多様化している。そして、「[親子]のそぶりは苦しい 23)」「失くしてしまいうそでした 21)」「コントロールもできます 27)」と、自己が抱える苦悩への対処方法を自ら見出していることがわかる。

表V-2 回答者の置かれた立場や状況で変化する項目

NO	ビネット	回 答		
7)	「結婚を考えていない人」は、DI 者のことを理解してくれません。	5	3	3
8)	「子ども望んでいない人」は、DI 者のことを理解してくれません。	5	3	3
11)	AID は、「親子＝同居」という考え方に納得できない、深い怒りの原因になりました。	5	3	2
13)	AID のことを知ったとき、「血がつながってなくて良かった」と思いました。	5	2	1
15)	AID を了承した父親が、本当に望んでいたのかを聞いてみたい。	5	2	1
20)	私は、生物学上の父がわかるまで、結婚できないと思っています。	4	3	0
25)	自分を否定したくなることがあり、そこで足踏みしていることが歯がゆいのです。	5	2	1
28)	誰かを愛することができたら楽なのに、誰も愛せないのです。	5	2	1
29)	私のドナーが、突然、目の前に現れたらと想像すると、眠れなくなることがあります。	5	3	1

第3群では3名の回答者の置かれた立場や状況により、回答が変化すると考えられるものである(表V-2)。表V-2の回答が三者三様であった理由を、回答そのものに戻って確認しておけば、次のような特徴が読み取れる。すなわち、ビネット7&8&11&20は、「結婚」「子ども」「親子＝同居」がキーワードのなっており、「DI者である」というよりも一個人としての結婚観や子ども観、出会いの集団関係により左右された回答となっている。ビネット13&15については回答者が、育ちや家庭の状況との関係に関わる意味が含まれていると解しており、各々の育ちの状況が影響していることが理解できる。ビネット25&28&29については、ビネットの表現上の課題が浮き彫りになった回答となっている。ビネットに表現されていることを表現どおりに受け止めれば、[否]という回答が浮かび上がり、類推することにより[是]であったり、あり得るという回答になっている。この点については心理学

上の課題であると考えてるので、今後の課題としておきたい。

このように考察してみると、29 項目にわたるビネットには、①時間を経過しても変化せず、DI 者の思いとして共通するもの、②何らかの理由で変化し、部分的に条件を加味すると、DI 者の思いとして共通するもの、③DI 者の発話として記録されたが、その内実としては個人的な価値観や育ちに影響を受けており、DI 者の思いとして共通しているとは言い難いものの3つに分類できる内容が含まれていたと解釈できる。したがって、DI 者の発話は少なくとも上記の①～③に区分できる内容を混合して発信される段階とそれが整理されていく段階、さらには整理されたことを自らが自覚している段階とに区分される、物語の整理の過程をたどる可能性がある。そうであるとすれば、DI 者自身やそのセルフ・ヘルプ・グループ (Self-help Group. 以下「SHG」と略す.) が仲間に共通する固有の人権とは何かを明確にし、明確となった人権の確立を求めて、SHG の役割を果たされていくことが尊重されなければならない。このような観点からソーシャルワークは SHG と関わりをもつことが望ましいと考えられる。

#### 5. SHG に関する補論

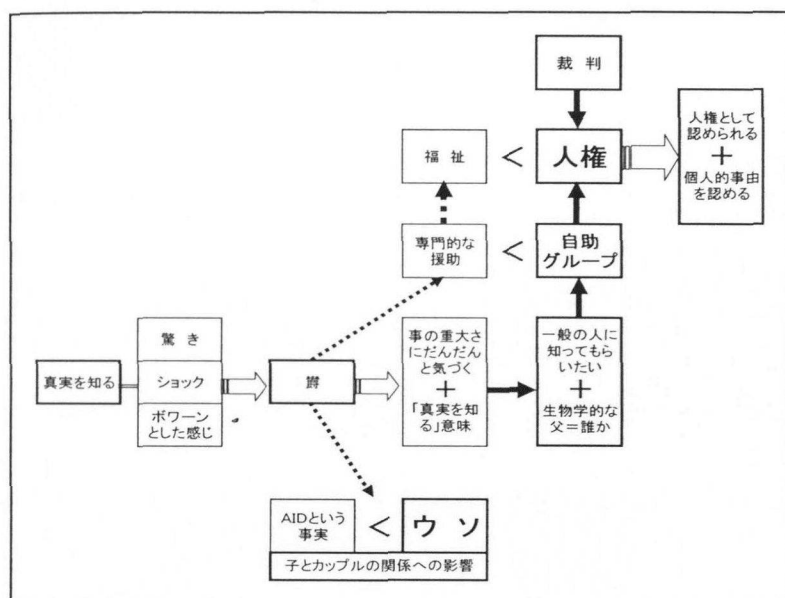
才村(2008)は、2007 年 9 月に T・エリスと D・ゴランツにインタビューしている。その記録は、「参照データ⑤：才村によるイギリスでのインタビュー記録 (抜粋)」で示した。才村によるイギリスの DI 者の声の構造を分析してみると、図 V-2 のようになる。これを考察してみると、次のようになる。

DI 者は、自らが AID で生まれたという真実を知ることにより、「驚き」「ショック」「パワーlessnessとした感じ」を抱き、鬱症状を呈することがある。そして、時間が経つにつれ、「事の重大さにだんだんと気づく」とともに「真実を知る」意味を深く考えるようになる。その気づきの1つが、自らが鬱症状を呈した理由は、自分が AID で生まれたという事実によるよりも家族だと思っていたカップルから「ウソ」をつかれていたことだと感じている。2 つ目に鬱症状に対して、専門的な援助を求めたところ、専門的な援助より同じ悩みを持つ人々による自助グループのほうが自分の気持ちに寄り添ってくれると感じている。第 3 に「真実を知ること」の意味には 2 つの要素が含まれており、1 つが「生物学的な父が誰なのか」を知ることであり、もう 1 つが DI 者の立場・苦悩・存在そのものにかかる真実を「一般の人に知ってもらいたい」というものである。

さらにその思いは、専門的な援助が「福祉」と呼べるものであるとすれば、SHG によるサポートは「人権」への寄り添いであると評価している。そして、自分自身や SHG の求めは、DI 者の人権が認められることであり、認めてもらうためには裁判という手段を用いることもある。なぜなら、裁判とは、人権を認めるという段階と、人権に関する個人的な事由を認めるという段階があるからである<sup>1</sup>。

このような DI 者の発話の構造は、図 V-1 の中で、左から右に真実を知ってからの時間が流れるにつれ、インタビューに答えている DI 者個人の思いから、DI 者の思いを社会化し、DI 者すべての思いを代弁するように普遍化した広がりを持つに至っているのである。この

ようなDI者の思いの社会化・普遍化・広がり、DI者の物語を自己とカップルの物語だけにとどめず、さまざまな情動が醸し出される時を経て、内的な物語から外的な物語へと変化させている。つまり、ナラティブ・アプローチという「外在化」がなされていくのである。DI者のナラティブは、DI者が「真実」を知る前と後では大きく異なることはここまでの本論による考察で明らかとなっているが、「真実」を知った後の物語も日々変化していくことがわかる。その変化の要因はさまざまであるとしても、DI者の発話によれば、専門家の援助より、SHGのサポートによって変化がもたらされていると認識されているのである。SHGに関する検討は、わが国でのDI者のネットワークの構築が2010年1月現在、検討されていることに鑑み、今後の課題とする。



図V-2 イギリスのDI者の声の構造

## 6. 変化をもたらすもの

上記「②何らかの理由で変化し、部分的に条件を加味すると、DI者の思いとして共通するもの」に関する「何らかの理由」とは何か。その応答として「人間が変化する」というソーシャルワークの立場がある。ソーシャルワークの人間観として一定程度、認知を得ているプトゥリウムの人間観によれば、人間は生涯にわたり変化すると考えられている。

「人間が変化・発達する」という観念は、発達心理学でいう愛着理論からも提唱されている<sup>2</sup>。また愛着を補完し、環境の機能を重視する理論にソーシャル・ネットワーク理論がある。ソーシャル・ネットワーク理論では、人間関係の多様化に着目し、愛着が変化することを認めるならば、「他者」がいれば、愛着の再構築が可能であるとする。すなわち、愛着に失敗し、自分らしさを見失うアイデンティティ・クライシスが生じている者においても、アイデンティティの再構築は可能であるとする。M・ルイス（2007：20）は、仲間の役割を次のように指摘する。仲間関係は社会的な技能・能力の発達において最も重要な

ものであり、仲間は伝達したり、攻撃したり、防衛したり、協力したりするスキルをゆっくり丁寧に作り上げていく機会を与える。その意味で、真実を知る前後では、DI 者にとって「仲間」との関係が劇的に一瞬に変化する。「真実告知（秘密の漏洩）」は、仲間関係をも崩壊させかねない。また逆に、DI 者の SHG は劇的なエンパワメントを獲得する可能性がある。人間は変化する。これが真実であるとすれば、その変化を起こす要因の 1 つに、SHG のダイナミクスにあるらしいことが、才村の調査結果並びに諸理論から推察される。

DI 者へのナラティブ・アプローチによるソーシャルワーク実践は、わが国において未だ成立していない。また、未だ DI 者の姿が社会化もされていない。

次節では、解放された DI 者像を求めて、米国での DI 者調査の結果を分析していく。

## (2) アメリカのDI 者の声 (第4調査)

### 1. [第4調査の1] の結果

2007年8月に筆者が実施した、アメリカにおけるDI者へのインタビュー調査の結果を報告する。

#### 1. 背景並びに概要

アメリカ社会は、一人ひとりの自由を最大限に尊重する社会である。アメリカ社会でいう一人ひとりとは、生存している人間を指しており、胎児を「人」と認めているわけではない。すなわち、アメリカ社会においては胎児やヒトの萌芽と呼ばれる受精卵、胚並びに母親の子宮に着床した直後の[生命]を法的に保護するべきであるという認識は、女性のリプロダクティブ・ライツ・ヘルツとの対比の中で少数者の認識である。また、アメリカ社会では合衆国という連邦の法律と各州の法律との間に齟齬が生じていることも稀ではない。

こうした先行研究による見識を参照した上で、本稿では筆者が行ったインタビュー調査の結果をもとに、DI者の多様性を明らかにし、DI者の[出自]と[物語]の関連を検討するものである。

#### 2. 調査の結果

##### ① 遺伝上の父を探す人の声

AIDで生まれた匿名でインタビューに答えてくれた女性(以下「T」と略す)は、彼女が母親に遺伝上の父を自分が探していることを告げておらず、マスコミ等のインタビューに答えることも避けてきたとのことであった。そのような彼女が私のインタビューに応じてくれたのは、ビル氏への信頼からだと推測される。

[資料1]に対応したインタビューを行ったことを明確に示すため、Tの発話をできる限り再現し、発話の意味が変化しない範囲で表現を修正している。

筆者の質問を[Q. ～ (斜体)]で示し、その回答を[A. ～]で示した。さらに、後の分析で活用する箇所にはアンダーライン並びに記号を付すこととした。

Q1. 何歳か。

A. 30歳。

Q2. 自分の出自について聞いたとき、あなたは何歳だったのか。

A. 26歳。

Q. あなたの家族構成は。

A. ①両親は離婚し、どちらも生きている。28歳になる弟はAIDで生まれた。しかし、遺伝上の父は違う。AIDを了解した父は、前妻との間に2人の子どもをもうけていたの  
で、私の家族は6人でした。

Q. 出自を知った26歳は早かったのか、遅かったのか。

A. 遅すぎたと思う。

Q3～4. 何歳頃に開示されるべきだったのか。



A. 16歳ぐらい。父と私は疎遠な感情を持ち、ずっとしっくり行かなかった。②なぜ仲良くできないのかを悩んでいたが、AIDで私が生まれたからだということで納得した。  
もっと早く知っていれば、父との関係が早い時期に上手くいくようにできたのではない  
か。今は父と仲良くできているから。そして、16歳なら家族の複雑なことについても  
理解できる。

Q5. あなたが自分の出自について聞かされる前に、両親から何か秘密にされていること  
があると感じたことがあるのか。

A. はい。③漠然といつもなんだか変だなと思っていた。自分は背が高いのに、父も母も  
背が低く、私の瞳の色はブルーなのに、瞳が青い家族は誰もいなかった。もう一つは、  
祖母が父の連れ子に、私があなたのお父さんの本当の子ではないということを話してい  
たのを聞いた。

Q6～8. 上記に含まれる。

Q9. あなたは、お父さんとの距離をどのように感じていたか。また、真実を知る前と後  
とではその距離は変化したか。

A. 私の両親は私が7歳のときに離婚したから、その後、父親と年中会うというわけには  
行かない。④離婚は両親の責任だ。私は父に怒りを向けていたと思う。でも、出生のこ  
ととは関係ないと思う。父への怒りは離婚の結果だと思う。

Q10～12. 上記に含まれる。

Q13. あなたはこの秘密が離婚の要因であると考えてるか。

A. ⑤そうは思わない。他に色々あったと思う。

Q. 両親は再婚する時、AIDで子どもを作ることに二人とも同意したのか。

A. ⑥聞くとところによると、母は結婚したらどうしても子どもが欲しいと思っていた。だ  
から、結婚するときの条件として、父のパイプカットの修復か、他のいかなる方法を用  
いても子どもを作ることに同意するのかを母は父に申し出ていた。

Q. お母さんがAIDのことを秘密にし続けたのは、なぜだと思うか。

A. なぜ話さなかったかといえ、医者には止められていたからだと言った。

Q. 医者はなぜ、真実を告げてはいけないといったのか。

A. ⑦たぶん、医者はAIDを選んだ全員に真実と告げるなといったのだ。そのほうが簡単  
だと思っていた。子どもに真実を告げると、子どもが父を探したくなると思ったのでは  
ないか。1970年代当時の医学界のアプローチは、言わないほうが良いというものだった。

Q14～21. 非該当

Q22～23. ドナーの医学的経歴について知る権利があると考えてるか。

A. はい。私はドナーの写真を見てみたいと思う。遺伝的な病歴については知りたい。と  
くに子どもを生んだので、遺伝的なものが未知のままでは不安だ。

Q. 真実を知ってから5年間で気持ちの変化はあるか。

A. 最初はショックだった。次によくよく考えていくうちに「なるほどな」と納得した。

しかし、その後、いろいろとリサーチしたことによって、AID に反対するようになった。  
⑧この領域のことが全く野放しだということがわかり、学べば学ぶほど、強い気持ちで反対するようになった。

Q. AID を選ぶようとしているカップルに対するメッセージはあるか。

A. じっくりと考えて欲しい。もしかしたら、利己的な、自分たちのことばかりを考えているのではないかと、気づくかもしれない。⑨AID が本当に子どものためなのかということを良く考えて決めるべきだ。AID で子どもを生むと、家庭内に何等かの対立が起こりやすい。

Q 24～30. 非該当

Q 31～32. AID で生まれた者にどのようなサポートが必要だと考えるか。

A. 事実を知る時期が様々だと思うので、どのようなサポートが必要かということを一口に言うことは難しい。しかし、⑩仲間から話を聞くと、カウンセリングを求めている人は多い。そして、AID に対して非常に怒りを感じている。多くの子どもたちが、両親の離婚ということに直面している。離婚により、より複雑な感情を子どもたちが抱かなければならなくなっている。例えば、うつ病になる人もいるし、上手くいかない人生のすべての出来事を親のせいにしてしている人もいるし、怒りに満ち溢れている人もいる。すべてのことが AID に引っかかってしまっていて、そこから抜け出せないという人たちが大勢いる。自分たちの人生・生活がハッピーで生産性に満ちたものではなく、AID が壁になってしまって、そこから次に動いていくということができにくいと感じられる。

Q 33. AID について、市民に訴えたいことがあるか。

A. 私たち当事者の間で問題があると訴えたとしても、なかなか聞く耳を持ってくれないだろう。でも、もう少し真実に関する知識をもつ必要があると思う。⑪AID を行うことによって起こり得る結末に関する教育をしっかりとし、その結末に関する知識をあたえる教育が必要だと思う。

Q 34～35. あなたにとって AID はどのような出来事なのか。

A. 年中、このことを考えているということではない。そして、人生の中での様々な出来事を AID のせいにしてたり、AID を責めるということでもない。⑫真実が発覚したときに、家族みんながホッとした。父親を責める気持ちが、真実を知ってから許せる気持ちに変わったのも事実である。そして、一歩先に人生を進めていくことができるようになったというのも事実である。

## ② 秘密のない家庭で育った DI 者の声

次に紹介する K は、自ら新聞に遺伝上の父を探しあてたことを告白する記事を投稿し、さまざまなインタビューや取材に答えて来た女性であり、筆者のインタビューにも実名で答えてくれた。本論にインタビュー内容を公表するに際しても同意を得ている。K のインタビューは、2007 年 8 月 29 日（水）17:00 から 1 時間半にわたって、アメリカ・ワシント



ンD. C. にあるホテルの会議室で行った。インタビューの内容についてTのケース同様、Q&Aの形式で紹介していく。

Q 1. あなたは何歳か。

A. 18歳。

Q 2. 自分の出自について聞いた時、あなたは何歳だったのか。

A. 覚えていない。⑬母はいつもオープンだった。母はシングル・マザーであり、私は母が早くからこのことを話したことに感謝している。

Q 3～8. 非該当

Q 9. あなたは、2番目の父親との距離をどのように感じていたのか。

A. 2番目の父と、親しく話したいとも思わないし、近づきたいとも思わない。私の暮らしは、母と私の関係で暮らしてきたのだ。⑭義理の父は、私が遺伝上の父とコンタクトを取ったことを知っているがそれだけだ。なぜ母が隠そうとしているのかはわからないが、私は母を信じている。

Q 10～15. 非該当

Q. 新聞記事を読むと、あなたの気持ちとして「恥」はなくとも「怒り」があるように思える。それは何時頃から、どのような理由からなのか。

A. 色々なステージがあったと思う。⑮12歳の頃、反抗期に入る頃には、AIDのことが反抗の理由付けになったりした。また、⑯私が私の生物学上の父を見つけようとしたとき、誰も話してくれなかったし、扱われ方がひどくて怒りにつながったと思う。今は落ち着きつつある。

Q 16. DI者は、生まれに関する情報を開示されるべきか。

A. はい、もちろん。

Q 17. 何歳頃に開示されるべきか。

A. 若いときが良い。子どもは特別な環境で生まれたことを知るべきだ。⑰私の経験から、私は小さいときに真実を聞いたけれど、悪い影響はなかった。しかし、後から聞いた人には、恥や怒りを感じている人たちが多い。秘密にされてきた人は、裏切りによって恥と怒りを感じるようだ。例えば、AIDのことを知ってから誰かにこのことを話したことがない人は、未だに話せないでいる。私は彼にオープンにしても良いことなのよと話しました。何も恥じることではないと。

Q. 隠しておこうというのは、どんな理由からだと思うか。

A. ⑱社会的理由。カップルなら旦那が無能だと言いたくないのではないかと。保守的な人なら、本当の父ではないことを知られたくないだろう。母子家庭の場合には旦那が逃げたと言うよりも、真実を話したほうが良い。

Q 19. 秘密が開示されることで、どのような不利益を受けたか。

A. ⑲アメリカでは父を知らない子どもが多く、出生証明書にも父の欄は何も書いていないことが不思議なことではない。

Q. 悲しみの中にいる仲間もいるのか。

A. もし私が赤ちゃんを生める頃になって AID のことを知ってしまったら、もっと詳しく母に聞いだろう。でも、②⑩私は早くから知っていたので、10 歳の頃には、父がどこにいるのか、わからないことをジョークにすることができた。私の怒りは医療機関に対してであり、父が誰だかわからないことについてだった。AID そのものに対しての怒りではない。

Q. あなた自身の結婚についてはどのように考えるか。

A. もちろん、結婚したい。⑪私は結婚するときに、夫になる彼にも生まれてくる子どもたちにも AID のことを話すつもりだ。

Q 20～22. 非該当

Q 23. 提供者の医学的経歴、社会的地位や思想、出自、その他の情報を知る権利がある  
と考えるか。

A. はい。医学的な履歴は知りたいと思った。

Q 24. 非該当

Q 25. あなたは、提供された精子による兄弟姉妹にあってみたいと思うか。

A. ウェブへの登録は、どこかにいる兄弟姉妹を探すためだ。

Q 26～32. 非該当

Q 33. あなたは、DI 当事者以外の市民に何か訴えたいことがあるか。

A. AID に関する事実を広く知らせることが必要だ。⑫未来に生まれてくる子どもたちのためにも、小学校の先生や医者への教育をどのようにしていくのかを考えていくべきだ。

### 3. データの解釈

ここでは DI 者である 2 人のアメリカ人女性にインタビューした結果を考察する。

比較対象とした 2 人の AID で生まれたアメリカ人女性は、自らが AID で誕生したことを理解しており、AID で生まれた子どもたちが AID で産まれたという事実を知るべきだという共通認識を示している。その一方、この 2 人には根本的な大きな違いがある。すなわち、第 1 に AID で自分が生まれたことを知ったときの年齢である。そして、第 2 に遺伝上の父に巡り合うことができたか否かにかかわることだと解釈できる。したがって、以下ではこれらの観点に関連づけて、2 人の発話を比較し、2 人の発話の相違を形成している苦悩の要因を検討していくことにする。

発話記録を振り返ってみると、AID という事実について、下線部⑬に見られるように K は小さい頃からオープンにされ、その中で育っており、反抗期においても下線部⑮のようにふり返ることができており、K の物語はいわば、AID とともに歩んできた物語であるといえる。その一方で、T は下線部②&③のように AID という事実が秘密にされた中で、不安とともに歩んできたという物語を語っている。このように 2 人の DI 者の物語は、AID という事実を知った年齢によって大きく異なる物語となっていることが認められる。次に K

とTの異なる物語の内容に議論を移すと、Kの怒りはAIDという事実に対してではなく、Kの思いに対する関係機関の対応に向けられ（下線部⑯&⑰）、Tの怒りは下線部⑦のようにKと同様な心境であるのに加えて、下線部⑩のようにAIDそのものにも向けられている。これらの発話を比較してみると、Kが発した下線部⑰では[怒りと恥]という情動が伝聞として表現されている。その伝聞は、Tが抱いている情動と親和性があると推測できる。

#### 4. AIDで生起される情動とは何か

そこで、以下ではコードレイとKとTの物語で生起されている[怒り]と[恥]という情動について検討しておきたい。

先行研究調査の中でもふれたようにアメリカのB. コードレイは、DI者としてはじめて実名でマスメディアの前に登場した人物である。氏の登場により本論で問題視している諸点が社会的に顕在化したといえ、DI者の当事者性や権利の獲得に向かうアクションが世界中で動き出すこととなった。

2004年9月10日明治安田こころの事業団のセミナーにおいて「To Be a Person Born Through Donor Insemination；非配偶者間人工授精により生まれた者として」と題して講演し、翌11日には慶応大学附属病院にて「The Right of a Donor Conceived Person to Know his Genetic Roots；非配偶者間人工授精で生まれた人々の出自を知る権利」と題して講演を行っている<sup>3</sup>。続く13日、同氏へのインタビューを行っている。

インタビュー調査の結果は、インタビューでのやりとりの内容をQ&Aの形式で記す。[Q＝質問、A＝応答]であり、分析を簡便に行う上での必要性からQ並びにAに数字を付した。得られたデータは、「参照データ⑥：コードレイの声」で示した。

このインタビューでビル・コードレイは「他人が自分の父親は誰かを知っていて、自分が知る権利がないということにすごく怒りを感じた。知らせないという権利を持っているということに関して、フェアでないと思った。」「10代の頃に自分の父親が生物学的な父親でないと気づいていた。性格や好みなど全て違っていた。12歳から19歳頃母親が不倫をしたのではないかと疑っていた。」「このような状況に自分たちを陥れた医療関係者にはすごく怒りを感じた。自分の子どもに嘘をつき続けるということはすごく不健康なことで、もっとオープンにするべきだ。」「ドナーにただ会って、私がどのような人であるか知りたい。」等と語り、「知る権利がないことへの『怒り』」「母親への『不信』」「医療関係者への『怒り』」「偽りの不健康さ」「ただ知りたい」などDI者が自らの出生の秘密に直面したとき並びに直面した以降抱き続ける感情を端的に表現している。

また、コードレイ（2004：a：b）は、「自分たちのルーツについての完全な知識がなくて、私達は不完全である。養子は、しばしば自分が家系的に家族から切り離されていると考え、『遺伝的な混乱』の中にいる。『遺伝的混乱』は、家族にうまくとけ込むための人工的なアイデンティティを形成させようとする。家族の中での自己認識と統合を非常に困難なものにする。これは両親には起こらないかもしれない。出生について知らされていない場合、アイデンティティの混乱が起こる。私達の多くは、家族の中にいながら異邦者であ

ったわけである。ルーツが断絶される苦しみについて、孤立させられた人々が『社会との共鳴』を失い、強く社会とつながっていたいといかに切望しているかを理解してほしい。

DI 者は、自己の存在証明として、奪うことができない権利としてのアイデンティティを知る権利があると宣言する」と述べている。つまり、これは DI 者による権利宣言といえよう。

このように語ったコードレイは、「怒り」を感じ続けており、AID という「隠された医療」の不適切さ、不条理さについて訴え、AID をオープンな医療にするべきであると主張していることがわかる<sup>4</sup>。

#### ①「怒り」の構造的理解

湯川（2008：3）によれば、社会構成主義的に「怒り」を定義すると、「所属する特定の社会システムの範囲内で、社会的安定の維持（道徳的秩序の確認と調整）に貢献する、社会的に構成されたシンдрーム」であり、「怒り」という経験は「自分の住む社会・文化における道徳的秩序に沿って学習された、社会的規則や社会的文脈に基づいて」構成される。すなわち、「怒り」とは「秩序の調整・維持に役立つ」のである。つまり、怒りとは次のようなメカニズムである。

怒りとは、自己もしくは社会への、不当なもしくは故意による（と認知される）、物理的もしくは心理的な侵害に対する、自己防衛もしくは社会維持のために喚起された、心身の準備状態である。

この湯川の定義に従えば、コードレイの「怒り」の意味が了解できる。すなわち、コードレイの「怒り」は、社会的存在である自己が理解し、育ててきた社会規範に反して、AID という事実行為が受胎時における物理的侵害を成し、「子のため」という建て前を受け、秘密主義を故意、あるいは不当に組み込み、「もしかしたら・・・、私は誰？」という不安を伴う心理的侵害に、当事者をさらしてきた結果生じたものであるといえよう。

木野（2008：39）は、「怒り」の特性と機能を整理し、適切な対処を成さなければ、新たな怒りを引き起こすという悪循環になることもあると指摘する。さらに適切な対処が得られず時間が経過すれば、「怒り」は持続し、コントロールの効かない行動として表出されることもあるとする。コントロールの効かない行動として表出されがちな「怒り」には、攻撃性が顕著である反面、頻繁に攻撃性が表出され、それが長引くうちに「抑うつ」へと転嫁することもあると述べている。一方、渡辺（2008：75）は「怒り」の肯定的な側面として「パワー」との関連を提示している。このような「怒り」のメカニズムをとらえると、コードレイの「怒り」への対応が心理学的側面からのみでなく、社会的な側面から必要であったことが了解できる。

さらに「恥」と「怒り」の関係に言及しておこう。

マイケル・ルイス（1997：164）は「恥が怒りを導く」と断言し、恥の感情の情動的置き換えに「抑うつ」と「激怒」があるとしている。そして、「怒り」の生起を次のように説明している。

怒りは、認められない恥の情動的置き換え反応である。恥じるかわりに怒るのは、自己



が恥を経験しないようにするのを助けることになり、怒ることはそれなりの適応的な意義をもつ。その人の生きている文化が怒りを許容する時は、特にそうである。

他人からいつも恥をかかされている人は、激怒をつのらせる可能性がある。他者の権力が大きすぎる場合や、恥をかかされた人が相手に強い正の情動を感じていて、そのために激怒が他の情動と相容れない場合がある。

ルイスの見解に従えば、DI 者の発話に[怒り]や[抑うつ]を読み取れる背景に、社会的文化的な規範との中で暮らしてきたという事実、あるいはそうした社会的文化的規範に反して[恥]をかかせた相手が、医療者という権力者や親という正の情動が強い相手であることに伴っているためであると解釈できる。つまり、DI 者の発話から読み取れる[怒り]や[恥]、[抑うつ]という情動については、心理学的な探求が進み、一定の見解が示されているのである。したがって、DI 者の[怒り]や[恥]、[抑うつ]を理解する上で、一義的には心理学的に一般化されている構造を手がかりにすることが可能であることが示唆された。

## ②物語と関連しない[恥]

上記のルイス（1997：164）の見解を再度、活用しよう。上記でみたように[恥]は[怒り]や[抑うつ]とつながる。そして、[恥]は「私たち—私」という相互作用の中で認めら得る社会的文化的規範とのつながりの中で生起するのであり、「日本の」とか「アメリカの」とか形容される社会的文化的規範を除外して[恥]を語ることは困難である。

日本の文化は「恥の文化」といわれるように、[恥]を語るとき、日本文化を語らざるを得ない。しかし、本論で文化論を展開することは筆者の力量と関心からして不可能に近いため、「子の生まれ」に関連する[恥]に関する議論を検討し、DI 者の情動理解の礎としたい。

原(1987：1)は、恥を人間の社会性から生じるものであり、集団に受け容れられコミュニケーションをしたいという願いや心安い集団の範囲と関連しているととらえている。恥を人間集団の観点から考察した塙ら(2000：19)は、児童期において「恥」は未だ芽生えの段階であり、「照れ」や「恥ずかしい」という表出行動的側面が多く認められることを実証している。久崎(2002：69)は、塙らの情動区分を引用し恥を「ある種の失敗を自己の安定した側面に帰属することによって発動し、強烈な苦痛、身体が重いあるいは縮小する、隠れたいといった主観的経験的側面、心拍の減少といった神経生理学的側面、他者の視線を免れるような表出・行動的側面の3つの要素がからみ合って生じるプロセスである。」と定義している。早川(1996：75)は、恥の変遷と社会との関わりに着目し羞恥を6つに区分し恥と社会規範との関係を明らかにしている。KもTも自らの親がシングル・マザーであることや、離婚経験があること、祖父母と会うことがほとんどないことなど(下線部①&④&⑤&⑥&⑨)と、AIDに関わる[怒りや恥]との関係を否定しており、DI 者の発話を根拠にすれば、上記のような文化や社会規範から生じる[恥]の概念からはDI 者が感じる[恥]との関係性は薄い。

### ③物語と相関する[恥]

早川と同様、恥と社会規範に関する考察を行っている G・レイモンド(2001: 30)は、国家が行った先住の人々への人権侵害を、恥の歴史であると指摘し、今日の我々が先の国家が行った恥すべき行為に対する共同責任を果たすという認識を社会規範とするべきであると主張している。この点について K は下線部①で、また T は下線部⑧&⑨&⑩において共同責任と親和性がある指摘を行っている。

恥を構成する因子分析を行った樋口(2000: 103)の 7 つの恥因子のうち、「混乱的恐怖」「自己否定感」「基本的恥」「自責的萎縮感」が DI 者の発話の中に認め得る。大柴(2002: 127)は、罪と恥を比較し、罪は行為の次元における痛みであり悔いであるのに対して、恥はさらに深く、存在 being そのものの次元における痛みであり悔いであると結論づけ、存在の一番深い次元に秘められている痛みであると、神と自己の関係の中で生じる恥という領域に踏み込んで恥の検討を行っている。このことが重要であるゆえんを、大柴は、恥の意識の獲得は成長と自立のために不可欠であるからだとし、恥にかかる防衛機制が次の 4 つの方向に動こうとすると分析している。その 4 つの方向とは、[①外への攻撃(怒り)、②内への攻撃(自己嫌悪、自傷行為)、③引きこもり(不安と恐れ、無感覚)、④回避(完璧主義、ユーモア)]であり、樋口の恥因子と共通すると考えられる。つまり、恥は心理学という情動として取り扱われるのみでなく、システムとして取り扱われることが必要であることが示唆されているものと理解できる。それは、久崎(2006: 1)による、恥の[自己システム内機能/対人システム内機能]にかかるシステム論と共通した認識である。こうした心理学上のシステム論で[恥]をとらえていくと、K の発話は[恥]のシステムにおける外部に立ちながら発言を繰り返しており(下線部⑭&⑯)、T の発話は[恥]のシステム内で繰り返されている(下線部②&⑩)といえ、両者の方向性の相違を指摘できよう。

### ④[恥]の文化社会的側面

さらに、2 人の DI 者の発話の相違は、下線部⑫や⑬から、婚姻上の夫が妻の子どもを産む権利を侵害しているという罪悪感並びにジェンダー論という男としての面子が保てないという恥に支配されていることを、夫である男性が自覚し認めることができないでいるために、家庭内の秘密主義が生起し、その影響下で DI 者が生活しているのか否かに関わる側面があると認め得る。K・ダニエル(2007: 113)は、配偶子提供を文化であるとし、この文化は非常に支配的な「秘密」という伝統を継承しているという。ダニエルは、秘密にしておくことは非常に強力な力学的背景があるとし、第一に人が不快であるとか恥とかに感じていること、それがスティグマにつながるようなことである場合、秘密を維持しようとする。第二に何人かの人々によって、他の人が知らない情報を握っているという構造の中で秘密は維持されるとしている。秘密に関するこの 2 つの力学的背景は、AID を選択したカップルにどちらも適用でき、それに AID を選んだカップルが関与しているという事実がある。このことによりダニエルは、AID を秘密にしておくことがより深く根付き、文化となっているとみなしている。

#### ⑤[恥]を隠蔽すること

このような見解を支持できる根拠を、青木の恥に関する見解から確認しておきたい。すなわち、青木(1966:33)は、恥の隠蔽には、無限な加重性・相乗性があり、あるがままであることが至難となる分裂した存在において、恥は更に恥じられ無限に加重され次数を高めていき、自己の弱さの認知が自己弱化の深い意識と結びついたとき、恥は最大の隠蔽力を発揮するに至ると述べている。この青木の指摘を根拠にすれば、AID を選択したカップルが DI 者に真実を隠しているという状態は次のようなシステムを家族内に構築し、DI 者を真実から排除することによって、DI 者の[怒りや恥]を日々加重しているといえよう。すなわち、AID を選択したカップルが、真実を隠すことでますます真実を隠さざるを得ない状況が深まり、家庭内に秘密が加重され、隠すことがカップルであることを維持し、夫からみれば妻の産む権利を保障するという機能や妻の子どもを持ちたいとする希望に基づく自己の救済の手段としての AID が、自己の救済には役立たず、家庭の破滅に向かい、本来、恥の概念に含まれる肯定的な側面をも破壊される可能性があるということになる。子どもから真実を隠すことが良いことだとされてきたパターナリズムによる神話が成立し続けるためには、神話に基づくコントロール下で「妻の産む義務」が正当化されなければならないことになり、女性の「性と生殖の権利」とはギャップのある論理が成立しなければならないことになる。したがって、自己の救済の手段としての AID が、自己の救済には役立たず、突然に、あるいは偶然に姿を現し、家庭を破滅に向かわせるのである。

#### b) 考察の結果と課題

第4調査の1・2で得た考察の結果は、DI 者が[怒りや恥]という情動から解放されるためには、[恥]という情動が生じ加重されひいては[怒り]を生じるという秘密主義から、DI 者の家庭が解放されなければならないということである。コードレイが語るように、「隠された医療」が当事者の「怒り」の原因となっている。また「怒り」は、コードレイの「母の不倫」という言葉に代表されるような情動を生起させる「恥」と結びついている。

このことは「IV. DI 者の苦悩とは何か 3. 日本の DI 者の声(第2調査)(3)小括」で、DI 者の人権侵害と DI 者を取り巻く課題の構造との関連として提示した「AID の実施における[秘密主義]は、ある者(医療者)が他者(不妊カップル)の社会的行為を、[誓約させる]という行為により、制限する行為である。そこには社会的弱者に対する差別的な意味合いとしての[産まず女]というスティグマや家父長制の影響、さらにはパターナリズムにみられる[強者-弱者]の関係が含まれている。」という規定を、当事者が実感を持って主張していることが示唆されている。

また AID の実施に関係する当事者は、父・母・医療者・ドナー並びに本人に及ぶ。これらの関係者に向けられる DI 者の情動は、上記の[恥]と[怒り]に関する構造を考慮するならば、少なくとも AID を選択したカップルが真実を隠すように医療者からコントロールされている中において、コントロールが及ばず、偶発的に真実と対面することになる中で生じる。したがって、医療者による秘密主義というコントロールが DI 者の[恥]と[怒り]を生起させ



ないためには、そのコントロールが AID を選択したカップル並びにそのカップルに縁のあるあらゆる人々の生涯にわたって機能し、子が AID で生まれたという【物語】を知ることがないと断言できなければならなかった。しかし、21 世紀の国際化した社会において、情報のグローバル化や個人情報のコントロール権にかかる権利性が生じた今、DI 者がいずれは真実の物語（＝AID という事実行為）と対面することになることを考慮するほうが、一般的に受け入れやすい理路であり、子の最善の利益という理念に対応していると考えられる。すなわち、前章で規定したように DI 者が 6 つの人権侵害を被っているとするならば、DI 者が「出自」という自己の遺伝子レベルの情報を知ることができる状況や DI 者が自らの情報をコントロールできる状況に置いたほうが、DI 者の Well-being にかなうといえよう。

## 2. [第 4 調査の 2] の結果

2008 年 8 月に第 11 回国際乳幼児精神保健学会世界大会 (The 11<sup>th</sup> World Congress of World Association for Infant Mental Health ; 以下「WAIMH」) が横浜市内で開催され、B・コードレイ氏を招聘している<sup>5</sup>。来日の目的は、筆者が The Rights of Infants and Children Born by Assisted Reproductive Technology と題して企画した同学会におけるワークショップで、DI 者の現状を訴えるためである。

### 1. 調査の結果

B・コードレイが公表した調査は、世界中の DI 者 105 人を対象に、アンケート形式で実施されており、質問項目は 27 項目で、それぞれの項目に自由記述のコメントが得られている。以下で報告する内容は、コードレイが行った 27 項目のうち、本論にとりわけ関連すると思われる 12 項目についてのみ取り上げることとした(表 V-3)。また、コメントについても同様とし、「巻末データ⑦：DI 者の秘密開示と情報入手に関する意識調査のコメント」として示した。

表V-3 DI者の秘密開示と情報入手に関する意識調査（B. コードレイ；抜粋）

1	秘密があると感じてたか？	人数	比率
	はい	46	44.2%
	うっすらと	6	5.8%
	いいえ	44	42.3%
	回答なし	8	7.7%

2	DI者は事実を知らされるべきか？	人数	比率
	はい	100	96.2%
	いいえ	0	0.0%
	分からない	4	3.8%

3	いつ知らされるべきか？	人数	比率
	できるだけ早く	90	86.5%
	大きくなってから	9	8.7%
	分からない	4	3.8%

4	もっと早くに知らされるべきだったと思うか？	人数	比率
	はい	73	70.2%
	いいえ	20	19.2%
	回答なし	10	9.6%

5	DIについて何時頃知らされるべきか？	人数	比率
	できるだけ早い年齢で	57	54.8%
	その他の年齢で	32	30.8%

6	真実を知らなければ良かったと思うか？	人数	比率
	はい	7	6.7%
	いいえ	79	76.0%
	いつも	17	16.3%

7	秘密を打ち明けられることは有害だと思うか？	人数	比率
	有益	52	50.0%
	ほぼ有益	26	25.0%
	どちらともいえない	17	16.3%
	ほとんど有害	4	3.8%
	有害	3	2.9%

8	ドナー/兄弟姉妹に会いたいと思うか？	人数	比率
	はい	76	73.1%
	いいえ	6	5.8%
	分からない	11	10.6%
	兄弟姉妹にだけ	6	5.8%
	兄弟姉妹に会った	1	1.0%

9	真実告知以前の秘密の影響はあったか？	人数	比率
	はい	55	52.9%
	いいえ	36	34.6%
	回答なし	12	11.5%

10	ドナーの病歴を知る権利があると思うか？	人数	比率
	はい	103	99.0%
	いいえ	0	0.0%
	回答なし	1	1.0%

11	ドナーの身元を知る権利があると思うか？	人数	比率
	はい	84	80.8%
	いいえ	10	9.6%
	分からない	9	8.7%

12	ドナーと連絡を取りたいと思うか？	人数	比率
	はい	76	73.1%
	いいえ	11	10.6%
	回答なし	11	10.6%

## 2. 得られたデータとその解釈

表V-3をみると、次のようなことが明らかになった。

DI者の概ね半数は、家庭の中で何らかの秘密があることを感じており(1)、回答者の全員が事実をできるだけ早くに知らされるべきであり(2)、その時期はできるだけ早い方がよい(3・4・5・6)としている。また、知ったことによる害はほとんどない(7)としている。さらにドナーや兄弟姉妹に会いたい又は連絡をとりたいと思う者が7割を超え(8・12)、それを権利だと考えている者も8割を超えている(10・11)。

つまり、DI者は、AIDで自分が生まれたことを知ったことが有害だとは思っておらず、その事実をできるだけ早くに知り、その事実とともに生きたいと願っている、そして出自を知る権利がDI者の固有の人権として主張されていると解釈することができる。

これらの結果をより詳細に考察するために、同調査の自由記述を分析してみると、次のような物語が出来上がる。なお、Qの番号は表V-3の番号と共通している。

Q2. DIで生まれた子どもたちはその事実を知らされるべきですか？

A. 子どもに真実を話さなくて良い訳がない。絶対に知らせるべきだ。誰もが、遺伝上の両親についての真実を知るべきだ。子どもが大きくなって、十分に理解できるようになったと両親が感じたら、話すべきだ。秘密がないことの利点は、どんなリスクよりも勝る。

Q6. 真実を知らなければ良かったと思いましたか？

A. 一度もない。どんなことであれ、真実を知ることには一番よいことだ。たいていの仲間がそう思っている。真実を知る前は、とても単純なもの・単純な生活だった。何か知らされていないことがあると常に思っていたので、ほっとした。自分が持っていた多くの疑問・たくさんの混乱が確かめられ、解決した。真実により解放された。でも、真実が本当のことでなければ良いと思う。真実は現実を知ることには役立った。理解できなかった人生の多くのことを説明してくれた。自分自身の出自・病歴・健康・兄弟姉妹との違いを知った。父親のことがわからないだけで、十分苦しい。父の遺伝病を受け継いでいないことがわかり、子どもを持つことを心配しないですみ、安心した。知る前は父の行動に戸惑うこともあった。しかし、父親の問題をより深く理解できたので、後悔はない。事実により親子の関係が強まった。私の権利を尊重し、信じてくれるようになった。両親に心から望まれて生まれてきたと考え、自分は特別な存在だ。全ての子どもが遺伝的なつながりのある両親のもと、安定した関係を持ち、安定した関係の中で、育てられる権利がある。今でも自分の誕生に関する状況・ドナーの情報・真実を探しているが、入手する方法がない。

Q7-1. 秘密を打ち明けられることは有害だと思いますか？

A. 有害なのは秘密だ。父親のことを決して知ることがないのだと悲しく思うとき、有害だと思う。大人になって自分が、人を信じない人間だと気づいた。このことは人間

関係に影響している。母は長期の嘘をつき、私の不信感を高めた。真実を知り安堵した。理解できる年齢を超えても、母は嘘をつこうとした。母との関係が変わった。母は私のことよりも自分のことを心配していた。その他多くのこと・不誠実さがわかったが、悲しいことだ。真実は家族の中での力関係・父の態度を明らかにした。驚くほど開放的になり、父の承認や愛情を得ようとする努力をやめた。真実は衝撃的で、偶然に知った。時に悲しみ、空っぽな気持ちに完全に圧倒されることがある。真実を知らなければ、病気の心配をし続けていたので、感謝する。真実を伝えることは、絶対に必要なこと。真実を知ったとき、父の死後だったので、父と話し合うチャンスを奪われた。気楽に話してくれたら、親密になれたのになと思う。子どもを持つために最良の方法を取ったのだと、両親に一層感謝する。愛されて望まれていたと実感する。

Q 7-2. 真実を打ち明けられる前、秘密があなたに影響を与えましたか？

A. 秘密は、人生に付きまとう大きな影響を及ぼす。自分が思っていたような自分でないことを発見した。自分が悩んでいたことを、両親はわかっていた。私は自尊心のない非常に不安定な子どもだった。アイデンティティの問題を抱え、何かが欠けていると感じていた。性格の問題で、父親から拒絶され愛されていないと思い、父親を遠い存在に感じていた。しつけはひどいものだった。父親を喜ばせようとして失敗した。失敗する恐怖感に苛まれていた。

Q 12. ドナーと連絡を取りたいですか？

A. 52 年も経っていなければ取りたいと答えただろう。時すでに遅しだ。そのままにしておく。会いたい、でも、かなわない夢だとわかっているの、もういい。連絡してみたい。そうすれば完全になれる気がする。メディアを利用して、ドナーの身元を知りたいと訴えた。ドナーのすべての記録が破棄されていた。口惜しい。拒絶される恐怖で、ドナーを探すのが怖い。

すでに話した。ドナーが誰かを知っただけで満足だ。ドナーが前向きな姿勢で、連絡を望んでいるのなら連絡してみたい。

上記のような DI 者の物語の最後に登場する、ドナーと「すでに話した」という回答者と前記の第 4 調査の 1 でインタビューした DI 者との想いが共通していたことがわかる。このことから、少なくとも AID という事実よりも、[隠された]という事実に対する怒りや口惜しさが際立ち、比重が重いことが了解できる。

### 3. 考 察

次に WAIMH のワークショップでの DI 者の発言を検討しておきたい。

このワークショップにおいて、DI 者は自ら次のように要約できる発言をし、社会に対して自らの思いを発信している。この調査の第一の意義は、日米の DI 者が国際会議という場で、自らの立場を訴え、それを記録として公開することができたことである。そして、第二の意義は表明された DI 者の思いが、筆者が行ってきた質的調査あるいは量的調査で明

らかにしてきた DI 者像を統合するような内容となっており、DI 者の「声」を世界的規模で普遍化し、代表するような内容となっていると解釈することができる。つまり、これがこの時点で生起された、DI 者のオルターナティブ・ストーリーである同時に、DI 者による DI 者の人権宣言であると解釈できる。なお、WAIMH のワークショップでの DI 者の発言は、「巻末データ⑧：WAIMH のワークショップでの DI 者の発言」で示した。

#### 【DI 者の発言要旨（DI 者のオルターナティブ・ストーリー／DI 者の人権宣言）】

秘密主義を医師たちが取り入れた理由は、AID を利用したカップルが感じるだろう「恥辱」という不名誉を夫婦が受けないようにするためである。

多くの DI offspring は事実を知りたがっている。長く事実を隠そうとすればするほど、子どもはより傷ついていく。母の告知で、[不安と憤り]を覚えた。両親に騙されたと感じた。今までの父親との関係の悪さを納得した。父親を失った。3年後、母を亡くしてから自分の存在に不安を感じ、出自を隠されていたことに[怒り]を感じるようになった。

今の私にたどり着くのに、他の当事者との出会いは大きいものであった。「もっと早くに告知して欲しかった」「提供者を知りたい」という共通の思いを抱いていることを知って安心できた。AID で生まれたことを隠すべきではない。もっと早くに知りたかったと思っている。

大人になって、結婚も出産も終えてしまってから告知は遅すぎる。自分の土台となるルーツが嘘であったことで、その上に積み重ねた自分が崩れてしまったような感覚。自分を再構築しなければいけなくなった。

このようなことを背景として、私たちは①当事者の心からの正直な訴えに耳を傾けてください。②当事者の物語は[悲しみ・怒り・悲痛]にあふれている。しかし、③変化に向かった前向きな希望にも満ち溢れている。そして、④私たちの尊厳や生まれながらの権利を、社会は尊重してほしい。

【4つの訴え】

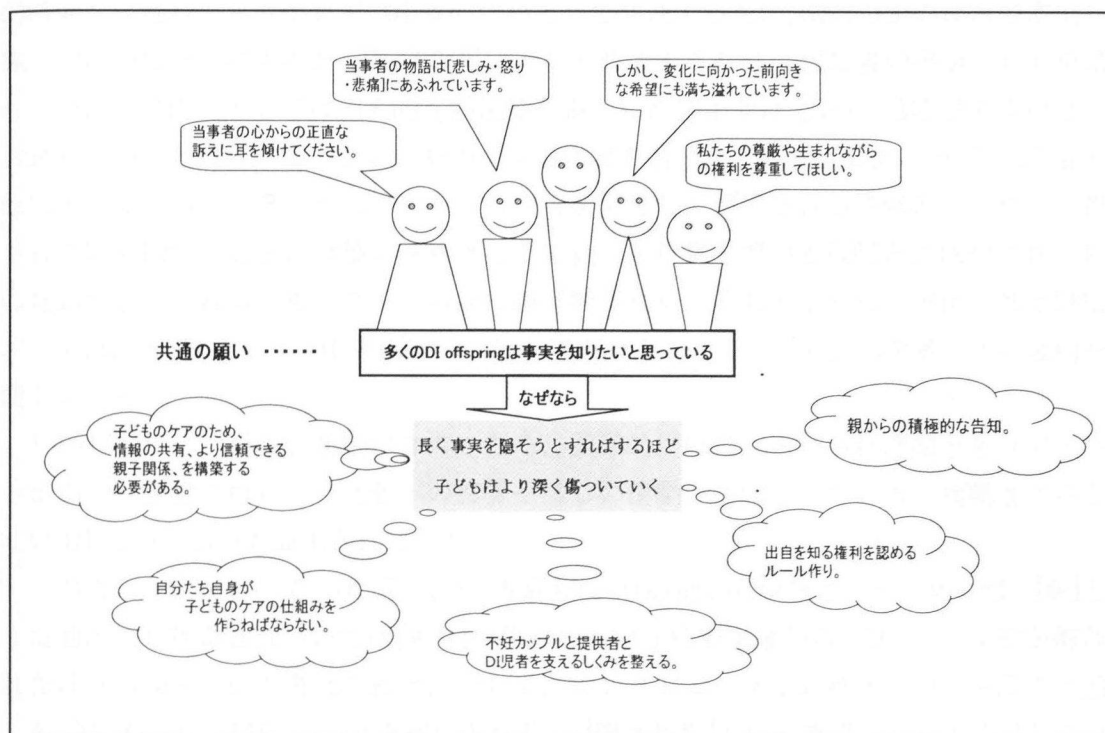
また、①社会や国の理解が低いので、政府を頼るよりは、まず自分たち自身が子どものケアの仕組みを作らねばならない。そうした取り組みの中から②匿名のドナーから生まれた子どものケアのための情報を共有し、より信頼できる親子関係を構築することをめざし、③親からの積極的な告知を求め、④出自を知る権利を認める社会のルール作りや⑤不妊カップルと提供者と生まれた人、それぞれを支えるしくみを整えることが必要である。

【5つの願い】

#### 4. 結 論

ビル・コードレイの調査並びに WAIMH での DI 者の発言を上記のように解釈し、照合させた上で構成すると図 V-3 のとおりとなる。つまり、構成された DI 者の発信趣旨は、[4つの訴え][5つの願い（自助を含む）]から構造化されていることがわかる。図 V-3 において [4つの訴え]は図中上段、[5つの願い（自助を含む）]は下段に構図化している。





図V-3 DI 者の訴えと願い

図V-3に認められるDI者共通の願いに対して、調査4の1の「②秘密のない家庭で育ったDI者の声」で示した事例Kは、「事実を知りたい」という願いのうち、AIDという事実や遺伝上の父を知ることができている。その結果、長く事実を隠そうとされた子どもより傷つき体験が少なく、事実を日常化し、時に「ジョーク」にできている。しかし、事例Kも課題を抱えている。それは事例Kが述べているように「医療機関に対する怒り」や「未来に生まれてくる子どもたちのためにも・・・教育・・・を考えていくべき」という言葉で言い表されているように、図V-3でいえば、「不妊カップルと提供者とDI児者を支える仕組みを整える」や「出自を知る権利を認めるルール作り」の未整備に見出せる。つまり、事例Kの状態は、DI者が望む、再構築された物語の中で生きるDI者像に近似しているといえるにもかかわらず、未だDI者固有の人権侵害から完全に解放されているとはいいがたく、社会的側面での課題が残存している状態であるといえる。なぜなら、前記のようにDI者による「4つの訴え、5つの願い」は、DI者の人権宣言であると解釈することができるが、解放されたDI者像に近似した、事例KというDI者においても、DI者の人権宣言に掲げた人権すべてを獲得しているとはいえないからである。

### (3) 小括(1)

第4調査から得た総合考察の結果は、第一にDI者の発話として記録することができた物語は時間と共に「外在化」していくというものである。そして「外在化」の過程の中で、

①時間を経過しても変化せず、DI 者の思いとして共通するもの、②何らかの理由で変化し、部分的に条件を加味すると、DI 者の思いとして共通するもの、③DI 者の発話として記録されたが、その内実としては個人的な価値観や育ちに影響を受けており、DI 者の思いとして共通しているとは言い難いものに分類できる内容が含まれていた。したがって、DI 者の発話は少なくともこれら 3 つに分類できる内容を混合して発信される段階と、それらが整理されていく段階、さらには整理されたことを自らが自覚している段階とに区分され、自らの物語が整理される過程をたどる可能性が示唆された。そして十分に明確化された段階においては、SHG として DI 者固有の人権を獲得することをめざし、当事者による運動を展開している。

しかしながら、当事者運動は今のところ、国際的には成果を得られた国とそうでない国とがあり、後者では長引く運動への疲弊や激しい情動が生起されていると判断せざるを得ない DI 者の発話が表面化されている。

このような状況の中で、DI 者が[怒りや恥]という情動から解放されるためには、[恥]という情動が生じ加重されひいては[怒り]を生じるという秘密主義から、DI 者の家庭が解放されなければならないと考えられた。そして、インタビューあるいはアンケート調査に回答した DI 者らが「AID という事実」よりも、「[隠された]という事実」に対する怒りや口惜しさを強調し、比重が重いということが明らかとなった。

さらに DI 者らが望む「出自を知る権利」には、「自らが AID で生まれたという事実」に関する一部始終を知ること、「遺伝上の父」に関することを知ることの 2 つがある。具体的には、事例 K は、この 2 つを得ており、再構築された物語の中で生きる DI 者像に近似している。しかし、事例 K が 2 つの要素からなる「出自を知る権利」を充足させられたのは、まさに偶然である。「出自を知る権利」に基づく制度枠組みが整備されていないわが国においては、その偶然も稀有な出来事でしかないといっても過言ではないだろう。

このことを踏まえて、さらに一步踏み込んで DI 者の変化を、発話が示した変化に対応させて検討しておきたい。

### 1. DI 者の類型化

AID で生まれたアメリカの二人の女性を取り巻く物語の最大の違いは「AID で生まれたことを何歳で知ったか」という真実を知った時期と「遺伝上の父を確認できたか否か」にかかわる。

この 2 つの「出自を知る権利」が適切な時期に擁護されない場合、権利を侵害された当事者は自らの存在—Being—そのものを「恥」続けるという可能性があり、この「恥」の加重性に関する原罪を父母に求め、父母に対する「怒り」を感じ続ける可能性がある。すなわち、「出自を知る権利」に包含されている「自分の出生の秘密を知る」とことと「自分の生物学的な父を知る」とことの 2 つの「知る権利」が、両者とも満たされた場合とそうでない場合とでは、後の人生の QOL に大きな違いが生じているのである。したがって、DI 者といっても、ひとくくりにすることはできず、図 V-4 のように類型化でき、サポートの



あり方も変化させていく必要が生じる。

アメリカの二人のDI者の「声」の共通点・相違点を類型化してみると、次のことがいえる。二人の相違点は、第一に「真実告知」を受けた年齢、第二に「遺伝上の父」を知ることができたか否かに関わる。第一の相違点に関して二人は、「真実告知」の時期として大きな節目となる時期が「青年期」であることを共通理解している。つまり、「青年期」という自我、あるいはアイデンティティの確立期を一つの境界と認識している。第二の相違点について、二人の現況から共通点を見出すことはできず、相違点を際立たせている。すなわち、「遺伝上の父」を知ることができた場合、事実と向き合い、「遺伝上の父」との距離を保ちながら、自らの人生を歩んでいくことができる一方、「遺伝上の父」を知ることができない場合、「探し続ける」という位置に立ち続けることになる。この位置に立ち続けることになる場合、すでに考察したように[怒り]の情動が維持され、時に[激怒]が表出されることへとつながる。

1. 「真実告知」が、青年期以降の場合とそれ以前の場合

→当事者は共に「青年期」を一つの境界として認識していた。

2. 「遺伝上の父」を、知ることができた場合と探し続けている場合

→知ることができた場合、事実と向き合い、「父」との距離を保ちながら、自らの人生を歩んでいる

→探し続けている場合、真実との距離が縮まらず、「怒り」が表出される

この2つの共通点・相違点を論理的に構成すると、DI者は「真実告知」という人権を回復するためのサポートを受け、「出自を知る権利—自分がDI者であるという事実を知ること及び生物学的な父を知ることに関する権利—」を回復することにより、自らの生まれにかかる物語を変化させられる。すなわち、第一に自らの出生にAIDが介在し、それを選んだカップルが不妊で悩んでいたという物語が存在していたことを知るという、新たな物語に直面する。そのことによって自らの出生にかかる物語を変化させられるのである。第二にAIDで出生したという物語を受け止め、理解し、納得しようとする葛藤の中で、自分探しをしていくことになるという、新たな物語に直面する。第三に「遺伝上の父」を探すという物語に直面する。そして「遺伝上の父」を知ることができることによって、自らが独立した個人であるという認識を深め、「遺伝上の父」と一定の距離をとりながら、自らの新しいナラティブを構築することができるようになる。その一方で、「遺伝上の父」の父を知ることができないという物語に直面する場合もある。

したがって、筆者はこうした2つの「出自を知る権利」の回復を「ナラティブの再構築」の主要な因子であるにとらえ、DI者が「今、どこにいるのか」を類型化するとともに、その類型下にいるDI者にとってどのような権利が回復されなければならないのかという関連を、図V-4のような四象限の構図として整理することができる。この図を解釈していくと、DI者の変化にかかる新たな知見を提示することができるものと考えられる。

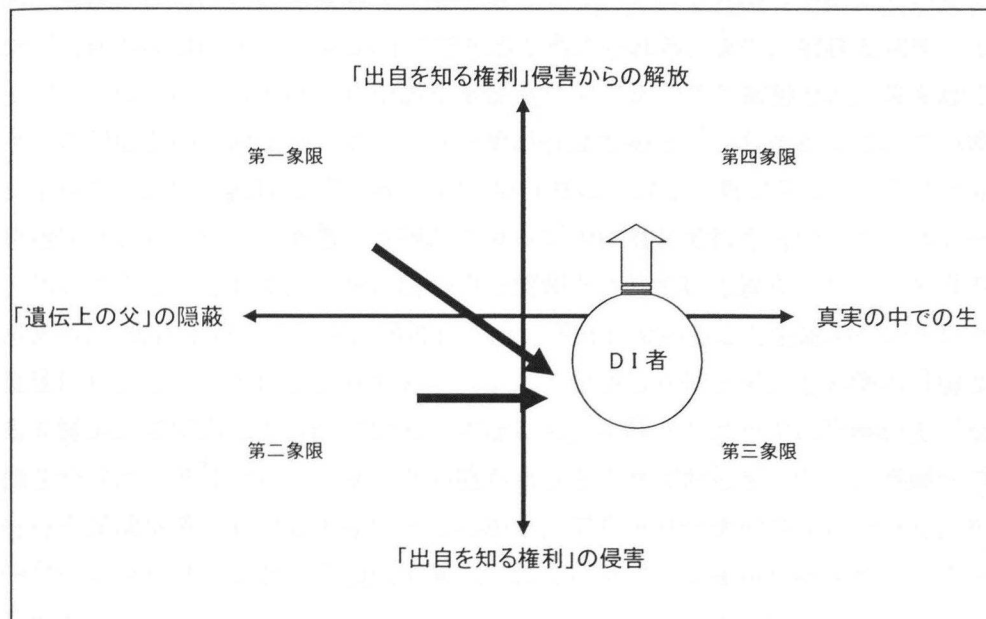


図 V・4 DI 者の類型と人権侵害からの解放

図 V・4 について若干の説明を行えば、図中の座標軸上に登場する人物はすべて DI 者であり、図中のいずれかの象限に位置づけることができることから、ここでは各象限の「住人」という呼び方をしておく。

第一象限の住人である DI 者は、自らの出自に関心がない当事者である。そして第二象限の住人である DI 者、「もしかしたら私は DI 者かもしれない」と思い悩む当事者である。次の第三象限の住人である DI 者は、思春期を過ぎてから真実を知った当事者であり、第四象限の住人は、物心ついたときから自分が DI 者であるという真実の中で育った当事者である。

## 2. DI 者の類型と想定される SW 実践

上記のように DI 者像を類型化することができるとすれば、類型ごとに対応したソーシャルワーク実践が想定できる。想定できるソーシャルワーク実践を導くために、本論の「II. 先行研究調査 2. DI 者のニーズに関する研究」で既に提示した「図 II・1 DI 者の権利擁護のためのソーシャルワーク・システム（案）」を想起し、ソーシャルワークの機能に着目した検討を試みる。

第一象限に住んでいる“DI 者”は、自分が“DI 者”であること自体を知らず、関心を示さず、普通に暮らしているケースが多いだろう。しかし、何等かのきっかけで自らが「DI 者」とあるという真実にふれたとき、第三象限の住人になり、第三象限の住人が典型的にみせる苦悩を背負い込むことになる人々である。つまり、第一象限の住人である“DI 者”は、自らが AID の当事者であることを知らないところに特徴がある。逆に言えば、本人が“DI 者”であることを知っているのは、AID を選んだカップルやそれを実施した医療者である。したがって、この段階でのソーシャルワーク実践は“DI 者”本人からみれば、間接

的な支援となる。この間接的な支援に関しては、才村や岩崎らが伝えているように「テリング（真実告知）」への支援が有効であると考えられる。また、AIDを選択しようとするカップルへの対応としては不妊相談や不妊カウンセリングの場面での、将来起こり得るリスクへの対応という側面からのアプローチが有効であろう。したがって、この段階でのソーシャルワークは、AIDに関する相談やAID後における「真実告知」に関する相談を、AIDを選ぼうとしている、あるいは選んだカップルに対して行うというケースワークになろうと想定できる。そして、不妊相談の中で問題とされている視点として「男性不妊」の問題がある。「男性不妊」の場合、男性自らが「不妊」であることを認めないという現実が多く見受けられることが指摘されており、子どもを望む女性と男性との間の「温度差」を埋める支援が必要であるとされている。すなわち、不妊クリニックに出向いてこない男性への働きかけは、不妊カウンセリングの範ちゅうとされておらず、かつ、妊婦への相談・指導を行う保健事業にもなじまないところから、アウトリーチのスキルを有し、かつファミリーソーシャルワークという領域で確立されているソーシャルワークが対応すべきだと考えられる。

第二象限に住んでいる“DI 者”は、自分の生まれに何等かの不自然さを感じ、小さな頃から「もしかしたら・・・」という悩みを抱いていた“DI 者”である。その意味では「不安」という感情を募らせている“DI 者”である。ここの住人も上記と同様、何等かのきっかけで自らが「DI 者」であるという真実にふれたとき、第三象限の住人になり、第三象限の住人が典型的にみせる苦悩を背負い込むことになる人々である。しかし、第一象限の住人とは異なり、長年の蓄積があるため、第一象限の住人とは異なる感情を浮かび上がらせる可能性がある。第二象限に住む“DI 者”は、「不安」などの感情への対応と真実を知るための術に関する支援を求めていると想定できる。この求めへの対応は、スウェーデンのシステムや図Ⅱ・1の「身近なところでの相談窓口」「当事者の代弁／代行」として示した相談窓口と情報開示請求という機能が有効であると考えられる。このようなシステムと機能が有効に稼動するためには、スウェーデンのような法的施策の整備が必要であり、国が想定したような本件にかかる法整備が進むことが求められる。法整備に向けたソーシャルワーク実践には本論で展開しているような調査研究並びに結果の公表・伝達などの媒介機能、啓発・教育的なアプローチによるソーシャルアクション機能を発揮することが求められる。また、法制定後においては、生殖医療にかかる専門教育を受けた上で“DI 者”の相談に応じる窓口としての機能、あるいは情報開示請求という公的サービスへのアクセスの手続きをサポートする機能を担うことができるだろう。具体的には専門社会福祉士の認定を受けた事務所を開業する独立型社会福祉士の機能の1つとして想定することができるのではないかと。

第三象限に住んでいる「DI 者」は、第一象限または第二象限から移り変わってきた住人であり、元の居場所での時間の長さや個人差、その他多様な要素により、真実を知らされても人権侵害からは解放されていない人々である。ここに住む「DI 者」の解放が、本論の中核をなしていると言えよう。ここに住む「DI 者」への対応は、システムとして、あるい

はサポート・ネットワークとして担われる必要があるのではないか。なぜなら、DI 者が被っている人権侵害は重層的な構造を有しており、その重層的な構造があるがゆえに多様なサポートが求められると考えられるからである。つまり、図Ⅱ-1 のシステム（案）に登場するすべての人・機関が DI 者のサポートに何らかの関与をし、それぞれの機能を DI 者の求めに即して展開する必要があると考えられる。

そして第四象限に住んでいる DI 者は、自らの物語を DI 者として構築していくことを了解し納得している人々であり、ここに住む DI 者の物語は「怒り」や「恥」から解放されているのである。ここにおけるソーシャルワークは、DI 者の求めや DI 者が「脱構築・再構築」した物語により構成された社会的正義の全うされた社会像を、DI 者を取り巻く人々・諸情勢に対して「翻訳」し「伝達」していく機能を担うことになるだろう。この点については、対人援助職のあり様や第三者への伝達方法等として検討が必要であり、第5調査以降の課題としておきたい。

### 3. DI 者を取り巻く2つの変化

以下では、第4調査の1の結果と図Ⅴ-4を踏まえて、第三象限の住人を「Aさん」、第四象限の住人を「Bさん」と称して代表性を与え、両者の置かれた状況を検討していく。

図Ⅴ-5は、DI 者の変化の側面を表している。歴史が証明しているように AID を永遠に「隠された医療」にしておくことは不可能であり、「隠された医療」の根幹にある他者の情報のコントロールは絶対的なものではない。したがって、AID で生まれた A さんが、AID で生まれたという事実を知り、“DI 者”となるという物語の変化（第1の変化）が起こり得る。この第1の変化の際、A さんにはさまざまなネガティブな情動が起こり、そもそも鬱症状を発症することもあり、個人的な背景から起こる問題や家族の中で誰もが経験するような問題まで AID によってもたらされたと考える。しかし、“DI 者”となった A さんは、「DI 者」となる第2の変化へ向かう可能性がある。

第2の変化がもたらすものは、DI 者としての整理された、外在化された新たな物語である。この第2の変化は、専門家より自助グループによる人権レベルの深いサポートによってもたらされ、A さん自らを解放していくような変化となる。

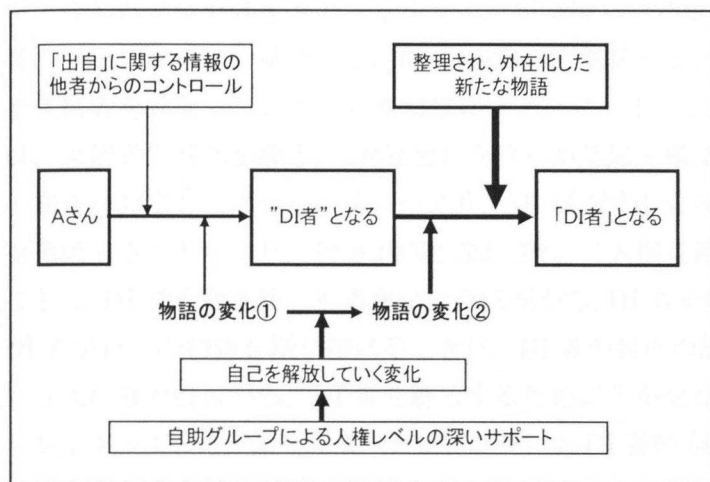
第3調査で明らかなように、DI 者の物語は、「対自己」に対する物語から「対両親」へ、そして「対社会」へと広がり、確実に変化している。このような変化を内在する語りを、DI 者のストレングスととらえることにより、ソーシャルワークの関わりとその焦点が明らかにできる。

そこでは、3つのレベルを、ソーシャルワークでいうマイクロ・メゾ・マクロの領域解釈論に照らしてみれば、[マイクロ・対人][メゾ・社会参加][マクロ・社会性]が対応し、DI 者の物語が[対社会]にまで広がるということは、自己認識がマクロレベルに影響を及ぼすところにまで広がっているといえることができる。すなわち、[対社会]に対して DI 者自身が訴える力を発揮できるまでにエンパワメントされ、訴える力を DI 者のストレングスと受け止めることができる。その範疇は[わが国]に留まらず、第4調査の2の結果に認められ



るように、国際会議という舞台を通して国際的に発信されており、その訴えはいわば“同時多発的”に世界各国で行われ、かつ、その動きが連帯を帯びている。

繰り返しになるが、こうした世界的なDI者の声の発信は、DI者によるDI者のための人権宣言のグローバル化であるといえよう。つまり、こうした当事者運動は、侵害されてきた人権のうち、表現の自由の侵害から、当事者を解放する道筋であり、社会的に認められ参加する権利の回復とも結びつく。



図V-5 DI者の2度の物語の変化

このように結論付けることができるならば、DI者は、自らの物語をオルターナティブ・ストーリーに再構築することにより、再構築された物語を「対自己」「対両親」「対社会」「対国際社会」に対して訴え、それが当事者の物語であることを訴える力を有したことになる。すなわち、DI者は自身が被っている「自己の情報を他者がコントロールする、支配する」という人格権の侵害から、自らが発言することにより解放される契機を獲得したといえよう。図V-6は、DI者の変化しない側面をイメージ化している。AIDで生まれたAさんとBさんがいる場合、Aさんが“DI者”になるまでの時間がBさんに比べて長ければ、[怒り]や「恥」の情動が強く、自己を否定する力も強い。この強さを緩和するためには、できる限りAさんが“DI者”になるまでの時間を短くする必要がある。しかし、時間を取り戻すことは不可能であるので、自己を否定する力を緩和する他の方法を見つけなければならない。それはAさんが「ドナーを知る」という方法である<sup>6</sup>。これは当然に「出自を知る権利」の回復を意味する。

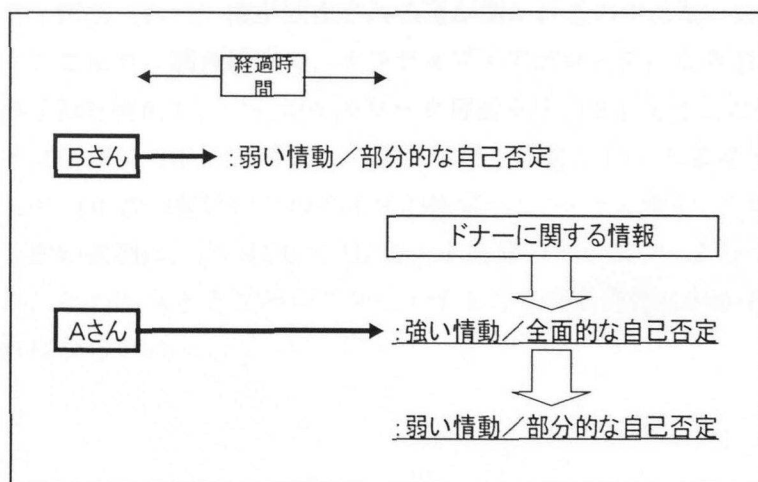
このような結論は、図V-4にて再現することができる。第一象限、あるいは第二象限の住人であったAさんが、他者からの自己の出自に関する情報のコントロールから、何らかの契機で逃れ、第三象限の住人、すなわち“DI者”になること。これが上記の第1の変化に該当する。“DI者”となり第三象限の住人となったAさんは、他者からの自己の情報がコントロールされているという状況下におかれていた、ドミナント・ストーリーから脱却し、



自らの求めに即して発せられた「人権に関する発話（人権宣言）」によって、人権を権利として回復し、第四象限の住人、すなわち「DI 者」として新しい物語を生きることができるようになる。しかし、自らの出自に関する情報を取り戻せたとしても、失われた時間を取り戻すことは不可能であり、その変化は「完全」なものではない。すなわち、DI 者固有の侵害されている 6 つの人権のうち、「出自を知る権利」と「表現の自由(権利)」を回復し、再構築されたオルターナティブ・ストーリーによって生きることができるようになる。

こうしたプロセスをソーシャルワークが支持し、サポートすることができるならば、DI 者のストレングスを見出し、DI 者が自らを解放するための主権者として運動し、理解者や支持者を拡充していくことを可能にする。こうした主権者による運動のプロセスや成果は、支援者の増加を導き、「対社会」を自らが排除・孤立させず、参加が擁護された社会へと描きなおすことにつながる。つまり、DI 者が DI 者自身の「人権宣言」とも呼べる発話を発信することにより、物語が描きなおされ、「人権宣言」が擁護された社会の住人になることは、DI 者を取り巻く不適切な社会状況から、DI 者を解放することにつながる。よって、DI 者が自らの物語を語り続けることは、DI 者の自らの思いを伝える権利（表現の自由）という人格権の侵害から、DI 者を解放するために欠かせない要件であると考えられる。

したがって、ソーシャルワークは、こうした DI 者の「語り続ける（宣言を発信し続ける）」という運動を支援し続ける機能を担う必要がある。この機能を担うことこそ、ソーシャルワークによる DI 者の権利擁護である。



図V-6 時間の長さで自己否定

#### ④ドミナント・ストーリーとDI 者との対話

ドミナント・ストーリーを主張する医療者等の権力を有する者の「力」は、DI 者が「語り続ける」ことにより相対化される。とすれば、権力—服従という関係の中ではなく、対話するという関係の中で次の段階へとDI 者を解放していく可能性が広がるのではないだろうか。

新たに構築された物語によって、DI 者と他者との関係が次の段階へと解放されていく可能性に着目することが、ソーシャルワークというストレングス・アプローチの視点であると筆者は考える。

ストレングス・アプローチとは、人間とはいかなる現状形態の中においても、成長・変化・学習する能力があるという人間観に支えられている。その人間観をもって、①支援を必要とする人の持つ力・可能性を信じ、②その力を引き出すために、強さ・長所・魅力などに着目し、③利用者と援助者のパートナーシップを尊重し、④[地域]を[社会資源の宝庫]として重視し、⑤地域ケアの重要性を認識した理論である。また、ストレングスは利用者の「長所または強さ」あるいは「能力・意欲・嗜好等」を活用し、利用者の能力に着目したアセスメント並びにケアが、結果として利用者の QOL の向上につながる。

つまり、ソーシャルワークは、ナラティブ・アプローチで DI 者の「物語」に寄り添いつづけ、DI 者の「物語る」権利、すなわち DI 者の思いを他者に伝える権利（表現の自由）を人格権として擁護し続けることにより、DI 者のみならず、DI 者を取り巻く社会状況をも、パターナリズムを背景とする AID を取り巻くドミナント・ストーリーから解放する可能性がある。ナラティブ・アプローチからストレングス・アプローチへのソーシャルワークの実践上の連結は、DI 者と社会との関係性を変革し、DI 者と対峙してきた他者を解放し、人々の QOL の向上、あるいは Well-being の保持・発展につながる可能性がある。これによって、DI 者と対峙する社会システムとの対話が構成されれば、DI 者の人権としてのコミュニティ開発（共生）権が回復される道が開かれるのではないだろうか。

ここまでの調査研究で、ナラティブ・アプローチによる DI 者の声を繰り返し聴取し、発話記録を構成し、ソーシャルワーク理論を用いて、主体的な情報発信と SHG 等のネットワーク活用の可能性を考察してきた結果、本論で 1 つの課題として明らかにすることを目指した「DI 者の解放のための理路の構築」に対する結論を、上記のように得ることができた。

次の課題は、いかにして DI 者と支援者のパートナーシップに基づく相互関係が結べるのか、その要点とそこからスタートすることの妥当性にかかる根拠を明らかにしていかなければならない。

## 2. DI 者の発話に対するレスポンス比較調査

この節では、2つの調査—日本の対人援助職のレスポンス（第5調査）とアメリカの対人援助職のレスポンス（第6調査）—の結果について考察していく。

ここでの調査は、DI 者の求めに即したソーシャルワーク・プラクティスのあり方を見出すことを目的としている。この研究では、アメリカおよび日本の DI 者へのインタビューを行って得られた発話記録を研究上の指標として用いて、わが国における医療・保健・福祉にかかる専門家へのインタビューを行い、DI 者の発話に対する専門家としてのレスポンスを口頭並びに文書にて得た（以下、第5調査）。その後、米国における不妊カウンセリングを行う第一人者である Sharon N. Covington と面接し<sup>7</sup>、第3調査と同様の指標を用いて、筆者と Sharon との間でロールプレイ形式による構造化インタビューを実施した（以下、第6調査）。

第5調査と第6調査によって得られたトランスクリプトを分析し、両調査の対象者のレスポンスと DI 者の求めるレスポンスとを比較検討し、DI 者の求めに即したソーシャルワーク・プラクティスに関する探索を行った<sup>8</sup>。

### （1）日本の対人援助職のレスポンス（第5調査）

第5調査は、次のような趣旨及び質問項目をインタビュー対象者一人一人に事前に伝え、グループ・インタビューの形式で行った。すなわち、事前に示した調査の趣旨は、「精子の提供等を受けて受精や妊娠を図る生殖補助医療によって、わが国ではすでに1万人以上の子どもが生まれています。この医療によって生まれた子どもが自らの出自を知る権利等を主張すると共に、アイデンティティ確立をめざしてメッセージを発信しはじめています。私たちの研究グループでは、こうした生殖補助医療で生まれた子どもにインタビューを行い、子どもたちへのサポートのあり方について当事者を交えて探究してきました。つきましては、専門職の皆様のご意見を踏まえて、生殖補助医療を取り巻く様々な課題を整理し、生殖補助医療で生まれた子どもへのサポートのあり方を明確にし、かつ、それらの普及に努めて」いくというものである。

「調査の目的、対象及び方法・手順、調査上の留意点」については、「Ⅲ. 研究の方法 2. 調査の枠組み （7）第5調査」で示した。

#### 1. 調査の結果

インタビュー記録の中にある「児相」とは「児童相談所」の略語として、そのまま活用した。インタビュー対象者から得た回答は「A○：～」で示し、○に相当する数字はインタビュー対象者の人数に対応しており、その属性は一致していない。各質問について何名から回答が得られ、それをランダムに順位付け、整理したものである。

具体的なデータは「参照データ⑨：専門職の概況と応答」で示した。

#### 2. 考 察

このインタビューの対象者は、自己紹介の記録（参照データ⑨）で確認できるとおり、

福祉関連業務における一定程度以上の学識経験を持つ者で構成されている。したがって、本インタビューの記録は、直ちに一般化できるものではないにしても、調査当時の諸情勢を加味した上で、一定程度以上の学識経験を持つ者が抱く、AID に関する認識の表出としての意味を有すると推測することができる。

続く【質疑・意見交換】にみられるように、一定程度以上の学識経験を持つ者においても、その経験と知見を生かすための十分な情報が、まず求められるのであり、十分な情報を取得するための一定の時間とそれを提供する研修等の機会が必要であることが読み取れる。つまり、いかなる学識経験者であろうとも、新しい課題に対して的確な判断を行うためには、十分な情報と研修等の機会が必要であるといえ、新しい課題に対する「教育のあり方」を明確にしていくという課題があることを指摘できるだろう。

各々の質問項目に対するインタビュー対象者の回答は、ケースワークまたはカウンセリングにおける、来談者を受容していくという原則にのっとった回答が大半を占めている。しかしながら、ともすると来談者である AID で生まれた子どもの立場に立った受容の原則を外れ、AID を行った親の側に立つ助言・指導が加えられる部分がある。誰の立場を受容し、共感していく立場なのかという原則が崩れてしまう要因には、従来までの支援者の「常識」が関与しているのかも知れない。木原（2005：128）は、ナラティブ・アプローチで言うパワー（権力）との「対抗文章」とは「口頭のナラティブの文章版」と呼び、口頭による語りと文章による語りは、基本的には同じであるが、口頭の場合より文章の場合はより「しみ込んだ」度合いが強固になる可能性があるとし、文章の場合は、読者の中で反復し、リフレクトし、それが確固たる普遍の現実として定立していく可能性が高くなるとしている。つまり、文章として確認できるナラティブが、従来までの支援者の「常識」という名のパワー（権力）であるにとらえることができるとすれば、それこそがドミナント・ストーリーである可能性があり、ここで抽出された文章記録はドミナント・ストーリー性を帯びている。したがって、図 V-7 のように支援者が日常業務の中で身につけている「支援者としての常識」（A）の範疇を、AID で生まれた子どもたちが抱える問題（C）は、はるかに超えており、「支援者としての常識」では対応しづらい領域へと拡大している。また、対応可能領域も存在し、図中では（B）として示した。

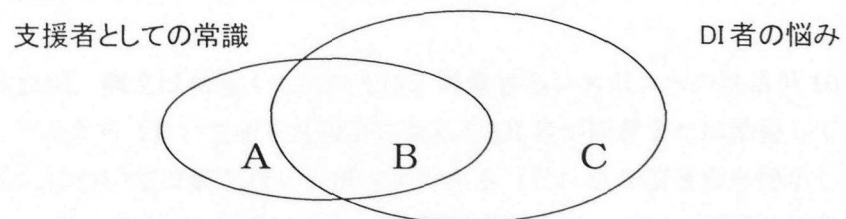


図 V-7 「支援者としての常識」と DI 者の悩み

## (2) DI 者の声と支援者のレスポンスの対比

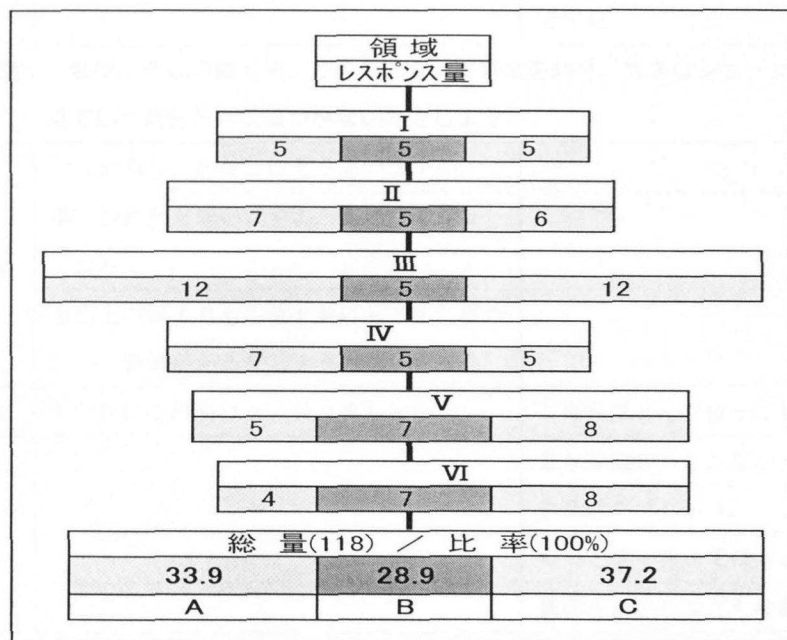
支援者へのインタビュー調査を行った後、AID で生まれた当事者にも同じ質問項目について、自記入式メールでの提出という方法で回答を寄せて頂いた。

### 1) 対人援助職のレスポンスと DI 者の求めの比較

ここでは、支援者と当事者の声を対比させ、図V-7 において提示した領域AとBとCが認められ、上記の仮説「図V-7 にいう『A・B・C』が存在する」が成り立つことを検討していくこととする。なお、具体的データは「参照データ⑩：第5調査の検討データ」で示した。

### 2) 比較結果の考察

第5調査の対象者から寄せられた口頭並びに文書によるレスポンスのうち、DI 者が同意・納得しがたいレスポンスを（A）とし、DI 者が同意・納得できるものを（B），そしてDI 者自身が求めるレスポンスを（C）とした。なお、図V-8 の作成においては、第2調査の対象者とDI 者のレスポンスの一致・不一致をヒストグラムの記述形式を範としている。



図V-8 対人援助専門職のレスポンスとDI 者の求めの比較

図V-8 を簡単に説明すれば、例えば領域Iにおいては、対象者のレスポンスの総量が10項目（A+B）であり、そのうち（B）である5項目に対してDI 者が同意または納得しており、残り5項目の（A）については新たなレスポンスである（C）を5項目自ら提示しているのである。つまり、（B）が多ければ多いほど、DI 者は自らの思いが第1調査の対象者に「受容または共感」されたと感じている度合いが高いことになる。このように整理してみると、2005年当時に第5調査の対象者による約半数のレスポンスは、DI 者にとって同意または納得しがたいものであった。同意または納得しがたいレスポンスとは、DI 者の言



葉を借りれば「深さが違う」と表現される。そこで、DI 者にとって同意または納得しがたいレスポンスと DI 者の求めるレスポンスの例を示せば、表 V-4 のとおりである<sup>9</sup>。

筆者は、表 V-4 のように第 5 調査対象者と DI 者の求めるレスポンスとの間に齟齬が生じることを重く受け止めたい。ここで試みた考察は 2 つの点を明らかにした。

表 V-4 DI 者の発話に対するレスポンス

発話： 医者は、「子どもへの説明は医療がやります」「医療がやるべきアフターケアを行います」とはじめに説明すべきではないでしょうか。		
	第 1 調査の対象者のレスポンス	DI 者のレスポンス
A	なるほど、もちろん、そういう考え方もありますね。子どもへの説明はまず、親がすべきではないでしょうか。	
C		そうですね、必要なことですよね。医者にも不信感があるのですね。
発話： 私は、今〇〇歳です。この年になって真実を知り、大きなショックを受けました。両親は、私のことを見ていて自分たちは傷つかないのでしょうか。		
A	どうだろう、あなたはどう思いますか。	
	傷つかれたと思いますよ、あなたのショックをみて。	
	遺伝上の親よりも生活を共にしてきた親の方が、価値があるでしょう。	
B	あなたにご両親はどう見えましたか。	ご両親はどんな様子に見えましたか。
C		25 年間知らされなかったのですね、それは大きなショックを受けたでしょう。
		もっと早く言ってほしかったですね。
		親御さんからはどんな風に聞かされましたか。

第一の考察結果は、第 5 調査の結果並びにその結果に対する DI 者からの求めとの間には、齟齬が生じる可能性があることを認識しておく必要があるということである。つまり、当事者の苦悩が対人援助職にとって従来までに想定されていた苦悩と異なる場合、いかなる対人援助職であろうとも、従来までに想定してきた対応をそのまま活用することには留意が求められるといえよう。荒川(1992: 42)は、自身のライフ・ヒストリーがクライアントや人の理解につながり、ワーカーが生涯を通じて自己覚知していくことの重要性を主張している。また、山崎(1994: 32)は、ワーカーがヒューマン・サービスに関わる時、クライアントや被援助者から学ぶ姿勢から始めなければならないと述べている。したがって、第 6 調査では、DI 者が同意または納得し得るレスポンスとは、どのような内容・意味・機

能・構成・構造を有しているべきなのかを探索することが次の課題となる。そのため、人工生殖の自由化が進み、人工生殖にかかる情報が溢れているアメリカにおいてDI者への支援を進めている対人援助専門職にインタビューし、DI者へのアプローチのあり方を模索する<sup>10</sup>。

第二は、第5調査の対象者のレスポンスをDI者が閲覧し、率直なコメントを寄せるという手法、すなわち、ナラティブ・アプローチというリフレクティング手法により、支援者のレスポンスとDI者が求めるレスポンスとに差異が生じることを明らかにしたことである。ナラティブ・アプローチは、開かれたオープンな関係の中で、ドミナント・ストーリーを脱構築し、相互作用の中で、オルターナティブ・ストーリーを構築していくことを模索していく。

ここで試みた対人援助職のレスポンスとDI者が求めるレスポンスとの対比という試行的研究プロセスは、ナラティブ・アプローチにいう「脱構築・再構築」にかかる過程における当事者への対人援助職の関わり方に関する焦点を見据えたものであり、木原（2005：28）がいう「当事者への眼差し」と「当事者の眼差し」の相違を尊重するという視点に近似する。すなわち、支援者が自らの物語の中で、DI者の物語を聞くのではなく、DI者の物語の中で、DI者の声を聴くことの有意さを検討したものであり、明らかにドミナント・ストーリーとオルターナティブ・ストーリーとの差異を認めるものであると考えられる。

### （3）アメリカの対人援助職のレスポンス（第6調査）

第6調査は、2007年8月にアメリカ・ワシントンDC郊外にある Shady Grove Fertility (reproductive science center)の Sharon N. Covington のオフィスにて、約2時間にわたり通訳者を介して、第2調査において活用した日本のDI者の発話記録を英訳して用い、構造化インタビューを実施した。構造化インタビューでは、筆者がDI者を演じ、DI発話指標を読み上げ、Sharonが相談者を演じるというロールプレイ形式を用いることでインタビュー調査の構造を保持した。本調査の内容は、Sharonの了解を得てICレコーダー並びにカセットテープで録音し、以下で公開する記録はSharonの了解のもと筆者の責任で整理したものである。なお、本調査には、筆者のアメリカでの調査をアレンジメントし、ゲートキーパーの役割を果たしていただいた Hare Isadora も同席している<sup>1112</sup>。

#### 1. 調査の結果

この調査から得たトランスクリプトは、筆者が読み上げたDI発話指標を「発話○：～」と示し、それに対するSharonのレスポンスを「返答○：～」で示した。また、発話記録の出所を明確にするため、トランスクリプトの冒頭に「領域・付番・キータム」を記載した<sup>13</sup>。具体的データは「参照データ⑩：アメリカの専門職のレスポンス」で示した。

## 2. 考 察

第6調査は、第2調査から得られたDI発話指標に基づき、アメリカにおいて対人援助専門職に対して行った、構造化インタビューである。

### 1) レスポンスの特徴

第5調査では、支援者のレスポンスとDI者の求めるレスポンスとの間に相当のズレが生起している応答と一致している応答とが認められた。この第6調査では概ねDI者が了解できるレスポンスがなされている可能性が高い。そのエビデンスを具体的に確認していく。

この調査における返答③は、図V-7におけるBに位置づけることができ、支援者の返答とDI者の求めとの間の齟齬が解消し、同意と納得を得られるレスポンスとなっている。第5調査と第6調査の間のレスポンスの差異は、日米のAIDに関する社会的な状況・認識度の差異に求めることができ、一定の学識・実践経験を持つ者においても、その経験と知見を生かすためには、当該事項にかかる十分な情報が得られ、問題の所在を認識する専門的知識の習得が欠かせないという示唆を与えるものであったと考える。

この調査のトランスクリプトの全体像は、とても受容的で共感に満ちている。とりわけ、返答③・④・⑧・⑪・⑫・⑯・⑱・⑲にみられるように、DI者の立場に寄り添うという「受容と共感」の原則と技法に則ったレスポンスが見受けられる。こうしたレスポンスの原則や技法は、カウンセリングにおけるクライアント中心療法やケースワークの原則並びにシャロンのアプローチとの共通点であり、対人援助職の基本的姿勢であり、対人援助職の基本的な姿勢にかかる思想、あるいは哲学の表出であるといえよう<sup>14</sup>。

このアプローチが非常に重要なことを確認した上で、S・マクミナー& K・J・ガーゲンの知見を参照しておく。すなわち、マクミナーらは、語られた現実を受け止めるとき、カウンセリングの場面やソーシャルワークの面接を「助言者の立場」と呼ぶことがあるが、この立場の良い点を「常識的」「受容的」とみなし、欠けている点をクライアントの語りの尊重からくる問題の固定化と慢性的で重篤なケースに対する新たな行動選択肢の提示による一時的な緩和剤の提供にとどまるとしている。したがって、筆者はDI者の苦悩の深さへソーシャルワークがアプローチする時、このように受け止められがちな「助言者の立場」にとどまるのではなく、AIDにより生まれるということの重大さにかかる生命倫理上の考察を踏まえ、DI者へ関わる哲学的姿勢を明らかにしたアプローチを探究していく必要があると考える。続けてS・マクミナーらの提案を参照すれば、「助言者の立場」よりも重みのある2つの選択肢として、精神分析と物語に関するポストモダニスト的理解があるとしている。この2つの選択肢のうち、前者においてはソーシャルワーク・プラクティスとして当然に排除される一方、後者は社会構成主義に基づくアプローチとしてその適用が社会福祉学における一つのテーマとなると考える。

### 2) ナラティブ・アプローチに焦点化した考察

このことに依拠して、本論ではソーシャルワーク・プラクティスとしてのナラティブ・アプローチに焦点を当てて、シャロンのレスポンスを分析していくこととする。

野口(2003:13)は、ナラティブ・プラクティスとは社会構成主義の考え方から出発し、その発展の歴史には3つの学派があり、その共通点が2つの異なるナラティブを対比させる点にあるとしている。2つのナラティブとは「今語られているナラティブ(ドミナント・ストーリー)」と「未だ語られていないナラティブ(オルターナティブ・ストーリー)」とに区分され、ナラティブ・プラクティスの目標は、クライアントとそれを取り巻く人々が生きる世界を新しい言語環境によって構成される世界に変えていくこと、すなわち「未だ語られていないナラティブ」で構成される世界を創造していくことであると述べている。また、3つの学派の一つを代表するM・ホワイト&D・エプストン(1990)は、ナラティブ・プラクティスの最も重要な領域は「問題の外在化」「治療目的のための物語手段」「物語テクスト」「ストーリング/再ストーリング」「上演」「力としての知」であるとしている<sup>15</sup>。M・ホワイトらの整理に基づき、第6調査のレスポンスの内容を吟味し、その特性に応じて領域を分類してみると「返答①・④・⑥・⑦」は「問題の外在化」に対応し、「返答⑨~⑫」は「ストーリング/再ストーリング」に対応していると読み取ることができる。「返答④・⑧」は、物語的思考モードとして整理されている「時間の流れに沿って出来事が明らかになっていく過程によりストーリーが成立する」というとらえ方と一致している。さらに「返答⑬・⑯・㉒」は、物語的思考モードの文脈における実践におけるオルターナティブ・ストーリーの生成過程での「名づけ」とユニークな結果の導きに親和性がある。とりわけ、シャローンは、「返答㉒」のレスポンスの意味を次のように説明しており、AIDの本質にかかる「名づけ」が認識されたレスポンスであるといえよう。

私はソーシャルワーカーとして、まさに‘Social Abuse’であると感じた。

Social Abuseの中核に‘Shame’があると強く感じた。なぜなら、Being そのものが辱められているのだから、人間の尊厳の侵害であると思う。

### 3. 結 論

第6調査の結果は、DI者が指摘する①AIDに関する知識、②DI者の立場を理解しようとする姿勢、③DI者のおかれた状況の的確な理解を行うことができるという前提を有する者がDI者の求めに即したレスポンスを行い得る援助者であり、その要件を備えたソーシャルワーク・プラクティスとして、ナラティブ・アプローチが有意であることが示唆された。

また、シャローンが示した「Being そのものが辱められている」というとらえ方は非常に重要である。これは死生学というスピリチャリティの侵害と親和性がある知見であると解釈できる。スピリチャリティとは、人間存在そのものの中核をなす観念である。つまり、DI者が「Being そのものが辱められている」とは、全人的否定あるいは侵害に晒されていることを指摘していると解釈できよう。



#### (4) 小括(2)

第5・第6調査の比較により得られた結果は、DI者の苦悩には、DI者固有の苦悩—例えば、理解されない、聞いてもらえない—が内在化しており、この思いがDI者の社会的に認められ、参加する権利の侵害に結びつくと考えられる。

そのためDI者への支援は、DI者が孤立感・疎外感を抱くことを最小限にとどめ、支援者との間でパートナーシップが形成されるような接し方で、かつ従来までの支援とは異なるDI者の固有の苦悩に対応した支援のあり方やDI者の苦悩へ適切に対応できるソーシャルワーク・プラクティスが必要である。

そのようなソーシャルワーク・プラクティスとは、支援者による利用者への寄り添い、受容・共感などの技法を駆使した、カウンセリングスキル—例えば、来談者中心療法やマイクロ・カウンセリング—やケースワークの原則による面接技法に留まらず、援助者が「無知の姿勢」で当事者の物語を聴き、ホワイトらによるアプローチのプロセスを経て、物語を再構築していくナラティブ・アプローチが有意であることが示唆された。

さらにDI者の苦悩を理解するためには、DI者の発する声を「無知の姿勢」で聴くための、対人援助職に対する教育訓練が求められることが示唆されている。

##### ①変化に対応して聴き続ける

第一に確認しておきたいことは、ある一人のDI者を特定してターゲットと考えた場合においても、そのDI者の発話が変化し続けるということである。そして、支援者はDI者が「図V-4 DI者の類型と権利の回復」で示した4つの象限の中で、今どこにいるのかを明確に聴き取り、かつ「図V-3 DI者の訴えと願い」のうち、どこに焦点があてられ、物語が構成されているのかを聞き極めていく必要がある。つまり、ソーシャルワークというアセスメントのプロセスを、DI者の話を聴く際、意識していなければならないだろうということである。なぜなら、DI者の苦悩は、本質的に変えられない、人類が容易に答えを出すことができない「生命への侵襲」あるいは「生命の誕生への人工的介入」という側面を持ち、かつ、その事実が「隠されてきた」という人為から出発し、かつ、終焉すると考えておかなければならないからである。その苦悩の深さに関する明確な回答は、未だ世界的な学術レベルにおいても結論は出しておらず、当事者ならではの回答の導き方があるに違いないという姿勢が求められると考える。したがって、DI者の声の変化に対応して聴き続ける姿勢をソーシャルワーカーが保ち続けるためには、常に「無知の姿勢」に立ち返ることを想定しておかなければならない。

##### ②「無知の姿勢」から「翻訳者」へ

しかしながら、常に「無知の姿勢」で聴き続けるばかりでは、DI者を解放に伴うことは困難である。とすれば、ナラティブ・アプローチで次に展開させている理路として、当事者の語る物語を理解し翻訳し「名づける」という支援的行為へ、支援を展開させることが求められる。しかし、本論においては前節でもふれたように、DI者がいかにして第三象限

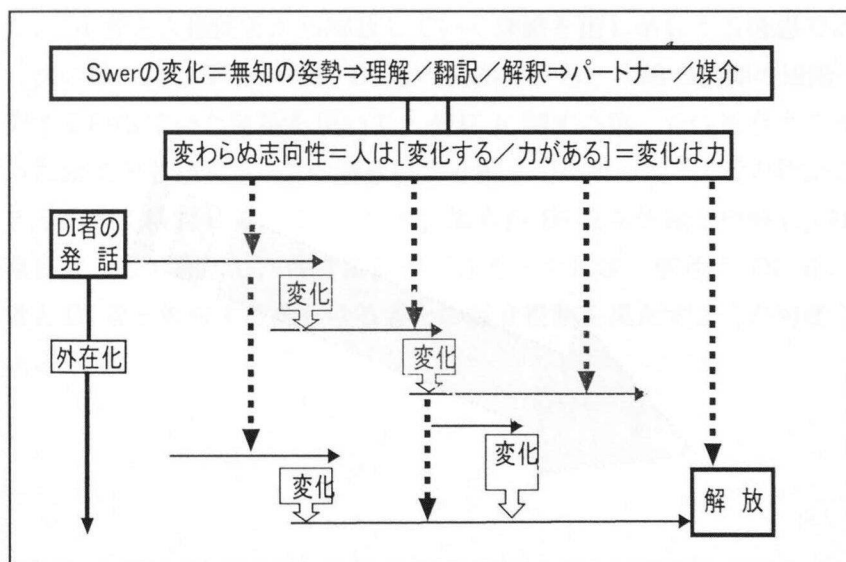


の住人から第四象限の住人にトランスファーするのは明確ではない。しかしながら、前節で導いたように、DI者が「語り続けること（宣言を発し続けること）」にストレングスを見出すことで、DI者の表現の自由が獲得されていく中で、DI者自身も変化する可能性がある。つまり、「語り続けること」は、自身の権利の回復であると同時に、他者への働きかけでもあるという要素があることを強調しておく必要があるだろう。

したがって、ナラティブ・アプローチからストレングス・アプローチへとソーシャルワーク・アプローチを連結させ、両者の交互活用を行うことで、DI者の常に変化するナラティブに即応できる可能性が広がると考えられる。

### ③「外在化」への対応

さらにDI者の発話は自らのアイデンティティを考えるとところから、DI者総体の人権を問うところへと、物語が「外在化」しつづけ、オルターナティブ・ストーリーは再構築され続ける。ただし、一直線にそうはならないことにも留意が必要である。したがって、支援者はDI者の物語がオルターナティブ・ストーリーとして再構築されるたびに、新たな立ち位置に立ち、求められる機能に対応していく必要が出てくる。つまり、DI者の物語が「ドミナント・ストーリー⇒オルターナティブ・ストーリー⇒ドミナント・ストーリー⇒オルターナティブ・ストーリー」と循環し、再構築されていくごとに、それに対応した支援者の機能の変化が求められる。このことを図示すれば、図V・9のように想定できる。



図V・9 DI者の物語の再構築と支援者の関わり

DI者が語る「4つの訴えと5つの願い」が獲得されることを、本論でいう「解放」であると想起しておけば、それに向かってDI者自身あるいはDI者の自助グループの物語は縦軸の方向で外在化し、さまざまな社会的要因や障壁に行き当たる可能性がある。そのたびに構築されてきた物語は脱構築され再構築されていくことになる。図中の左から右に進む→の基点が脱構築への基点である。そのたびに支援者、とくにソーシャルワーカーは変わ

らぬ志向性と変化する立ち位置から、DI 者へ応答していくことになるのではないだろうか。本節で明らかにしたことは、次のとおりである。

支援者がナラティブ・アプローチでいう「無知の姿勢」あるいは「無私の態度（先入観を持たずに、DI 者の話に耳を傾ける）」で、DI 者の声を聴き続け、DI 者の求めに DI 者のストレングスを見出した上で、求め（ストレングス）に即したレスポンスがなされなければならない。DI 者の求めに即したレスポンスがなされるとは、DI 者の求めを的確に理解できていることをフィードバックするレスポンスである。

的確な理解、あるいは解釈、意味づけをすることができれば、DI 者の求めを第三者に対しても、正確に伝達する道筋を見出すことが不可能ではなくなる。

DI 者が人権侵害から解放されるために、DI 者の求めを正確に伝達しなければならない相手は、AID に関する当事者性を有する者であり、第三者でもあり、ドミナント・ストーリーを構成してきた、あるいは容認してきた者ということがいえよう。いわばソーシャルワークの認識論で言えば、家族というミクロレベルから、友人・知人等あるいはコミュニティというメゾレベル、さらには社会や国家というマクロレベルにまで、DI 者のオルタナティブ・ストーリーである「4 つの訴えと 5 つの願い」が、DI 者の「人権宣言」として、正確に伝達されなければならない。

これが、筆者が考えるソーシャルワークが行う、DI 者の権利擁護の基盤となる構想であり、DI 者を人権侵害から解放していく理路を指し示しうる構想である。

次の節では、筆者が得た DI 者の発話のうち、本論の初期の段階・DI 者の苦悩の本質を探究する段階で得た発話を用いて、AID に関する第三者性を有する者に対する量的調査を行った結果を考察する。この調査により筆者が理解した DI 者の物語の構図が第三者に伝達できるのかを検討していく。つまり、筆者が DI 者を的確に理解し、DI 者の求めを DI 者の人権宣言として翻訳し、他者に伝達できるとすれば、筆者は DI 者のパートナーとして、DI 者と DI 者と対峙するあらゆる者との媒介役割を果たすことが可能となるのではないかと考える。

### 3. DI 者の発話に対する他者の認識に関する量的調査

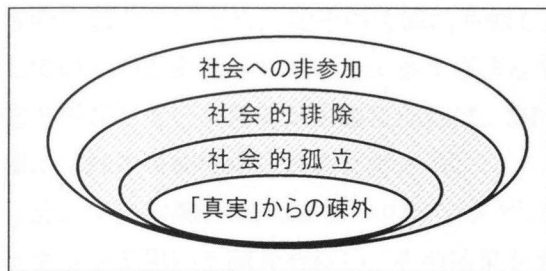
第7調査と位置づけた、DI 者の発話に対する他者の認識に関する量的調査は、本論における唯一の量的調査である。この調査の結果を検討していく。

#### (1) 調査の意図と対象者の選定

本調査は、DI 者の発話が、調査対象者にどのように認識されるのかを、量的調査により明らかにすることを目的とする。

DI 者が被っている人権侵害は、「図IV-4 DI 者を取り巻く課題の構造」で示し得る社会状況においてなされている。このような社会状況を構成する要素である「社会的ネグレクト（無視・放任）」から DI 者を解放するための示唆を得ることをめざして、本調査を設計した。その調査結果を報告する。

ここでいう「社会的ネグレクト」とは、AID に関する第三者が、DI 者に対して無意識的なレベルでなしている不適切なかかわりであると考えられるものである。その構造を図示すると図V-10 のとおりとなり、図V-10 における網掛け部分が本調査のターゲットである。



図V-10 DI 者を取り巻く社会状況と本調査のターゲット

図V-10 を構成する論拠を提示しておきたい。図V-10 は、本論「図IV-4 DI 者を取り巻く課題の構造」並びに「図IV-5 [社会的虐待]の構造及び要素」にかかる理路並びに人権にかかわる本論の射程から導いたものである。すなわち、図IV-4 が提示している構造は、DI 者の発話により生起させることができた DI 者を取り巻く人間関係的視座を意味する。ここにはジェノグラムが示す特徴としての時間性と人間関係そのものに内在される力関係、イコール力動性、さらにはその変化の可能性が含意される。また図IV-5 が提示している構造は、横軸に時間性、縦軸に人間関係に内在する力動性を要素化して示している。この両図を統合しカテゴリー化したうえで、代表する構成要素を抽出し、概念図化したものが図V-10 ということになる。つまり、図V-10 を構成している輪は、時間性・力動性・変化性を、DI 者の置かれている状況に照らして抽出した観念から構造しているのである。

図V-10 にいう DI 者の社会的孤立とは、筆者が示した DI 者の発話キータームにある「何も知らないのに否定する」という領域にいる者に向けられた DI 者の発話が意味する孤独感・排他感に代表される。そして、社会的排除とは、「ビックッと反応する」というキーター

ムに代表される DI 者と社会との軋轢である。つまり、社会的排除とは、岩田 (2008) がいう社会的排除の 7 つの指標のうち、集団的指標 (ラベリング, スティグマ, マイノリティ) に該当する概念に親和性がある。

このような社会的孤立と社会的排除を構成要素とする社会的ネグレクトが、AID に関する第三者から DI 者に対して無意識的になされているという認知が社会的に広がり、社会的ネグレクトという従前の物語とは逆の、肯定的な物語により世論が形成されることになれば、DI 者は人権侵害の重層的な社会システムの一部から解放され、DI 者の Well-being が維持・向上するものと考えられるのである。なお、社会的認知とは、認知心理学でいう人間の心の最も基本的な働きの 1 つであり、同じ文化や社会に属する人々で共有される共同主観性をさしている (池田ら (1991; 16))。そして、社会的認知とは通常、外集団との間に偏見や差別、非好意的な感情を抱くステレオタイプ化に代表されるネガティブな概念を内包している (池田ら (1991; 3), 森ら (2005; 200))。したがって、DI 者に関するステレオタイプ化された社会的ネグレクトという物語が存在するとなれば、その物語も変革のターゲットとなりえる可能性がある。さらに本論の論点である DI 者に対する社会的認知とは、社会を構成するあらゆる立場の人々が、①いかに DI 者をありのままに理解し、②DI 者の苦悩を受けとめ、③その苦悩に共感し、共感に基づく新しい物語を、社会として形成していくのかを含意している。さまざまな立場の人々における、DI 者に関する上記の①～③が生起していく構造が明確になれば、DI 者の無理解者を理解者へと変化させる焦点が明確にされる可能性が広がると考える。

そこで、本調査は、DI 者へのインタビュー調査から得た発話からビネットを生起させ、ビネットを用いた調査を行い、その結果をもとに、DI 者自身あるいは、DI 者を取り巻く近親者や友人・縁者、一般市民、さらには学識経験者など、日本国内はもとより国際的な関係者を調査対象とすることを想定した。したがって、母集団となる人々は、現在国内外で生存するすべての人であり、今後誕生してくる人たちでもあるため、母集団を特定することができない。しかし、西條 (2005; 22) の構造構成主義から、現象の再現可能性を追求していくと、次のように考えることができる。構造構成主義の思考原理は現象学的思考法であり、ある現象がいかに立ち現われてくるのかに焦点をあてる。そして、ある現象における存在・意味・価値は主体の身体・欲望・関心と相関的に規定されるという関心相関的観点によって構成される。したがって、絶対的な唯一の真実・真理はなく、対象(事物)は志向と相関して現われるのであり、認識は多元的であるとされる。この認識論に立てば、DI 者のナラティブに着目した筆者の研究の成果は、DI 者の苦悩を本質的に理解しようという志向と相関して立ち現われた現象であり、新たな現象が立ち現れない限り確からしいといえる。そこで、本調査では量的な調査という方法により、AID に関する第三者が、DI 者の苦悩の本質を構造的に把握しているとされるビネットを通して、DI 者の苦悩の本質にかかる構造を、どのように認知し、物語を構成するのかを探求することとした。

この検証の妥当性は、構造構成主義の基盤とされる池田による構造主義科学論の要諦に

ある。池田（2007;208）は、科学を真理の追求ではなく、現象の中から何らかの同一性をつかむことであり、それを基にして、予測可能性や再現可能性、検証可能性の適用が広がることが大切だとしている。つまり、池田（2006；173）によれば科学とは構造を記述することであり、現象をよりうまく説明できる理論（構造）が、より有効な理論（構造）であるとされる。西條（2005；137）は、構造存在論における「構造」は、実体化・存在化された「体制」ではなく、存在論的な「生起」であり、システムは存在的な「体制」として受け止められた「構造」であるとし、構造はシステムを包括していると述べている。このように構造とは現象を説明するための理論であり、その理論に即した実在がシステムである。現象をシステム化するという理論を、本論に適用してみれば、DI 者への援助実践のシステム化が理論であると解釈することができる。すなわち、本論でいう援助実践のシステム化とは次のとおりである。AID に関する第三者が DI 者の発話から生成されたビネットを通して、DI 者の苦悩にかかる物語を、DI 者の発話が示す方向性により構図を構成し、その構成が筆者の構造（理論）を再現し、説明可能性を深化させるとすれば、筆者の仮説は科学性を帯びていると主張することができる。さまざまな立場・社会・文化を背景にもつ人々が、DI 者の抱えた苦悩を理解したうえで、DI 者の存在を社会的存在として肯定し、理解者あるいは支援者となることと、DI 者の権利を擁護する者（例えば才村ら（2003;34）が生起させた構造（理論）とが一致、あるいは同質性をもちえていることが望ましい。そして、DI 者の権利を擁護する理論に基づき、DI 者への働きかけのポイントを明確にし、DI 者へのインターベンションを実施していくことができれば、DI 者の社会的認知を肯定的な物語へと脱構築し、肯定的な物語を認知した社会を構築することができる。また、同様に効果的に DI 者の権利を擁護するための、ソーシャルワーク実践として、その構造（理論）を活用していくことが可能になると考える。すなわち、DI 者を DI 者が自らの人権であると主張する「出自を知る権利」等の理念的権利の侵害から解放し、DI 者の権利が擁護された社会システムの構築への示唆が得られるものと考えられるのである。

本論の問題認識からすれば、AID に関する第三者はごく限られている。なぜならここで調査の対象とした「学生」に近似し、AID に関するドミナント・ストーリーを保持していないと考えられる者並びにそのような者で構成されたコミュニティがごく稀であると推定されるからである。すなわち、「図IV・4 DI 者を取り巻く課題の構造」の輪に属していない「無知の姿勢」を保持している者とは、権威や権力の前で完全に自由である者でなければならないからである。

ここでいう「コミュニティ」とは、コミュニタリアニズムというコミュニティに近似する。A・エチオーニ（2001：186）によるコミュニティの定義は、①ある集団の個々のメンバー同士の間に存在する、互いに交差し合い強化し合うような情緒にもとづくネットワーク②共通価値・規範・意味および共有する歴史やアイデンティティなど、ある特定の文化に対するメンバーによる一定の献身とされている。今後、本調査で得られた結果に対峙する結果が得られる群的調査が提示される可能性も高い。あえて、AID に関する第三者によるコ



コミュニティを例示しておけば、本論第2調査でDI者らが述べている知人・友人のうち、結婚や子育てに関心のない者によるコミュニティなど限定的であると考えられる。

このような問題認識から本調査での調査対象者は「学生」とした。また、今後の調査の発展の方向を視野におけば、これまでのDI者の発話記録を用いた質的な先行研究において一度も登場したことの無い集団を構成する者が学生であり、AIDにかかる最も利益相反を起し難い集団を形成している可能性を認め、理論的に調査対象コミュニティを限定していくことが可能となると考える。ただし、調査対象者を、筆者の所属する福祉心理系学生に限定したことについては、量的調査のセオリーからみれば、一般化を指定していける科学性を帯びておらず、限界を想定せざるを得ない。その一方で、上記のような構造構成主義による関心相関的観点からみれば、そのような対象から得た結果においても、ある集団において立ち現れる1つの現象として許容されうると考える。

以上のような視点に立ち、推計統計学上、母集団に対する標本に該当する、本調査での調査対象とした学生集団を、1つのコミュニティと認識しておきたい。

## （2）調査の結果

### 1）回答者の基本属性

「問1）回答者の基本属性」として性別を尋ねたところ、回答者のうち、男性が172人（38.2%）であり、女性が278人（61.8%）であった。「問2）回答上の立場」は、すべて学生である。

回答者の「問3）DI者に関する知識レベル」を尋ねたところ、表IV-6のような結果であり、回答者は、DI者から話を聞いたことが「一度もない」者が58.2%であり、間接的に聞いたことがある者を含めると97.3%がDI者への認識がほとんどない者であり、調査対象者が構成する集団は、DI者への認識がほとんどない者で構成された集団であるといえる。つまり、DI者のことを直接よく知っている当事者やDI者の声を代弁しようとしているサポート的な権利擁護者とは対極にある者で構成された集団であり、調査対象者は、DI者からみた第三者性を有する可能性が高く、調査対象者の選定の意図と一致していた。

表V-6 問3）DI者に関する知識レベル

選択肢	度数	パーセント	累積パーセント
1) 一度もない	262	58.2	58.2
2) 間接的に聞いたことがある	175	38.9	97.1
3) DI者から直接聞いたことがある	1	.2	97.3
4) その他	4	.9	98.2
欠損値	8	1.8	100.0
合 計	450	100.0	

「問4）対立する価値観への認識」として、以下のAとBを示して回答を求めたところ、回答者の約半数は、「生まれてくる子どもの知る権利」の方がより大切だと思う者（Bに近い）であった（表V-7）。

A：「女性の産む権利」と「生まれてくる子どもの知る権利」のどちらも大切だと思うが、どちらがより大切かを決めなければならぬとすれば、「女性の産む権利」の方がより大切だと思う。つまり、女性はすべてだれからも妨害を受けずに自由に子どもを産むことができると思う。

B：「女性の産む権利」と「生まれてくる子どもの知る権利」のどちらも大切だと思うが、どちらがより大切かを決めなければならぬとすれば、「生まれてくる子どもの知る権利」の方がより大切だと思う。つまり、だれも自分のことを知る権利があり、自分の情報はすべて自分のものであると思う。

表V-7 問4）対立する価値観への認識

選択肢	度数	パーセント	累積パーセント
1) Aに近い	103	22.9	22.9
2) Bに近い	208	46.2	69.1
3) どちらでもない	48	10.7	79.8
4) わからない	80	17.8	97.6
欠損値	11	2.4	100.0
合 計	450	100.0	

表V-8 問1) 性別 と 問3) DI者について のクロス表

	問3 DI者について				合計
	一度もない	間接的に聞いたことがある	DI者に直接聞いたことがある	その他	
問1 女性 度数	157	112	0	3	272
性別 %	57.7%	41.2%	.0%	1.1%	100.0%
男性 度数	105	63	1	1	170
%	61.8%	37.1%	.6%	.6%	100.0%
合 計 度数	262	175	1	4	442
%	59.3%	39.6%	.2%	.9%	100.0%
	値	自由度	漸近有意確率 (両側)		
Pearson のカイ 2 乗	2.643 <sup>a</sup>	3	.450		
有効なケースの数	442				

## 2) 回答者集団の属性

回答者集団の属性をより明確にするため、「回答者の性別（問 1-a）と DI 者に関する認識（問 3）（検定 1）」並びに「回答者の性別（問 1-a）と価値観（問 4）（検定 2）」について、カイ 2 乗検定を試みた。検定 1 における帰無仮説を「男性と女性との間には DI 者に関する認識に差がない」とし、検定 2 においては、「男性と女性との間には価値観に差がない」とした。

検定 1 におけるカイ 2 乗検定を行ったところ、表 V-8 のとおりであり、カイ 2 乗分布表に認められる自由度 3 に対するカイ 2 乗値は有意水準 5 % の場合に 7.81 であり、検定結果から得たカイ 2 乗値 2.643 は、7.81 より小さく、95% の確率で起こる。したがって、検定 1 の帰無仮説は採択できる。

表 V-9 問 1) 性別 と 問 4) 価値観 のクロス表

			問 4 価値観				合計
			A に近い	B に近い	どちらでもない	わからない	
問 1 女性 性別	度数		57	133	31	51	272
	%		21.0%	48.9%	11.4%	18.8%	100.0%
男性	度数		46	75	17	29	167
	%		27.5%	44.9%	10.2%	17.4%	100.0%
合計	度数		103	208	48	80	439
	%		23.5%	47.4%	10.9%	18.2%	100.0%
			値	自由度	漸近有意確率 (両側)		
Pearson のカイ 2 乗 有効なケースの数			2.511 <sup>a</sup> 439	3	.473		

同様に検定 2 におけるカイ 2 乗検定を行ったところ、表 V-9 のとおりであり、カイ 2 乗分布表に認められる自由度 3 に対するカイ 2 乗値は有意水準 5 % の場合に 7.81 であり、検定結果から得たカイ 2 乗値 2.511 は、7.81 より小さく、95% の確率で起こる。したがって、検定 2 の帰無仮説は採択できる。

検定 1 及び 2 の結果から、男女差を考慮した考察を行うことの必要性は極めて低いと考えられる。したがって、以下の分析においては、この 2 つの検定結果と問 3 の結果とを用いて男女差を考慮に入れず、本調査対象者集団を「DI 者に関する第三者性を有した学生」と操作的に定義する。

「問 6) DI 者が「自分の遺伝上の父を知りたい」と願うことについての認識」は、表 5-10 のとおりである。表 V-11 で認められるように、「全く同感だ」と「まあ理解できる」と回答した者を合計すると、80.1% になり、「何となくわかる」まで含めると、96.1% の者が DI 者の「自分の遺伝上の父を知りたい」という想いに同感または理解できる者であった。

問 4 と問 6 をクロス集計してみると、価値観の違いによる思いへの理解の度合いの出現率に大差はなかった(表 IV-11)。したがって、上記の操作的定義に「父を知りたいという想

いに同感または理解できる」という特徴を加え、本調査対象者集団を「DI 者の父を知りたいという想いに同感または理解できる第三者性を有した学生」と再定義する。

表 V-10 問 6) 想いへの共感

			問 6 想いへの共感				合計
			全く同感だ	まあ理解できる	何となくわかる	理解できない	
問1 性別	女性	度数	78	141	42	9	270
		%	28.9%	52.2%	15.6%	3.3%	100.0%
	男性	度数	62	65	27	8	162
		%	38.3%	40.1%	16.7%	4.9%	100.0%
合計	度数		140	206	69	17	432
	%		32.4%	47.7%	16.0%	3.9%	100.0%

表 V-11 「問 4) 価値観 と 問 6) 想いへの共感」のクロス表

			問 6 想いへの共感				合計
			全く同感だ	まあ理解できる	何となくわかる	理解できない	
問4 価値観	Aに近い	度数	33	49	11	6	99
		%	33.3%	49.5%	11.1%	6.1%	100.0%
	Bに近い	度数	77	92	30	7	206
		%	37.4%	44.7%	14.6%	3.4%	100.0%
	どちらでもない	度数	10	24	8	1	43
		%	23.3%	55.8%	18.6%	2.3%	100.0%
	わからない	度数	19	38	19	2	78
		%	24.4%	48.7%	24.4%	2.6%	100.0%
	合 計		139	203	68	16	426
			32.6%	47.7%	16.0%	3.8%	100.0%

### 3) DI 者の声の構成要素

問 5 においては、DI 者の発話から得たビネットを用いて回答を得た<sup>16)</sup>。問 5 は、設問 A) (5 件法)と設問 B) (4 件法)とからなり、設問 A) では共感度、設問 B) ではサポート度を尋ねた。その結果への単純集計は、表 V-12 のとおりである。



表V-12 問5) -A・Bの単純集計

設 問  (ビネット)	設 問 (A)										設 問 (B)											
	感大 でい きる 共		共 感 で え ら ば か		も ど い ち え ら な と		共 感 で え ら ば か		共 感 で え ら な と		共 感 で え ら な と		計		必要 だ い に が サ	がサ とど い ち え ら ば か	も ど い ち え ら な と	のサ に必 要 い は ト	計			
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%						度数	%	度数
1) AIDは、私の親を「自信が持てない親」にしてしまった。	42	9.7	81	18.8	174	40.4	66	15.3	68	15.8	431	100.0	148	34.6	141	32.9	112	26.2	27	6.3	428	100.0
2) 配偶子提供で産まれたということは、本人にしかわからない、体験です。	163	38.0	140	32.6	92	21.4	21	4.9	13	3.0	429	100.0	136	31.9	145	34.0	116	27.2	30	7.0	427	100.0
3) 医者は、配偶子提供を希望するカップルに、「真実告知」の必要性を説明するべき	185	42.9	106	24.6	102	23.7	22	5.1	16	3.7	431	100.0	200	46.5	127	29.5	88	20.5	15	3.5	430	100.0
4) 医者は、配偶子提供を希望するカップルに、医療がやるべき「アフターケア」につ いて、説明するべきです。	234	54.3	112	26.0	63	14.6	13	3.0	9	2.1	431	100.0	241	56.0	114	26.5	65	15.1	10	2.3	430	100.0
5) カウンセラーやソーシャルワーカーが、「DI者の苦悩」が理解できない人では困り	217	50.0	110	25.3	80	18.4	18	4.1	9	2.1	434	100.0	221	51.5	120	28.0	81	18.9	7	1.6	429	100.0
6) カウンセラーやソーシャルワーカーは、「DI者の怒り」を受け止めてくれる人で あってほしい。	178	40.9	129	29.7	84	19.3	29	6.7	15	3.4	435	100.0	199	46.3	117	27.2	91	21.2	23	5.3	430	100.0
7) 「結婚を考えていない人」は、DI者のことを理解してくれません。	26	6.0	59	13.6	195	44.9	74	17.1	80	18.4	434	100.0	97	22.6	131	30.5	159	37.0	43	10.0	430	100.0
8) 「子ども望んでいない人」は、DI者のことを理解してくれません。	39	9.0	69	15.9	187	43.2	65	15.0	73	16.9	433	100.0	98	22.8	127	29.6	157	36.6	47	11.0	429	100.0
9) AIDのことを話すと、「聞かなかったことにする」という態度をとる人がおり、 悲しくなります。	139	32.0	123	28.3	121	27.8	30	6.9	22	5.1	435	100.0	178	41.4	124	28.8	97	22.6	31	7.2	430	100.0
10) AIDの話を2度すると、「その話はもういいよ」と聞いてくれない人がおり、あ きらめを感じます。	101	23.2	118	27.1	143	32.9	43	9.9	30	6.9	435	100.0	162	37.8	132	30.8	116	27.0	19	4.4	429	100.0
11) AIDは、「親子＝同居」という考え方に納得できない、深い怒りの原因になりま した。	46	10.6	88	20.4	208	48.1	47	10.9	43	10.0	432	100.0	114	26.8	141	33.1	147	34.5	24	5.6	426	100.0
12) 父が「妻とせめてつながっていれば良い」というのは、口先だけじゃないかと思 います。	51	11.8	91	21.0	172	39.6	63	14.5	57	13.1	434	100.0	117	27.5	127	29.9	149	35.1	32	7.5	425	100.0
13) AIDのことを知ったとき、「血がつながってなくて良かった」と思いました。	21	4.8	28	6.4	169	38.8	89	20.4	129	29.6	436	100.0	116	27.0	101	23.5	160	37.2	53	12.3	430	100.0
14) 両親は、がAIDで産まれたという事実を隠して「ウソ」で生きてこられたので	36	8.3	71	16.4	190	43.8	69	15.9	68	15.7	434	100.0	152	35.5	137	32.0	110	25.7	29	6.8	428	100.0
15) AIDを丁了した父親が、本当に望んでいたのかを聞いてみたい。	164	37.8	136	31.3	88	20.3	21	4.8	25	5.8	434	100.0	163	38.0	137	31.9	105	24.5	24	5.6	429	100.0
16) AIDは、夫婦の関係が壊れていききっかけを作ったと感じています。	30	6.9	68	15.6	189	43.4	83	19.1	65	14.9	435	100.0	131	30.5	127	29.5	139	32.3	33	7.7	430	100.0
17) 母親は、真実を告げなかった理由を「子どもが知ったら可哀想」と言っています が、同意できません。	102	23.4	97	22.3	151	34.7	56	12.9	29	6.7	435	100.0	167	38.9	131	30.5	108	25.2	23	5.4	429	100.0
18) 「私」をほしかったのではなく、夫婦関係を保つためにAIDを選択したと言われ て、ショックでした。	221	50.9	87	20.0	80	18.4	22	5.1	24	5.5	434	100.0	248	57.7	94	21.9	74	17.2	14	3.3	430	100.0
19) 私の子どもに「あなたとお爺ちゃんとは血がつながっていないのよ」と話せるまで に、ずいぶん時間がかかりました。	157	36.1	129	29.7	105	24.1	20	4.6	24	5.5	435	100.0	163	37.9	133	30.9	111	25.8	23	5.3	430	100.0
20) 私は、生物学上の父がわかるまで、結婚できないと思っています。	39	9.0	62	14.3	173	39.8	77	17.7	84	19.3	435	100.0	150	34.9	104	24.2	131	30.5	45	10.5	430	100.0
21) AIDのことを知ってから私は、家族に気を遣いすぎて、自分を失くしていまし た。	95	21.9	142	32.8	114	26.3	36	8.3	46	10.6	433	100.0	221	51.5	109	25.4	80	18.6	19	4.4	429	100.0
22) 夫は、私の出生の話を真剣に聴いてくれませんが、あきらめています。	42	9.7	95	21.8	174	40.0	67	15.4	57	13.1	435	100.0	143	33.3	140	32.6	117	27.3	29	6.8	429	100.0
23) 私は「ウソ」を感じながら「親子」のそぶりはできないと感じています。	100	23.0	101	23.3	137	31.6	60	13.8	36	8.3	434	100.0	165	38.6	147	34.3	96	22.4	20	4.7	428	100.0
24) いろいろ考えたことを聞いてもらうと、気持ちが楽になることがあります。	244	56.1	98	22.5	70	16.1	11	2.5	12	2.8	435	100.0	195	45.5	97	22.6	107	24.9	30	7.0	429	100.0
25) 自分を否定したくなることがあり、そこで足踏みしていることが歯がゆいので	112	25.7	138	31.7	145	33.3	25	5.7	15	3.4	435	100.0	172	40.1	144	33.6	100	23.3	13	3.0	429	100.0
26) 「親子のつながり」という言葉に「ビクッ」としてしまいうくらい、いつも敏感に なっています。	108	24.9	140	32.3	114	26.3	40	9.2	32	7.4	434	100.0	196	45.6	130	30.2	84	19.5	20	4.7	430	100.0
27) AIDで生まれたことを知ってから、自分のことがわからなくなることがありま す。	99	22.8	140	32.3	126	29.0	39	9.0	30	6.9	434	100.0	212	49.4	117	27.3	81	18.9	19	4.4	429	100.0
28) 誰かを愛することができたら楽なのに、誰も愛せないのです。	65	15.0	80	18.5	155	35.8	56	12.9	77	17.8	433	100.0	189	44.0	104	24.2	107	24.9	30	7.0	430	100.0
29) 私のドナーが、突然、目の前に現れたらと想像すると、眠れなくなることがありま す。	117	27.0	112	25.8	144	33.2	29	6.7	32	7.4	434	100.0	204	47.7	115	26.9	91	21.3	18	4.2	428	100.0



表V-13 問5-A)に関するパターン行列<sup>a)</sup>

	1	2	3	4	5	6
26)「親子」にビクッとする	0.856	0.115	-0.072	-0.128	0.062	-0.145
27)自分のことがわからなくなる	0.751	0.050	-0.004	-0.103	0.013	0.076
29)ドナーを思うと眠れない	0.631	0.076	0.025	0.056	-0.039	-0.056
25)自分を否定し、足踏みしてしまう	0.580	-0.020	-0.087	0.167	-0.051	0.028
28)誰も愛せない	0.563	-0.101	0.179	-0.063	0.002	0.135
21)家族に気を遣いすぎて	0.456	-0.042	0.232	0.226	-0.041	-0.066
22)夫は、聴いてくれません	0.341	-0.112	0.295	0.088	0.002	0.078
4)「アフターケア」を説明すべき	-0.085	0.760	0.080	0.156	-0.017	-0.097
2)本人にしかわからない体験	0.082	0.646	0.148	-0.252	-0.083	0.021
3)「真実告知」の必要性を説明すべき	0.050	0.549	-0.032	0.187	0.095	-0.150
5)SWは「DI者の苦悩」がわかる人	-0.054	0.541	0.015	-0.005	-0.055	0.242
6)SWは「DI者の怒り」を受け止められる人	0.148	0.436	-0.020	-0.006	-0.003	0.213
12)「妻とつながっていれば良い」	-0.182	0.175	0.571	0.025	-0.016	0.106
16)夫婦関係が壊れていくきっかけ	0.155	-0.074	0.567	0.088	-0.083	0.018
14)「ウソ」で生きてこられた	-0.041	0.041	0.541	0.218	0.068	-0.136
13)「血がつながってなくて良かった」	0.006	0.078	0.522	-0.144	0.094	-0.033
20)生物学上の父がわかるまで	0.227	-0.036	0.451	-0.005	0.041	0.007
18)夫婦関係を保つため	-0.066	0.008	0.110	0.733	-0.160	0.090
15)父親は本当に望んでいたのか	0.050	0.122	0.072	0.526	0.043	-0.073
17)「子どもが知ったら可哀想」	-0.067	-0.051	0.088	0.490	0.153	0.051
19)「お爺ちゃんとながってない」	0.216	0.044	-0.101	0.431	-0.019	0.047
24)聞いてもらおうと楽になる	0.208	0.272	-0.240	0.389	0.078	0.046
8)「子どもを望んでいない人」	0.006	-0.076	-0.042	0.065	0.914	0.038
7)「結婚を考えていない人」	-0.017	0.050	0.205	-0.053	0.682	0.052
10)「その話はもういいよ」	-0.055	0.010	0.067	0.011	0.067	0.737
9)「聴かなかったことにする人」	0.030	0.100	-0.092	0.123	0.015	0.624
<b>Cronbach のアルファ</b>	<b>0.838</b>	<b>0.762</b>	<b>0.692</b>	<b>0.749</b>	<b>0.819</b>	<b>0.706</b>

因子抽出法: 主因子法, 回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法, 8 回の反復で回転が収束.

問5の分析においては、多変量解析の手法の1つである因子分析を行い、観測データの合成量から、個々の構成要素を得ようとするものである。また、データに含まれる構成要素を因子として抽出するため、主因子法により座標軸の変換を行うための回転を与えた。さらに因子間の斜交行列を求めるため、座標軸の変換を行う回転に際してはプロマックス法による因子の抽出を行った。その結果、1回目の解析で選択肢1)が第6因子として一項のみとなり、因子としての有効性を欠いていた。選択肢1)を除いた2回目の解析で選択肢11)及び23)が因子寄与率=.4未満で、かつ2因子間にまたがる因子として抽出されたため、因子としての有効性を欠いており削除した。したがって、以下では26項目を対象として解析を進めた。

上記の回転後の因子分析結果における因子枠組みの決定においては、各々の項目が持つ固有値の大きい順に並べるスクリー・テスト (Scree test) を行った。スクリー・テストを行った結果に対する因子群について、その信頼性を確保するため、信頼度係数「Cronbackのアルファ」を求めたところ.888であり、データの信頼性を保持するための同係数の一般的基準=.8を上回っており、本設問で活用した29項目中26項目について、内的整合性が保持されているといえ、分析結果の信頼性は保持されている (表V-13)。

#### a)因子の抽出

問5の設問A)で抽出した第1から第6までの因子に含まれている意味内容を再ストーリー化する。再ストーリー化に際しては、ビネット作成時と同様に物語理論に依拠して、各ビネットに含まれる意味内容並びにその意味がどのような関係の中で成立しているのかを中野&野村 (1979: 857) などによる形態素分析の手法を参照して筆者が行い、共同研究者による学際的スーパービジョンを経て、因子名を与えた<sup>17・18</sup>(表V-14)。

表V-14について若干の説明を行いたい。表中最も左の列には因子分析で抽出された6つの因子を第1因子から第6因子まで番号化し降順に配置した。その上で各因子に該当するビネットを配置し、ビネットごとに付した番号で表示した。第3列から第6列までが形態素分析で得たキー概念である。キー概念の整理については、左から順に「対象(主体)」「対象(従者)」「事実」「情緒」「認識」とコード名を付し整理した。このようにビネットを分解した上で、それらが因子ごとで一つのまとまりとして認識されるための因子名を検討し、因子名を付した。因子名を検討するに際して筆者が行った分解後のキー概念の再ストーリー化の内容を明確にしておくために表中の最も右欄に「再ストーリー化」と称して分析結果を提示した。

表V-14 因子分析結果の再ストーリー化

因子	ビネット No.	対象(主体)	対象(従者)	事実	情緒	認識	因子名	再ストーリー化
1	21)	私	家族	AIDを知ってから	気を遣いすぎて	自分を失くした	私の家庭に生じる不安	<p>AIDで生まれたことを知ってから私は、誰かを愛することができれば楽になると思っているのに誰も愛せず、家族に対しては気を遣いすぎて自分を失くし、話を真剣に聞いてくれない夫に対してはあきらめ、ドナーのことを思うと眠れなくなることがある。</p> <p>AIDで生まれたことを知ってから私は、自分のことがわからなくなることがあり、自分を否定したくなくなることが歯がゆさを感じ、「親子のつながり」に「ビクッ」としてしまふほど敏感になっている。</p>
	22)	私	夫	出生の話	あきらめている	真剣に聴いてくれない		
	25)	私		自分を否定したくなる	歯がゆい	足踏みしている		
	26)	私		「親子のつながり」という言葉	「ビクッ」としてしまふ	敏感になっている		
	27)	私		AIDで生まれたことを知ってから		自分のことがわからなくなる		
	28)	私		誰かを愛すること	楽になる	誰も愛せない		
	29)	私	私のドナー	目の前に現れたらと想像すると	眠れなくなる			
2	2)	私		配偶子提供で産まれた	本人にしかわからない		支援者への要望	<p>AIDで産まれたということは、本人にしかわからない体験である。AIDを実施する医者は、「真実告知」の必要性ややるべき「アフターケア」について、説明すべきである。また、カウンセラーやソーシャルワーカーは、「DI者の苦悩」を理解し、「DI者の怒り」を受け止めてくれる人であってほしい。</p>
	3)	医者	配偶子提供を希望するカップル	「真実告知」の必要性		説明すべき		
	4)	医者	配偶子提供を希望するカップル	やるべき「アフターケア」		説明すべき		
	5)	私	カウンセラー・ソーシャルワーカー	「DI者の苦悩」		理解できない人では困る		
	6)	私	カウンセラー・ソーシャルワーカー	「DI者の怒り」		受け止めてくれる人であってほしい		
3	12)	私	父	「妻とせめてつながっていれば良い」		口先だけじゃないのか	AIDの両親への影響	<p>AIDは、夫婦の関係が壊れていくきっかけを作ったばかりでなく、両親は「ウソ」で生きてこられた。私は、父の「妻とせめてつながっていれば良い」という言葉を口先だけのことだと思ひ、「血がつながっていないで良かった」と思う。私は生物学上の父がわかるまで結婚できないと思う。</p>
	13)	私		「血がつながってなくてよかった」		思った		
	14)	両親	私	事実を隠して		「ウソ」で生きてこられた		
	16)	AID		夫婦の関係が壊れていく	感じる	きっかけを作った		
	20)	私	生物学上の父	わかるまで	思う	結婚できない		
4	15)	私	AIDを了承した父親	本当に望んだのか	聞いてみたい		父母への疑念	<p>AIDで産まれたということは、本人にしかわからない体験であるが、考えたことを聞いてもらおうと、気持ちが楽になることがある。親が「本当に望んだのか」を聞いてみたいし、母親の「子どもが知ったら可哀想」と思う気持ちに同意できず、夫婦関係を保つためにAIDを選択したと聞いたときショックを受けた。</p>
	17)	私	母親	「子どもが知ったら可哀想」		同意できません		
	18)	私	母親	夫婦関係を保つためにAIDを選択した	ショック			
	19)	私	私の子ども	「血がつながっていない」		ずいぶん時間がかかった		
	24)	私		聞いてもらおうと	楽になる			
5	7)	結婚を考えていない人		DI者のこと		理解してくれない	無理解者	<p>「結婚を考えていない人」や「子どもを望んでいない人」は、DI者のことを理解してくれない。</p>
	8)	子ども望んでいない人		DI者のこと		理解してくれない		
6	9)	態度をとる人		AIDのことを話す	悲しくなる		話した人の反応	<p>AIDのことを話すと「聴かなかったことにする」という態度をとる人おり、悲しくなる。AIDの話をして2度すると、「その話はもういいよ」と聞いてくれない人おり、あきらめを感じる。</p>
	10)	聞いてくれない人		AIDの話をして2度する	あきらめを感じる			

## b) 因子構造の比較

抽出された6つの因子を筆者(2006:16)が示した「図IV-4 DI者を取り巻く課題の構造」及び「図IV-5 [社会的虐待]の構造及び要素」並びに「図V-10 DI者を取り巻く社会的状況の構造と本調査のターゲット」に照らして、回答者が想起したDI者の発話から得たビネット群の構造を検討してみると、表V-15のような対応が得られた。

前記したとおりここに示した3つの図は、DI者の置かれている状況に照らして、DI者を取り巻く社会的状況を、時間性・力動性・変化性に着目して観念化し、その構造を図示したものである。その対応を説明すれば、以下のとおりとなる。

得られた因子の順序や再ストーリー化によって付した名義などは比較した2つの結果間で、異なる側面を残しながらも、因子と領域の数が一致していた。つまり、第1因子と領域IVはともにDI者がカップルとなり、家庭を築き、子どもとともに生きていくうえで当事者が抱く想いとして理解されている。第2因子と領域Iでは、本調査では拙稿以降にDI者から得られた発話に依拠してカウンセラーやソーシャルワーカーを加え、支援者という側面を肯定的に表現しているが、医療・福祉の関係者へ向けられた当事者の想いと整理すると、領域Iとの共通性を見出せる。第3因子と領域III、第4因子と領域IVとは説明するまでもなく一致しており、前者がAIDを介した父母への想いであるのに対し、後者がAIDを介さない父母への想いである。第5因子と領域VIは「無理解者」と「何も知らずに過ごす市民や社会」と名義が与えられているようにDI者の存在を社会的にネグレクト(無視・放任)している者への想いである。さらに第6因子と領域IIは、「話した人の反応」と「深刻さに直面すると無関心を示す者」への想いである。

表V-15 DI者を取り巻く課題の構造比較

本調査	宮嶋・才村(2006)
第1因子「私の家庭に生じる不安」	領域IV「新しく自らが形成した家族」
第2因子「支援者への要望」	領域I「肯定しがたい行為を容認した者」
第3因子「AIDの両親への影響」	領域III「AIDで縛られた父母への言葉」
第4因子「父母への疑念」	領域V「信頼に足るべき存在に対する言葉」
第5因子「無理解者」	領域VI「何も知らずに過ごす市民や社会」
第6因子「話した人の反応」	領域II「深刻さに直面すると無関心を示す者」

したがって、本論においては、DI者の発話を分析して得た結果を質的研究法により構成した、DI者を取り巻く課題の構造と、DI者の発話によって得られたビネットを介して、DI者に関する第三者性を有した学生(本調査の回答者)が認識するDI者を取り巻く課題の構造とが、一致する現象として立ち現われた。この立ち現われは、DI者の発話に基づく結果である。つまり、質的研究で構築されたDI者を取り巻く課題の構造と客観主義に基づく量的研究で構築されたDI者を取り巻く課題の構造とを一致した現象として立ち現われさせる根本要因に、DI者の発話が介在していると解釈できる。



#### 4) 回答者の認識とレスポンスの言葉

サポートの必要性に関する設問である問7については、問7-aで回答者の認識を問い、問7-bでレスポンスの言葉を自由記述方式で記述させた。設問6が認識の構造を把握するための設問であったのに対し、この設問は回答者がある課題に対してどのように機能するかを把握・分析しようとするものであり、調査上のロジックを異にする。ただ、両者を同一調査上で実施した意図は、人が自身の問題として認識したことのない未知なる問題に直面したとき、いかに認識していくのかを構造上及び機能上把握しようとするところにあった。したがって、本調査の結果にかかる構造上の認識と機能上の認識との間での、認識形成の順序や関係性を検討する場合には留意が必要である。

回答者の認識とレスポンスの言葉の一致度を測るに際し、次の手順で作業を進めた。

第1に問7-aと問7-bに記述されている内容をExcelシートにすべて記載されているままに落とし込み、データ処理ができるように準備した。第2にそれらのデータが、第2調査で得たDI者の発話に認められるDI者の求めと一致しているのか否かを区分した。この際、重視したことは「誰の立場、または誰に寄り添う」ところからの「記述、またはレスポンスか」である。つまり、第3調査で認められるように、DI者の支援に不慣れな対人援助職は、AIDを選択した母やカップルへ寄り添うレスポンスをする傾向にあり、それらを排するためのクリーニングを行うこととした。その結果、概ね回答者のレスポンスは、「肯定的・中立的・否定的・NA」に分類できることが明らかになった。第3に問7-aと問7-bとのクリーニングの実施は2週間の間隔をおいて実施した。なぜなら、本問の分析が筆者一人で行う分析であるため、データの量的な多さによる感覚の鈍磨と個人認識が、データ分析上のバイアスとなることを避けるためである。その上で、第4に一致度を測る尺度を、第2調査で得たDI者の発話に認められるDI者の求めと受容・共感・非審判的態度・感情の反射などのソーシャルワークの対人援助の原則との対応から、「無条件の肯定・条件付の肯定・中立的・条件付の否定・完全な否定」の5件尺度として用意した。

その結果、表V-16に認められるように、回答者の認識とレスポンスの言葉が一致していた回答者は133人(28.3%)であった。この内訳をみてみると、「無条件の肯定」を認識(問7-a)並びにレスポンス(問7-b)で一致していた回答者は、わずかに2人であった。認識とレスポンス内容が一致していた回答者のうち、「条件付の否定」を示した者が103人(77.4%)と最も多く、回答者全体の中でも5人に一人となっている。

表V-16 問7のa・bの一致度

		無条件 の肯定	条件付 の肯定	中立的	条件付 の否定	完全な 否定	計
回答者全体に占める [a・b]一致者	度数	2	9	5	103	14	133
	%	0.43%	1.91%	1.06%	21.91%	2.98%	28.30%
一致者中の内訳	%	1.50%	6.77%	3.76%	77.44%	10.53%	100.00%



表V-17 条件付で肯定する群

回答区分	回答記述の形態素							回答記述の再ストーリー化
認識	私	その人たちの気持ち	正しく	理解すること	難しい			私には、DI者の気持ちを正しく理解することは難しい。
	自分	ルーツ	半分	わからないなんて	信じられません			自分のルーツの半分がわからないなんて、信じられません。
	自分の父	血のつながっていない人	想像すると	怖くなります				自分の父親が血のつながっていない人だったらと想像すると、怖くなります。
発語	あなたにしか	わからない思い	でも	できることなら、	あなたの想いを	教えてください		あなたにしかわからない思いだと思います。でも、できることなら、あなたの想いを教えてください。
				話せそうなのがあれば		話してください		あなたにしかわからない思いだと思います。でも、話せることがあれば、あなたの想いを話してください。
	なんとと言えば良いか	わかりません						なんとと言えば良いかわかりません。でも、……。
	あなた	ここにいます	だから	あなたに	出会えた	不安にならなくて	良い	あなたはここにいます。だから、あなたに出会えた。不安にならなくて良いですよ。
		生まれてきた		形がどうであれ	楽しく生きること	大切だと	思う	あなたは生まれてきた。だから、形がどうであれ楽しく生きることが大切だと思う。
	血のつながりだけが	あなたを	決定すること	ではない				血のつながりだけがあなたを決定することではありません。
	私も	親も	友達も	思っている				私も親も友達もあなたのことを思っています。
	いつでも	話を聞かからね						いつでも話を聞かからね。
	同じ悩み	持つ人が	生まれてこないように	努力していきましよう				同じ悩みをもつ人が、生まれてこないように努力していきましよう。
	本当の父親を	探しましよう						本当の父親を探しましよう。

以下では、認識とレスポンスが一致していた 133 人の自由記述の内容を分析した。分析においては、①5 件尺度で分類した回答ごとで群とし、②記述されている用語をそのまま生かし形態素に分解した。その上で③分解した形態素の重複を整理し、④一覧表化を行った。表化が完了した段階で、⑤回答記述の再ストーリー化を行った。このような手順で分析して得た結果の一部が表Ⅳ-18 である。なお、認識とレスポンスが一致しているか否かの判断は、構造構成主義でいう関心相関性認識論に基づくものであり、本調査の目的に即して検証が可能となるよう、133 人の自由記述すべてを「認識」上の形態素と再ストーリーと「レスポンス」にかかる形態素と再ストーリーを対応させているが、ここではその一部を掲載するにとどめた。

表Ⅴ-17 で例示した「認識とレスポンス」は、表Ⅴ-16 で条件付けした回答群ごとに、「認識」と「レスポンス」を整理していくと次のとおりである。

第 1 に、肯定する群は「私が同じ立場であれば確かにそう思う・感じる・考える(a1)」と認識しており、表Ⅴ-18 のようなレスポンスを記述している。

表Ⅴ-18 肯定する群のレスポンス

- B1：もちろんです。私はあなたがここにいてくれて嬉しい。一緒に生きていきましょう。
- B2：あなたは、生まれてきて良かったのだと思うほどの、運命を背負わされて、生まれてこられたんですね。そして、これからも背負っていかれるんですね。生まれてきたことそのものに、疑問を抱いていますよね。生まれてきたことそのものに、辛い気持ちを抱いているんですね。
- B3：どのような立場であっても、かけがえのない命に変わりはないと思います。大丈夫ですよ。生まれてきてくれて、ありがとう。

表Ⅴ-19 条件付で肯定する群のレスポンス

- B4：あなたにしかわからない思いだと思います。でも、できることなら、あなたの想いを教えてください。話せることがあれば、あなたの想いを話してください。
- B5：なんとと言えば良いかわかりません。でも、・・・・・・
- B6：あなたはここにいる。だから、あなたに出会えた。不安にならなくて良いですよ。あなたは生まれてきた。だから、形がどうであれ楽しく生きることが大切だと思う。
- B7：血のつながりだけがあなたを決定することではありません。
- B8：私も親も友達もあなたのことを思っています。（だから）いつでも話を聞くからね。
- B9：同じ悩みをもつ人が、生まれてこないように努力していきましょう。本当の父親を探しましょう。

第 2 に、条件付で肯定する群は「私には、DI 者の気持ちを正しく理解することは難しい(a2)」「自分のルーツの半分がわからないなんて、信じられません(a3)」「自分の父親が血のつながっていない人だったらと想像すると、怖くなります(a4)」と認識しており、表Ⅴ-19 のようなレスポンスを記述している。

第 3 に、中立群は「正直、たぶん、私には自分自身で体験したことがない、関わったこと

がないことなので、かける言葉が見つからない(a5)」「自分のことを知っているということや自分のことに疑問を感じてしまうことは、人間として当たり前のことだ(a6)」「つらいかもしれないけど、命がある限り、そんな悲しいことをいわないでほしい(a7)」「けど、一緒に希望を見つけましょう(a8)」と認識しており、表V-20のようなレスポンスを記述している。

表V-20 中立群のレスポンス

B10：答えを見つけるために、生まれてきたと思う。

B11：カウンセリングが必要だ。

B12：(安易な言葉はかけられません。安易な声はかけられません。)

第4に、条件付で否定する群に属する回答者は最も多く、その認識も多岐に及んでいる。「望まれて生まれてきたのだから、そんなこと思わなくてもよいと思う(a9)」「人間の命は一つしかないのだから、チャンスがあってこの世に生まれてきたのはよいことだと思う(a10)」「母親は少なくとも望み、かつ、腹を痛めたのだから、母親に失礼だ。親としては本当に子どもが欲しくて、だから最後の方法として AID を選んだ(a11)」「生まれてこられたからこそ、今の生活があるのだから間違っている。ここまで育ててもらったことに感謝すべきだ(a12)」「自分の父親が違っていて、混乱するのはわかるけど、自分の存在を否定するのはわからない。本人にしかわからない悩みだと思うけれど、望まれて生まれてきたのだから良いと思う (a13)」「告知された後、辛いと思うけど、産んでくれたことに感謝したい (a14)」「どういう理由で AID を了承したのかわからないけれど、父母から愛されて育てられた(a15)」「実の親と育ての親とが違うことは辛いことだけれど、ここまで育ててくれた人のことを思うと、その人のために生きなければいけない(a16)」「血がつながっていても、子どもを愛していない親が存在する。血のつながりよりも、育ちの環境の方が大事である(a17)」「親子関係が上手くいっていれば、生まれてきて問題はない(a18)」「生まれてこなければ良かったと思うなら、そうすれば良い (a19)」「周りに迷惑がかからないなら、悩めば良い(a20)」「DI 者の気持ちはわからないけど、もし自分が DI 者だったら、同じように思っていたかもしれない(a21)」「そんな悲しいことは考えないで、生まれてきたことを喜んで欲しい。今まで愛されて育ったという月日も、曲げられない事実(a22)」「感謝すれば幸せな気持ちにもなれる。自分自身で幸せになれる道を探して欲しい(a23)」「誰もが思っていることだと思う。生きていることに意味がある (a24)」「生まれてくることを良い・悪いで判断することではない。期待も不安もあるのが普通で、今、そこに存在することが大事(a25)」

また、この群のレスポンスは次のとおりである (表V-21)。

表V-21 条件付で否定する群のレスポンス

B13：お母さんにとって、子どもはあなただけです。あなたを必要とする人は必ずいます。あなたが生まれてきたことに何か意味があります。あなたを育ててくれて人が本当の親です。あなたは両親を幸せにした人です。自分がこの世でやらなければならないことを見つけて欲しい。

B14：生きていることが今、大事なことです。自分で夢をつかむまであきらめないで。

B15：誰かと過ごしていて楽しいと思ったことはありませんか？それは相手も同じだと思います。

- B16: いずれ楽になる時が来ます。幸せ・不幸せは自分で決めるものです。
- B17: 生まれてこなくて良かった人は、一人もいません。苦しいと思うが、自信を持って、  
望まれて生まれた命だから、生まれて来て良かったのです。
- B18: あなたに出会いたいと強く願ったのだから、産んでもらえたのです。あなたに出会いたいと望んだから、あなたが生まれたのです。あなたに出会いたいと望んだから、自信を持って、あなたに出会いたいと望んだから、人を信じて、あなたに出会いたいと望んだから、自分を責めないで。
- B19: 世の中には両親に捨てられた子どももいるのだから、そんなことを言ったらそういう子が可哀想。世の中に生まれてこられなかった子もいる。そんなことを言ったらそういう子が可哀想。
- B20: 両親の理解があって、あなたは生まれたのです。あなたが不要なのなら、わざわざAIDなどしないと思います。
- B21: 理解できないけれど、真実はそうなのです。もし生まれてきていないと、何も見えない。
- B22: 今まで生活してきた過去まで全否定するのですか？血のつながりがそんなに重要なのですか？  
自分の命に誇りを持って、ステキな人生を歩んで欲しい。自分を否定することはないじゃない？
- B23: できちゃった婚とは違い、望まれて生まれてきたのです。両親が愛してくれるとか、愛してくれないとかではなく、自分の大切にしたい人と出会うために生まれてきた。
- B24: 母親は知らせることが辛かった。お父さんも同意するのに大変な決意が必要だった。
- B25: 自分の権利は大切です。中でも楽しく生きることは一番大事です。これからいろいろなことに挑戦できるじゃない。
- B26: 絶対に幸せだと思います。だから、元気を出して。将来のことはわからない。だから、楽しく暮らそう。今を生きよう。前向きに生きよう。産まれてこられたことに感謝してください。一緒にしよう。
- B27: 自分のために生きて。友達には変わりない。あなたが悪いわけじゃない。一人ではないからね。
- B28: やりたいようにやれば良い。気にしなくて良い。
- B29: 悩みがあれば相談に乗ります。だから、協力できることを話して下さい。私も一緒に悩みます。

表V-22 否定する群のレスポンス

- B30: 生きたくても生きられない人もいる。生きていれば楽しいこともたくさんある。
- B31: 前向きに生きよう。
- B32: 悩んでもしょうがない。
- B33: 別に気にすることではない。

第5に、否定する群は「行きたくて生きられない人もいるんだから、そんなこと思っ  
てはいけない(a26)」「誰もが生まれてきて良いのだから、誰もが生きていていけないことはな  
いのだから、誰もが生まれてきて悪いことはないのだから、そんなことを思っ  
てはいけない(a27)」と認識しており、表V-22のようなレスポンスが記述されている。



### (3) 小括 (3)

DI 者の苦悩の本質は、①出自を知る権利、②表現の自由 (権利)、③社会的に認められ、参加する権利、④未来世代への継承に関する権利、⑤暴力に晒されない権利、⑥コミュニティ開発 (共生) 権の侵害によって構造化されている可能性がある、というのが本論「IV. DI 者の苦悩とは何か」から得られた結論である。これに焦点をあて、DI 者が被っている人権侵害の構造に包含されている「社会的ネグレクト」という社会状況の輪を形成していると考えられるコミュニティに属する者のうち、AID に関わる第三者性を有すると考えられる学生群を 1 つのコミュニティとして、量的調査の対象とし、第 7 調査を実施した。この試行は、DI 者が被っている人権侵害の構造が、第三者にいかに関与されるのかを、先行研究の認識と比較することにより吟味しようという試みである。

その結果、質的研究法により構成された DI 者を取り巻く課題の構造と第三者性を有する学生が認識する DI 者を取り巻く課題の構造とが一致する現象として立ち現われた。こうした 2 つのタイプの異なる調査から一致した現象を立ち現われさせる根本要因に、ビネット化した DI 者の発話が介在していることが確認されてよいと考える。このことは、DI 者の発話による「DI 発話指標」をビネットとし、AID に関する第三者性を有する学生以外の調査対象集団 (コミュニティ) に対して働きかけを行い、同様な現象が立ち現われる可能性を否定することはできないことを意味する。

#### 1) 「ツール」を介した対話のための視座

このように DI 者の発話を介在して立ち現れる認識が、ある構造、一定の枠組みをなしていることが明らかになれば、立ち現れた認識を導くビネットを、米本 (2005 : 5) が指摘するように、「ツール」として活用することが可能になるのではないか。米本は認識として外在化、あるいは視覚化された装置としての「ツール」が、他者への伝達を促し、効果や評価を導く可能性があるとし唆している。このことをソーシャルワークにいうナラティブ・アプローチの「翻訳」という機能に適用して検討してみれば、①DI 者の「声」を物語として受け止め、②受け止めたソーシャルワーカーが DI 者の「声」を理解するための「ツール」として加工し、③DI 者の「声」を「ツール」を介して他者に伝達する、そして④他者が伝達された内容を正確に受け止めているかを確認する、というプロセスを経て「翻訳」機能は完結する。この①～④を完結させる機能を担うことにより、ソーシャルワークは DI 者と他者との接点に介入していくことができる。後述するように、このことが重要な意味を持つことを、第 7 調査の設問 7 の回答並びに自由記述が示している。

#### 2) あるコミュニティで生起された理論

野上 (2008 : 118) が紹介している DI 者の当事者によるホームページ “The Donor Sibling Registry (DSR)” (2009 : <http://www.donor-sibling-registry.org/>) をみると、DSR のミッションには、提供を希望する者やドナーにより形成されたコミュニティを変革していくことが掲げられており、ホームページ上に形成されている “We” というコミュニティとの対立軸が示されている<sup>19)</sup>。このことを踏まえれば、本調査の対象者集団を 1 つのコミュニティと見立てることに妥当性がある



20. したがって、本調査の対象者集団をコミュニティと捉えることにより、コミュニタリズムにいうコミュニティとコミュニティのモラル対話を生起させることが理路として可能となる。一つのコミュニティで生起された構造（理論）により、そのコミュニティが認めたある価値を、他のコミュニティとの対話に反映させ得るという主張は、その理論の善さあるいは理論の価値が他のコミュニティとの対話により検証されると考えるものである。そして両コミュニティ間でのモラル対話が成立させられるならば、コミュニティ間でのオルターナティブ・ストーリーが構築される。すなわち、オルターナティブ・ストーリーが構築されたというソーシャル・チェンジがなされたと考えられるのである。つまり、オルターナティブ・ストーリーの再構築の繰り返しが、新たな物語で構成されるコミュニティの伸張の可能性を広げるのである。さらにコミュニティ間で成立した再構築された物語は、その根底でモラル対話というプロセスを踏まえているのであり、価値レベルでの一致をみている。つまり、価値が一致したコミュニティが複数創造されたことになり、価値によるコミュニティの再編（再構築）がなされる可能性に満ちている。そのようなソーシャル・チェンジをもたらす可能性が示唆されたのである。

また、上記の知見が成立するとすれば、さらに第三のコミュニティを調査対象として想定し、本論で構築しようとする理論の科学性を深化させていくことも可能になろう。コミュニティ間の同一性、あるいは共同理解を醸成するコミュニティとコミュニティとのモラル対話とは、善き社会を構築するためには共通善に対する対話が必要であり、対話は異なる文化的な背景をもつ社会と社会との間においても成立させることにより、価値をなすという考え方である。

このように、DI 者の発話が現象の立ち現われにおける再現性を担保するならば、DI 者の発話を指標あるいはビネットという対話のツール、あるいは言葉という記号に「翻訳」して、人と人あるいは人と社会、さらにはコミュニティとコミュニティとの対話を成立させることに活用できる。コミュニティ間で同じ DI 者の発話を介した対話が成立すれば、DI 者の権利を擁護する世論（コミュニティ）を形成していくことが可能になる。すなわち、異なる関心をもつ2つのコミュニティにおけるコミュニケーション、あるいは対話・討論において、当事者の「声」を介在させることによって、当事者の「声」への関心が生起され、その「声」の構造（理論）をコミュニティが理解し、そのコミュニティの成員に浸透させることができる。そして、そこからコミュニティ間で善とする価値が創造される。このような段階を経て創造される価値は、新たな価値を作り出していく可能性がある。つまり、DI 者のストーリーを再構築した結果を伝達することは、コミュニティを含む他者を新たなストーリーへと導き、善き価値に基づいて再構築されたコミュニティを創造できる可能性をもっていると考えられる。

ソーシャルワークが当事者の声を一つのオルターナティブ・ストーリーとしてコミュニティを含む他者に伝えること、それ自体が新たな価値を創造するソーシャルワーク実践である。また、それ自体がソーシャルワークでいう、価値創造志向のソーシャルアクション

に該当すると考えることができるのではない。ただし、留意すべきことは、この調査の試みが DI 者の苦悩という非常に複雑な構造を構成する要素のうち、DI 者の苦悩として筆者が受け止めた発話を根拠に、ツール化されたものに過ぎないという点である。DI 者の苦悩の本質を言い表すツールや記号には、さらにさまざまな認識の方法により多元的に認知され複雑化する可能性があるからである。

### 3) 働きかけの重層化が理解を深化させるのか

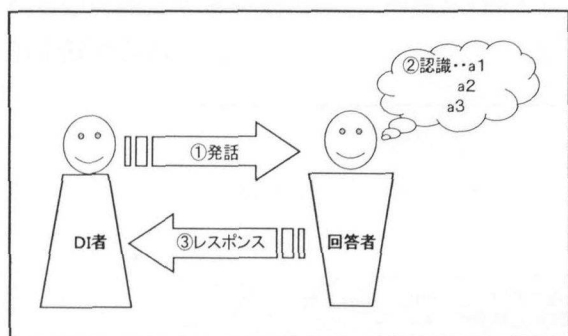
DI 者の発話からなるビネットを通して、AID に関する第三者性を有する学生群（コミュニティ）をはじめ、いかなる立場（関心）の者が含まれるコミュニティであっても、DI 者を取り巻く社会状況を、同一の構造として、理解される可能性を否定することはできないことが示唆された。そうであるならば、DI 者の発話からなるビネットをより深化させ、DI 者の苦悩の本質、あるいは DI 者の人間としての生の声を、より深く反映させられるビネットや発話指標を生起させ、重層的に指標を形成することが肝心になる。なぜなら、DI 者の声から重層的に形成された指標は、DI 者の声に耳を傾けようとする者の状況に即して、選択的に提供されれば、それを耳にした誰もが、どのような状況、あるいはどのようなコミュニティの住人であっても、その聞こうとする準備状況に即して理解を形成することができると考えられる。つまり、重層化された DI 発話指標を用いれば、DI 者が構成した、DI 者を取り巻く社会状況を、その指標にふれた者は自身の価値観に左右され、その状況を良し悪しで歪めることなく、構図として理解することが可能となるのではないかと考えられる。一方、先にみた第3調査の結果が示すように、DI 者の物語は変化し続けている。このことから、新たに構成された物語ごとで、DI 発話指標を構成するならば、DI 発話指標を重層的に形成し、他者に的確に示し、理解を共有することが可能となるのではない。重層的な指標を示された他者は、より深い本質的なレベルで、DI 者を理解することが可能となるのであろうか。

### 4) 認識とレスポンスに関する考察

能智(2006 : 11)は、ディスコース (discourse) とは「談話」または「言説」と訳され、会話より長い、一続きの言葉のまとまりであるとし、ナラティブはディスコースの一部であるとしている<sup>21</sup>。またヴァン・ディーク (2001 : 95) は、ディスコースを広い意味でのコミュニケーション事象としている。さらに、朴と茂呂(2006)は、社会文化活動の心理学ではディスコース＝談話を「言説」と「相互行為」という 2 つの意味を有し、その対比を研究する質的研究を紹介している。したがって、第7調査の設問7で得られた記述をディスコースとしてとらえなおすと、図 V-11 のような構図になる。

調査方法の中でも述べたとおり、第7調査の設問は第2調査の結果から導かれている。すなわち、第2調査で得た DI 者の発話をビネット化した問い（設問5）や DI 者の発話への認識とレスポンスを求めた問い（設問7）などで第7調査の調査内容が構成されている。

したがって、第7調査の調査内容そのものがDI者のナラティブであり、設問はDI者のナラティブをどのように受け止めるのかを回答者に問うていると仮定できる。ここに質問紙というテキスト化された媒介をとおした、DI者と回答者との相互行為、コミュニケーションがなされていることが期待できる。したがって、回答者の記述は、単なる自由回答ではなく、上記のようなディスコースと受け止めることに妥当性があると考えられる。



図V-11 設問7の構図

以下では、5類型に分類することができた回答者の認識とレスポンスについてディスコース分析に基づく考察を行っていく。

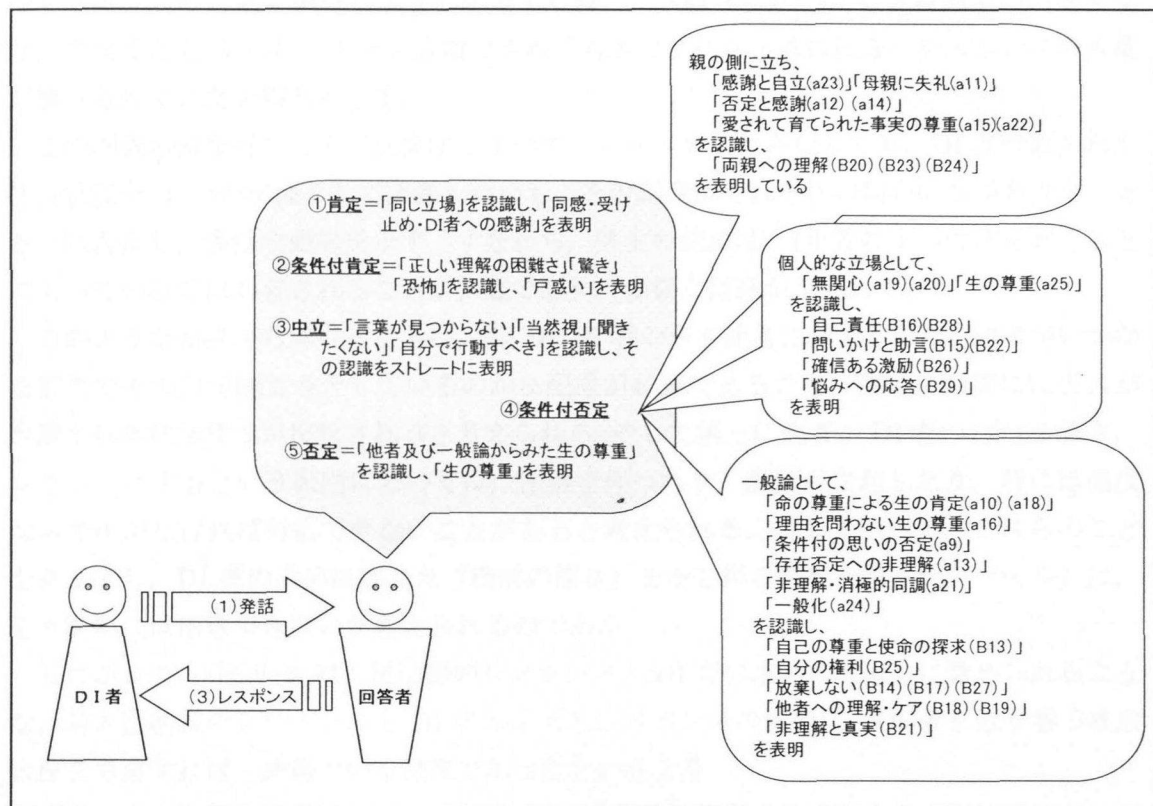
第1に、肯定する群は「同じ立場(a1)」で「思う・感じる・考える」と認識しており、レスポンスも「同感(B1)」「受け止め(B2)」「感謝(B3)」が表明されている。

第2に、条件付で肯定する群は「正しい理解の困難さ(a2)」「驚き(a3)」「恐怖(a4)」を認識しており、レスポンスは①認識を表明した後に、「でも」という否定的接続詞を介して受け止めを表明するパターン(B4・5)や②DI者の思いではなく、今ここにいることに対応して肯定的な生き方を奨励するパターン(B6・7)、そして③他者からの肯定や他者との比較から肯定的な生き方を奨励するパターン(B8・9)が表明されている。つまり、回答者がDI者の思いに対等な立場となり、直接的なレスポンスを行うのではなく、回答者や両親、そして第三者の立場を反映させたレスポンスが表明されており、回答者の「戸惑い」を内包するレスポンスとなっていると解釈できる。

第3に、中立群は「言葉が見つからない(a5=B12)」「当然視(a6=B10)」「聞きたくない(a7=B11)」「行動すべき(a8=B10&B11)」と認識しており、その認識をストレートに、否定的なレスポンスをしている。つまり、回答者は「関わりの回避」を念頭においていると解釈できる。

第4に、条件付で否定する群に属する回答者は最も多く、その認識也多岐に及んでいる。その認識は、「条件付の思いの否定(a9)」「命の尊重による生の肯定(a10)(a18)」「母親に失礼(a11)」「否定と感謝(a12)(a14)」「自分の存在を否定するのはわからない(a13)」「愛されて育てられた(a15)」「理由を問わない生の尊重(a16)」「[血のつながり]と[育ちの環境]の比較(a17)」「無関心(a19)(a20)」「無理解かつ消極的同調(a21)」「愛されて育った事実の

尊重(a22)」「感謝と自立(a23)」「一般化 (a24)」「生の尊重(a25)」と概念化することができる。また、この群のレスポンスは、「自己の尊重と使命の探求 (B13)」「あきらめないで (B14) (B17) (B27)」「問いかけと助言(B15)(B22)」「自己責任(B16)(B28)」「他者への理解・ケア (B18) (B19)」「両親への理解 (B20) (B23) (B24)」「非理解と真実 (B21)」「自分の権利 (B25)」「確信ある激励 (B26)」「悩みへの相談 (B29)」と概念化することができる。これらの認識とレスポンスは、「両親」「個人」「一般」の立場から発せられたものであることが了解できる。



図V-12 設問7の回答者の認識とレスポンスの概念構成図

第5に、否定する群は「他者との比較からの思いの否定(a26=B30)」「一般化からの思いの否定 (a27=B33)」が認識されており、一見肯定的で前向きなレスポンスではあるが、DI者の思いの理解にはつながらないレスポンス(B31)と DI 者の思いを打ち消すレスポンス (B32) が表明されている。つまり、この群でのレスポンスは、DI 者の発話としての設問の意図とは無関係に「生まれてきて良かったのか」というキータームに引き寄せたレスポンスがなされている。

このような考察結果を図示してみると、図V-12のような認識とレスポンスの多様な概念の入り混じる中で記述されていると理解することができる。こうした結果は、筆者が期待するストレンクス視点からのレスポンスというよりも、一般的共感的、あるいは同情的な



レスポンスとなっているといわざるを得ない。DI 者がいう「深さが違う」という疎外感を拭えるものとなり得ているとは考えづらい。

#### 5) 「理解の深さ」という課題

本調査の対象者は、DI 者を取り巻く社会状況を、DI 者の発話が示した構図として理解している。一方で、調査対象者がどのような立場から DI 者の発話に耳を傾けるのかで差異が生じ、その認識の差異がレスポンスの差異にも反映されると考えられる結果が得られた。すなわち、第7調査の設問7の自由記述にかかる分析結果を解釈すると、学生らは DI 者へのレスポンスの言葉を構成しようと思案する場合、当該学生が抱える背景因子の影響を受け、少なくとも5つにパターン分類できる思考がなされたと思われる、レスポンスの言葉が構成されていたと解釈できる。

この調査の対象者である学生集団を1つのコミュニティとみなしても、DI 者のおかれた社会状況を1つの構図として認識しつつも、その認識はそれぞれの関心に基づき肯定、あるいは否定し、多様な認識を示す。すなわち、学生の認識は、DI 者の1つの声を聞くことによつてのみでは共有されることが困難であり、多様な認識が示されていた。

このような結果から導けることは、第一に DI 者の声を他者に伝える際に、他者がいかなる姿勢でその声を聴こうとしているのかに配慮が必要であること、第二に回答には当人が置かれた社会状況が反映されると考えられる。そして第三に他者が DI 者の「声」を聴き、レスポンスするという段階においては、困難を伴ったり、混乱が生起したり、時には高度なスキルがなければ対応できないことがあると考えられる。そして第四に、これらのことをクリアし、DI 者の求めに応じた「理解の深さ」を示し得る機能を備えた「ツール」は、そう簡単には用意できないと考えられるのである。

したがって、「図V-8 対人援助職のレスポンスと DI 者の求めの比較」に認められるような、対人援助職のレスポンスと DI 者が求めるレスポンスの齟齬は、DI 者を取り巻く社会状況を考慮すれば、納得のいく結果であったといえよう。

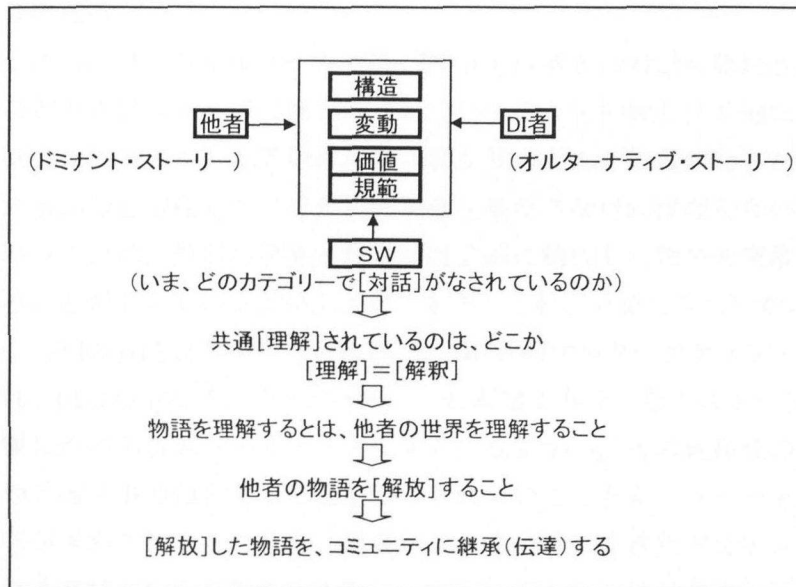
それ以上に強調されなければならないのは、DI 者の権利を擁護しようとするソーシャルワーカーは、DI 者の苦悩の本質を、より深いレベルで理解し、寄り添うためのソーシャルワーク・アプローチに熟練していなければならないということである。

#### 6) レディネス・アセスメント

AID に関する第三者性を有する者が、AID や DI 者に対して、どのような認識をもち、DI 者を理解するためのレディネスがなされているのかを見極めていくことを、ソーシャルワークが行えれば、DI 者と他者との共同理解を形成していくための橋渡しをすることが可能となる。このときに重要になる他者のレディネスを見極めるというソーシャルワークの機能を、本論では仮に「対話のための当事者以外の者（他者）の準備状況診断機能」という意味から、「レディネス・アセスメント」と呼ぶこととする。なお、「レディネス」という支援への示唆は、本論「IV. DI 者の苦悩とは何か 2. 養子縁組制度を活用した親子に関する調査（二次的利用）」の中で引用した、坂元の指摘によるものである。



このような結果を踏まえて、筆者が新たに提示したソーシャルワークにいう「レディネス・アセスメント」の概念としてチャート化してみた結果が図V-13である。



図V-13 レディネス・アセスメントの概念

レディネス・アセスメントとは、先に「対話のための当事者以外の者（他者）の準備状況診断機能」と定義した。この中味を第7調査の設問5の結果から想起し、ソーシャルワークの展開過程における概念として提示しておく。

ソーシャルワーカーは、第一にDI者の側に立ち、DI者の物語が「脱構築・再構築」されていくことを支援するために、ナラティブ・アプローチによりDI者の発話を聴取し続ける。それと並行して、ソーシャルワーカーはDI者を人権侵害から解放するために他者へ働きかけることを想起していなければならない。そのためにソーシャルワーカーはDI者のオルターナティブ・ストーリーを他者に伝達し、他者のドミナント・ストーリーが「脱構築・再構築」することを支援する必要がある。その際、ソーシャルワーカーは支援する他者の準備状況、すなわちレディネスについて診断し、他者がどのような状況にあるのかをアセスメントする必要がある。アセスメント内容を想起しておけば、(1)他者がどのようにAID並びにDI者のおかれた状況を構造的に理解できているのか（図中：構造）、(2)DI者の物語並びに他者自身の物語が変化するということを理解し、その焦点が理解されているのか（図中：変動）、(3)対話やコミュニケーション、理解を深めようという姿勢や価値観を持っているのか否か（図中：価値・規範）などが考えられる。これらを把握した上で、ソーシャルワーカーはDI者の発話のうち、どのような意味や深さの発話を、他者に対して提供するのか、あるいはDI者と他者のコミュニケーションの場を設定すればよいのかを検討していくことになる。つまり、第7調査の問5の結果が示しているとおり、他者はビネットからDI者が置かれている課題の構図を筆者が描いた構図と同様に描きながら、多様なレベルで

レスポンスしようとする。このことを根拠とすれば、DI 者を発信元、他者を受信先ととらえ、情報の伝達が行なわれるためには、発信元と受信先との“周波数”を調整することが重要になる。

さらにソーシャルワーカーは、DI 者と他者との対話が開始された際にも、上記の(1)～(3)のどのカテゴリーで対話が行なわれているのかを把握し、共通に理解されているのは、どの部分であるのか、あるいは理解が異なりゆがんだ解釈が行なわれているのではないかとと思われる部分を把握していくための機能を果たさなければならない。他者の物語を理解することは、他者の世界－他者が社会的に構成した物語を理解、すなわち、共通に解釈することができているということであり、これが確認できていなければならない。

所期の目的を達成するためには、DI 者のオルターナティブ・ストーリーが他者に理解され、他者のドミナント・ストーリーに影響を与え、そのストーリーが DI 者のストーリーと親和性のあるストーリーへと変化し、なおかつ、その親和性のあるストーリーが当該他者の「頭の中の知」として価値づけられていくことを、ソーシャルワークがサポートすることが求められる。これは、他者がこれまで有してきたドミナント・ストーリーから解放される理路であると考えられる。

ソーシャルワーカーは、「DI 者の解放された物語」すなわち、DI 者のオルターナティブ・ストーリーが他者から他者に、他者からコミュニティに、あるいはもっと複雑な回路を通して、継承(伝達)されることをサポートする機能を担うことにより、DI 者と他者の両者、あるいは多様な他者を結びつけ、「解放された物語」を広めていくことを可能にする。

このようにソーシャルワーカーが DI 者と他者の両者の間に介在することによって、先に指摘したコミュニタリアニズムのキー概念である「モラル対話」の概念を援用した、両者あるいは多様な他者間での対話が構成できれば、DI 者とコミュニティとその構成員が「解放された物語」を共有する理路が構築できる可能性が広がるのではないか。

#### 4. 本章の総合考察

本章では、前章で明らかにした「DI 者の苦悩が人権侵害である」という結論に依拠し、そうした人権侵害から DI 者を解放するための理路を構築することをめざして、DI 者を取り巻く人的環境に対するソーシャルワーク・リサーチを、質的量的調査の手法を活用して行い、その結果を考察してきた。この章の研究で得られた結論は、次のとおりである。

DI 者は、自らが DI 者であることを知る以前と以後で、自らの物語を大きく変化させざるを得ず、時にアイデンティティの揺らぎに至ることもある。それは、出自を知ることの中に、「DI 者であることを知る」とことと「遺伝上の父を知る」とことが含まれているからだと考えられる。この2つのことをクロスさせると、DI 者は四象限のどこかの住人として規定することができる状況におかれている。そして、DI 者は「知る」とことにより象限間を移動し、自らの物語を「外在化」させていく。DI 者がどの象限の住人であるのかによって提供されるソーシャルワークは異なり、1つのソーシャルワーク・アプローチで擁護できる DI 者の侵害されている人権も限定的となる。

DI 者が DI 者として生きていくとき、DI 者は DI 者固有の人権を、自らの「人権宣言」として表明し、他者との対話を模索する。このことを DI 者のストレングスの表明ととらえると、ソーシャルワークはナラティブ・アプローチによって、DI 者の変化する物語を聴き続けると同時に、再構築される物語にストレングスを見出していくアプローチを連結させ、「翻訳—連結—伝達—交互作用」へと、2つのアプローチを循環的に機能させ、DI 者の求めに即応していくことが可能となる。

DI 者の変化し続ける物語に即応したレスポンスを表明することは容易ではなく、DI 者の変化し続ける物語に即応した「ツール」を開発し、他者に DI 者の変化し続ける物語を伝達することは不可能ではないが困難を伴う。この困難さの克服は、伝達先である他者をソーシャルワークが「レディネス・アセスメント」し、DI 者と他者とを媒介することで可能となるかもしれない。

DI 者の変化し続ける物語を伝達する先が、個人・集団・コミュニティ・社会のいずれであってソーシャルワークは、ナラティブ・アプローチとストレングス・アプローチを交互作用させ、DI 者と対峙する他者を「レディネス・アセスメント」することによって、両者の「対話」を成り立たせるよう支援し続けることにより、DI 者が人権侵害から解放された社会へと向かうことができる。

(注)

- <sup>1</sup> ロバート・ピンカー(1997)は、自分自身の情報を自分が「所有する権利」があり、多くのソーシャルワーカーがクライアントが自分の個人情報に自由にアクセスできるかどうか、クライアントが自己の生活に関してどれだけ公的な権限を与えられ、コントロールできる状況にあるのかという尺度とみなしているとし、個人情報へのアクセス権は、基本的人権に中心的な要因であることを伝えている。
- <sup>2</sup> 「愛着」への示唆は、“Are you thinking of Donating Sperm?” (DSR, 2007)から得ている。すなわちDSRは、ドナーとなろうとする者へ、①DNAを共有する子どもたちがどんどん増えていることを想像しているか、②生物学上の家族がインターネット上で接触していることを想像しているか、③子どもたちとの関係を構築する意欲を持っているか、④遺伝子上の孫が救命上、連絡を取ろうとしたとき、どのように対応するか、と問いかけている。
- <sup>3</sup> ビル・コードレイの研究成果については、平成16年度三菱財団『「子どもの出自を知る権利を保障するための福祉教育のあり方に関する研究」報告書』(主任研究者：才村眞理)、2005を参照。
- <sup>4</sup> DSRのメンバーであるウェンディ・クレイマー ([http](http://www.dsr-japan.org/)) は、遺伝子上半分が同じであるライアンと出会えた喜びをつづった文書をDSRのホームページに投稿し、互いに「home」を得たように感じたとしている。なお、DI者の自助グループであるDSR (2007: [http](http://www.dsr-japan.org/)) は、配偶子を受け取る人、ドナー、社会、産業界に対して教育的なアプローチを行なっている。すなわち、配偶子を受け取る人には、DSRファミリーへのアクセスや子どもへの情報開示の必要性を施術前に十分に説明する。また、出産後には子どもへの伝達方法に関する教材を提供する。ドナーには、提供により生まれた子どもから遺伝情報にアクセスすることが望まれていることが了解できる。社会や産業界に対しては立法者への協働、学際的な協力、DI者を無視・拒否しないための教育や倫理的な原則を伝える。さらに、DI者にはグループに入ることを支援し、情報交換が活発になされるようインターネットの活用をすすめている。DSRの活動目的は、DSRの仲間が遺伝子を共有する他者と、相互に連絡をとろうとすることを援助することであり、DSRに集う仲間の願いは「たった2つ」であるとしている。それは①ルーツと②「翼」を獲得することであるとしている。DSRは、①AIDを使った多くのカップルは、遺伝子上のルーツを知りたいという子どもの気持ちと願いに対する覚悟ができていないこと、②AIDを奨励する業界が長い間秘密主義であったことから抜け出すことを願っており、DSRはDI者がアイデンティティについて知ること、そう思うことを支持することの重要性について、カップルや一般市民を教育し続ける必要があると認識している。
- <sup>5</sup> コードレイ氏の招聘は、2008(平成20)年度中部学院大学特別研究助成「人口減少社会における人工生殖の制度化と子ども福祉のあり方に関する研究」並びに2008(平成20)年度日本私立学校振興・共済事業団学術研究振興資金「人口減少社会における人工生殖の制度化と子ども福祉のあり方に関する研究—非配偶者間人工授精で産まれた子どもの福祉に関する国際比較—」により行った。
- <sup>6</sup> ジョン・バーガー(2008)は、AIDで生まれた子どもたちが、長い間子どもでいるわけではないことを強調し、彼らが成長し、自分のニーズおよび近くを発揮できる大人になることに関心を向けるべきであると述べている。また、将来、遺伝上の父を探す



- ことはイギリスがそうしたように容易になり、成果が上がらないということから解放されるだろうと予測している。
- <sup>7</sup> Sharon N. Covington は、ジョージタウン大学医学部にて教鞭をとりつつ、アメリカ・ワシントン DC の郊外にある Shady Grove Fertility (reproductive science center) の Psychological Support Services で Director として不妊カウンセリングを行っている。
- <sup>8</sup> 坂田 (2003) は、質的調査法が文字化された記録であるトランスクリプトの分析を中心に発達したと指摘し、分析を目的として得た記録を「トランスクリプト」と標記する。
- <sup>9</sup> 表 V-4 の作成においては、日本社会福祉実践理論学会 (2004) の逐語記録の作成例を参照した。
- <sup>10</sup> 「模索」と表記したのは、DI 者をソーシャルワークでいう「サービス利用者」やソーシャルワーク・リサーチでいう「対象者」という位置づけで捉えること自体に吟味すべき点があること。並びに久保 (1990) が指摘するように、仮に DI 者をソーシャルワークの「サービス利用者」と捉えたとしても、その「声」に目を向けた研究がごく稀であるため。
- <sup>11</sup> Hare Isadora は、U.S. Department of Health and Human Services の Perinatal Health Specialist である。
- <sup>12</sup> 岡によれば、質的研究において研究者を現場に紹介してくれる人のことを「ゲートキーパー」と呼んでいる。
- <sup>13</sup> トランスクリプトの記載方法については、松嶋 (2003) を参照した。
- <sup>14</sup> 保坂 (1998) は、ロジャーズが提示したカウンセラーの条件は、カウンセラーの基本的な哲学そのものであると指摘している。
- <sup>15</sup> ホワイトとエプストン (1990) は、ナラティブ・セラピーが「問題が問題であり、人や人間関係が問題ではない」という前提に立っており、そのステップを 1 2 段階に整理している。
- <sup>16</sup> [資料 2] 参照。
- <sup>17</sup> 形態素分析の手法とは、日本語テキストデータ (自然文) からのキーワードの抽出を行い、文を単語に分割「分節処理 (分ち書き)」を行う自然文解析のことである。
- <sup>18</sup> ここでいう学際的スーパービジョンとは、萱間 (2007) にいう「質的分析スーパービジョン」を参考に行っている。
- <sup>19</sup> R・M・マッキーヴァー (1975) は、コミュニティと「関心」を結びつけ、「関心」を個人とコミュニティの「真実意志」を代表するものであり、コミュニティの源泉は共同関心であるとしている。共同関心が定着すればするほど、コミュニティや社会もますます定着し、そこにおけるあらゆる増進により経済も増進する。そして、共同関心は排他的なものではなく、共同によってのみ効果的に追求され得るものであるとしている。
- <sup>20</sup> 「#0073」(2009) というドナー登録者番号のみの情報を受け取った、同性愛者に育てられた DI 者は、自らの居場所を求めて DSR を訪問している。彼女は DSR を「私が新しく発見したコミュニティ」と称し、DSR が国際的なネットワークであることに関心を示している。
- <sup>21</sup> 松岡 (2004) は、「ディスコース」を「考え方」と訳し、ディスコースを理解することはソーシャルワーク実践の大義と対象を理解し、専門職の守備範囲を考えるうえで有効であるとしている。

## VI. 結 論

ここでは、本論の結論を提示していく。第一に結論を導いていくための本論の立場を確認しておく。第二に AID に関するわが国の先行研究調査から得た結論を示し、第三に本論で行なった DI 者等へのインタビュー調査を中心とした研究から得た結論をふり返る。そして第四に 5 つの調査結果の考察から得た結論を述べる。そのうえで第五に、本論で実施した研究の結果から導いた、本論の結論を提示する。

本論で得た結論は、今後の研究の方向性を示唆するものであるとともに、ソーシャルワークによる DI 者の権利擁護を推進するための理路並びに指針でもあると考える。

最後に本論の限界と今後の課題を提示していくことにする。

### 1. 結論を導くためのパースペクティブ

本論の結論を提示する前提として、①本論がソーシャルワーク研究であること、②理論的前提としてナラティブ・アプローチを用い、その視座から DI 者を取り巻く社会状況と課題の構造を解釈してきたこと、③DI 者の発話から得られたオルターナティブ・ストーリーが、わが国で固定化されてきた AID にかかるドミナント・ストーリーに影響を与え、④オルターナティブ・ストーリーの内容とその変化に、DI 者のストレングスを見出すことにより、DI 者と他者との関係を服従と支配などの人権侵害から解放し、対話ができる関係へと変化させられる可能性があること、そして⑤本論で展開した筆者らと DI 者との一連の研究上の関わりが、実はソーシャルワーク実践そのものであるといえる可能性がある、という視座のもとで、本論の結論の構築を図った。

### 2. 先行研究調査から得た結論

先行研究調査の結果、わが国における人工生殖と子の福祉に関する歴史的な考察において、1949～1978 年という時期における生殖補助医療が、生まれてくる子どもを生殖補助医療の当事者とはせず、出生後においても社会的存在として認知してこず、「子の福祉」という考え方が極めて希薄であったことが否定しがたい事実であることが明らかになった。

また 1979 年以降、諸外国における「出自を知る権利」が法定化される中、わが国においても「出自を知る権利」が議論され、以下のような特徴を有する理念的な権利として「出自を知る権利」が定着しつつあるにもかかわらず、わが国における ART に関する法制度は未だ整備されていない。

出自とは、個人と祖先とのつながりを明確にすることであり、個人の属性を示すとともに、つながりを確定させる、人格を構成する要素である。

出自を知ることは、自己の個性の理解と展開にとって重要な手がかりを与え、人格権に内包される。つまり、出自を知る権利は、自己のアイデンティティと直結する権利である。

子どもは完全なる人間であるので、当然に権利の主体であり、「出自を知る権利」という人格権を有する。

筆者は、このように規定できる「出自を知る権利」に関する観念を支持し、この人格権が保持されていない状態を、第一義的にDI者固有の人権の侵害であると考えたものである。

本論で試みた先行研究調査の結果から筆者は、ヒトに対する生殖科学の50年の議論が、DI者が「絶対的少数者」であった時代において、医療者は秘密主義を奨励し、人工授精の当事者からDI者を排除してきたととらえる。

そして、人工生殖の歴史に関する第5期以降、はじめてDI者は、わが国のAIDを取り巻く社会状況の中に登場し、「声」をあげた。それによってDI者がAIDの当事者であり、様々な苦悩を抱えていることが明らかになり、DI者のコミュニティを形成する権利の主体であることが唱えられるようになり、秘密主義が奨励されていた時代には想像されなかった新たな複雑な問題が顕著になったのである。そして、新たな複雑な問題群の中に、ARTを取り巻く社会の、システム上の問題と医療上のリスクがあることも、看過してはならない事実であるとしてとらえた。

### 3. 研究から得た結論

#### (1) DI者の苦悩とは何か

DI者が自らの人権と主張する理念的な権利である「出自を知る権利」にかかる諸要素の抽出から示唆を得て、筆者はDI者に対する人権侵害が社会システムとして構成されてきたと考える。すなわち、筆者が導いたDI者を取り巻く社会システムとは次のとおりである。

医療者は不妊カップルの求めに応じて、AIDを実施するにあたり、AIDの実施を「秘密」にすることを「誓約」させ、他者にその事実が伝達されることを制限してきた。

その背景には「伝えないほうが幸せ」という子どもに対するパターンリズムと「嫁」という格付けされた、女性の立場にみられる「強者－弱者」の関係が認められる。

AIDを取り巻く歴史と社会状況は、「医の三原則」により、医療者が構築したシステムを強化し、そのシステムが結果としての非難・排除・ネグレクトを生起させた。

AIDの実施は、DI者への直接的行為というよりも、第一義的に不妊カップルをコントロールし、結果として、AIDを選択した不妊カップル及びDI者が信頼関係を築けず、つな

がりを断たれ、自らを卑下することを助長するという結果を招いた。

ここまでの研究から導ける結論は、DI 者がおかれている状況の背後には「秘密主義とパターナリズムの正当化が社会システムとしてなされてきた」ということである。

「DI 者の苦悩とは何か」という問いに対する本論の結論は、こうした社会システムのもとで、DI 者は自らの人権として主張している「出自を知る権利」などの理念的権利を侵害されているということである。すなわち、次のように DI 者の求めと人権侵害の関係をまとめることができる考える。

第一に DI 者は自身が「DI 者」であることを知り、AID の当事者となり、「真実」の中で家族関係を営むという権利を獲得し、「真実」から疎外されているという状況からの解放を求めている。（「出自を知る権利」の侵害）

第二に DI 者は、真実の中で生活する者として、友人・知人等に「真実」を知ってもらい、かつ、認められるという行為が伴う人間関係を、安心して獲得する権利を獲得し、社会的に孤立するという状況からの解放を求めている。（「表現の自由」の侵害）

第三に DI 者は「絶対的少数者」として、社会から無視される、あるいは放置されることなく、社会の一員として生きる権利を獲得し、法的に自らの存在が認知されていないという状況から解放されることを求めている。（「社会的に認められ、参加する権利」の侵害）

第四に DI 者は遺伝情報のレベルで、未来永劫、「つながりを確定させる」ことから侵害されている現状から解放されることを求めている。（「新しい人権 - ①未来世代への継承に関する権利、②暴力に晒されない権利、③コミュニティ開発（共生）権」の侵害）

したがって、DI 者が侵害されている人権には、①出自を知る権利、②表現の自由（権利）、③社会的に認められ、参加する権利、④未来世代への継承に関する権利、⑤暴力に晒されない権利、⑥コミュニティ開発（共生）権が包含される。

そうであるならば、こうした人権侵害から DI 者をいかに解放へと導き、DI 者の Well-being を実現するのかを、あらためて問うていく必要がある。それは、ソーシャルワークの価値である「人間の尊厳と社会正義の保持」に一致するミッションの実現であり、DI 者の解放が DI 者の Well-being を実現するための理路であるからである。

本論でいう DI 者の権利擁護とは、DI 者を DI 者が被っている人権侵害から解放することであり、かつ、DI 者を取り巻く社会的環境を、DI 者の人権を侵害しない社会へと変化させることである。その両立によって、ソーシャルワークが価値とする「人間の尊厳と社会正義の保持」を実現させることが可能となるのである。



## (2) DI 者の解放のための理路

本論で得た、DI 者のオルターナティブ・ストーリーは、WAIMH のワークショップなどで国際的に発信された内容であり、以下のようにまとめられる。これは、DI 者による DI 者のための人権宣言であると解釈できる。

### 【DI 者のオルターナティブ・ストーリー／DI 者の人権宣言】

秘密主義を医師たちが取り入れた理由は、AID を利用したカップルが感じるだろう「恥辱」という不名誉を夫婦が受けないようにするためである。

多くの DI offspring は事実を知りたがっている。長く事実を隠そうとすればするほど、子どもはより傷ついていく。母の告知で、[不安と憤り]を覚えた。両親に騙されたと感じた。今までの父親との関係の悪さを納得した。父親を失った。3年後、母を亡くしてから自分の存在に不安を感じ、出自を隠されていたことに[怒り]を感じるようになった。

今の私にたどり着くのに、他の当事者との出会いは大きいものであった。「もっと早くに告知して欲しかった」「提供者を知りたい」という共通の思いを抱いていることを知って安心できた。AID で生まれたことを隠すべきではない。もっと早くに知りたかったと思っている。

大人になって、結婚も出産も終えてしまってから告知は遅すぎる。自分の土台となるルーツが嘘であったことで、その上に積み重ねた自分が崩れてしまったような感覚。自分を再構築しなければいけなくなった。

このようなことを背景として、私たちは①当事者の心からの正直な訴えに耳を傾けてください。②当事者の物語は[悲しみ・怒り・悲痛]にあふれている。しかし、③変化に向かった前向きな希望にも満ち溢れている。そして、④私たちの尊厳や生まれながらの権利を、社会は尊重してほしい。

また、①社会や国の理解が低いので、政府を頼るよりは、まず自分たち自身が子どものケアの仕組みを作らねばならない、そうした取り組みの中から②匿名のドナーから生まれた子どものケアのための情報を共有し、より信頼できる親子関係を構築することをめざし、③親からの積極的な告知を求め、④出自を知る権利を認める社会のルール作りや⑤不妊カップルと提供者と生まれた人、それぞれを支えるしくみを整えることが必要である。

つまり、ソーシャルワークは、DI 者の人権侵害からの解放のために、このような DI 者の人権宣言が権利として擁護される社会システムの構築をめざさなければならない。

本論では、DI 者を取り巻く人的環境に対する質的量的調査の手法を活用して、この目的に到達するための考察を行い、その結果、得られた結論は次のとおりである。

DI 者は、自らが DI 者であることを知る以前と以後で、自らの物語を大きく変化させざるを得ず、時にアイデンティティの揺らぎに至ることもある。それは、出自を知ることの中

に、「DI 者であることを知る」ことと「遺伝上の父を知る」ことが含まれているからだと考えられる。この2つのことをクロスさせると、DI 者は四象限のどこかの住人として規定することができる。そして、DI 者は「知る」ことにより象限間を移動し、自らの物語を「外在化」させていく。DI 者がどの象限の住人であるのかによって提供されるソーシャルワークが異なる必要があり、ソーシャルワークで擁護すべきDI 者の侵害されている人権も異なる。

DI 者がDI 者として生きていくとき、DI 者はDI 者固有の人権を、自らの「人権宣言」として表明し、他者との対話を模索する。このことをDI 者のストレングスととらえると、ソーシャルワークはナラティブ・アプローチにDI 者の変化する物語を聴き続けると同時に、再構築される物語にストレングスを見出していくアプローチを連結させ、中心的機能を「翻訳—連結—伝達—交互作用」へと循環させ、DI 者の求めに即応していくことが求められる。

DI 者の変化し続ける物語に即応したレスポンスを表明することは容易ではなく、DI 者の変化し続ける物語に即応した「ツール」を開発し、他者に伝達することは不可能ではないが困難を伴う。この困難さの克服は、ソーシャルワークは伝達先である他者を「レディネス・アセスメント」することで可能となるかもしれない。

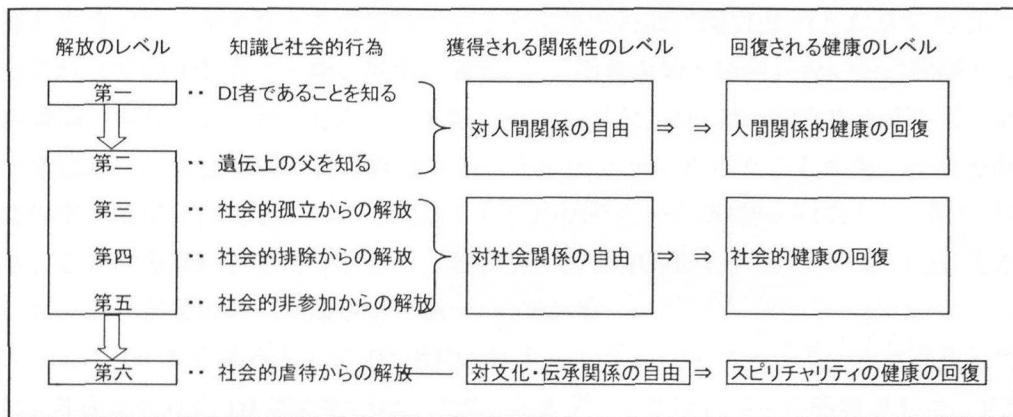
DI 者の変化し続ける物語を伝達する先が、個人・集団・コミュニティ・社会のいずれであっても、ソーシャルワークはナラティブ・アプローチとストレングス・アプローチを交互作用させ、DI 者と対峙する他者との「対話」が成り立つよう支援し続ける。

#### 4. 本論の結論

以上のような「先行研究調査から得た結論」と「研究から得た結論」から導ける、本論の結論は、図VI-2 で示す構図の中で、ナラティブ・アプローチとストレングス・アプローチの交互作用を基軸とするソーシャルワークを展開することにより、DI 者固有の人権に対する、AID を取り巻く社会システムからの侵害行為から、DI 者を解放し、DI 者の権利を擁護することが可能となるというものである。

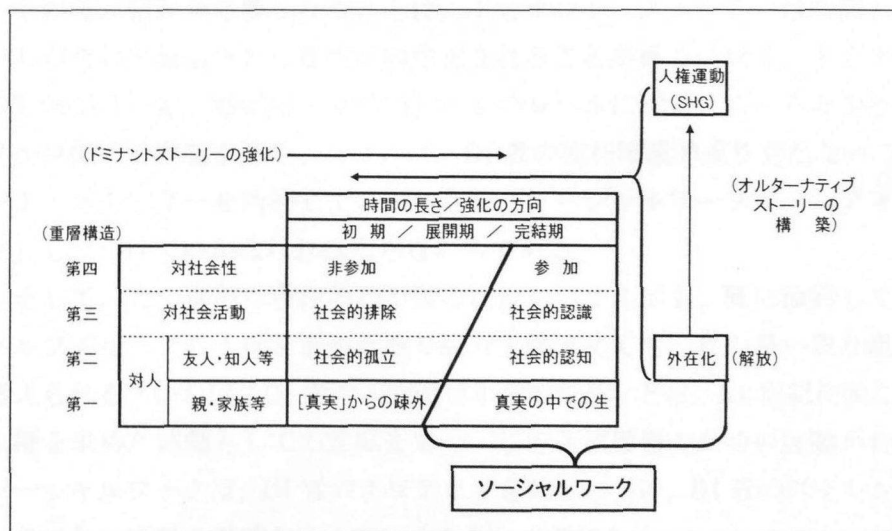
この結論は、DI 者が自らの人権であると主張する固有の人権の侵害から、DI 者を解放するのみならず、今後、発生する可能性のある新たな人権侵害やその背景にある社会的な不正義が繰り返されないために、ソーシャルワークがいかに機能し、人間の尊厳と社会正義の保持に貢献し得るのかを展望する視座を提示する理論モデルであるとも考える。

まず本論でいう「DI 者の解放」について図VI-1 で確認しておきたい。



図VI-1 DI者の解放概念の整理

本論で繰り返し述べてきたように、DI者に対する人権侵害は重層的である。その重層性を図中では解放のレベルに対応させて、第一から第六までに区分した。この区分に対応して、DI者が得る知識とDI者が解放のレベルに到達するために他者から得べき社会的行為を対応させた。さらに獲得される関係性のレベルにおいては先行研究から示唆を得た、「社会的虐待」の概念区分を対応させている。つまり、DI者は第一から第六までに区分できる解放のレベルに到達するごとに、人間関係や社会関係、文化・伝承関係レベルの自由を獲得し、WHOが提示する健康の各レベルと親和性のある健康を回復するのである。またスピリチャリティの健康の回復とは、シャローンが指摘するように「辱められているBeingの解放」である。したがって、解放とは何かを改めて定義すれば、心身・社会・文化的に健康でいられるように、自由が獲得されている状態である。



図VI-2 DI者の権利擁護モデル

つまり、DI者が解放されている状態とは、DI者の固有の人権－出自を知る権利、表現の自由（権利）、社会的に認められ参加する権利、「つながり」を確定させる権利、暴力に晒されない権利、コミュニティ開発（共生）権が擁護されている状態である。ここを到達目

標とするソーシャルワークの実践モデルを図示すれば、図VI-2のとおりである。

これまでのDI者の人権に関する議論は、「出自を知る権利」をいかに保障していくのが議論の中心であった。しかし、本論の研究の結果、DI者の固有の人権として認めていくべき権利は、上記のように多様であることが明らかになった。しかも「出自を知る権利」に対応する事実行為としての「真実」からの疎外という人権侵害には、大きく「DI者であることを知らない」ということと「遺伝上の父を知らない」という2つのことが含まれていた。これが図中の「重層構造（第一）」である。

そしてDI者を基点としてDI者のオルターナティブ・ストーリーが外在化していくごとに、外在化されたDI者の物語は、ミクロ・メゾ・マクロレベルの環境がもつ、ドミナント・ストーリーと対峙することになる。対峙することとなるドミナント・ストーリーには質的に異なる人権侵害が内在しており、DI者は様々な人権侵害に遭遇するとともに、その環が第一から第四へと重層化していることに、直面してきたといえる。

こうした議論を踏まえて筆者は、DI者の物語が外在化しオルターナティブ・ストーリーが構築され、DI者が直面する環境からDI者が自由になることを、「DI者の人権侵害からの解放」であると考え、筆者のソーシャルワークの考え方からすれば、DI者のオルターナティブ・ストーリーと対峙することになる、人権侵害の環をなすミクロ・メゾ・マクロレベルのそれぞれの環境は、それぞれのドミナント・ストーリーを所持しているのであるから、ソーシャルワークはそこで生起しているドミナント・ストーリーを把握し続けることによって、DI者と人権侵害の環をなす環境との対峙を媒介し、両者の間に介在し、対話やコミュニケーションが成立することを支援していくことになる。

その際、留意が必要となることは、ドミナント・ストーリーは時間と共に強化され、動かしがたいと確信される程度に固定化されることが稀ではなく、ドミナント・ストーリーの形成が「初期・展開期・完結期」のどのレベルに到達しているのかを、ソーシャルワークが見極める機能を果たさなければ、DI者の権利擁護が成り立たない。すなわち、ドミナント・ストーリーを所持している他者を、ソーシャルワークが「レディネス・アセスメント」しつづけていかなければならないのである。

そして、この過程は現在のわが国の状況を踏まえても、既に検討してきたようなセルフヘルプグループの人権を求めた取り組みを踏まえても、息の長い取り組みが必要となると考えられる。いわば「DI者の人権侵害からの解放」とは、21世紀初頭に生起された新たな人権を求めた運動としての意味をもつ。この人権獲得のための運動が目標に到達するまでソーシャルワークは、DI者のナラティブを聴きつづけ、DI者のストレングスにアプローチしながら、運動の継続を支えていくことも必要になる。

DI者の権利を擁護するための、ソーシャルワークに課せられた機能を確認しておけば、ソーシャルワークはDI者が人権侵害から解放され、自由を獲得するまで、DI者の「脱構築・再構築」される物語を聴き、ストレングスを見出し続けなければならない。聴くことによって得た、あるいは構成した知識は、DI者の権利を擁護するために社会的行為として提



供されなければならない。その提供のされ方は、DI 者が対峙することとなる人権侵害の環に関するレディネス・アセスメントを行い、その状況に即した対話が構成できる DI 者の発話とストレングスからなる指標を準備し、その指標が DI 者の想いと合致しているのかを常に吟味し、「ツール」として活用する際には慎重でなければならない。

ソーシャルワークは、DI 者の権利を擁護するために、DI 者のオルタナティブ・ストーリーの内容や DI 者の変化の中に、ストレングスを見出しつつ、DI 者との間で共同の理解を生起させるとともに、そのストーリーが伝達可能な他者を発見し、他者の状況を理解し、他者をもドミナント・ストーリーから解放することもめざすことによって、社会システムを変革し、DI 者がインクルージョンされた社会の中で、DI 者による DI 者のための人権宣言が認知される、新たな社会を構築していかなければならないと考える。

## 6. 本論の限界と今後の課題

### (1) 対等性の主張から脱皮する理論の構築

本論は、人権と社会正義が全うされた福祉社会の構築が最終的な目的である。しかし、本論では AID を求める側と DI 者の議論が、本論で生起されたオルタナティブ・ストーリーによって対話が成立するよう、対等性を求める段階に至る結論を導き、対等性を主張する段階から対話、あるいは議論のための理論モデルを導いたに過ぎない。今後、これらを用いたソーシャルワーク実践を展開し、この理論モデルの適用可能性を検証していくことが次の課題となる。

### (2) DI 者の変化とストレングスの見立て

DI 者の物語の「外在化」を、ドミナント・ストーリーからオルタナティブ・ストーリーへの「脱構築—再構築」が図られたと捉えた。この変化が本論でいう DI 者の固有の人権侵害からの、DI 者の解放のエントランス・ポイントとなる。つまり、シングル・デザイン・システムでいえば、回復点に相当する。それは、本文「図 V-4 DI 者の類型と人権侵害からの解放」で示した第三象限から第四象限へのトランスファーに相当すると考えるのである。しかし、それが「出自を知る」こと以外の、いかなる要因で変化するのか、個人差があるのか、DI 者という集団、あるいはコミュニティに共通する要因で起き得るのか、など具体的に解明しなければならない課題は多く残存している。また、DI 者の物語の変化にストレングスを見出すという理念を提示したが、それをソーシャルワークがいかに把握していくのかを、ソーシャルワーク実践としてモデル化するには至っておらず、今後の課題である。

### (3) ソーシャルワーク・プラクティスの全容構築

本論はストレングス志向のナラティブ・アプローチに親和性のある研究として、DI 者の権利擁護のためのソーシャルワークの実践モデル（理論）の構築をめざした。ここで得

た結論は、DI 者と他者のように立場の異なる二者間の対話、あるいは議論の着眼点と実践のための理論上のモデルを構築したに過ぎない。今後、ソーシャルワークの展開過程におけるプランニングやインターベンション、エバリュエーションへと続くプロセスがソーシャルワークの共通基盤として普遍的であるとすれば、それに最適なアプローチを探究し、DI 者の権利擁護のために連結させ得るソーシャルワークの実践モデル（理論）を探究し、その全容の構築へと本研究を進展させていかなければならない。

#### (4)研究の科学性の検証

研究の科学性を主張するためには、①研究上の手続きや方法、②DI 発話指標やビネットの形成、③ソーシャルワーク・プラクティスの探索尺度として、②を活用することの妥当性、④本研究の手法が分析的帰納法にいう質的研究となり得ているのか、を検証しなければならない。そして、これらを展開した質的研究と⑤ビネットを介した量的研究のトライアングレーションの妥当性、さらには⑥第1～第7までの調査研究を連結させた研究法にかかるメタ理論を構造構成主義とした観点や⑦筆者の立場をポスト構築主義と称する妥当性、に関する検証も欠かすことができない今後の課題である。

#### (5)生命科学への関心と理解の深化

DI 者は語るにより、なぜ自らの物語を「外在化」することができたのであろうか。「他者との関係の中から変化する」からであるということができようし、「気づき」あるいは「洞察」、「自己覚知」という働きかもしれない。さらに、人間の本質に立ち返れば、人間は「生まれながらの気質」によって定められた人生を送るのではなく、「他との関係」あるいは「環境の影響」を受け生まれ、変化しながら生きているのである。ヒトの萌芽としての胎児は、未だ十分に解明されていない「受精の瞬間」並びに「着床の瞬間」に、他者からの援助を受けているともいわれる。この瞬間が人類の発祥及び生誕の本質であることは疑いようがない。他者との関わりの重要性をヒトの起源にさかのぼり検討し、生命科学や生命倫理に関する学術的深化を探究していくことも、本論の関心からすれば、今後必要な研究課題であると考ええる。

#### (6)DI 者の解放に向けた運動への協働

2010年2月現在、わが国のDI 者らは、信頼できる理解者や支援者らとともに、DI 者のセルフ・ヘルプ・グループを立ち上げようとしている。

こうした当事者運動によって、彼／彼女らの望む結果がもたらされ、本論で提唱するような「DI 者の『人権宣言』」が、わが国における法的権利として位置づけられるまで、彼／彼女らとともに協働していくことは、本論の最も重要な今後の課題の1つであると考ええる。

## 謝 辞

本論は、精子提供による非配偶者間人工授精で生まれた皆さんのご理解・ご協力なくしては成立しない研究であり、長年にわたる筆者の稚拙なインタビューに快くお声出し頂き、感謝申し上げますとともに、本論がいかほどでも、皆さんの役に立てば幸いである。

本論は、初出論文一覧にも示したとおり、才村眞理帝塚山大学教授との共同研究として展開させてきた成果を数多く活用させて頂いている。才村先生の熱い想いと行動力、そしてお人柄から醸し出される温かみに支えられ、筆を運ぶことができた。ありがとうございました。

そして本論を学位論文として提出するにあたり、何よりも主指導教授である高橋重宏先生に深く御礼申し上げたい。高橋先生には筆者がソーシャルワークの実践現場から職能団体に調査研究にかかる補助を担う時代から、今日、大学で教鞭をとるに至るまで多方面にわたりご指導ご鞭撻を頂いた。とりわけ高橋先生から頂いた「概念の明確化」と「オリジナリティと科学の探求」というお言葉は、研究を進める上で常に念頭におき、一項一節と書き進めるたびに吟味の尺度とさせて頂いた。また、副指導教授の小林良二先生には本論執筆の各段階並びに最終とりまとめの段階で、本論の社会的価値を高めるための洞察につながる貴重なご指導を頂いた。審査委員の古川孝順先生並びに若穂井透先生にはともすれば冗長になりがちな本論を精緻化し、かつ体系化するための視点をご提示頂いた。さらには本論の調査実施に協力頂いた渡辺久子先生、坂本正子先生、谷口真由美先生、平野華織先生、鶴飼奈津子先生および高橋ゼミで中間報告等を聴きご助言頂いた同志諸氏、あるいは量的調査に協力頂いた学生諸子に対して、心から感謝の意を表し、御礼申し上げます次第である。

最後に、2009年現在の日本においては、未だソーシャルワークが社会的に認知され、社会の期待に十分応え得る科学として浸透していないという指摘もある。こうしたソーシャルワークを取り巻くドミナント・ストーリーから脱却し、わが国におけるソーシャルワークの新たな物語が構築されるよう、筆者はソーシャルワークの実践者並びに研究者として、より一層の研鑽に励む所存であることを、ここに表明し筆をおきたい。

## 参照データ① インタビューから得た葛藤

### 1) AID を選んだカップルが直面する可能性のある葛藤

養親は、①養子を得ること、②養子を育てること、③親の立場や責任、育児ストレス、④養子への真実告知、についての葛藤をもつことが抽出された。各葛藤に関する具体例を示すと次のとおりとなる。

#### ①「子を得ること」に関わる葛藤の例

a 1 = 「親になるための資質」「本当になぜ自分は子どもを求めているのかという覚悟が必要」「ライフスタイル、人生設計上に子どもがいるのか」「子どもを持たないのも選択肢」

b 1 = 「親としての自信を持たないまま、親をやっていると思春期特有の問題を特殊な状況で自分が貰った子どもだからとか、勘違いしてしまう」「親の覚悟、親の準備、親の備え」

#### ②「子を育てること」に関わる葛藤の例

a 2 = 「子どもがいないということは日本の社会ですごい偏見で見られる」「親から親類から周りからのプレッシャー」「日本人全体の文化形態が普通であることを望んでいる」「養子と聞くと何となく身構えられたり、2、3歩下がったりされるので」

b 2 = 「日本の社会が血縁社会で養子ということを隠さねばならないという成熟した社会でない」「子どもを育てないと周りから一人前と認められない」「世間の偏見」

#### ③「親の立場や責任、育児ストレス」に関わる葛藤

a 3 = 「何かトラブルがあると一番辛い立場に追い込まれるのは母親」「父親も必ず責任とるべき」「夫は妻に引きずられて」「育児は育自である」「できた子どもの理想と現実のギャップは大きい。苦勞して生んでいるからこんなはずじゃなかった」「四六時中子ども中心の生活がすごいストレス」「ほしがりが異常」「絶対ちゃんと育ててくれば」

#### ④「子への真実告知」に関わる葛藤

a 4 = 「告知は絶対すべきである。子どもが立ち上がっていける」「隠し通せるといいう信念体系は絶対ばれる」「近親婚を避ける措置としても告知をする必要はある」

b 3 = 「秘密を持つということに親が精神的に耐えられない」「それは言わなければ子どもはわからないと思っているけど、いろんなところで察知している」「言うか言わないかはその人の自己決定だ、言わない人はその裏にある危険性を覚悟しておかなくてはならない」

a 5 = 「告知は本人にとってすごいショック」「揺れがありましたね、家のお金を持ち出すとか」

b 4 = 「そのことを子どもが知ったら子どもが裏切るかもしれない」「育ててくれている親から生みの親を悪く言われることは辛い」「告知のトラウマ」



- a 6=「親が拒否的に話すと子どもは不安になる」「明るく言うのがいい」「うそをつかない」「告知のタイミング」「物心つく前に話す」「時期とか、受け止め得る力があるかどうか」
- b 5=「世間や第三者に言う必要はない」「何をしても可愛い、4、5歳までに真実告知」「実際にロールプレイ」「お誕生日にするとか、家族旅行の時に」「楽しい雰囲気の中に」「真実告知と事実告知とは違う」「賢そうだったからというのはやめて」
- a 7=「しょっちゅう電話で話す」
- b 6=「子どもに告知するといろいろなことを不安に思う、赤ちゃん返りしてみたり親を一杯試すの」「告知をした報告を受けて、良かったよ、上手だったよ、無事に済んだねと、そういうアフターケアがいる」「言わない人は一番親子関係の悪い時に言ってしまうている」

## 2) DI 者が直面する可能性がある葛藤

養子は、①告知されたこと、②出自を知ることに関わる葛藤を抱えていた。

### ①「告知されたこと」に関わる葛藤

- a 8=「『お母さんのお墓参りに行きたい。お母さん亡くなった』という。多分これは心の中で作り上げた話」「なぜここの家の子になるのか、納得させる理由」「家族を作ったかった」
- b 7=「告知によって非常に大きな負担」「生んでくれた親が自分を手放したという精神的な負担」「それは自分の存在全てに対しての乖離」「人間への不信任感」

### ②「出自を知ること」に関わる葛藤

- a 9=「出自については、本人は死ぬまで思うんですよね、腑に落ちるのですね」「子どもの出自についてちゃんと知らせるべき」「自分の産んだ親のところへ会いに行つたよう」
- b 8=「自分はどこの誰のどういう血を引いて本来どういう環境で生まれ育つ人間だったのか、それを知らないことの怖さ」「育て親が自分の出生にまつわる事実に関してある種のタブーを持っている」「子どものアイデンティティの形成」「見放されたという原体験がある」「だけどどんな人なのかは知っておきたい」「自分の生い立ちがわかって納得すればそこから再スタートできる」
- a 10=「本人が知りたければ誰というところまで」「子どもが大きくなった時どうしても会いたいと言うなら何とかしてやりたい」「身長やそんなことを聞いても仕方がない」
- b 9=「生みの親と共に生活したいかというところではない。会うという場合でも直接対面するということよりも遠くから一度見てみたい、あるいは写真をみてみたい」「心の準備が必要だ、受けとめるだけの適性がないうちに会わせるとこれは大変」「なぜどうして会いたいのか、会ってどうするのか、何をどう確認するのか」「社会的責任を負

う覚悟があるのか」

b 10＝「親を探したり出自を知るということの影響の大きさというのは本当に大きいのだよ」「お母さんの人生をこっちから見るとこのように見えるかもしれないとソーシャルワーカーが言えるかもしれない」「自分たちで自助グループを作っている」

a 11＝「一部ではなく全て知り得ることは子どもにとって権利がある、そして知る方法を絶対作っておくべき」「生殖補助医療では提供者まで知りたいと思う、きちんと提供者にも話す必要あり」「子どもの立場から知る権利は必要だ」

b 11＝「いつでもあなたが知りたい情報をあなたが知る権利があるのだ」

3) ドナーが直面する可能性のある葛藤

生みの親に対するインタビューは出来ていないが、養子縁組に携わった支援者は次のような想いを語っている。

b 12＝「いずれ子どもが訪ねてくるかもしれない、その時に人間として精一杯生きてきたんだという証しを」「知らせてもいいとするのが提供者の条件」「提供者へのサポートはいる」「人間としての責任はある」「子どもが訪ねて来た時納得する人生を送って」

## 参照データ② 家庭養護促進協会の調査結果

特別養子であることで心配していることについて尋ねたところ、「心配ごとはない」と回答した者が 64 人 (53.3%) で最も多く、次いで「反抗期や思春期にどういう問題が出てくるか=27 人 (22.5%)」であり、「真実告知をするかどうか」が 15 人 (12.5%) であった。

「もし将来、子どもが実親に会いたいと言ったらどうするか」を尋ねたところ、「子どもが大人になってから、本人の意思にまかせる」が 76 人 (63.3%) で最も多く、次いで「会いたいという気持ちは理解できるので、会えるよう協力する」と「気持ちは分かるが、正直なところ、会って欲しくないと言う」とが 13 人 (10.8%) で同数となっている。

自分の子どもが養子であることについて、一般論としての「打ち明ける」べきかどうかを尋ねたところ、「打ち明けた方が良い」が 71 人 (59.2%) であるのに対して、「打ち明けない方が良い」は 12 人 (10.0%) であった。一方、自身の子どもに対して養子であるという真実を告知した者は 33 人 (27.5%) であり、一般論と自分のこととは異なる回答が寄せられている。告知した者について、その理由を尋ねたところ、「いずれわかることだからいわなければならないと思った」が 13 人 (39.4%) であり、「事実は事実として伝えなければと思った」が 9 人 (27.3%) であった。さらに打ち明けたことについてどのように思うのかを尋ねたところ、「良かった」が 26 人 (78.8%) であり、「良くなかった」が 2 人 (6.1%) であった。

真実告知をしていない者に対して、打ち明けることに対する不安を尋ねたところ、「子どもが驚き、動揺するかもしれない」が 28 人 (41.2%) であり、「今はまだ子どもが理解できないと思う」が 22 人 (32.4%)、「子どもが傷つくかもしれない」が 15 人 (22.1%) であった。

### 参照データ③ DI 者の発話と【名づけ】

#### 1. DI 者へのインタビュー～2006. 7. 1.

- [発話 1] 会いに行って、最初入った瞬間に“ああ、この人に話していいんだあ”って思え、相談室に入った瞬間に涙が出てきちゃって……。【名づけ：認めてくれる人】
- [発話 2] 話している中で覚えているのは、なんか親に対して怒ってもいいんだっていう、親が悪いんだから、あなたは悪くない、本当にひどいことだ、罪だと思うとか、少し過激ではあるけど嬉しかった。そういうことを初めて言ってくれた。【名づけ：意識の転換】
- [発話 3] 親に、自分の気持ちを書くのはどうかって、親への手紙って形をとって、自分の気持ちを書いたらどうかって、そういうことを言われた。【名づけ：提案・アドバイス】
- [発話 4] 言葉で気持ちを表現するという事は大事なことで、その人の思いが伝わってくる。それまでは言わなくていいと思っていたし、まあいいかって思っちゃいそうなとき、1人で抱えてきた。【名づけ：言葉にすること】
- [発話 5] 養子とか捨て子とかではなく優秀な精子を使って生まれてるんだから、そんな事で悩んで贅沢だとその養子の方に言われ頭にきて涙が止まらなくて……。それが一回目なんです。強烈な発言だなーと、あの時は。【名づけ：人前で話すということ】
- [発話 6] お母さんはすごい！絶対だ！みたいな。でも子どもはその事に対して何かを言いたいと思っても言えない、言いたくても言えない、表面的にはそういう感じでも奥底ではそうかな？という疑問が有るけどそれ言わせない雰囲気……。【名づけ：親子関係】

#### 2. DI 者へのインタビュー～2006. 8. 4.

- [発話 7] 波なんです。嫌だナァと思って、また何か言われたあ…嫌だなあ…と思う時があり、波の中で、もうほっといてって気持ちになったり。【名づけ：波】
- [発話 8] 人前で言いたくないって気持ちになるときがある。自分がこう思ったとか、今こう感じているって言って、いつもなんか、わりと否定される。【名づけ：気持ちの変化】
- [発話 9] 終わってまた気持ちが高ぶっているんで、一晩くらい眠れない。“なんか行きたくないなあ”っていう風な気持ちで嫌な気持ちがあって、でも、行ってみたら「エンパワメント」され、生きていく力が湧いてくるような。【名づけ：行動すること】
- [発話 10] 声かけてもらったり、いろんな方の言葉を自分の中にすりこんだとき、揺れていた心が、“あっ、こういう事なのかあ”とか“こうなんだあ”ってとびこんできた。「エンパワメント」、勇気づけるってことで、あっ、そっかと思って。【名づけ：気づき】
- [発話 11] 自分の気持ちを表す言葉っていうのが浮かんなんです。【名づけ：到達点】
- [発話 12] 子どもも全員がやめろって言っているわけではない。多くの人は続けていくことに、まず反対ですよ。【名づけ：当事者間の立場の相違】
- [発話 13] 母に対する感情がすごい高まって泣けてくる。“なんでいないの”って思った



だけでバーって涙が出てきて。本当に枕を涙でぬらすって状態で。眠れなかったんですよ。

【名づけ：親に対する怒り】

[発話 14] 産むまでに、結婚するまでに、気持ちを整理する時間がある。早く言ってくれてれば、それだけ考える時間がある。早く言ってくれてれば……。一生を左右するようなことなのに、そこをわかってもらえない。

【名づけ：親への助言】

[発話 15] 大人になって知らされても悲しいし、ショックだし。親に告知してもらうのが一番なんです。涙が落ちたらダメなんです。涙が出てきたら、ちゃんとぬぐってやれる親じゃないと。

【名づけ：親は信念をもって子どもをサポートすべきだ】

[発話 16] 親が考えて、告知もして、一生懸命育てるのならイイですよ、みたいな方向になって、私は嫌ですって言おうかなと思ったけど……。

【名づけ：絶対反対】

[発話 17] こんな良いところがあって、こんな風な根拠があって、だから大丈夫だよって言ってくれる人がいて、私が納得できたら賛成します！っていうけど、そんな人がまだ1人もいないので。

【名づけ：私を納得させて】

[発話 18] DI をするなら、もう何が何でも子どもに言わない。幸せを守る。何で DI なんか許されているんだろうーって思っている。

【名づけ：否定する者への理解】

[発話 19] ある人の言葉が私にはグサッときて、“40にもなって何言ってるの”“お母さんが育ててくれたからイイでしょ”“そんなこと言ってる場合じゃないよ”って言われて。あなたに私の気持ちなんて分かるわけがない……。

【名づけ：否定する者からの回避】

[発話 20] 面と向かってやめてください！とかやめろ！とは言えないけど、でも、自分は良いと思ってないというのは言いたい。反対だって思っている子どもがいても、あえてやるなら最低限これはやってほしい！って。

【名づけ：社会への助言】

### 3. DI 者へのインタビュー～2006. 11. 10.

[発話 21] 「母親がわからなかったけども、そっちへ向け捜したけどやめたのよ、もう全然こだわってないわ」っていうのと、私たちは違う。少しでもたどれたのと、たどれる家は全然ないのとでは違うのに、その違いがまだわからない。

【名づけ：養子との相違】

[発話 22] 何が違うのかっていうと、根本的な問題がある。彼らみたいに全く出発点が違う、特に「血はつながらないけれども幸せだ」っていう、僕らみたいに「血が繋がってるんだけど幸せじゃない」っていう、立場とは全く逆の視点。

【名づけ：養子との相違】

[発話 23] 一般の人に対しても、特別養子縁組とは根本が違って、仕組みから違うんだということを言わないと議論がすごく曖昧なまま展開したかな。

【名づけ：曖昧な焦点】

[発話 24] 「子どもが困るじゃない」って「言わなきゃもって困るのよ」って思って、「その困った姿を見るのが辛いのよ」って、辛くても仕方ないのに、

【名づけ：覚悟できない親】

[発話 25] 大人になったほうが、理解が得られるって思ってるけど、そうじゃない。自分と同じ立場になってくれたらわかってくれると思っているけど、そうじゃない。わかるのはこの辺(頭)でわかるのかもしれないけど、最初に振っとくことが大事。

【名づけ：子どもの理解】

- [発話 26] 何年か前に比べれば、理解されたけど、その割合は少ない。【名づけ:社会の変化】
- [発話 27] カルテの中にそれが挟んであるのが見えるのに、「こっちはこう思ってるんです」って言ったら「いや、そんなことはないでしょ」とか、やっぱり未だに言う。【名づけ:無理解のまま】
- [発話 28] 言ってる人が自分の価値観の中で落ち着かせたいんですよ、私たちの問題を。すごい問題を押し付けてるのに気付かない。【名づけ:理解されづらさ】
- [発話 29] やっぱり人権でどんどん言い足すと、生む権利があるみたいな主張される。  
【名づけ:人権では言い切れない】
- [発話 30] わかってくれる人が話を聞いてくれる所さえない。とても辛いこと。相談しに行っても、何を言ってるのかわからない。結局、友だちに相談できない。  
【名づけ:認めてくれる人の必要性】
- [発話 31] 言っても叩かれちゃうと、「言うのやめようかな」とか思っちゃう。日本はもっともっと広めないと、まず広めないといけない。知らなさすぎる。【名づけ:社会への働きかけ】
- [発話 32] 知りたいと思うんだから、これからのことをみんなが開示するようにしてほしいって言うてるのに。これからのことを法律でちゃんと…。【名づけ:未来への担保】

#### 4. DI 者へのインタビュー～2007. 5. 11.

- [発話 33] するからには、それが必要で、別に全然悪いことではない、あなたがそういう生まれ方をしたのは私たちに会うためだと、自信を持って伝えて。【名づけ:自信を持って伝えて】
- [発話 34] 戸籍に全て実子でいいじゃないかっていう意見が書いてあったけど、それは逆。養子で何が悪い、DI で何が悪いっていうの。【名づけ:DI は秘密にしなければならない悪いこと】
- [発話 35] 腹が立つ気持ちになりながらも、やはり親なので言えないとか怒れなかったりとかするので、一番大切なところで嘘はいけなくなってる。【名づけ:大切なところでの嘘はいけない】
- [発話 36] 言わないっていうことは、嘘ついているってことだからね。嘘だっってわかった時点でやっぱり、「他にもうないよね？」って心の中で思うし、「他にないよね」って言うよりも、信じられなくなるというか、信じられるものって思っていたものが信じられないものなのかなっていう「はてな？」っていう気持ちになることがすごく…。【名づけ:言わないという「嘘」から不信へ】
- [発話 37] 自分の不妊の問題は言わない。それを理解してもらおうっていうのではなくて、ただ子どもにその事実と私たちはあなたを愛しているっていうことを伝える。わかってもらおうっていうのはおかしい。【名づけ:親が自分の立場を子どもに理解させようとするのはおかしい】
- [発話 38] 本当に一番信用している親が一番大切なことを知らなくていいと思って言わなかったっていうのはすごく悲しいなって。  
【名づけ:一番大切なことを一番信用している親が大切に】
- [発話 39] 最初にどういことが起こるだろうっていうことを全て知るべきだっていうか、全てを患者に知らせていくことが大事なんじゃないかって。【名づけ:最初に理解すべき】
- [発話 40] 産む権利はその人にとっての、親としての権利だ。【名づけ:産む権利への理解】
- [発話 41] 生む権利が自分の権利っていうんだったら、その後は自分が嫌な思いをしても、子ど

ものためになることに向かって…、

【名づけ:権利主張への責任】

[発話 42] 医療関係者とか看護に当たる人たち、カウンセリングとかする人たちに、私たち子どもの気持ちとか、こういうふうになりましたよって…。 【名づけ:専門家の理解の必要性】

[発話 43] こういうふうにしてほしいとか、こう思いましたとか、言っていく、そういう場所がほしいなってすごく思う。 【名づけ:言っていく場所】

## 5. DI 者へのインタビュー～2007. 7. 13.

[発話 44] 結局、個人個人でやるんだと思うけど、社会的にあんまりしゃべんないような風潮とか、そんな別になんないんじゃないかなと思う。 【名づけ:社会より親の選択】

[発話 45] しゃべらなければ何もない。しゃべらないっていうか、告知しないっていうのは別に消極的にやってればそれはそれで…。 【名づけ:告知しないという消極性】

[発話 46] 告知を一番阻む要因って、親の方針じゃないか。 【名づけ:告知を拒む親の方針】

[発話 47] 言われても後悔してないっていうのが親じゃないって思う。お詫びをするんじゃないくて…、お詫びなんかしてほしくないですね。 【名づけ:親の謝罪はいらない】

[発話 48] 大人になって、子どもを産むぐらいの年齢になってから告知したほうが良いとかいう人は、自分の子を産みたい気持ちとか、「辛さ」を子どもがわかってくれるからだ、みたいな言い方をするけど、でも、ほんとに自分中心で。 【名づけ:子どもに理解を求める自己中心性】

[発話 49] やっぱりどういうふうに生まれたとか生んだということよりも、それでも「あなたに会えてよかったのよ」って、嘘でもいいから言ってほしい。 【名づけ:「あなたに会えてよかった」って】

[発話 50] 告知が日本でなされる状況が想像できるだろうか。 【名づけ:日本社会への疑念】

[発話 51] 絶対秘密にしないっていうお医者さんはあまりいなくなった。それだけ、ポピュラーになってきたっていうか、それは変わってきたんだろうと思う。 【名づけ:ポピュラーになってきた】

[発話 52] 生まれた子どもたちが、出産のことを「どう思った」って、やっぱり聞けるような親であってほしい、聞いてくれるような社会で 【名づけ:出産のことが話せる社会であったほうが良い】

[発話 53] 児童相談所と連携を取ってやるっていても…。せっかく相談に来て、デスクの奥のファイルされちゃうのも、切ない話。 【名づけ:相談機関の限界】

[発話 54] 相談するような所、各市とか都道府県に分散させるよりは1ヶ所あれば、それでいい気がします。実際に面談するとか難しいかもしれないけど 【名づけ:最初は相談する窓口作りを】

[発話 55] やるか、やらないかの前のカウンセリングの段階で、「私なら言います」っていうのを確認し、ちゃんと前面に出した人にそういうことをやってもらいたい。 【名づけ:事前の宣言】

[発話 56] いま医者は「告知するな」とは言わないんです。「でも、決めるのはあなたたちですよ」っていう。一応、説明したっていう。 【名づけ:一応の説明】

[発話 57] 少なくとも「告知してもいいんじゃないですか」みたいな風潮はあるけど…。だからって、告知しましよっていう積極性は出てこない。 【名づけ:変化した「告知しないほうが良い」】

[発話 58] 結局、医者は最終的な責任は親が決めることだからみたいな感じになってきた。親はどっちにしようかなっていうと、しゃべんない、告知しないんじゃないかなっていうことで、誰も責任を

取らないような感じになりつつある気がします。

【名づけ:誰も責任とらない】

[発話 59] 医者を掘り返すか、コメディカルを掘り返すか、親を掘り返すかですね。コメディカルを掘り返すっていうのは結構一つ…。

【名づけ:コメディカルを掘り返す】

## 6. DI 者へのインタビュー～2007. 8. 25.

[発話 60] わかってもらうために自分の知った経緯とか話すことになる。そうするとわかってもらう面のお話のようになる。

【名づけ:語るということ】

[発話 61] 言われた時の環境。みんな家庭内に何か問題が起こって、問題と一緒に DI のことを聞く。記憶が混じってる。ショックな時に聞いているから。

【名づけ:言う場と時間】

[発話 62] うちの父が自分の子どもも自分の血がつながってないので、似てるはずがないだけで、私が子どもを生んだときに、やっぱり田舎なんでみんなでお祝いしようっていうことで、「特徴あるよね」みたいながありますよね。

【名づけ:親の「ウソ」の中身】

[発話 63] 相談口はやっぱり日本で1ヵ所くらいいいだろうと思う。それをすくい上げるもっと末端の相談箇所っていう部分で、子どもがちゃんと選べれば、それでよい。【名づけ:相談機関】



#### 参照データ④ 才村によるイギリスでのインタビュー記録（抜粋）

対 T・エリス

- Q1. 知ってからの気持ちの変化は？ A1. すごい鬱になった。後の人生の中でものすごく重大なことなのだとだんだん気づいていきました。
- Q2. ドナーを知りたい？ A2. とても、2つの思いがある。1つは、個人的に自分の生物学的な父が誰なのかを知りたいという自分の動機。2つは、そのことをもっと公に、一般の人に知ってもらいたいという動機。
- Q3. IDOA とは？ A3. 運動団体。声を上げていく。

対 D・ゴランツ

- Q4. 父からの告知のときの気持ちは？ A4. 驚きとショック。怒りという感情は湧いてこなかった。車にはねられた時のような、ただボーンとした感じと全く一緒。
- Q5. 母に対する気持ちは？ A5. 母に対しては責める気持ちはないし、怒ったことも一度もない。
- Q6. 援助については？ A6. カウンセリングとか専門的なものに関してはあまり信用していない。やっぱりお互いの自助グループ。結局、気持ちをシェアできる、同じ気持ちを持っているということがものすごく大切。
- Q7. それはなぜ？ A7. 14年間サイコセラピーを受けた。とんでもなかった。嫌でした。自分がなんかエイリアンみたいな、ちょっと人間じゃないみたいな（扱いを受けた）。
- 結局、ウソをつかれていたこと、今まで自分だと思っていた自分が違うのだと言われたダメージの方が、DIの事実よりも大きい。
- Q8. 真実告知と親子関係は？ A8. カップルの関係が真実を子どもが知ることで悪くなるとは必ずしもいえない。福祉という観点で言い出すと、結局証明するのが難しいし、人間の権利、自分が誰なのかということを知る人間の権利、権利という言葉で、やっていくほうがわかりやすい。
- Q9. アクションは？ A9. 疲れている。年を取って、キャンペーンとかしたくない。
- Q10. 裁判と法改正の影響は？ A10. 裁判では勝たなかったけど、負けなかった。人権に関する裁判は2段構え。第1段は人権に関することなのかどうかを判断する。第2段はその人の個人的な見解からみて、それが個人的人権侵害に当てはまるのかどうかをみる。裁判では第1段が認められた。人権に関わることだということが証明できた。

# 参照データ⑤ ビネットを活用したDI 者の声の変化

NO	質 問 項 目	回答者A		回答者B		回答者C	
		選択肢	その理由	選択肢	その理由	選択肢	その理由
1)	AIDは、私の親を「自信が持てない親」にしてしまった。	3	子どもとの関係についてはやや自身を失うようなところはあったのかも知れないが、子どもの視点からでははっきりしたことは分からない。	2	AIDで生れたという事実は話さずに32年隠してきたから。	1	AID選択の時点で、その選択に自信を持てていないから、積極的な告知や、告知後の子どもへの対応ができず、この問題をより複雑にしていると感じるからです。
2)	配偶子提供で産まれたということは、本人にしかわからない、体験です。	1	配偶子提供自体が、社会的認知の低さ、「隠されている」かのような印象から、DIの現実を把握することがまず困難である。本人以外の人が子どもとしての体験を理解することは困難である。実際に、相談相手として考えたときに、一般的な友人・教育者・医療者では子どもの体験を共有することは難しいのではないかな。	1		3	・大切な人との信頼関係がくずれる・それまで自分が自分だと思ってきたものが突然崩されるという部分については、他の似たような経験からも推測して共感してもらうことはできると思うので。だし、自分の出生の部分に人為的な介入があることへの違和感や、遺伝的なルーツの半分かからないことの不安感は、同じような状況に陥る他のケースがあまりないと思うので、当事者以外の共感を得ることは難しいと思います。
3)	医者は、配偶子提供を希望するカップルに、「真実告知」の必要性を説明するべきです。	1	真実告知を行うかどうかはカップルの判断になるが、少なくとも真実告知の必要性があることは伝えられなければならない。真実告知が必要になることは、この治療でのもっとも発生確率の高い治療リスクである。医療の一つである以上、医師は医療のリスクを患者に説明すべきであり、患者は聞いておく必要がある。	1	医者がまだまだ理解が足りないと思う。理解できないまま、続けるべきではない。	1	この技術について提供される情報が非常に少ないなか、医療現場での医師の言葉の影響は非常に大きいと思われます。過去、医師が隠すことを勧めたためこの技術が隠されて行われ続けてきたのなら、医師の意識が変われば、告知もすすむのではと思うからです。
4)	医者は、配偶子提供を希望するカップルに、医療がやるべき「アフターケア」について、説明すべきです。	2	アフターケアが確立されていない現状では、医療サイドのアフターケアについて説明すべきかどうかは現時点では疑問もあるが、試行段階ではあるが、子どもができたあとのアフターケアをサポートする組織は動きつつあり、アフターケアについて医師は限定的な情報であっても説明する努力をすべきである。	1	夫婦が得るAIDの情報が、医者からがほとんどだと思うし、医者の話は信じやすいと思う	1	アフターケアが全くないことが、真実告知に踏み切れない要素にもなっていると思うからです。
5)	カウンセラーやソーシャルワーカーが、「DI者の苦悩」が理解できない人では困ります。	5	カウンセラーやSWはあくまで当事者ではない。DI者の苦悩を完全には理解できないと思われる。一般的には傾聴と共感、適所への紹介ができればよいと思う。	1	すべてのカウンセラーに望むわけではないですが、DIのスペシャリストがいて欲しいと考えています。	1	DIで生まれたことを知った人に対する相談窓口が多くないなか、そういった人が最初に訪れるかもしれない場所にいる方には、少なくともDIに対する知識が少しはあってほしいと思います。
6)	カウンセラーやソーシャルワーカーは、「DI者の怒り」を受け止めてくれる人であってほしい。	1	まず話を聞いて受け止めて欲しい。これに尽きる。	1	何も言わず、ただ、うなずいて欲しいと思うけれど、自分で消化することかなとも思う。(無理なことかもしれないと思う。) ピア・カウンセリングがいるのかなとも考えます。	1	DIで生まれたことを知ることによって生まれる痛みや怒りの感情をまずは受け止めてもらうことが必要です。一般の方ならまだしも、専門職にある方には、それを否定し、当事者を二重に傷つけるようなことはしてほしくありません。
7)	「結婚を考えていない人」は、DI者のことを理解してくれません。	5	DI者の苦悩や不安・憤りを理解するのに、結婚を考えているかいないかは関係ない。	3	そうとも限らないようです。(知る限りで)	3	2)で答えたように、結婚や出産について考えていなくても、何か他の経験などから推測して共感してもらうことは可能だと思います。
8)	「子ども望んでいない人」は、DI者のことを理解してくれません。	5	自分が子どもを望むか望まないかと、DIの子どものことを理解しようとすることは別である。	3	子どもとして、生まれた立場として、考えてくれる人もいます。	3	上と同様です。
9)	AIDのことを話すと、「聞かなかったことにする」という態度をとる人がおり、悲しくなります。	3	聞かなかったことにするという態度をとった人には遭遇したことがないのでも私には分からない。が、そう言う人がいたら問題だ。個人と個人の会話として、侮辱している。	1	よくいます。	2	相手にそのことに対する知識が全くないことが原因であり、それならば自分が話してこの問題を伝えていくことも必要なかもしれないと思うことがあります。
10)	AIDの話を2度すると、「その話はもういいよ」と聞いてくれない人がおり、諦めを感じます。	3	そういう態度を取った人はまだいないため、わからない。	1	います。います。	2	上と同様、それでも相手に話すことで問題を広めていくことが必要かと思っています。

NO	質問項目	回答者A		回答者B		回答者C	
		選択肢	その理由	選択肢	その理由	選択肢	その理由
11)	AIDは、「親子＝同居」という考え方に納得できない、深い怒りの原因になりました。	5	別にDIだからと言って、親子が同居してもいいと思うし、別居してもよいと思う。	2	一緒に居ることが、あまり安らかな気持ちにならない。	3	
12)	父が「妻とせめてつながっていれば良い」というのは、口先だけじゃないのかと思います。	3	分かりません。多くの不妊カップルの男性がそのように考えているようだが、実際にAIDの現場には出てこない人を見ると、どこまで本気でAIDをやりたいのか理解しきれぬ場合もある。反面、自分の子どもとして育てよい関係を築いている人もいられると思われ、父親のAIDへの積極性や選択理由は一様ではないだろう。よって「妻とせめてつながって」という言葉が、口先だけで本当はAIDに納得していない男性もいるだろうし、本気でそう発言している人もいられるだろう。ケースによるのではないか。	2	同意して、生まれても育てられなかったから。	1	養子のように、夫婦がともに子どもと血縁関係がないという状態とは違い、片方だけがつながっていることでの対等でない関係が、むしろその後の家族関係に影響を与えると思うからです。
13)	AIDのことを知ったとき、「血がつながってなくて良かった」と思いました。	5	血が繋がってなくて面倒だな、と思いました。親にあまり不満などなかったのです。	1	父とうまくいってなかった、愛されていないと思っていたので、逆に納得しました。	2	父の病気が自分には遺伝していないことが確認できたので。
14)	両親は、私がAIDで産まれたという事実を隠して「ウソ」で生きてこられたのです。	2	家庭の生活が全てウソの上に成り立っていたとは言いきれない。しかし、意図的に事実を隠しウソ偽りの情報の上に成り立っていた部分は少なからずある。	1	「提供者が誰であろうと、私(母)だけの子・・・」と言って、32年間言わず、忘れるほどだったと話していたから。	1	
15)	AIDを了承した父親が、本当に望んでいたのかを聞いてみたい。	5	特に聞きたいとは思いません。望んでいたがどうかは別としてちゃんと育てているので動機はあまり気にしていません。	2	そこまで強い思いは、今はないです。確認した方が、よいのかもしれないけど。	1	
16)	AIDは、夫婦の関係が壊れていくきっかけを作ったと感じています。	3	AIDが両親の関心に影響を及ぼしたかどうかは、わからない。特に問題がないように見えるが、何らかの影響があるのかも知れない。が、それは分からない。	1	10年仲むつまじく暮らしてきた夫婦が、子どもが生まれてうまくいかなかったの。(母からの話により、そう思った。)	2	それがすべてだとは思いますが、要素として大きな一つではあったと思います。
17)	母親は、真実を告げなかった理由を「子どもが知ったら可哀想」と言っていますが、同意できません。	1	全く同意できない。母親に何が分かるか？幼少時に子どもは母親に内在されているかも知れないが、子どもはいずれ母親とは別人格である。一般的には母親が死んだあとも子どもは生きるし、AIDの事実は何歳になろうと消えるものではない。子どもの一生の問題を母親の一時の感情で判断し、あまつさえ勝手に代弁するなどあり得ないことだ。		言ってません。が、そうだとしたら、言うべきであると思う。	1	真実を知ってかわいそうなのは、子どもではなく自分達であったのだと思うからです。
18)	「私」をほしかつたのではなく、夫婦関係を保つためにAIDを選択したと言われて、ショックでした。	3	そう言われたことはないの、わからない。		言われていません。	1	
19)	私の子どもに「あなたとお爺ちゃんとは血がつながっていないのよ」と話せるまでに、ずいぶん時間がかかりました。	3	自分にまだ子どもがないので、わからない。ただし、子どもにも、周囲や親戚同様、比較的簡単に告知できるだろうと思う。		すぐ話しました。大切なことなので、かくすことなく話すべきだと思ってます。時期は見るべきかもしれません。親子・夫婦がしっかりしていれば、話せると思う。		

NO	質 問 項 目	回答者A		回答者B		回答者C	
		選択肢	その理由	選択肢	その理由	選択肢	その理由
20)	私は、生物学上の父がわかるまで、結婚できないと思っています。	4	そんなこと言っていたら一生結婚できません。AIDを選択した親や、治療した医師のために自分の結婚まで制限されたくない。		既に結婚していました。	3	提供者がわかるかどうかより、AIDの事実を自分のなかでどこまで受け止められるか（その過程に提供者が見つかることも含まれると思いますが）が重要だと思います。
21)	A I Dのことを知ってから私は、家族に気を遣いすぎて、自分を失くしていました。	2	気を遣っていた部分はある。特に父親に対しては、どう話しかけてよいか分からなかった。ただ、自失というほどの体験はない。	2	A I Dが関係するかどうか・・・するのかな。自分の存在に自信が持てなくて、人のために自分を抑えすぎて疲れることは多いです。	2	
22)	夫は、私の出生の話を真剣に聴いてくれませんが、あきらめています。	3	妻は、と読み替えればよいでしょうが、結婚していないので、わかりません。いずれにしても、真剣に聞いてくれることが重要であって、事実は事実なのであきらめられるならそれで構わないと思います。	2	よくわからないなりに、聞くようになったと思う。他人事と思っている部分もある。		
23)	私は「ウソ」を感じながら「親子」のそぶりはできないと感じています。	1	ウソを感じながら親子のふりをするのは難しいと思う。少なくとも、ウソの上に毎日生活し続けるのは無理だと思う。	3	親子のそぶり・・・しました。今さら、苦しい思いです。	1	
24)	いろいろと考えたことを聞いてもらうと、気持ち良くなる場合があります。	1	一般的にも、人に傾聴してもらおうと気持ち良くなる人が多いですが、これはDIでも同様です。	1		1	
25)	自分を否定したくなることがあり、そこで足踏みしていることが歯がゆいのです。	5	DIに関して、自分を否定しようとは思いません。	2	歯がゆいとは、あまり感じなくなりました。それも必要な時間なのだと考えるようになりました。	1	
26)	「親子のつながり」という言葉に「ビクッ」としてしまうくらい、いつも敏感になっています。	1	「親子のつながり」と言う言葉に恐れや反発はありません。が、メディアの報道や、周囲の意見には聞き耳を立てていますのでニュースの中や、誰かが喋っているのを聞くと、聞き逃さないようにしています。	1	「親子」の話題が、TVや日常で、のぼらない日はないくらい、良く交わされることなので、だんだん慣れて合わせたりもしますが、パワーのあるときはついつい反論したくなり、やっかいです。	2	
27)	A I Dで生まれたことを知ってから、自分のことがわからなくなることがあります。	2	いつもは特に気にしていませんが、時々、重要な判断をしなければならない局面で自分がどこまで自分のことを把握しているのか、分からないことはあります。	2	前ほどではないけれど、コントロールできるようになったけど、自分は何者なのか、わからないと思う。	2	
28)	誰かを愛することができたら楽なのに、誰も愛せないのです。	5	そんなことはありません。	1	愛しいと思う気持ちが、湧かなくて、自分は冷たい人間だとがっかりするか、仕方ないとわりきってもいる。	2	人を信用できなくなったとは思っています。
29)	私のドナーが、突然、目の前に現れたらと想像すると、眠れなくなることがあります。	5	そんなことはありません。ドナーが急に現れたら、それはそれで嬉しいですが。	1	ドナーを知ることができない、できる・・・どちらも心が揺れる。眠れなくなる・・・というか、それ以外のことが考えられなくなったりすることはある。	3	



## 参照データ⑥ コードレイの声

### Q 1. 真実を知る経緯とその時の想い、そして現在の心境

A 1. 37歳のときに、弟が亡くなりました。父は、その1年前に亡くなっていたので、母がすごく悲しんでいるときでした。その2人が何かの感染によって亡くなったので、自分も感染で亡くなるのではないかと疑念を抱きました。母は、私が心配しているのを見て心配し、彼女もストレスを感じていたそうです。父は糖尿病があり、糖尿病は遺伝する要素が強いので、それについても心配でした。でも、本当は、10代の頃に、自分の父が生物学的な父親ではないということに気づいていました。

### Q 2. 「血のつながり」や「家」について、どのように考えるのか

A 2. 12歳ぐらいから19歳ぐらいの間に、そのような確かなものを持ちました。母が、不倫をしていたのではないかと疑い始めました。父がどうも違う、そして、3人の子どももどうも違うから、3人ぐらい不倫したのではないかと疑っていました。不倫した母から生まれたということは、恥ずかしいことだと思っていました。だから、疑っていたし恥ずかしいと思っていたから、陸軍に入隊して家族から距離をおこうとしました。10代の後半以降37歳までは、その疑いというのを隠して、抑圧して、学校の勉強、建築科の学校に通っていたのですけれども、建築のことに集中しました。

A 3. 最初は、医者のところへ直接聞きに行くというのは、母の意志を尊重するために、何もなかったのです。その母が数年後に脳溢血になって、意識があまりはっきりしなくなったりして、私は、そのような状態に母がなったし、自分が訪ねていくのは自分の自由ではないかと思うようになった。それで、医者に電話をして、受付の事務の人に聞けば教えてくれるものだと思っていました、ドナーが誰かを聞いて、断られるなどと、思いもしませんでした。

### Q 3. 「遺伝情報」は誰のもので、どのように取り扱われるべきか。また、「養子」と「AID」との類似点と相違点をどのように考えるのか

A 4. 妊娠・出産を経験できるということが、母とすれば、DIを選択する大きな理由になったのではないのでしょうか。母自身が、DIであることが養子縁組のような特別なことでなくて、妊娠して出産するという経験することそのもので、彼女が事実を無視できる。DIで生まれるという事実が、特別なことではないと思ひ込むことができたということなのです。出産するということは、普通のことです。

A 5. 4年間の養子縁組を試みた間に、私の父は女の子がほしくて、1人養子縁組ができそうになったが、その子が自分たちの子どもとして養子縁組できなかった。そのことが本当にショックを受けたというのもあったし。DIということ、私の父はマッチョな人で、精神的に男性性が強いというか、そのようなことを信じている人で。自分の精子で妊娠できないということに関して、すごくネガティブな思いを持っていました。だから、DIに同意するということは、母は妊娠できると喜んだけれども、父にとってはすごく難し



い決断で、大変だった。だから、秘密を守るということも、すごく大事だったのです、父にとっては。DI で私が生まれたということを、まわりに知られないことが。私の父にとっては、誰かの子どもというか DI で生まれる子どもを持つより、遺伝子的に自分の子どもであれば、いろいろ似たようなことが見えますよね、子どもと顔が似ているとか、そのようなことをすごく楽しみにしていただろうに、そのようなことを経験できないということは、すごく悲しいと感じていました。 長く秘密を守り続けなければいけなかったことや、自分の子どもができないというストレスが、私の父の体の健康自体にもすごく影響を与えていたと思います。自分の子どもに嘘をつき続けるということは、すごく不健康なことだから、やはりもっとオープンにするべきだと思います。

**Q 4. 「親」への期待、「親」の今の心境を想像できるとしたら、また自分の子どもや配偶者への真実告知はどのようにしたのか**

A 6. 私の母が、私の弟に彼らが DI で生まれたということを話すのをすごく嫌がっていたのです。だから、それはすごく大変なことだったけれども。私が妻と子どもに話すことについては、何も問題はありませんでした。ただ話をしただけで、別に。私の両親に対して、妻も子どももそれほど親密性がないというか、それほど近い関係ではなかったから、それほど取り乱すことはありませんでした。

妻は、すごく怒っていた。なぜかという、私の両親が私たちが結婚するときにやはり知らせるべきだったと。結婚して、長くまた日にちがあったわけだし。特に、DI で生まれた家族に特徴的なのは、孫、DI で生まれた人の子どもがおばあちゃんやおじいちゃん、つまり DI で生まれた人の両親と疎遠になるという傾向が強いと思う。

**Q 5. 当事者としてどのような支援を望むのか**

A 7. 私は支援がないということ。全部の家庭を自分で探したり、名簿をしたり調べたりしなければいけないこと。父が誰かを教えてくれたら、このようなことをしなくてよかったし、自分をこのような状況に陥れた、追い込んだことに対して、すごく怒りを感じています。

プライベートなネットワークなのですけれども、DI で生まれた人たちのネットワークがあって、何人もの知り合いはいます。いろいろな人がサポートしてくれているのですけれども。自分たちが探すだけではなくて、逆に精子提供者のほうも、自分の子どもがどこにいるかということを知りたいと思って探している人もいて。そのような人たちがすごく共感してくれて、サポートしてくれたりしています。

**Q 6. 同じような境遇の人たちと会って感じること、印象に残っていること**

A 8. ソーシャルワーカーでも、どこかの機関があって、特定の機関というか個人、さまざまなソーシャルワーカーが、これはとても倫理的ではないと思う人たちがサポートしてくれたり、医療社会学を勉強している人たちや、生命倫理学を勉強している人たちも、理にかなっていないということで支援してくれています。政策立案者とか法律などを作る人たちの中にも共感してくれる人はいるのだけれども、でも、十分な理解は得ていな

い。いくつかの病院でも、今そのような試みは始まっていて。DI で生まれた子どもたちにも普通に教えるということが、アメリカでも始まっているのだけれども。母がそれに同意するかということもあるし。だったら、出生証明書に父の名前を書いてくれるのが一番簡単な方法だと思います。

A 9. 母が、子どもが誰が父か、精子提供者かということを知るということに同意しなければ、そのようなクリニックにも行かないだろうし。結局、子どもは知る権利を守られないということになるわけだから。

一番大事なのは、養育してくれている親、養育者からのサポートです。出自を知る権利を理解してくれて、サポートしてくれるというのが一番大事なのだけれども。最近始まった試みとしては、ドナー兄弟登録というものがあって。親が、いつどのクリニックで、ドナーナンバー何番の人から精子提供を受けたかということがわかれば、同じドナーから生まれた兄弟を会わせるというような試みが始められています。

A 10. イングランドとオーストラリア、コロラド州でウェブサイトが開かれている。このような試みが、DI で生まれた子どもたちとか、大人になった人たちとか、ドナー自身も、どこのクリニックに精子を提供したかとか。クリニックの場所とか時間、いつというのを登録することによって、結構マッチができるようになるのではないかな。それによって、クリニックがいくら隠そうとしても、結局結果としてわかってしまう。悪いいい方をすれば、ばれるというか、出自告知がなされるというメカニズムを作ってしまうと、きっと、もっともっとオープンになるきっかけになるのではないのでしょうか。

#### Q 7. 支援の枠組みは「カウンセリング」で十分だと考えるのか

A 11. カウンセラーとかソーシャルワーカーのために、グループで議論することは、すごく有益だと思うので。知る権利があるということを強い意志を持って支援するようなこととか。先ほども言っていましたけれども、養育者として暮らす親のサポートがすごく大事だから。親への支援というような。子どもを育てる親の方への支援。ケン・ダニエルさんという人で、27 年ぐらい DI について研究している人です。ニュージーランドのカンタベリー大学というところの教授で、一番適切な方だろう。ソーシャルワークの先生です。一番影響力をもっていて、オープンすることに関して、一番サポートしてくれている人で、世界的にも有名な DI に関して何でも知っている人、オーストラリアとかニュージーランドとかイギリスの法律を変えたりすることについて、すごく多大な貢献をしている。オープンであることをすごく信じているというか、その点をすごく強調していらっしやいます。

A 12. 私は、親が真実を告知するときのお手伝いをしている。そういう意味で、ピア・カウンセリング、サポートのようなことをしています。

参照データ⑦ DI 者の秘密開示と情報入手に関する意識調査のコメント

設問	自由記述から抽出した形態素						形態素の再ストーリー化
DIで生まれた子どもたちはその事実を知らされるべきですか？	子ども	真実	話さなくて良い	わけがない	絶対に	知らされるべき	子どもに真実を話さなくて良い訳がない。絶対に知らせるべきだ。
	誰もが	遺伝上の両親	真実	知るべき			誰もが、遺伝上の両親についての真実を知るべきだ。
	子ども	大きくなる	十分理解できる	両親が	感じたら	話す	子どもが大きくなって、十分に理解できるようになったと両親が感じたら、話すべきだ。
	秘密がないこと	利点	どんなリスクより	勝る			秘密がないことの利点は、どんなリスクよりも勝る。

設問	自由記述から抽出した形態素						形態素の再ストーリー化
真実を知らなければ良かったと思いましたが？	一度も	ない	どんなことであれ	真実を知ること	一番良いこと		一度もない。どんなことであれ、真実を知ることには一番良いことだ。
	たいていの仲間	そう	思っている				たいていの仲間がそう思っている。
	真実を知る前	とても	単純なもの	単純な生活			真実を知る前は、とても単純なもの・単純な生活だった。
	何か知らされていないこと	常に	思っていた	ほっとした			何か知らされていないことがあると常に思っていたので、ほっとした。
	自分が持っていた	多くの疑問	たくさんの	混乱	確かめられた	解決した	自分が持っていた多くの疑問・たくさんの混乱が確かめられ、解決した。
	真実により	解放された	でも	真実が	本当のこと	でなければ良い	真実により解放された。でも、真実が本当のことではなければ良いと思う。
	真実	現実を知ること	役立つ	理解できなかった	人生の多くのことを	説明してくれた	真実は現実を知ることには役立った。理解できなかった人生の多くのことを説明してくれた。
	自分自身の	出自	病歴	健康	兄弟姉妹との違い	知った	自分自身の出自・病歴・健康・兄弟姉妹との違いを知った。
	父親のこと	わからないだけで	十分	苦しい			父親のことがわからないだけで、十分苦しい。
	父の遺伝病	受け継いでいない	子どもを持つこと	心配しないですむ	安心した		父の遺伝病を受け継いでいないことがわかり、子どもを持つことを心配しないですみ、安心した。
	知る前は	父の行動	戸惑うこともあった	父親の問題	より深く理解できた	後悔はない	知る前は父の行動に戸惑うこともあった。しかし、父親の問題をより深く理解できたので、後悔はない。
	事実により	親子の関係	強まった	私の権利を尊重	信じてくれる		事実により親子の関係が強まった。私の権利を尊重し、信じてくれるようになった。
	両親	心から望まれて	生まれてきたと考えると	自分は	特別な存在		両親に心から望まれて生まれてきたと考えると、自分は特別な存在だ。
	全ての子ども	遺伝的なつながりがある	両親のもと	安定した関係を持ち	安定した関係の中で	育てられる権利がある	全ての子どもが遺伝的なつながりのある両親のもと、安定した関係を持ち、安定した関係の中で、育てられる権利がある。
	今でも	自分の誕生に関する状況	ドナーの情報	真実	探している	入手する方法がない	今でも自分の誕生に関する状況・ドナーの情報・真実を探しているが、入手する方法がない。

設問	自由記述から抽出した形態素						形態素の再ストーリー化
秘密を打ち明けられることは有害だと思いますか？	有害なのは	秘密					有害なのは秘密だ。
	大人になって	自分	人を信じない人間	気づいた	人間関係	影響している	大人になって自分が、人を信じない人間だと気づいた。このことは人間関係に影響している。
	母	長期の嘘	不信感	高めた	真実	安堵	母は長期の嘘をつき、私の不信感を高めた。真実を知り安堵した。
	理解できる年齢	越えても	母	嘘をつこうとした			理解できる年齢を超えても、母は嘘をつこうとした。
	母との関係	変わった	母	私のことよりも	自分のこと	心配していた	母との関係が変わった。母は私のことよりも自分のことを心配していた。
	その他多くのこと	不誠実	わかった	悲しいこと			その他多くのこと・不誠実さがわかったが、悲しいことだ。
	真実	家族	力関係	父の態度	明らかにした		真実は家族の中での力関係・父の態度を明らかにした。
	驚くほど	開放的	父の承認や愛情	得ようとする	努力を	やめた	驚くほど開放的になり、父の承認や愛情を得ようとする努力をやめた。
	真実	衝撃的	偶然に知った				真実は衝撃的で、偶然に知った。
	時に	悲しみ	空っぽな気持ちに	完全に	圧倒される		時に悲しみ、空っぽな気持ちに完全に圧倒されることがある。
	真実	知らなければ	病気の心配を	し続けていた	感謝する		真実を知らなければ、病気の心配をし続けていたので、感謝する。
	真実	伝えること	絶対に必要なこと				真実を伝えることは、絶対に必要なこと。
	真実を知ったとき	父の死後だった	父と話し合う	チャンスを奪われた	気楽に話してくれたら	親密になれたのに	真実を知ったとき、父の死後だったので、父と話し合うチャンスを奪われた。気楽に話してくれたら、親密になれたのになと思う。
	父親のこと	決して	知ることがないのだ	悲しく思う時	有害だと	思う	父親のことを決して知ることがないのだと悲しく思うとき、有害だと思う。
	子どもを持つために	最良の方法を取った	両親に	一層感謝する	愛されて	望まれていた	子どもを持つために最良の方法を取ったのだと、両親に一層感謝する。愛されて望まれていたと実感する。

設問	自由記述から抽出した形態素						形態素の再ストーリー化
真実を打ち明けられる前、秘密があなたに影響を与えましたか？	秘密	人生に付きまとう	大きな影響				秘密は、人生に付きまとう大きな影響を及ぼす。
	自分	思っていたような	自分ではない	発見した			自分が思っていたような自分でないことを発見した。
	自分が	悩んでいたことを	両親は	わかっていた			自分が悩んでいたことを、両親はわかっていた。
	私	自尊心のない	非常に	不安定な	子ども		私は自尊心のない非常に不安定な子どもだった。
	アイデンティティ	問題	抱えていた	何かがかけている	感じていた		アイデンティティの問題を抱え、何かが欠けていると感じていた。
	性格の問題	父親から	拒絶	愛されない	父親を	遠い存在	性格の問題で、父親から拒絶され愛されていないと思い、父親を遠い存在に感じていた。
	しつけ	ひどいもの	父親を	喜ばせようとして	失敗した		しつけはひどいものだった。父親を喜ばせようとして失敗した。
	失敗する恐怖感	苛まれる					失敗する恐怖感に苛まれていた。

設問	自由記述から抽出した形態素						形態素の再ストーリー化
ドナーと連絡を取りたいですか？	52年も	経っていなければ	取りたいと答えただろう	時すでに遅し	そのままにしておく		52年も経っていなければ取りたいと答えただろう。時すでに遅しだ。そのままにしておく。
	会いたい	かなわないこと	夢	わかっている	もういい		会いたい。でも、かなわない夢だとわかっているので、もういい。
	連絡してみたい	完全になれる	気がする				連絡してみたい。そうすれば完全になれる気がする。
	メディア	利用	ドナー	身元を知りたい	訴えた		メディアを利用して、ドナーの身元を知りたいと訴えた。
	ドナー	全ての記録	破棄されていた	口惜しい			ドナーのすべての記録が破棄されていた。口惜しい。
	拒絶される恐怖	ドナー	探す	怖い			拒絶される恐怖で、ドナーを探すのが怖い。
	すでに	話した	ドナーが誰か	知った	だけで	満足	すでに話した。ドナーが誰かを知っただけで満足だ。
	ドナー	前向きな	姿勢	連絡を望んでいるのなら	連絡してみたい		ドナーが前向きな姿勢で、連絡を望んでいるのなら連絡してみたい。



## 参照データ⑧ WAIMH のワークショップでの DI 者の発言

### 【当事者 1】

DI が正当な医療分野と呼べるとしても、その専門分野では長期にわたりどのような結果がもたらされるのかに関する調査は行われていません。倫理的基準も存在しません。公的規制も政府による規制ありません。特に記録保管に関しては、徹底的に秘密が貫かれています。最悪なのは、この専門分野は、彼らが作り出した何十万人もの人々の運命に対して冷淡で無関心な態度を示していることです。DI を実施する医師たちは生殖だけが専門なので、DI で家族を築いた人々についての社会学的心理学的な側面に着目していません。秘密主義を医師たちが取り入れた理由は、DI を利用した夫婦が感じるだろう「恥辱」という不名誉を夫婦が受けないようにするためです。

世間から DI を秘密にしておく厚い壁は徐々に破壊されつつあります。

DI 実施の医師たちは私たちのことを少数派で特殊な集団とみなし、DI で生まれた大多数の人々の代表ではないと言っています。それでも私たちは声をあげます。DI を実施する医師たちは DI で生まれた「普通の」成人の声を披露できずにいます。何故なら DI で生まれた「普通の」成人が誰でもどこにいるのか知らないからです。

1999 年、私は DI で生まれた成人を対象にした調査を開始し、彼らの出生に対する受け止め方・秘密や情報公開・遺伝上の父親に関する情報の入手法に関する意見を訊きました。現在、7 カ国から 18 歳～59 歳までの DI で生まれた成人 105 人が調査に参加しています。参加者の感じ方は、DI の医師や両親たちの予想とは明らかに異なったものです。

DI 実施の医師たちは、両親が DI のことを秘密にし続ければ、子どもたちは何も怪しむことはないだろうと考えています。私の調査によれば、50%近い回答者が秘密にされていることがあると察しています。それもかなり年少の頃からそう感じていることが多いのです。41%の回答者が自分は父親と遺伝的なつながりがないのではないかと疑っていました。

DI 実施の医師たちは DI を受けるカップルに DI で生まれた子どもは他の子どもたちと何ら変わらない子どもに育ちますよと言っています。家族関係は正常なものになるだろうと言います。私たちの調査によれば、父親と仲が良いと答えたのは僅か 4 分の 1 だけで、57%の回答者が、秘密のせいで父親とはよそよそしい関係だったと答えています。DI を受けた夫婦の 57%が秘密によるストレスを抱えていたと答え、56%の夫婦が最終的に離婚しています。

DI のことを秘密にしておくことは、長年にわたり非常に難しいことが分かりました。69%の親たちが子どもたちに話す前に誰かに DI のことを話しています。しかし最も注目に値するのは、回答者の 97%が DI で生まれた子どもに真実を話すべきだと考えていることです。78%ができるだけ早い時期に話すべきだと感じています。中には幼少期に伝えられる人もいましたが、真実を明かされた時の平均年齢は 21 歳でした。70%以上の回答者が、もっと早くに真実を聞いたかったと答えています。

DI 実施の医師たちは、真実の公開は苦悩や憤りを生み出すので適切ではないと考えています。

しかし 76%の回答者が、秘密の開示は有益である、もしくはほぼ有益であると答えています。また 77%が出自について知ったことを残念だとは全く思わないと回答しています。

DI 実施の医師たちは伝統的にドナーの医療記録を親たちに公開してきませんでした。しかしこの点も徐々に変わり始めています。回答者の 100%が、自分たちには遺伝上の父の病歴を知る権利があり、病歴はドナーの精子提供時の記録だけではなく、後年、提供者が年を取ってから更新されるべきだと考えています。DI に関して最も物議を醸す問題は、DI で生まれた子どもの遺伝学上の父親の身元に関することです。DI 実施の医師たちは精子提供者のプライバシーは侵すことができないものだと主張します。DI で生まれた成人の 82%が遺伝学上の父親の身元を知る権利があると回答しています。79%がドナーと連絡を取り会いたいと言っています。また片方の親が違う兄弟姉妹と会う権利や、同じドナーのもとで生まれてきた他の DI の人たちにも会う権利を望んでいます。こうしたことは私たちが相続したもの、アイデンティティの一部なのです。

こうした話は単なるデータに人間的な表情を与えます。私たちの心からの正直な訴えに耳を傾けてください。私たちの物語は悲しみ、怒り、悲痛にあふれていますが、変化に向かった前向きな希望にも満ち溢れています。そして私たちの尊厳や生まれながらの権利を社会は尊重してほしいという願いを心から証明する物語でもあるのです。

## 【当事者 2】

私は DI で生まれた 34 才男性です。29 才、医学生の際に偶然遺伝検査によって自分が DI offspring だと知りました。HLA、ヒト白血球抗原が父親とマッチせず、遺伝的關係がないことが判明したのです。私は母に自分の生まれについて聞きました。母は嫌々ながら、両親は父親の無精子症による不妊で、東京の慶應義塾大学を受診し匿名の精子提供を受けて生まれた、と答えました。慶應大学は日本で最も多くの DI 症例を扱っています。母の告白は私に不安と憤りを覚えました。私は 29 年間も両親に騙され、そして父親を失ったのです。

日本では donor insemination は AID と呼ばれ 1949 年に初めて行われた。DI は海外と同様に不妊カップルの間で幅広く受け入れられ、60 年の間に 10,000 人以上が生まれている。Donor conception はいくつかの倫理的問題を持っている。ドナーは匿名で医療記録は秘匿されている。さらに両親、産科医、ドナーの全てが donor conception を隠そうとしてきた。このため、DI offspring は社会的に無視され、メンタルケアを受けることができなかった。

多くの DI offspring は事実を知りたがっている。日本の DI offspring group は 10 人弱のメンバーである。ほとんどの DI offspring が事実を知らないと思われる。2002 年には、我が国でも厚生科学審議会生殖補助医療部会で個人が特定できるレベルまでの出自を認める権利を認めるよう答申が出されようやく国レベルから個人情報の匿名を前提とした donor conception を改めるような動きは出てきている。しかしながら、現実には社会や国会での理解が低く政府を頼るよりは私たち自身が子供のケアの仕組みを作っていかなければいけないのが現実となっている。長く事実を隠そうとすればするほど、子供はより傷ついていく。匿名のドナーから生まれた子どもをどのようにケアすればよいだろうか。情報を共有し、より信頼できる親子関係の構築を行うべ

き時に来ている。

### 【当事者3】

私がDIで生まれたことを知ったのは、10年前32歳の時でした。ずっと別居していた父と母が離婚する際に、母から告知されました。その当時、私は既に結婚しており、3人の子どもの親でした。戸籍上の父が生物学上の父ではないことに驚きましたが、聞いてすぐはショックを受けたりはせず、今までの父親との関係の悪さを納得しました。

ところが3年後母を亡くしてから自分の存在に不安を感じたり、出自を隠されていたことの怒りを感じるようになりました。嵐の海の中に投げ出されたような感じで、何が不安なのかよくわからないけれど不安に飲み込まれるような辛さがあり、毎日眠れず体調も悪くて、今までの自分はどこにいったのだろうと思いました。

自分が生まれてきてよかったのか、子どもを生んでしまってよかったのか。一体自分はどこからきたのか、それが気になりだすと他のことは何も考えられなくなりました。うまく眠れず、不安でいっぱい、母親を演じる裏で疲れ果てていました。

不眠に肩こり、頭痛、食欲不振、過敏性腸症候群、めまい、憂鬱感、不安感……。

いろいろな病院を巡り、ようやくたどり着いた心療内科で「仮面鬱」と言われました。

10年たった今では、自分の気持もずいぶん整理されました。当時に比べれば、穏やかな気持ちで生活するようになりました。

今の私にたどり着くのに、当事者との出会いは大きいものでした。「もっと早くに告知して欲しかった」「提供者を知りたい」という共通の思いを抱いていることを知って安心できました。

DIは、DIで生まれたことを子どもに言わないことでうまくいっていると言われてきました。しかし、本当にそうでしょうか。言わないことで、親子関係を不審に思うケースもあります。私自身うまくいっていない父との関係の中で（どうして父は私が可愛くないのだろう。）と思ってきました。父にも母にも似ていない外見に自信が持てずにいました。私の場合は両親が高齢だったのと、未婚の叔母がそばに住んでいたことで、（もしかしたら未婚の叔母の産んだ子を両親がもらったのかもしれない。）と考えたこともありました。

DIで生まれたことを隠すべきではなく、もっと早くに知りたかったと思っています。大人になって、結婚も出産も終えてしまっただけからの告知は遅すぎました。自分の土台となるルーツが嘘であったことで、その上に積み重ねた自分が崩れてしまったような感覚でした。自分を再構築しなければいけなくなりました。

DIという医療を続けるとしたら、3つの点を考えてほしいと思います。

まずは、親からの積極的な告知です。血の繋がりがなくても親子であると思えるからこそ選んだDIだと思います。例え提供者がわからないとしても、親子の間に嘘がないという始まりであってほしいと願います。親は自分の出自に関して嘘は言わないという前提の元に、子どもはいます。それを裏切らないでほしいと思います。

次に出自を知る権利を認めるルールを作してほしいと思います。日本では2003年に提出され

た生殖補助医療部会の最終報告書に「生まれた子どもの『出自を知る権利』を認め、15歳以上になった子どもが希望すれば個人が特定できる範囲まで認める」と報告されています。しかし、この報告書は未だ法案化されていません。どの子どもにも出自を知る権利があるということを知っていただき、法案化されることを望みます。

そして、そういった中で不妊カップルと提供者と生まれた人、それぞれを支えるしくみを整えることです。夫婦にとっては積極的な告知を支えるためだけでなく、いろいろな悩みを相談ができる場所があるでしょう。提供者には提供する前、そして提供後もカウンセリングなり相談できる場所があるでしょう。生まれた人にとっても、親以外の相談できる場所が欲しくなる時もあるかと思います。自助グループも要ると思いますが、出自を知る権利が認められれば、公的な相談窓口が必要になるのではないかと考えています。

いずれにしても、今までの日本の状況で、この医療を続けていくことは最善の方法とは思えません。生殖技術は産婦人科の領域かもしれませんが、実は当事者は生まれた赤ちゃんでもあるということを忘れないでいてほしいのです。

## 参照データ⑨ 専門職の概況と応答

### 【インタビュー対象者の自己紹介】

- A：私が経験してきた、他の援助体験がこの課題につながれば、という思いで出席した。
- B：昭和53年に医学部卒業。慶応大生はバイト感覚で精子を提供していたと聞いたことがある。AIDの出産に立ち会った友達がいる。お父さんとのつき合いもあったという。出自を求める子どもの想いもわかる。「貴重児」と保健師のマニュアルに書いているが、一般的ではない。待ち望んできた子どもであるのに、親の意識が伴わないと感じる。
- C：兄相に、平成9年まで勤務していた。里親担当20年間。成人した子どもたちが私のところに自分たちの経緯を知りたいと相談に来たことがある。また、真実告知等に関して、数は少ないが、養子本人へのインタビューを行ったことがある。
- D：兄相に長くいた。当時、里親担当というスペシャリスト・ワーカーとして養子・里親とも長年関わってきた。その当時担当した養子がすでに結婚し子どもを出来ている。縁組終了後、年賀状のやりとり等で関わってきた者もいる。今ならその子たちに真実告知をどのように受け止めたのかを聞くこともでき、仕事の検証にもつながり、後輩たちにも残すことができると考え、数人の子どもと逢って来た。子どもと親の気持ち異なる場合もある。
- E：不妊の認定看護師の研修を担当。養子縁組、AIDを含めて、当事者の選択肢を広げていくことを研修のカリキュラムに盛り込んでいる。

### 【質疑・意見交換】

- ・AIDであるという事実を知るきっかけとなるのは、本人が「病気ー遺伝病ー」のことを心配している様子を見て、母が話さずにはおられなかった場合や、不意に伝わってしまうことがある。
- ・AIDの実施に際しても、最近は血液型も合わせて行われており、AIDで生まれた子どもたち1万人のうち、自分がAIDであることについて知っているのは数%ぐらいしかいないのではないだろうか。
- ・AIDの場合、母とは血が繋がっているし、お腹が大きくなっている。しかし、父との血のつながりがない。この点が養子縁組との違いとして大きく、家族の中での複雑な問題があるのではないか。
- ・相談の場面では、来談者と相談者の性差によって相談内容の深まりが異なるのではないか。
- ・AIDの当事者が女性であれば、母への想い・共感がたくさん出るのが自然である。その要因として、精子提供による出産の場合、男性と女性とで、背景が平等でないことがあるが、それは養子を迎える場合でも男女どちらかに不妊の原因があり、背景が



平等ではないことは同じである。

- ・精子提供者の確保の仕方、報酬の有無、精子のスクリーニング等は、おこなわれているのだろうか。
- ・不妊治療を希望する夫婦に、養子縁組の情報提供をきちんとできる生殖補助医療を担当する人は少ないのではないか。
- ・当事者に対する支援は必要だろうし、今の児相では一般的な相談は可能であろうが、もっと専門的な支援を行うためには児相と公的管理機関との役割分担や生殖補助医療全般の理解をどのように進めるのが、まず課題である。したがって、「押さえるべき情報」「つなぐための方法・ルール」を明確にしておく必要があると思う。児相は、子どものあらゆる相談に応じるという意味では、この課題への対応を求められる。しかし、職員がどれだけ理解するか、そのためにどうするかは大きな課題である。
- ・養子縁組後の支援で言えば、「告知の内容を聞く」「親からはどのように知らせたのか」という点を、できる限り具体的に聞くことから始めることになる。また、相談員としては、本人が知りたいと思うことを知らせられるように、情報を収集しておくことが大事だろう。AID で生まれた本人が成人してから突然、その事実を知った場合のショックは大きい。養子縁組の場合も小さい頃からの告知を、児相ではすすめている。小さい頃の方が、後々の困難は小さくなる。養育過程での安定感や親密さを大切にさせてきた。子どもへのサポートを中心に考えれば、後で聞かされるほど、衝撃は大きい。AID をスタートさせる前に夫婦に今後のことを話しておく必要がある。
- ・心理的なサポートの立場で考えた場合、目の前にいる人の悩み、その人が語ることが、すべてである。提供者が気になっていることの中で、言葉にされたことから、そこから付き合う。「今、ここで」の問題を明確にしていくことがカウンセラーの役割である。一緒に考え、一緒に歩んで行くしかない。どのような質問に対しても、来談者が来られれば、来談者が述べたことが「正しいか、正しくないか」を伝えるのではなく、その人の気持ちに付き合う＝寄り添うということになるだろう。「カウンセリングを受ける」という言葉の意味も拡散している。背景（なぜ会いたいのか、どういう意味があるのか）・状況・「支持する」も「指示する」もある。
- ・「何で私がこんな目に遭わないかんのか」という、来談者が皆共通に持つ一般的な思いにもつながっている。視点を変えると、「被害者と加害者」の問題や「学校に行きたい／帰りたい」という問題は、「刑を軽くしてほしい／友達に会いたい」と同じように、対になっている場合もある問題である。したがって、どのような中味であるのかを聞き分けることが重要である。「親に会いたい」という言葉の中味を明確にしていく必要がある。寄り添うとは、一緒に苦悩することでもある。その意味で背景等を知らなければ、答えることはできない。総合的に考えていくことが大事である。
- ・混乱されている状況の中では、まず専門家が受け止め、そして情報提供を。はじめのところがズレないように、相談していくことが大事である。したがって、相談員の資

質の均質化が必要である。本当の意味での「共感」とは何かを相談員に教えていかなければならない。

- ・どのような資質の専門家、どのような視点・機能が必要であるのかといえば、1つには、支援のネットワークが必要で、幅広い専門家のネットワークが必要である。その意味で児相の9時～17時の相談受付窓口では、問題への対応は非現実的ではないか。ただし、相談の方法として電話相談も必要である。
- ・「支援者」や「親」の次に、「先生」や「スクールカウンセラー」が、きちんとした知識をもっていることが必要である。地域に相談できる場、例えば市町村保健センターなども必要で、次世代法による施策の枠に入れられないだろうか。
- ・いろいろな相談窓口が想定できるが、大事なことは子どもに対して、「親が言えない理由」を説明し解説することである。その意味では、保健所のスタッフの中でも、誰でもが相談できるということでもない。父や母の選択プロセスを咀嚼することも必要である。ただ、心配なのは不妊相談センターや保健所で、まだ、不妊相談がこなせていないという現実があることである。医療機関に電話相談ができるというメリットはある。

## I、精子の提供を受けて行われる生殖補助医療への疑問

A 1： AIDの治療に関わった医者、親、精子提供者への怒りと避難の感情を出すことを肯定し傾聴する。

Q 1、医者は、AID で生まれた私のような子どもが「苦しみ」をもっているのに、なぜこの医療を行うのでしょうか。

A 1： 医師がAIDで生まれた子どもの「苦しみ」を知らないからでしょう。

A 2： 善意で解すれば、親のニーズに医師は精一杯応えようとしたのでしょう。

A 3： なぜでしょう

A 4： なるほど

A 5： あなたはそう感じる。

Q 2、親は、「子供を得る＝不妊に悩んでいる親の幸せ」であり、AIDを行うカップルは、まだ生まれていない子供のことは、何も考えていないのではないのでしょうか。

A 1： AIDで生まれる子どもに事実を告げると言うことは考えず、子育ての喜びだけを考えていたのでしょうね。

A 2： 子どもの「苦しみ」を知ってもらう必要がありますね。

A 3： 他の方法、例えば養子をもろうということも考えられたことでしょう。AIDを選択したことに、ご両親も悩んだ末にことでしょうね。

Q 3、私はこんな心配もしています。「精子の提供者」がもし、どこかの大学病院の学生だったら、精子提供をしたことを後悔しているかもしれないし、まさか自分の子どもが存在するとも思わないかもしれないし、子どもが現れたら疎ましいと思うかもしれ

ない。

A 1 : 当然の心配と思いますよ。

A 2 : そうかも知れないけれど、精子提供者は医者から説明を受けて納得の上のことなので、あなたが考えているほどの後悔や想いはないと思いますよ。

## Ⅱ、生殖補助医療実施状況や体制への疑問

A 1 : AID で生まれたことについて、ご両親、あるいは父母のどちらかに経緯を知りたいと問いかけることは困難だろうか。

A 2 : AID のことを知らなかった時、成長過程で自分の両親について満足していたか、父母関係や親子関係についてどのように感じていたか、思い出なども交えて聞かしてもらっても構わないか。

A 3 : 生んではいないけれど、育てることで親子になっている人たちを何人か知っている。

Q 1、子どもが欲しかったら何をしても良いのでしょうか。両親は、AID という医療を選択した理由や経緯、現在に至るまでの気持ちなどを、私にきちんと話すべきだと思います。

A 1 : 臓器移植と同様にコーディネーターが必要かもしれません。

A 2 : 同感です。

A 3 : 私もそう思いますよ。

A 4 : なるほど。

Q 2、私は、医者や両親など一部の人間のエゴで、勝手に作られたものだという気持ちを持っています。

A 1 : ご両親は悩んだ末、この方法をとられたのですから、勝手に作られたものという気持ちはないのではないのでしょうか。

A 2 : なるほど。

Q 3、私は、「母と精子で私ができた」と感じています。私のルーツにちゃんとした人がいるとわかれば、人間としての私でいられると思うのです。

A 1 : ルーツ探しは人間として当然のことだと思いますよ。

A 2 : 自分のルーツは、誰でも知りたいものですね。

Q 4、「ドナーをもし知ったとして、『とんでもない人』だったら苦しむよ」といわれることがあります。私のイメージする「とんでもない人」とは、①尊敬できない人、②犯罪者、③「そんなことしたっけ？」と無責任にとぼける人、④何の気持ちもなくドナーになった人、などです。こういう人たちは「善意の提供者」ではないと思います。

A 1 : 提供者には、人間を作ることに参加しているのだという強い意識をもってもらわなければならない。

A 2 : 「とんでもない人」は、ドナーにはいないのではないのでしょうか。

A 3 : ドナーについては医師を信頼して良いのではないのでしょうか。

A 4 : ああ、あなたはそう思う。

### Ⅲ、DI を選択した両親への疑問

A 1 : 隠されていたことがショックなのか、AID で生まれたことがショックなのか、両方ともがショックなのか。

A 2 : 今の混乱した気持ち、父及び母に対する不信感をはき出しながら本人が自分で方向性を見つけ出していく作業につきあいサポートする。

Q 1、私は、今 25 歳です。この年になって「真実」を知り、大きなショックを受けました。両親は、私のことを見ていて自分たちは傷つかないのでしょうか。

A 1 : 遺伝上の親よりも生活を共にしてきた親の方が、価値があるでしょう。

A 2 : 傷つかれたと思いますよ。あなたのショックをみて。

A 3 : どうだろうね。

A 4 : あなたはどう思いますか。

A 5 : あなたには、ご両親はどう見えましたか。

Q 2、私は、AID を選んだ親やそれを進めた医者に対して「怒り」を感じています。この「怒り」をどのように受け止めていけばよいのでしょうか。

A 1 : AID がこのような事態を起こすのだと言うことを世の中に知ってもらい必要がある。

A 2 : AID を選ぶ人に対して、あなたの怒りを具体的に訴えてみてはどうでしょうか。

A 3 : あなた自身が自分を受け止める一つになるのではないのでしょうか。

A 4 : 何か、できそうだと思うことはありますか。

Q 3、私の親は、①子どもが傷つかないように、②子どもが何ともしないようにと、秘密にしてきたことを「子どものため」というのですが、それは周りにも聞こえが良い言い訳だからではないのでしょうか。

A 1 : 親が AID をする前に、きちんと問題点等を認識してもらう必要がある。

A 2 : 秘密にしてきたのは、「子どものため」と思ったことが、そうではないと今、分かれたと思いますよ。

A 3 : なるほど、あなたはそう思うのですね。

Q 4、私の親は、何で子どもに隠したいようなマイナスなことをしたのでしょうか。隠したいことなら何でやったのでしょうか。私は、せめて母が自分のやったことに自信を持って堂々としていてほしいのです。

A 1 : 親が AID をする前に、きちんと問題点等を認識してもらう必要がある。

A 2 : そうですね。隠さないこと、ある時期に真実をあなたに打ち明けてほしいかとあなたは思うでしょうし、私もそう思いますよ。

A 3 : なるほど、そうも考えられますね。

Q 5、私の母は、「私」をほしかったのではなく、夫婦関係を保つために、AID を選択したと告げました。ショックでした。

A 1： 親がAID をする前に、きちんと問題点等を認識してもらう必要がある。

A 2： それはショックでしたね。

A 3： なるほど、あなたはそう感じている。

Q 6、私の父は、「せめて妻とつながっていれば」といいます。何か口先だけのことじゃないのかなと思っています。

A 1： 親がAID をする前に、きちんと問題点等を認識してもらう必要がある。

A 2： 「せめて妻とつながっていれば」というお父さんの気持ちは事実でしょうし、それは又、あなたへの愛情の印だと思いますよ。

A 3： なるほど、そうかもしれませんね。

A 4： あなたはそう思うのですね。

Q 7、私は、父の気持ちを聞いたことがありません。父がAID を了承したのか、それをちゃんと理解したのか、私のことを「我が子」と思っているのかなど、制度的な「認知」ではなく、精神的な「認知」をしているのかを聴いてみたいと思います。

A 1： 親がAID をする前に、きちんと問題点等を認識してもらう必要がある。

A 2： そうです。ちゃんと聞いてみるのが大切でしょう。

A 3： なるほど。

#### IV、DI で生まれた「私」の家族への思い

A 1： 結婚したくないし、子供は産まない方がよいと思うのは、自分の存在そのものを肯定できないからなのか。父不明のため近親婚を心配しているのか。

A 2： 知る前に結婚している人が、AID のことを知ったことから家族とどのように関わるかを一緒に考えていく。

Q 1、私は、結婚はしたくないし、子どもは絶対産まないほうが良いと思います。

A 1： 思いを受け止める必要がある。

A 2： 今のあなたの気持ちはそうでしょう。

A 3： 人は愛する人ができれば結婚し、子どもがほしいと思うものです。しばらく時間をもって、これからのことを考えてみてはどうでしょうか。

A 4： 人間の気持ちや考えは変わっていくものです。変わるから成長するのです。

Q 2、子どもは、全然知らないのに、自分がやったことじゃないのに、「つらさ」の中に入らなきゃならないし、巻き込まれているのです。このことは、すごく理不尽なことではないでしょうか。

A 1： 思いを受け止める必要がある。

A 2： その通りだと思います。

Q 3、「つらさ」に巻き込まれた子どもたちは、一番新しく直かの形で、「理不尽さ」を体験した者ということになります。子供世代とこの問題は切り離せません。



A 1 : そうでしょうね。

A 2 : もう少し『つらさ』や『理不尽さ』を具体的に聞かせてほしいのですが・・・

A 3 : そうですね。

Q 4、私は真実を知る前に結婚し、子どももいます。しかし、家族のことよりも、自分を取り戻すのが先だと思っています。今、やらなくとも結局、いつかはやることになると思います。家族とどのように関わったらよいのでしょうか。

A 1 : とことん思いを受け止めて、自分の思いを整理するように関わる必要があります。

A 2 : 「ルーツが揺らいだ」ということは、これほどまでに影響の大きいことだということを認識してもらう必要がある。

A 3 : どのようにかかわったらよいのでしょうか。

A 4 : 自分を取り戻すには、どうしたらよいのでしょうか。一緒に考えてみましょう。

## V、「私」のアイデンティティに関する思い

A 1 : AID による出生を「神に許されていない」「生まれたくなかった」という気持ちで、これまで知り合った友人との付き合い方にも整理がつかない、友達の言葉にますます違和感や距離を感じている、というそのつらさを共感し、福祉における存在有意論について一緒に考えていく。

Q 1、私は、AID のことを知ったその日から、そのことが頭から離れず、混乱しています。どのようにしたらよいのでしょうか。

A 1 : どのようにしたらよいか、一緒に考えてみましょう。

A 2 : ああ、混乱しておられるんですね。

Q 2、私は、「神に許されて生まれてきたのではない」という気持ちをもっています。

A 1 : もう少し具体的に話してほしいのですが・・・。

Q 3、私は、「親と子のつながり」「絆」「遺伝」等という言葉に反応し、「親子なのだから」「親孝行のつもりで同居したら」という理由付けに「ウソ」を感じます。考え過ぎなのでしょうか。

A 1 : 考えすぎだとは思いますが、「ウソと感じる」について、もう少し話してほしいのですが・・・。

Q 4、私の「親像」は、AID という真実を知ったことで突然、途切れてしまいました。これから先、母とどのように接していったらよいのでしょうか。

A 1 : どのように接していくのか、一緒に考えてみましょう。

A 2 : あなたは、どうすればよいと考えるのですか。

A 3 : できそうに思うことはありますか。

Q 5、私は、母に「何で産んだの?」「産まなきゃ良かったじゃないの?」と、「怒り」を一方的に出したことがあります。言い過ぎたのでしょうか。

A 1 : あなたも言い過ぎたと思っているのではありませんか。

A 2 : あなたの怒りに対してお母さんはどう対応されたのでしょうか。

A 3 : 言い過ぎたと思っているのですか。

Q 6、私は、AID のことを知らない人との間では、何か埋められない距離があり、仲良くなって AID のことを知って、それが壊れたり、引かれたりするの余計つらいと感じています。

A 1 : そうでしょうね。

A 2 : なるほど、そう感じている。

Q 7-1、私は、友達が AID のことを何も知らないのに、なぜ私のことを否定することができるのだろうかと思います。私の中で「不消化」となる、

A 1 : そうでしょうね。

A 2 : 隠されたことがあったまま、親子関係を続けてきたという点にも問題がありますね。

A 3 : なるほど。

Q 7-2、次のような発言から自由になりたいと思っています。

- (1) 暇だからそんなことを考えるのよ
- (2) 知らなかったら良かったのに
- (3) 前向きに生きなよ
- (4) まじめなのね
- (5) あなたはまだ幸せじゃない
- (6) お母さんが愛してくれたからいいじゃない
- (7) 両親そろっていても良くないこともあるから良いじゃん
- (8) もし知ったとしても「とんでもない人」だったら苦しむよ
- (9) 探しちゃいけないよ
- (10) そんなこと見なければいいじゃない

[注] (1)～(10)に関する具体的な指摘はなかった。

## VI、「より添う仕組み」に対する思い

A 1 : 日本では、AID で生まれた場合の制度面の対応（精子提供者へのルール、近親婚を避けるための戸籍面の工夫、親子へのサポート体制等）が全くなされないまま、AID による不妊治療が続いているので、早急に法整備も含めて、医療・司法・福祉・心理等の関係者の連携の中で、制度作りが必要という立場に立って、本人の今のつらさをサポートしていく。

Q 1、私は、医者や友達、その他の人が AID の話をきちんと聞いてくれないのは、その人が耐えられないからではないだろうかと感じています。

A 1 : そうかも知れません。そうでもないかも知れません。それは、AID のことを知らないからかも知れません。

Q 2、私は、戸籍上、実子として届けられていたので、私が AID であるという真実を知るまで、戸籍が本当のものだと思っていました。戸籍も福祉制度も信用できません。

A 1： 信用できないのではなく、今の制度が AID に対して何ら作用していないの  
でしょう。

A 2： なるほど、あなたはそう思うんですね。

Q 3、私は、ドナーが誰であるのかではなく、ドナーにたどり着くまでの方法＝道筋を  
教えてほしいのです。

A 1： そうでしょうね。ご両親がたどり着くまでの方法ですか。

A 2： なるほど。

Q 4、私は、一人で考えていると良い考えが浮かばないので、私と同じような経験をし  
た人を捜しています。どのようにしたらよいのでしょうか。

A 1： ピア・カウンセリングが必要である。

A 2： DI offspring Group へ連絡してみてもはどうでしょう。

Q 5、私は、私の悩みを受け止めて助けてくれる人を求めているのです。

A 1： DI offspring Group へ連絡してみてもはどうでしょう。

Q 6、私は、「どうして私を作ったの？」という理由を見つけて、自分の中で混沌とした  
ごちゃごちゃとなったものを自分で埋めていきたいのですが、そのような場がないで  
しょうか。

A 1： 思いを受け止める場、ピアな場が必要である。

A 2： DI offspring Group へ連絡してみてもはどうでしょう。

Q 7、私が AID のことを考えていると、他人から、「前向きに生きなきゃ」と言われるこ  
とがあります。言われる以上に、今が前向きなのです。もっと前向きに生きろと言わ  
れると、腹が立ちます。嫌なことを思い返したり話したりすることは、それを整理で  
きけると思うのです。

A 1： その通りだと思いますよ。

Q 8、医者は、「子どもへの説明は医療がやります」「親になっても良いと医療が認知し  
た人を引き受けます」「医療がやるべきアフターケアを行います」とはじめに説明する  
べきではないでしょうか。

A 1： 医師も親も AID で子供を持つことの問題を認識し、とくに親はしっかりと  
子供を持つことの意味を整理しておくこと、生まれてきた子どもの気持ち、  
告知について前もって考えておくことが重要である。

A 2： 子どもへの説明はまず親がするべきではないでしょうか。

A 3： なるほど。

A 4： もちろん、そういう考え方もありますね。

インタビュー調査の最後に、対象者から発せられた、まとめの一言をとりまとめておく。

### 【まとめの一言】

- ・「生き方」を支援するのがソーシャルワークであろう。
- ・子どもの相談のためには、情報を得るための窓口が身近なところにあり、専門機関に相談窓口がある必要があるだろう。病院につなげることも必要である。
- ・「チーム」や「多職種」とのつながりが構築されていることが必要で、そのためには、日ごろからの専門職間のつきあいが大切である。
- ・事例検討ができた方がわかりやすかったのではないかな。
- ・次のケースが出てきた場合に、対応できることを想定していくことも必要である。
- ・将来、当事者の会の方々がピア・カウンセラーとして成長してほしいと思う。
- ・実のある研究にしてほしい。
- ・本人自身のサポートを、いろいろな専門職がそれぞれの持ち味を持ってやっていける体制を組めると良いのではないかな。
- ・ルーツを知りたいというのは、人間の根本的な欲求であると思う。
- ・「産めない私」を受け止めるという選択肢もあるということ、夫婦に与える情報提供のあり方を検討する必要があるということ、を強調したい。
- ・様々な専門職が関わらなければ、問題に対応できない時代である。
- ・犯罪・事故に巻き込まれた被害者が、「何で私が・・・」という、思いを持ったり、それに巻き込まれたことをきっかけに、別の問題があぶり出されることがよくある。それと同様に DI にも、AID を通して別の問題（例えば、親子問題や DI 自身が今現在、行き詰っている仕事のことで、対人関係など）が浮上したり、絡んで、自分の AID に対しての DI の感情を複雑にしてみたり、（意識的にではなく）問題をすり替えてしまったりすることもあるだろう。
- ・「何で私が・・・」という思いから問題に入るのであるから、そこをクリアしたならば、サポートの糸口を見つけることができる。
- ・親にもきちんと知らせていく必要がある。
- ・ステップ・ファミリーの絵本もあり、AID の絵本があってもよい。

---

<sup>i</sup> 長倉(1976)は、ソーシャルワークの成果を阻んでいるソーシャルワーカー自身の持つ弱さや個人の持つ好みや得て不得手に留意しておく必要性を指摘しており、その指摘を受け、これ以下の発言を記述した。

# 参照データ⑩ 第5調査の検討データ

項目	領域	支援者の声	当事者の声
I		精子の提供を受けて行われる生殖補助医療への疑問	
Q1	C1		・事実を知って苦しいのですね。よくここへ来られました。よかったら話せる範囲でお聞かせください。
	B1	・医師がAIDで生まれた子どもの「苦しみ」を知らないからでしょう。	・医者はAIDで生まれた子どもがどのように感じるのか、 <u>わからない</u> のではないのでしょうか。
	C2		・あなたの気持ちを医者に伝えることも必要かもしれませんね。
	A1	・善意で解すれば、親のニーズに医師は精一杯応えようとしたのでしょう。 ・なぜでしょう。	
	A2	・なるほど、あなたはそう感じる。	
Q2	B2	・AIDで生まれる子どもに事実を告げると言うことは考えず、 <u>子育ての喜びだけ</u> を考えていたのでしょうね。	・子どもを得ることが <u>ゴール</u> になってしまっているのかもしれないね。
	B3	・子どもの「苦しみ」を知ってもらう必要がありますね。	・子どもを得た後に起こりうる問題についても、事前にきちんと考えなくてはなりませんね。
	B4	・AIDを選択したことに、 <u>ご両親も悩んだ末</u> のことでしょうね。	・子供が生まれてからが長いのですから、生まれてくる子供のことをもっと考えて欲しいですね。
	A3	・他の方法、例えば養子をもろうということも考えられたことでしょう。	
Q3	C3		・自分の存在を否定されるのは苦しいですし、生きにくいことだと思います。
	B5	・ <u>当然の心配</u> と思いますよ。	・あなたが心配されるのも、 <u>自然な思い</u> ですよ。
	C4		・精子を提供するとはどういうことなのか、将来どんなことが起こる可能性があるのかなど、提供する前にきちんと説明があるべきですね。
	A4	・そうかも知れないけれど、ドナーは医者から説明を受けて納得の上のことなので、あなたが考えているほどの後悔の想いはないと思	



		いますよ。	
	C 5		・そういったことができていないということも、AIDの大きな問題ですね。
II		生殖補助医療実施状況や体制への疑問	
Q 1	A 5	・なるほど	
	B 6	・同感です。	・そうですね。あなたに関わることは、きちんとあなたに話される必要がありますよね。
	B 7	・私もそう思いますよ。	・ご自分の出自を知りたいという気持はとても自然で当たり前のことですものね。
	A 6	・臓器移植と同様にコーディネーターが必要かもしれません。	
	C 6		・ご両親からはどんなお話を聞かれましたか。
	C 7		・もっと詳しくお聞きになりたいのですね。
Q 2	A 7	・なるほど。	・そうですね。
	C 8		・それは、苦しいでしょう。その気持ちを詳しく聞かせてもらえますか。
	A 8	・ご両親は悩んだ末、この方法をとられたのですから、勝手に作ったという気持ちはないのではないのでしょうか。	
Q 3	A 9	・なるほど、そう思うのですね。	
	B 8	・ルーツ探しは人間として <u>当然のこと</u> だと思いますよ。	・ルーツを知りたいと思うのは、 <u>当然のこと</u> だと思います。
	B 9	・自分のルーツは、 <u>誰でも知りたいもの</u> ですね。	・ルーツとしての提供者を知りたい気持ちがあるのですね。 <u>自然な欲求</u> だと思います。
	C 9		・人間として生まれてないような感情があるということですか。
Q 4	C 10		・そうですね。提供者はどんな人で、どんな気持ちで精子を提供したのでしょうかね。
	A 10	・ああ、あなたはそう思う。	

	B 10	・「とんでもない人」は、ドナーにはいないのではないのでしょうか。	・とんでもない人が提供者だと知らない方がよいと他人に言われることに違和感を覚えるのですね。
	A 11	・ドナーについては医師を信頼して良いのではないのでしょうか。	
	C 11		・その他に提供者に言いたいことはありますか。
III		AID を選択した両親への疑問	
Q 1	A 12	・どうだろうねえ。	
	A 13	・あなたはどう思いますか。	
	C 12		・25年間知らされなかったのですね。それは大きなショックを受けたでしょう。
	C 13		・もっと早く言ってほしかったですね。
	C 14		・親御さんからはどんな風に聞かされましたか。
	B 11	・あなたには、ご両親はどう見えましたか。	・ご両親はどんな様子に見えましたか。
	A 14	・傷つかれたと思いますよ。あなたのショックをみて。	
	A 15	・遺伝上の親よりも生活を共にしてきた親の方が、価値があるでしょう。	
Q 2	C 15		・ご両親や医者に対し、あなたの今の素直な気持ちをぶつけてみてはどうでしょうか。
	C 16		・ご両親に対する「怒り」をもっと詳しく聞かせてもらえますか。
	C 17		・医師に対する「怒り」の気持ちを詳しく聞かせてもらえますか。
	A 16	・AID がこのような事態を起こすのだと言うことを世の中に知ってもらい必要がある。	
	A 17	・AID を選ぶ人に対して、あなたの怒りを具体的に訴えてみてはどうでしょうか。	
	A 18	・あなた自身が自分を受け止める一つになるのではないのでしょうか。	

	A 19	・何か、できそうだと思うことはありますか。	
Q 3	A 20	・なるほど、あなたはそう思うんですね。	
	C 18		・そうですね。子どものためとは言いつつ、ご両親は自分たちを守りたかったのかもしれないね。
	B 12	・秘密のしてきたのは、「 <u>子どものため</u> 」と <u>思ったことが、そうではないと今、分かったと思いますよ。</u>	・とても大きな秘密を隠していたことの <u>言い訳に「子供のため</u> 」と言われることは違うと思っているのですね。
Q 4	A 21	・なるほど、あなたはそう感じている。	
	C 19		・そうですね。AIDを選択する時点で、もっときちんとその選択の意味を考えてほしかったですね。
	B 13	・そうですね。隠さないこと、ある時期に <u>真実をあなたに打ち明けてほしかったとあなたは思うでしょうし、私もそう思いますよ。</u>	・ <u>自分の出自が隠されなければならないこと</u> だとお母さんに思われていたのが余計に苦しいんですね。
	C 20		・お母さんには自信を持って欲しいと思うのですね。
Q 5	B 14	・それはショックでしたね。	・そうですね。それはショックでしたでしょう。
Q 6	A 22	・なるほど、そうかもしれませんね。 ・あなたはそう思うんですね。	
	C 21		・そうですね。お父さんの気持ちについて、いつかお互いに話し合えるといいですね。
	C 22		・お父さんの言葉を口先だけだと感じるのですね。もう少しくわしく聞かせてもらえますか。
	A 23	・「せめて妻とつながっていれば」というお父さんの気持ちは事実でしょうし、それは又、あなたへの愛情の印と思いますよ。	
Q 7	B 15	・そうです。ちゃんと聞いてみるのが大切でしょう。	・そうですね。いつか話し合えるといいですね。
	C 23		・子供にとって、お父さんの気持も大切でしょうね。
IV		AID で生まれた「私」の家族への思い	
Q 1	B 16	・今のあなたの気持ちはそうでしょう。	・そうですね。

	B 17	・人は愛する人ができれば <u>結婚し、子どもがほしい</u> と思うものです。	・結婚して子供を持つことに、 <u>希望がもてない</u> というような気持ですか。
	A 24	・しばらく時間をもって、これからのことを考えてみてはどうでしょうか。	
	A 25	・人間の気持ちや考えは変わっていくものです。変わるから成長するのです。	
	C 24		・結婚や育児に意味がないように思うのでしょうか。
Q 2	B 18	・その通りだと思います。	・そうですね。他の当事者でもある、親や医師、提供者もきちんと考えてほしいですね。
	C 25		・そうですね。納得しがたいでしょうね。
	C 26		・その「つらさ」についてもう少し詳しく聞かせてもらえますか。
Q 3	A 26	・そうですね。	
	B 19	・そうですね。	・自分の出自に関する問題ですものね。 ・人間にとって大切なところです。
	A 27	・もう少し『つらさ』や『理不尽さ』を具体的に聞かせてほしいのですが・・・	
Q 4	B 20	・自分を取り戻すには、どうしたらよいのでしょうか。一緒に考えてみましょう。	・そうですね。一緒に考えていきましょうね。
	C 27		・自分の出自を知らずに、子供を生み育てていたことに戸惑いがあるのですね。
	C 28		・今の気持を少しずつ話せますか。
	A 28	・あなたの思いを整理できるように関わることが必要ですね。	
	A 29	・「ルーツが揺らいだ」ということは、これほどまでに影響の大きいことなのですね。	
	A 30	・どのようにかかわったらよいのでしょうか。	
V		「私」のアイデンティティに関する思い	
Q 1	B 21	・どのようにしたらよいのか、一緒に考えてみましょう。	・そうですね。どのようにしていったらいいのか、一緒に考えましょうね。

	B 22	・ああ、混乱しておられるんですね。	・混乱している中で、よくここへ来られました。ここでよければあなたの気持ちをゆっくり聞かせてください。
Q 2	B 23	・もう少し具体的に話してほしいのですが・・・	・それはとても辛い気持だと思いますが、もう少し詳しく聞かせてもらえますか。
Q 3	C 29		・そうですね。そういった言葉に反応してしまうのですね。
	B 24	・考えすぎだとは思いますが、「ウソと感じる」について、もう少し話してほしいのですが・・・	・反応し、ウソだと感じる具体的な場面があれば、聞かせてくれますか。
Q 4	B 25	・どのように接していくのか、一緒に考えてみましょう。	・どのように接するのがいいのか、一緒に考えていきましょうね。
	C 30		・それはかなり不安定なお気持でしょう。あなたの今までの「親像」も聞かせてもらえますか。
	A 31	・あなたは、どうすればよいと考えますか。 ・できそうに思うことはありますか。	
Q 5	A 32	・あなたも言い過ぎたと思っているのではありませんか。	
	C 31		・あなたの素直な気持ちをお母さんにぶつけたのですね。お母さんも AID によるあなたの悩みがどれほどのものなのか、少しはわかったのではないでしょう。
	C 32		・そう言わずにはいられなかったのですね。その時お母さんとはどんなやり取りがありましたか。よかったら聞かせてください。
	A 33	・あなたの怒りに対してお母さんはどう対応されたのでしょうか。	
Q 6	A 34	・なるほど、そう感じている。	
	B 26	・そうですね。	・そうですね。
	C 33		・AID で生まれたことも含めて自分を丸ごと知って欲しいと思うのでしょうか。
	C		・例えば、どんなことがありましたか



	34		
Q 7	B 27	・なるほど、そうですね。	・そうですね。
	A 35	・隠されたことがあったまま、親子関係を続けてきたという点にも問題がありますね。	
	C 35		・あなたの感情を否定する言葉のようですね。
	C 36		・ここでは、あなたが悩んだり苦しんだりしている気持ちを、そのまま話していいですよ。
VI		「より添う仕組み」に対する思い	
Q 1	B 28	・そうかも知れません。そうでもないかも知れません。	・そうですね。
	A 36	・それは、AID のことを知らないからかも知れません。	
Q 2	B 29	・なるほど、あなたはそう思うのですね。	・そうですね。ずっと隠されてきたため、不信感で一杯になってしまったのですね。
	A 37	・信用できないのではなく、今の制度が AID に対して何ら作用していないのでしょうか。	
Q 3	B 30	・そうですね。ご両親がたどり着くまでの方法ですか。	・そうですね。一緒に考えていきましょう。
	C 37		・あなたの自主性を大切にするということですね。
Q 4	B 31	・DI offspring Group へ連絡してみてもいいでしょう。	・同じ当事者のグループと連絡を取ってみてはどうですか。
	C 38		・非配偶者間人工授精で生まれた子どもの会 (DOG) という自助グループがあります。パンフレットがありますので差し上げましょう。
Q 5	C 39		・同じような立場の人と話してみるのもいいかもしれませんよ。
	B 32	・DI offspring Group へ連絡してみてもいいでしょう。	・AID で生まれた子供の会 (DOG) も自助活動をしていると思います。よければ、連絡をとってみるのもいいかもしれません。
	C 40		・いつでも話をしに来て下さい。 ・ここでよければ、あなたのお話を聞きます。
Q 6	C 41		・そうですね。一緒に考えていきましょう。

	B 33	・DI offspring Group へ連絡してみてもいいでしょう。	・ここで少しずつ気持ちを話して、心の整理をされてもいいですし、DOG と連絡をとってみてもいいかもしれませんね。参加されなくても、いろいろな情報が得られるかもしれません。
Q 7	B 34	・その通りだと思いますよ。	・そうですね。
	C 42		・そうですね。ここへ来られていることも「前向き」のひとつですね。
Q 8	A 38	・なるほど、もちろん、そういう考え方もありますね。	
	C 43		・そうですね、必要なことですね。
	C 44		・そうですね、医者にも不信感があるのですね。
	A 39	・子どもへの説明はまず親がするべきではないでしょうか。	

## 参照データ⑪ アメリカの専門職のレスポンス

### 領域Ⅰ「医者側の責任」

発話①： 医者は、AID で子どもを産ませ、自信が持てない親にしてしまったのだと思います。

返答①： あなたがそう思うのはもっともなことです。医者が重要な情報をあなたに知らせなかったのですから。

発話②： AID は、本当に残酷です。AID で産まれたということは、あまりにもすごい体験です。

返答②： これがどうして起こったのかなど、あなたが混乱しているように感じます。私はあなたが、DI であることに恥を感じているように感じます。

発話③： 医者は、「子どもへの説明は医療がやります」「医療がやるべきアフターケアを行います」とはじめに説明するべきです。

返答③： そうですね。医者は情報を提供するべきです。しかし、まず両親が情報を提供するべきでしょう。子どもがドナーを知りたいと思うことは当然のことなのです。

### 領域Ⅰ「希望者への説明と責任」

発話④： 医者は、「あなたたちの人生を広げるため、いろんな困難はあるけれども、『正直』にやれば乗り越えられるので、ひるまないで思い切ってオープンに、堂々とやってみなさい」というべきです。

返答④： そうですね。あなたが思うほど、障害は大きくないと思います。医者が秘密にしないでということが、間違っていることを私たちも長い間に学びました。医者ということは患者にとってとても重いものです。あなたのご両親が正しいのかを疑っていても、それに反対することはできなかったのでしょう。その当時の医療のやり方や文化的なものが背景にあったのです。今は変わりました。例えば、倫理委員会があり、委員会は子どもがオリジンを知る権利があると認め、ここ 20 年で大きく方向転換をしました。

### 領域Ⅱ「何も知らないのに否定する」

発話⑤： 私のことを否定する人は、①同年代で結婚してない人、②まだ子供がいない人、③結婚や子どものことを考えてない人。

返答⑤： もう少し状況を具体的にお聞かせください。どのような、どういう状況の中で、あなたはそう感じたのですか。私はあなたの気持ちを理解したいのです。

発話⑥： AID の話を 2 度目にすると「その話はもういいよ」と言われた。「AID を考えている自分」をひっくるめてわかってもらう。

返答⑥： もちろん、理解されることが大切です。本当によく理解してくれる人との関係を結ぶ必要がありますね。きっとあなたは屋根の上で、大声で叫びたいような気持ちなのかもしれません。

### 領域Ⅲ「嘘で生きてこられる」

発話⑦： 例えば、父親が「妻とせめてつながっていれば」というのは口だけじゃないかな。親は、こんなに簡単に、ウソで生きてこられるのです。

返答⑦： 両親にサポートがなかった場合、両親の関係にヒビを入れる可能性があります。この問題は「不妊」の解決だけではなく、「子どもがいない」という状態を変えることが問題なのです。自分の子どもを持てないという悲しみがあります。時間がたった後でも出てきます。あなたが経験した家族の崩壊も、その一つです。

発話⑧： 本当に望んで許したのか。産まれたときに父は喜んだが、その後育児放棄した。AIDは「壊れていくきっかけを作っている」

返答⑧： あなたのおっしゃるとおりです。成長している間に、何か変だなということを感ぜませんでしたか。あなたの中に精神的なトラウマがあるように感じます。家族が秘密をもつということで、あなたは結果的にトラウマを持った。どこか変だなと感じるものの、それを100%信じることもできないで自分を疑うこともあります。秘密は長期的な影響を与えるのです。例えば、何が入っているのか分からない袋を手渡されたような感じでしょう。あなたは怒りを感じているでしょう。それは正しいことなのです。そういう気持ちは自然なことです。

### 領域Ⅲ「告知しないのは自分を守るため」

発話⑨： 母親は、「取り合わない」「話したくない」「隠したい」という態度をとりました。「私」をほしかったのではなく、夫婦関係を保つために、AIDを選択したと言われてショックだった。

返答⑨： お母さんはあなたに重荷を持たせることになってしまいましたね。お母さんの言葉は、あなたが小さくなるような言葉、本人の価値が減るような言葉です。あなたが怒る気持ちが良くわかります。

### 領域Ⅳ「AIDのことも子どもたちへの伝え方」

発話⑩： 次男は、〇〇さんの出ているビデオを見ていて、「いややなあ」と言った。そして、長女が「何を言うてんの。これママだよ」と話した。

返答⑩： 子どもはビデオ見て理解を深めたのでしょう。子どもたちは家族が色々な形でできているということも知るべきでしょう。遺伝子が異なっている、おじいちゃんや子どもを愛してくれた。それも重要な役割です。家族を全体としてみてみてはどうでしょうか。私はあなたの家族をよく理解したいと感じています。

### 領域Ⅳ「依存は苦しい」

発話⑪： AIDのことを知ってから、自分が自分である確認ができない状況にあり、生きている感じがなくなりました。

返答⑪： そうでしょうね。あなたは事実を知っているのですから、そう感じているのでしょう。重要なことは、あなたがお母さんからされたような態度を、あなたの家族にし続けることをやめた方がよいということです。聴きたいことは聴けるような家

族関係を心がけてはどうでしょう。

#### 領域Ⅳ「夫の『母』ではない」

発話⑫： 気づいたら自分の家族が自分で自分の身の回りのことができないことが多いことがわかった。夫は私に「母」も「父」もやらせて、「お父さん」してくれない。

返答⑫： あなたは、それを変えようとしたのですね。私にはあなたが家族を変えようと、大きな一歩を踏み出しているように思えます。家族の間では今までの習慣が続く傾向があります。時間がかかるかもしれませんが、時間をかけて続けてください。

#### 領域Ⅴ「ビクッと反応する」

発話⑬： 私は、「親と子のつながり」という言葉に、ビクッと反応します。

返答⑬： なぜそのように反応するのでしょうか、もう少しお話しいただけますか。

発話⑭： 私は、「親子なんだから」「親孝行のつもりで同居したら」という理由づけに「ウソ」を感じます。

返答⑭： お母さんに怒りを……。近所の人や周りの人にも怒りを感じているのですね。

#### 領域Ⅵ「反応しなくなるぐらい整理したい」

発話⑰： いろいろ考えて、いろいろ聞いてもらって、何かのきっかけで「スー」と気持ちもちが「あがる」こと、「つまっていたものが流れはじめる」ことがあります。

返答⑰： あなたが現実を認めていくためには「考えていること」「感じていること」を人に話してはどうでしょう。そうすると、その重荷は少しずつ減ると思います。

#### 領域Ⅶ「相談者の要件」

発話⑱： 相談者の要件として、①AID を知らない人、②説明をしなければならない人、③説明をしても理解できない人では困ります。

返答⑱： そうですね。カウンセラーや一般の人々が理解できるような教育が必要です。世間には情報が少ないのです。あなたが教育していくということも必要かもしれません。それであなたの心の痛みが減ります。あなたがミッションをもつことです。

#### その他

発話⑳： 誰かを愛することができたら、すごく楽なのに、子供も自分も愛せないのです。生まれてきた自分を否定したくなることもあり、そこで足踏みしていることが歯がゆいのです。

返答㉑： とても悲しいことですね。私も悲しいです。家族がAIDを扱った、扱い方に問題があったのです。「秘密」「恥」という重荷を、あなたがしょってしまった。

「恥を捨てる」「重荷を下ろす」ことが、あなたの仕事……。

発話㉒： 私は神に許された存在ではないのではないかと思うことがあります。

返答㉒： とても悲しいことですね。一種の虐待だと思います。こうなったのは私のせいかもしれないという恥じる気持ちがありますね。



## [資料 1]

### DI 者へのインタビュー項目

1. あなたは、何歳ですか。
2. あなたが自分の出自について聞いたとき、あなたは何歳でしたか。
3. あなたは何歳頃に開示されるべきだったと考えますか。
4. あなたがそのように考えるのは、なぜですか。
5. あなたが自分の出自について聞かされる前に、両親から何か秘密にされていることがあると感じたことがありましたか。
6. 家庭の中に秘密があると感じたのは、あなたは何歳の頃でしたか。
7. あなたはどのようなときに、家庭の中に秘密があると感じましたか。
8. あなたは、父親と血がつながっていないのではないかと何歳から疑いましたか。
9. あなたは、父親との距離をどのように感じていましたか。
10. あなたは、両親の関係がこの秘密によりどのような影響を受けていたと考えますか。
11. 過去にあなたの両親は、別居または離婚したことがありますか。
12. それはあなたへの情報が開示される前でしたか、それともあとですか。
13. あなたはこの秘密が離婚の要因であると考えますか。
14. 秘密が離婚の要因であるとする理由を教えてください。
15. 友人もしくは親戚の中で、あなたより前に秘密を知っている人はいましたか。
16. DI 当事者は、情報を開示されるべきですか。
17. 何歳頃に開示されるべきでしょうか。
18. あなたは、秘密を開示されなければ良かったと考えたことはありますか。
19. 秘密が開示されることで、あなたが受けた不利益はどのようなことですか。
20. あなたが秘密を知ってから、あなたの人生はどのように変化しましたか。
21. あなたが秘密を知ってから、あなたの人との接し方はどのように変化しましたか。
22. あなたは、ドナーの医学的経歴について知る権利があると考えますか。
23. あなたは、ドナーの社会的地位や思想・出自・その他の詳細について知る権利があると考えますか。
24. あなたは、ドナーとコンタクトを取りたいと思いますか。
25. あなたは、ドナー自身や兄弟姉妹にあつてみたいと思いますか。
26. あなたの母親には、あなた以外に DI の子どもがいますか。
27. 彼らのドナーは、あなたと同じですか。
28. 両親には、ドナー以外の子どもがいますか。
29. あなたには、養子である兄弟姉妹や義父(義母)の兄弟姉妹がいますか。
30. あなたは、DI 当事者である友人がいますか。
31. あなたは、DI 当事者のネットワークをどのように活用していますか。
32. あなたは、DI 当事者にどのようなサポートが必要だと考えますか。
33. あなたは、DI 当事者以外の市民に何か訴えたいことがありますか。
34. あなたは、別紙のような気持ちを持ったことがありますか。
35. 以上のような質問に答えを出した、今のあなたの気持ちを教えてください。

## [資料2]

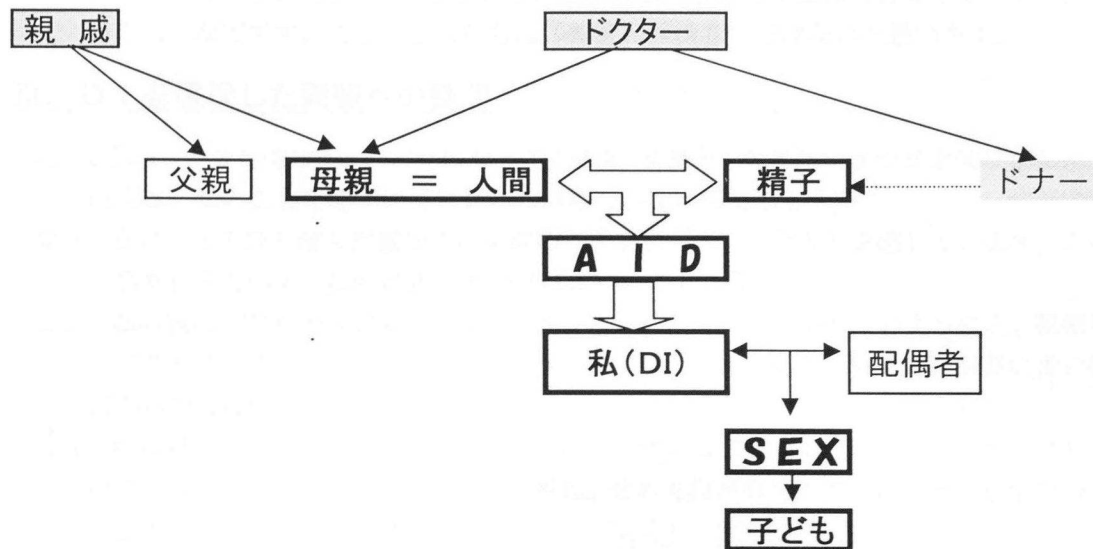
### ＤＩ者の発話記録から作成したビネット

- 1) AIDは、私の親を「自信が持てない親」にしてしまった。
- 2) 配偶子提供で産まれたということは、本人にしかわからない、体験です。
- 3) 医者は、配偶子提供を希望するカップルに、「真実告知」の必要性を説明するべきです。
- 4) 医者は、配偶子提供を希望するカップルに、医療がやるべき「アフターケア」について、説明するべきです。
- 5) カウンセラーやソーシャルワーカーが、「DI 者の苦悩」が理解できない人では困ります。
- 6) カウンセラーやソーシャルワーカーは、「DI 者の怒り」を受け止めてくれる人であってほしい。
- 7) 「結婚を考えていない人」は、DI 者のことを理解してくれません。
- 8) 「子ども望んでいない人」は、DI 者のことを理解してくれません。
- 9) AIDのことを話すと、「聞かなかったことにする」という態度をとる人がおり、悲しくなります。
- 10) AIDの話を2度すると、「その話はもういいよ」と聞いてくれない人がおり、あきらめを感じます。
- 11) AIDは、「親子＝同居」という考え方に納得できない、深い怒りの原因になりました。
- 12) 父が「妻とせめてつながっていれば良い」というのは、口先だけじゃないのかと思います。
- 13) AIDのことを知ったとき、「血がつながってなくて良かった」と思いました。
- 14) 両親は、私がAIDで産まれたという事実を隠して「ウソ」で生きてこられたのです。
- 15) AIDを了承した父親が、本当に望んでいたのかを聞いてみたい。
- 16) AIDは、夫婦の関係が壊れていくきっかけを作ったと感じています。
- 17) 母親は、真実を告げなかった理由を「子どもが知ったら可哀想」と言っていますが、同意できません。
- 18) 「私」をほしかったのではなく、夫婦関係を保つためにAIDを選択したと言われて、ショックでした。
- 19) 私の子どもに「あなたとお爺ちゃんとは血がつながっていないのよ」と話せるまでに、ずいぶん時間がかかりました。
- 20) 私は、生物学上の父がわかるまで、結婚できないと思っています。
- 21) AIDのことを知ってから私は、家族に気を遣いすぎて、自分を失くしていました。
- 22) 夫は、私の出生の話を真剣に聴いてくれませんが、あきらめています。
- 23) 私は「ウソ」を感じながら「親子」のそぶりはできないと感じています。
- 24) いろいろと考えたことを聞いてもらえると、気持ちが楽になることがあります。
- 25) 自分を否定したくなることがあり、そこで足踏みしていることが歯がゆいのです。
- 26) 「親子のつながり」という言葉に「ビクッ」としてしまうくらい、いつも敏感になっています。
- 27) AIDで生まれたことを知ってから、自分のことがわからなくなることがあります。
- 28) 誰かを愛することができたら楽なのに、誰も愛せないのです。
- 29) 私のドナーが、突然、目の前に現れたらと想像すると、眠れなくなることがあります。

[資料3]

対人援助職へのインタビュー

- 「I」～「VI」までに含まれる「Q」について、以下の構造図と囲みの事柄に留意してご回答下さい。



貴方が相談員を勤める相談窓口に、次のような悩みを持つ利用者が相談にきました。貴方はどのように対応しますか？

なお、他の相談窓口を紹介する場合は、具体的にその名称を上げて下さい。

【共通事項】

私は、両親の不妊治療の末、精子の提供を受けて産まれました。ここに来る2週間ほど前に、この事実を知りました。

I、精子の提供を受けて行われる生殖補助医療への疑問

- Q 1、医者は、A I Dで生まれた私のような子どもが「苦しみ」をもっているのに、なぜこの医療を行うのでしょうか。
- Q 2、親は、「子供を得る＝不妊に悩んでいる親の幸せ」であり、A I Dを行うカップルは、まだ生まれていない子供のことは、何も考えていないのではないのでしょうか。
- Q 3、私はこんな心配もしています。「精子の提供者」がもし、どこかの大学病院の学生だったら、精子提供をしたことを後悔しているかもしれないし、まさか自分の子供が存在するとも思わないかもしれないし、子どもが現れたら疎ましいと思うかもしれない。

II、生殖補助医療実施状況や体制への疑問

- Q 1、子どもが欲しかったら何をしても良いのでしょうか。両親は、A I Dという医療を選択した理由や経緯、現在に至るまでの気持ちなどを、私にきちんと話すべきだと思います。
- Q 2、私は、医者や両親など一部の人間のエゴで、勝手に作られたものだという気持ちを持

っています。

Q 3、私は、「母と精子で私ができた」と感じています。私のルーツにちゃんとした人がいるとわかれば、人間としての私でいられると思うのです。

Q 4、「ドナーをもし知ったとして、『とんでもない人』だったら苦しむよ」といわれることがあります。私のイメージする「とんでもない人」とは、①尊敬できない人、②犯罪者、③「そんなことしたっけ？」と無責任にとぼける人、④何の気持ちもなくてドナーになった人、などです。こういう人たちは「善意の提供者」ではないと思います。

### Ⅲ、D I を選択した両親への疑問

Q 1、私は、今25歳です。この年になって「真実」を知り、大きなショックを受けました。両親は、私のことを見ていて自分たちは傷つかないのでしょうか。

Q 2、私は、A I Dを選んだ親やそれを進めた医者に対して「怒り」を感じています。この「怒り」をどのように受け止めていけばよいのでしょうか。

Q 3、私の親は、①子どもが傷つかないように、②子どもが何とかしないようにと、秘密にしてきたことを「子どものため」というのですが、それは周りにも聞こえが良い言い訳だからではないのでしょうか。

Q 4、私の親は、何で子どもに隠したいようなマイナスなことをしたのでしょうか。隠したいことなら何でやったのでしょうか。私は、せめて母が自分のやったことに自信を持って堂々としていてほしいのです。

Q 5、私の母は、「私」をほしかったのではなく、夫婦関係を保つために、A I Dを選択したと告げました。ショックでした。

Q 6、私の父は、「せめて妻とつながっていれば」といいます。何か口先だけのことじゃないのかなと思っています。

Q 7、私は、父の気持ちを聞いたことはありません。父がA I Dを了承したのか、それをちゃんと理解したのか、私のことを「我が子」と思っているのかなど、制度的な「認知」ではなく、精神的な「認知」をしているのかを聴いてみたいと思います。

### Ⅳ、D I で生まれた「私」の家族への思い

Q 1、私は、結婚はしたくないし、子供は絶対産まないほうが良いと思います。

Q 2、子どもは、全然知らないのに、自分がやったことじゃないのに、「つらさ」の中に入らなきゃならないし、巻き込まれているのです。このことは、すごく理不尽なことではないのでしょうか。

Q 3、「つらさ」に巻き込まれた子どもたちは、一番新しく直かの形で、「理不尽さ」を体験した者ということになります。子供世代とこの問題は切り離せません。

Q 4、私は真実を知る前に結婚し、子どももいます。しかし、家族のことよりも、自分を取り戻すのが先だと思っています。今、やらなくとも結局、いつかはやることになると思います。家族とどのように関わったらよいのでしょうか。

### Ⅴ、「私」のアイデンティティに関する思い

Q 1、私は、A I Dのことを知ったその日から、そのことが頭から離れず、混乱しています。どのようにしたらよいのでしょうか。

Q 2、私は、「神に許されて生まれてきたのではない」という気持ちをもっています。

Q 3、私は、「親と子のつながり」「絆」「遺伝」等という言葉に反応し、「親子なのだから」「親孝行のつもりで同居したら」という理由付けに「ウソ」を感じます。考え過ぎなの

でしょうか。

Q 4、私の「親像」は、A I Dという真実を知ったことで突然、途切れてしまいました。これから先、母とどのように接していったらよいのでしょうか。

Q 5、私は、母に「何で産んだの?」「産まなきゃ良かったじゃないの?」と、「怒り」を一方的に出したことがあります。言い過ぎたのでしょうか。

Q 6、私は、A I Dのことを知らない人との間では、何か埋められない距離があり、仲良くなってA I Dのことを知って、それが壊れたり、引かれたりするのも余計つらいと感じています。

Q 7、私は、友達がA I Dのことを何も知らないのに、なぜ私のことを否定することができるのだらうかと思います。私の中で「不消化」となる、次のような発言から自由になりたいと思っています。

- (1) 暇だからそんなことを考えるのよ
- (2) 知らなかったら良かったのに
- (3) 前向きに生きなよ
- (4) まじめなのね
- (5) あなたはまだ幸せじゃない
- (6) お母さんが愛してくれたからいいじゃない
- (7) 両親そろっていても良くないこともあるから良いじゃん
- (8) もし知ったとしても「とんでもない人」だったら苦しむよ
- (9) 探しちゃいけないよ
- (10) そんなこと見なければいいじゃない

## VI、「より添う仕組み」に対する思い

Q 1、私は、医者や友達、その他の人がA I Dの話をきちんと聞いてくれないのは、その人が耐えられないからではないのだらうかと思っています。

Q 2、私は、戸籍上、実子として届けられていたので、私がA I Dであるという真実を知るまで、戸籍が本当のものだと思っていました。戸籍も福祉制度も信用できません。

Q 3、私は、ドナーが誰であるのかではなく、ドナーにたどり着くまでの方法＝道筋を教えてください。

Q 4、私は、一人で考えていると良い考えが浮かばないので、私と同じような経験をした人を捜しています。どのようにしたらよいのでしょうか。

Q 5、私は、私の悩みを受け止めて助けてくれる人を求めているのです。

Q 6、私は、「どうして私を作ったの?」という理由を見つけて、自分の中で混沌としたごちゃごちゃとなったものを自分で埋めていきたいのですが、そのような場がないのでしょうか。

Q 7、私がA I Dのことを考えていると、他人から、「前向きに生きなきゃ」と言われることがあります。言われる以上に、今が前向きなのです。もっと前向きに生きろと言われると、腹が立ちます。嫌なことを思い返したり話したりすることは、それを整理できると思うのです。

Q 8、医者は、「子どもへの説明は医療がやります」「親になっても良いと医療が認知した人を引き受けます」「医療がやるべきアフターケアを行います」とはじめに説明するべきではないでしょうか。



[資料 4]

オーストラリア・南オーストラリア州のパフレット

Donor conception—telling your child

[ドナー受胎 ー子供への告知について]

(抜 粋)

**なぜ告知が重要か？**

「出自を知る権利」～あなたが告知により家族内で起こる問題を恐れるのは十分に理解できます。しかしながら、出身地や家系を知る権利または家族の中で秘密を持たれたまま暮らすことの意味を考えれば、その重要性はわかりやすいかもしれません。

- 私達が誰であるかは、部分的には何を遺伝したかということにあります。それが私達の人生の始まりです。
- 家系を知ることは、私達が誰であるかを理解することに役立ちます。
- あなたは、秘密保持が子供の権利として、からかわれたり、噂されたりすることから子供を守ると信じているかもしれません。しかしながら、提供された組織により生まれた人々の経験によると、真実を知ること自体が問題なのではなく、その告知のされ方や事実の発見のされ方が問題を引き起こすと話しています。
- あなたは、子どものリスクに対し準備が出来ているのかを考えることが大切です。

—他の誰かによって知られること

—偶発的に知ってしまうこと

—疑いを持ち、16歳になって生殖医療機関に立ち寄り自身で調べてしまうこと

- 子どもが年齢を重ねたあとの告知は自尊心を傷つけます。

いずれも子どもに、信じていた者からの裏切りと喪失の感情をもたらすかもしれません。

**家族関係**

- 秘密は長く保てません。生涯を通して秘密にすることは、恐るべきことで大変な重責を意味します。
- 秘密にすることは他の者に対し、特に子供に、あなたがこの事実を恥じていると考えさせるでしょう。子供を自然に作ることができないことは、恥ずかしいことではありません。
- 家族の中で秘密をもつことは、信頼関係を損ない家族を不安定な気持ちにさせます。

**告知の時期と方法**

子どもに告知される時期と方法は大変重要です。あなた自身によって話されることが、双方同じ理解をするために大切なことです。

**時 期**

- 子供がこの事実について、奇妙なものに感じる前の成長段階で話されるべきです。たとえ、あなたがまだ話すには早すぎると感じたとしても、幼少期であればあるほど、子供が自分とは何かを理解することがうまくできます。
- 子供が読み聞かせを好み始めた時期に、子供自身の“話し”に興味を持ち始めるので、それが話し始めるのに良いタイミングです。

**親戚や友人への告知について**

- 全ての家族は異なります。あなたはもしかすると、近しい者に対してどのようにこの事実を話せばいいかを、カウンセラーと相談したいかもしれません。
- 事実を知ったとき、親身になってくれそうな人で、あなたが必要なときに手助けをしてくれる人が誰であるか知っておきましょう。

- 前もって、人々の異なる反応に対してどのように対応すれば良いか考えておくと良いでしょう。
- もしあなたが友人家族だけに話し、子供には知らせていない場合、間違って子供がこの事実について知ってしまうかもしれません。

#### 南オーストラリアの法律

ドナーは、書面で情報提供に同意しない限り、自分たちのアイデンティティについて秘密を保持する権利があります。16歳以上の全ての精子・卵子・胚の提供により生まれた子供は、ドナーが特定されない情報を、知ることが出来ます。近年では、アイデンティティを公開されることに前向きなドナーが選ばれています。今日、全ての親は子供に出自について知らせるよう助言されています。

#### 確認事項

- 不妊は一般的なことです。夫妻の7分の1で起きています。
- 子供が出自を知ることは、とても重要なことです。
- 健康上の理由からあなたの遺伝歴を知ることが役に立ちます。
- アイデンティティを公開させてくれるドナー探しへの重要性が高まっています。
- 家族内の秘密は信頼と家族関係に傷を付けます。
- まだ全てを理解するには幼い子供にも、事実を話しましょう。
- 子供が成長するにつれより多くの質問に答えられるよう準備をしましょう。
- 個人、カップル、グループに対するサポートや手助けには幅があります。

## 配偶子提供で生まれた子の社会的認知に関する調査

日本では、21 世紀に入った直後から、配偶子提供を介して行われる人工生殖(=AID)に関する法律の制定がめざされてきました。しかし、日本国内での議論は遅々として進捗しておりません。AIDの実施に関する法律の制定に向けた議論の焦点の 1 つが「子の福祉」です。

そこで本調査では、配偶子提供で生まれた子(=DI者)の福祉のあり方と焦点を明らかにし、社会的合意を得ていくための指針を得ることを目的として実施するものです。

本調査は、DI者へのインタビュー調査から得た生の声を分析した結果をもとに、DI者自身はもとより、DI者を取り巻く近親者や友人・縁者、一般市民の皆様、さらには学識経験者など、日本国内外の広範な皆様を対象として、DI者に対する社会的な認知をお伺いするものです。

本調査を実施し分析するにあたっての倫理的配慮として、本調査へ協力頂いた皆さんのプライバシーの最大限の尊重とデータ処理時の匿名化、結果の目的外使用の禁止、その他問い合わせに対する迅速な対応等を誠実に誓約するものです。皆様のご理解・ご協力を心からお願い申し上げます。

なお、本調査は平成 20 年度日本私立学校振興・共済事業団の学術研究振興資金による援助を得て行うものです。

2008(平成20)年10月

実施者および問い合わせ先

主任研究者:中部学院大学子ども学部 准教授 宮嶋 淳  
分担研究者:帝塚山大学心理福祉学部 教授 才村 眞理、大阪経済大学人間科学部 准教授 鵜飼 奈津子  
中部学院大学人間福祉学部 講師 谷口 真由美、平野 華織  
〒504-0837 岐阜県各務原市那加甥田町30-1  
TEL:058-375-3637 FAX:058-375-3604 E-mail:[miyaji@chubu-gu.ac.jp](mailto:miyaji@chubu-gu.ac.jp)

回 答 用 紙

問1 あなたのことについて、該当するものを1つ選んで、番号に○を付けて下さい。

a) 性 別	:	1 女性 (female)	2 男性 (male)				
b) 年齢層	:	1 20代	2 30代	3 40代	4 50代	5 60代	6 それ以上
C) 住んでいる国名	:	1 日本	2 その他	(具体的に )			

問2 この調査において、あなたはどのような立場でお答え頂けますか。該当するもの1つを選んで○を付けて下さい。

- 1 ソーシャルワーカー(Social Worker) 2 医者(Doctor) 3 研究者(Resrecher) 4 教育者(Teacher) 5 看護職(Nurse) 6 介護職(Care Worker)  
 7 学生(Student) 8 市民(Citizen) 9 提供者(Donor) 10 AID 希望者 11 AID 選択者  
 12 DI 者 13 その他 (具体的に: )

問3 あなたは、今までにDI者に関する話を聞いたことがありますか。該当するもの1つを選んで○を付けて下さい。

- 1 一度もない 2 間接的に聞いたことがある 3 DI者から直接聞いたことがある 4 DI者をサポートしたことがある  
 5 その他(具体的に: )

問4 次の2つの意見のうち、あなたのお考えに近いのはどちらですか。1つ選んで番号に○を付けて下さい。

A: 「女性の産む権利」と「生まれてくる子どもの知る権利」のどちらも大切だと思うが、どちらがより大切かを決めなければならぬとすれば、「女性の産む権利」の方がより大切だと思う。つまり、女性はすべてだれからも妨害を受けずに自由に子どもを産むことができると思う。
B: 「女性の産む権利」と「生まれてくる子どもの知る権利」のどちらも大切だと思うが、どちらがより大切かを決めなければならぬとすれば、「生まれてくる子どもの知る権利」の方がより大切だと思う。つまり、だれも自分のことを知る権利があり、自分の情報はすべて自分のものであると思う。

- 1 Aに近い 2 Bに近い 3 どちらでもない 4 わからない

問5 次の 1)～29)までのビネットは、DI 者の声から得たものです。設問 A)と B)とのそれぞれについてお答え下さい。

A) 「DI者の想い」について、あなたのお考えに最も近いものを、次の中から1つ選び、解答欄(A)の該当する番号に○を記入してください。

1. 大いに共感できる    2. どちらかといえば共感できる    3. どちらともいえない  
4. どちらかといえば共感できない    5. 共感できない

B) あなたの立場から、「DI者の想い」へのサポートは必要だと感じますか。次の中から 1 つ選んで、解答欄(B)の該当する番号に○を記入してください。

1. 大いにサポートが必要だ    2. どちらかといえばサポートが必要だ    3. どちらともいえない    4. サポートの必要はない

解答欄(A)	ビネット	解答欄(B)
1 2 3 4 5	1) AID は、私の親を「自信が持てない親」にしてしまった。	1 2 3 4
1 2 3 4 5	2) 配偶子提供で産まれたということは、本人にしかわからない、体験です。	1 2 3 4
1 2 3 4 5	3) 医者は、配偶子提供を希望するカップルに、「真実告知」の必要性を説明するべきです。	1 2 3 4
1 2 3 4 5	4) 医者は、配偶子提供を希望するカップルに、医療がやるべき「アフターケア」について、説明するべきです。	1 2 3 4
1 2 3 4 5	5) カウンセラーやソーシャルワーカーが、「DI 者の苦悩」が理解できない人では困ります。	1 2 3 4
1 2 3 4 5	6) カウンセラーやソーシャルワーカーは、「DI 者の怒り」を受け止めてくれる人であってほしい。	1 2 3 4
1 2 3 4 5	7) 「結婚を考えていない人」は、D I 者のことを理解してくれません。	1 2 3 4
1 2 3 4 5	8) 「子ども望んでいない人」は、D I 者のことを理解してくれません。	1 2 3 4
1 2 3 4 5	9) A I Dのことを話すと、「聞かなかったことにする」という態度をとる人がおり、悲しくなります。	1 2 3 4
1 2 3 4 5	10) A I Dの話を2度すると、「その話はもういいよ」と聞いてくれない人がおり、あきらめを感じます。	1 2 3 4
1 2 3 4 5	11) A I Dは、「親子＝同居」という考え方に納得できない、深い怒りの原因になりました。	1 2 3 4
1 2 3 4 5	12) 父が「妻とせめてつながっていれば良い」というのは、口先だけじゃないのかと思います。	1 2 3 4



1 2 3 4 5	13) A I Dのことを知ったとき、「血がつながってなくて良かった」と思いました。	1 2 3 4
1 2 3 4 5	14) 両親は、私がA I Dで産まれたという事実を隠して「ウソ」で生きてこられたのです。	1 2 3 4
1 2 3 4 5	15) A I Dを了承した父親が、本当に望んでいたのかを聞いてみたい。	1 2 3 4
1 2 3 4 5	16) A I Dは、夫婦の関係が壊れていくきっかけを作ったと感じています。	1 2 3 4
1 2 3 4 5	17) 母親は、真実を告げなかった理由を「子どもが知ったら可哀想」と言っていますが、同意できません。	1 2 3 4
1 2 3 4 5	18) 「私」をほしかったのではなく、夫婦関係を保つためにA I Dを選択したと言われて、ショックでした。	1 2 3 4
1 2 3 4 5	19) 私の子どもに「あなたとお爺ちゃんとは血がつながっていないのよ」と話せるまでに、ずいぶん時間がかかりました。	1 2 3 4
1 2 3 4 5	20) 私は、生物学上の父がわかるまで、結婚できないと思っています。	1 2 3 4
1 2 3 4 5	21) A I Dのことを知ってから私は、家族に気を遣いすぎて、自分を失くしていました。	1 2 3 4
1 2 3 4 5	22) 夫は、私の出生の話を真剣に聴いてくれませんが、あきらめています。	1 2 3 4
1 2 3 4 5	23) 私は「ウソ」を感じながら「親子」のそぶりはできないと感じています。	1 2 3 4
1 2 3 4 5	24) いろいろ考えたことを聞いてもらうと、気持ちが楽になることがあります。	1 2 3 4
1 2 3 4 5	25) 自分を否定したくなることもあり、そこで足踏みしていることが歯がゆいのです。	1 2 3 4
1 2 3 4 5	26) 「親子のつながり」という言葉に「ビクッ」としてしまうくらい、いつも敏感になっています。	1 2 3 4
1 2 3 4 5	27) A I Dで生まれたことを知ってから、自分のことがわからなくなることがあります。	1 2 3 4
1 2 3 4 5	28) 誰かを愛することができたら楽なのに、誰も愛せないのです。	1 2 3 4
1 2 3 4 5	29) 私のドナーが、突然、目の前に現れたらと想像すると、眠れなくなることがあります。	1 2 3 4

< 次ページに続く >

問6 DI者が「自分の遺伝上の父を知りたい」と願うことについて、あなたの想いに最も近いものを1つ選んで○をつけて下さい。

1 全く同感だ    2 まあ理解できる    3 何となくわかる    4 理解できない

問7 DI者は、「私はほんとうに生まれてきてよかったのだろうか」という想いを抱いています。

(A) この想いに対するあなたのお考えをご自由にお書き下さい。

(B) この想いを抱いたDI者に、あなたから声をかけるとしたら、どのような言葉になりますか。

問8 本日のワークショップ・プレゼンテーション・フルペーパーを踏まえて、あなたのお感じになったことをご自由にお書き下さい。

問9 この調査の結果や研究成果物の送付を希望される方は、その旨お書き下さい。

名前(Name):

E-mail:

=ご協力ありがとうございました =

【図表一覧】

図 表	表 題
図Ⅰ－１	本論の枠組み
表Ⅰ－１	本論における[人権]の整理
表Ⅱ－１	体外受精に関する歴史区分
表Ⅱ－２	生殖補助医療と親子関係
表Ⅱ－３	わが国初の「人工授精子」論争
表Ⅱ－４	諸外国の「子どもの出自を知る権利」規定
図Ⅱ－１	DI者の権利擁護のためのソーシャルワーク・システム(案)
図Ⅱ－２	DI児とカップルの構図
図Ⅱ－３	精子の提供を受けたDI児
図Ⅱ－４	胚の提供を受けたDI児
表Ⅱ－５	ドイツ連邦憲法裁判所の見解
表Ⅱ－６	「出自を知る権利」考察の視点
表Ⅱ－７	生殖補助医療に関するスイス連邦法の特徴・目的・独自性
表Ⅱ－８	ドナーの情報公開
表Ⅱ－９	ナラティブ・アプローチの問題
図Ⅲ－１	調査の全体構造(イメージ図)
表Ⅲ－２	調査の構成
図Ⅳ－１	ARTに伴う「カップル」の葛藤
図Ⅳ－２	ARTに伴う「子ども」の葛藤
図Ⅳ－３	AIDを取り巻く当事者への支援の構図
表Ⅳ－３	[生殖補助医療による親子]と[特別]並びに[普通]養子縁組親子の比較
表Ⅳ－４	DI者の発話が向けられた対象とキーターム
表Ⅳ－５	DI者の発話の抽出結果
図Ⅳ－４	DI者を取り巻く課題の構造
図Ⅳ－５	[社会的虐待]の構造及び要素
図Ⅴ－１	DI者の発話の意味・内容・方向性の変化
表Ⅴ－１	回答者の選択上の条件を加味した結果
表Ⅴ－２	回答者の置かれた立場や状況で変化する項目
図Ⅴ－２	イギリスのDI者の声の構造
表Ⅴ－３	DI者の秘密開示と情報入手に関する意識調査(B. コードレイ:抜粋)
図Ⅴ－３	DI者の訴えと願い
図Ⅴ－４	DI者の類型と人権侵害からの解放
図Ⅴ－５	DI者の2度の物語の変化
図Ⅴ－６	時間の長さで自己否定

図V-7	「支援者としての常識」とDI者の悩み
図V-8	対人援助専門職のレスポンスとDI者の求めの比較
表V-4	DI者の発話に対するレスポンス
図V-9	DI者の物語の再構築と支援者の関わり
図V-10	社会的虐待の構造と本調査のターゲット
表V-6	問3)DI者に関する知識レベル
表V-7	問4)対立する価値観への認識
表V-8	問1)性別と問3)DI者についてのクロス表
表V-9	問1)性別と問4)価値観のクロス表
表V-10	問6)思いへの共感
表V-11	問4)価値観と問6)思いへの共感のクロス表
表V-12	問5)-A・Bの単純集計
表V-13	問5-A)に対するパターン行列
表V-14	因子分析結果の再ストーリー化
表V-15	DI者を取り巻く課題の構造比較
表V-16	問7)のa・bの一致度
表V-17	条件付で肯定する群の分析
表V-18	肯定する群のレスポンス
表V-19	条件付で肯定する群のレスポンス
表V-20	中立する群のレスポンス
表V-21	条件付で否定する群のレスポンス
表V-22	否定する群のレスポンス
図V-11	設問7の構図
図V-12	設問7の回答者の認識とレスポンスの概念構成図
図V-13	レディネス・アセスメントの概念
図VI-1	DI者の解放概念の整理
図VI-2	DI者の権利擁護モデル

(表=34点、図=26点、計60点)

本論で用いた図中の記号の意味あるいはイメージ

- ..... : 弱い関連、あるいは説明
- : 一般的な関連
- == : 根拠のある関連
- : 強い関連
- : 一般的な方向
- ➡ : 強い関係のある方向
- ➞ : 実証すべき、あるいは実証された関係のある方向
- : 概念あるいはカテゴリー
- : 形成途中の概念あるいはカテゴリー
- } : 領域、あるいはグループ
- [ ] : 領域、あるいはグループの説明
- , ○ : ジェノグラムの手法に基づく
- , ● : ジェノグラムの手法に基づく
- その他 : エコマップ等マッピング技法の手法に基づく



## 【文献リスト】

### I. はじめに

- アイリーン・ヤングハズバンド／高瀬智津子訳(1975)「ソーシャルワークの未来」『ソーシャルワーク研究』1(1)、10-4
- 秋山薊二(1983)「統合ソーシャルワークをめぐる一その構想および日本の諸理論との関連一」『ソーシャルワーク研究』8(4)、19-35
- 芦部信喜(1994)『憲法学Ⅱ人権総論』有斐閣
- Dennis Saleebey(1992), "*The Strengths perspective in social work practice*", New York : Longman
- Domestic Violence Information and Services (2009), "*Life Line*" (<http://www.domesticviolenceservices.com/abuseassessment.html>) 2009. 05. 01 検索
- Elis Envall, "*Global conflicts and Human Rights Violations : Social Service Action*", IFSW 19<sup>th</sup> conference, 2008. 08. 18.
- Federico Souflee. Jr. /小田兼三訳(1979)「ソーシャルワーク：黙従的専門職業」『ソーシャルワーク研究』5(4)、54-8
- 橋本義郎(1991)「人権と障害者の『訴え』—身体障害者をめぐる事情の検討を中心に—」『ソーシャルワーク研究』17(1)、13-8
- International Federation of Social Workers (2006), "*Biennial Report 2004-2006, Agenda item 9*" (<http://www.ifsw.org/>) 2008. 8. 19. 検索
- International Federation of Social Workers(2000), "*Biennial Report 1998-2000, Agenda item 9*" (<http://www.ifsw.org/>) 2008. 8. 19. 検索
- International Federation of Social Workers (2006), "*General meeting, Minutes, Munich, Germany*" (<http://www.ifsw.org/>) 2008. 8. 19. 検索
- International Federation of Social Workers (2002), "*International policy on Poverty alleviation and the role for Social Workers, Agenda item 13.3*" (<http://www.ifsw.org/>) 2008. 8. 19. 検索
- International Federation of Social Workers (2002), "*Permanent Committee on Ethical Issues- Ethics draft*" (<http://www.ifsw.org/>) 2008. 8. 19. 検索
- International Federation of Social Workers (2004), "*Policy on Globalization and the Environment, general Meeting, Adelaide, Australia*" (<http://www.ifsw.org/>) 2008. 8. 19. 検索
- International federation of social workers (2002), "*Social Work and the Rights of Child-A Professional Training Manual on the UN Convention-*", (=社)日本社会福祉士会国際委員会訳(2004)『ソーシャルワークと子どもの権利』筒井書房)
- 樋口陽一(1996)『人権』三省堂
- 平塚良子(2007)「2006 年度学界回顧と展望ソーシャルワーク部門」『社会福祉学』48(3)、171-82
- 平塚良子(2008)「2007 年度学界回顧と展望ソーシャルワーク部門」『社会福祉学』49(3)、165-77
- 石渡和実(2006)「精神障害者の地域ケア」『新版地域福祉事典』中央法規出版、190-1
- Jim Lantz(1996), "*Cognitive Theory and Social Work Treatment*", Francis J. Turner, Soccial work treatment : interlocking theoretical approaches, The Free press, A Division of Macmillian, Inc. (=ジム・ランズ(1996)「認知理論」フランシス・J・ターナー編／米本秀仁監訳『ソーシャルワーク・トリートメント 相互連結理論アプローチ(上)』中央法規出版、337-86)
- John Shattuck(1995), "*Computer Matching is a serious threat to individual rights*" (=ジョン・ジャット

- ウック／向井大地郎訳(1999)「コンピューターマッチングは個人の権利にとり重大な脅威である」日本学術振興会「未来開拓学術研究推進事業」「情報倫理の構築」プロジェクト『情報倫理学研究資料集Ⅰ』京都大学文学研究科、広島大学文学部、千葉大学文学部、127-33)
- Judith A. B. Lee(1996), *"The Empowerment Approach to Social Work Practice"*, Francis J. Turner, Soccial work treatment: interlocking theoretical approaches, The Free press, A Division of Macmillian, Inc. (= ジュディス・A・B・リー(1996)「エンパワメント・アプローチ」フランシス・J・ターナー編／米本秀仁監訳『ソーシャルワーク・トリートメント 相互連結理論アプローチ(上)』中央法規出版)
- 加茂陽・大下由美(2008)「エビデンス・ベースト・ソーシャルワークの特質(2)ーナラティブ・アプローチとかわらせて」『ソーシャルワーク研究』34(1)、39-55
- 加藤幸信(2005)「人権論の基盤に何を据えるのか」『宮崎県立看護大学研究紀要』5(1)、6-17
- 河野正輝(1993)「社会福祉における人権論の課題」『社会福祉研究』57、30-5
- 川廷宗之・宮嶋淳(2008)『社会福祉をはじめて学ぶあなたへ社会福祉入門ー』ヘルス・システム研究所
- 北野誠一(2008)「エンパワメントの支援」『エンサイクロペディア社会福祉学』中央法規出版、444-7
- 北野誠一(1995)「ヒューマンサービス、エンパワメントそして社会福祉援助の目的」『ソーシャルワーク研究』21(2)、36-47
- 小西加保留(2007)『ソーシャルワークにおけるアドボカシーHIV/ AIDS 患者支援と環境アセスメントの視点からー』ミネルヴァ書房
- 河野正輝(2007)「社会福祉の理念と思想 人権の思想」『エンサイクロペディア社会福祉学』中央法規出版、280-3
- 木原活信(2009)「ソーシャルワークにおける先行研究検討の意義と文献検索の方法」『ソーシャルワーク研究』35(2)、42-9
- 木原活信(2007)「社会福祉実践の枠組み②歴史・沿革」『エンサイクロペディア社会福祉学』中央法規出版、614-7
- 木原活信(2004)「ソーシャルワーク実践への歴史研究の一視角ー『自分のなかに歴史をよむ』ことーナラティブ的可能性をめぐってー」『ソーシャルワーク研究』29(4)、12-9
- 木原活信(2000)「ナラティブ・モデルとソーシャルワーク」加茂陽編『ソーシャルワーク理論を学ぶ人のために』世界思想社、53-84
- 北島英治(2008)『ソーシャルワーク論』ミネルヴァ書房
- 小松源助(1996)「ソーシャルワーク実践におけるストレングス支援の特質とその展開」『ソーシャルワーク研究』22(1)、46-55
- 小松源助(1995)「ソーシャルワーク実践におけるエンパワメント・アプローチの動向と課題」『ソーシャルワーク研究』21(2)、4-10
- 久保美紀(2007)「ソーシャルワークの体系③ソーシャルワークの専門技術」『エンサイクロペディア社会福祉学』中央法規出版、638-43
- 久保美紀(2007)「ソーシャルワークの実践分野③障害児者ソーシャルワーク」『エンサイクロペディア社会福祉学』中央法規出版、694-5
- 久保美紀(2006)「エコマップにおける人と環境の関係の質を読み解く試み」『ソーシャルワーク研究』32(3)、60-7
- 久保美紀(1995)「ソーシャルワークにおける Empowerment 概念の検討-power との関連を中心にー」『ソーシャルワーク研究』21(2)、21-27
- キャサリン・マッキノン「戦時の犯罪、平時の犯罪」スティーヴン・シュョート／スーザン・ハーリー編／中島吉弘・松田まゆみ訳(1998)『人権について』みすず書房、103-36
- 南 博方(1991)「人権の進化と創造」『“人権の歩み”から何を学ぶか』(財)日本学術協力財団、63-80
- 宮嶋 淳・才村眞理(2003)「生殖補助医療に伴う子どもの権利製の社会的支援に関する質的研究」『社会福祉学』

44(1)、34-45

中川 剛(1991)『基本的人権の考え方』有斐閣

日本弁護士連合会(2001)「『厚生科学審議会先端医療技術評価部会生殖補助医療技術に関する専門委員会報告書』に対する意見書」

NIRAクローン・体外受精等研究会(2001)「生命倫理法試案および関連法等との比較」『NIRA』総合研究開発機構、14(6)、55-61

野口裕二(1995)「構成主義アプローチ-ポストモダン・ソーシャルワークの可能性-」『ソーシャルワーク研究』21(3)、28-34

奥平康弘(1993)『憲法Ⅲ 憲法が保障する権利』有斐閣法学叢書

小田博志(2009)「エスノグラフィーとナラティブ」野口裕二編『ナラティブ・アプローチ』勁草書房、27-52

大石嘉一郎(1991)「近代日本の人権思想」『“人権の歩み”から何を学ぶか』(財)日本学術協力財団、35-36

Patricia Kelley(1996), *"Narrative Theory and Social Work Treatment"*, Francis J. Turner, *Social work treatment: interlocking theoretical approaches*, The Free Press, A Division of Macmillan, Inc. (=パトリシア・ケリー(1996)「物語理論」フランシス・J・ターナー編/米本秀仁監訳『ソーシャルワーク・トリートメント 相互連結理論アプローチ(下)』中央法規出版、159-92)

Robert Adams(2003), *"Social work and Empowerment: Third Edition"*, Palgrave Macmillan(=杉本敏夫、齋藤千鶴監訳(2007)『ソーシャルワークとエンパワメント』ふくろう出版)

Roberta R. Greene(1999), *"Human Behavior theory and Social work practice"*, Walter de Gruyter, Inc. (=ロバート・ブランド&ロバート・R.グリーン編/三友雅夫・井上深幸監訳(2006)『ソーシャルワークの基礎理論 人間行動と社会システム』(株)みらい)

Ruth Gavison, *"Privacy and the Limits of Law"*, the Yale Law Journal, 89(3) (=ルース・ゲイビソン/奥田太郎訳(1999)「プライバシーと法の限界」日本学術振興会「未来開拓学術研究推進事業」「情報倫理の構築」プロジェクト『情報倫理学研究資料集Ⅰ』京都大学文学研究科、広島大学文学部、千葉大学文学部、106-15)  
定藤丈弘(1985)「コミュニティ・ワーク」高橋重宏・宮崎俊策・定藤丈弘編著(1981)『ソーシャル・ワークを考える 社会福祉の方法と実践』川島書店、181-208

最高裁判所第二小法廷(2006)「認知請求事件」60(7)、2563

齋藤功高(2008)「憲法解釈の法源としての人権条約-コモン・ロー諸国における現状-」『文教大学国際学部紀要』19(1)、13-28

佐藤幸治(1995)『憲法[第3版]』青林書院

佐藤孝道(2002)「生殖補助医療の進歩と子どもの権利」第2回 FROM Current opinions 資料

佐藤豊道(2007)「アメリカにおけるソーシャルワーク理論と実践-エビデンスベースドの着想と日本への取り組み」『社会福祉研究』100、52-8

佐藤豊道(2007)「ソーシャルワークのアプローチ④ソーシャルワークのアプローチの新しい展開」『エンサイクロペディア社会福祉学』中央法規出版、668-71

佐藤豊道(2001)『ジェネラリスト・ソーシャルワーク研究』川島書店

佐藤豊道(1994)「ソーシャルワーク理論における『人間：環境：時間』概念の検討」『ソーシャルワーク研究』20(1)、16-24

佐藤豊道(1992)「ソーシャルワークの新しい方向の探求-地球規模の環境問題をめぐって-」『ソーシャルワーク研究』17(4)、4-10

(社)日本社会福祉士会(2009)『虐待対応ソーシャルワークモデルに基づく高齢者虐待対応テキスト』22-6

(社)日本社会福祉士会倫理委員会編(2007)『社会福祉士の倫理、倫理綱領実践ガイドブック』中央法規出版

芝野松次郎(2008)「エビデンス・ベースト・ソーシャルワークの特質(1)-量的分析、開発的研究の立場から」『ソ

ーシャルワーク研究』34(1)、4-23

渋谷秀樹・赤坂正浩(2004)『憲法Ⅰ 人権〔第2版〕』有斐閣アルマ

白澤政和(2007)「ソーシャルワークの体系④ケアマネジメント」『エンサイクロペディア社会福祉学』中央法規出版、644-9

白澤政和(2006)「地域における自立支援とケアマネジメント」『新版地域福祉辞典』中央法規出版、418-9

副田あけみ(2007)「日本におけるソーシャルワーク実践のゆくえ」『社会福祉研究』100、44-51

杉本大一郎(1991)「科学技術と人権」『“人権の歩み”から何を学ぶか』財団法人日本学術協力財団、47-62

高野雄一(1977)『国際社会における人権』岩波書店

辻村みよ子(2002)『市民権の可能性～21世紀の憲法・デモクラシー・ジェンダー』有信堂

辻村みよ子(2000)『憲法』日本評論社

辻村みよ子(1992)『人権の普遍性と歴史性』創文社

多賀谷一照(1999)「プライバシー概念の多様性」FINE プロジェクト(1999)日本学術振興会「未来開拓学術研究推進事業」「情報倫理の構築」プロジェクト『情報倫理学研究資料集Ⅰ』京都大学文学研究科、広島大学文学部、千葉大学文学部、17-24

高橋重宏(2007)「子どもの権利擁護」『エンサイクロペディア社会福祉学』中央法規出版、930

高橋重宏・宮崎俊策・定藤文弘編著(1981)『ソーシャル・ワークを考える 社会福祉の方法と実践』川島書店

千田有紀(2001)「構築主義の系譜学」上野千鶴子編『構築主義とは何か』勁草書房、2-44

Vishanthi Sewpaul(IASSW Chair) and Daavid Jones(IFSW Co-Chair), *"Global Standards for the Education and Training of the Social work Profession"*, Adopted at the General Assemblies of IASSW and IFSW, Adelaide, Australia in 2004

Vivien Burr(1995), *"An Introduction to Social Constructivism"*, London: Routledge (=田中一彦訳(1997)『社会的構築主義への招待』川島書店)

鷺江義勝編著(200)『リスボン条約による欧州統合の新展開 EUの新基本条約』ミネルヴァ書房

渡辺久子(2008)「生殖補助医療で生まれた子どもの心」『子育て支援と世代間伝達 母子相互作用と心のケア』金剛出版、132-43

渡部律子(2009)「ソーシャルワークの研究方法：ソーシャルワーク研究の発展に向けて」『ソーシャルワーク研究』35(2)、4-16

米本秀仁(2008)「理論的背景」『エンサイクロペディア社会福祉学』中央法規出版、658-61

横山登志子(2008)『ソーシャルワーク感覚(グラウンデッド・セオリー・アプローチ)』弘文堂

## Ⅱ. 先行研究調査

赤城恵子(2009)「不妊状態の心理と支援のあり方を考える～カウンセリングの事例から～」『日本生殖医学会雑誌』54(1・2)、64-5

明石勝英・道免聚二・佐々木誠・他(1965)「札幌医大産婦人科教室における人工授精の成功例について」『産婦人科治療』11(6)、1-8

秋月百合・甲斐一郎・赤林朗(2001)「非配偶者間人工授精に対する一般住民の意識とその関連要因」『生命倫理』11(1)、62-70

秋山薊二(2004)「社会構成主義とナラティブ・アプローチーソーシャルワークの視点からー」『関東学院大学人文科学研究所報』27、3-16

Alison Motluk(2005), *"Anonymous sperm donor traced on internet"*, New Scientist, com news service

安藤画一(1967)「所謂・人工授精に関する常識的概説」『慶応医学』44(4)、393-398



- 朝日新聞厚生事業団(1949. 9. 10)『週刊家庭朝日』
- 朝日新聞厚生事業団(1949. 9. 24)『週刊家庭朝日』
- 青木隆嘉(1966)「恥について」福岡女子大学『文芸と思想』28、33-56
- Centers for Disease Control and Prevention(2008), *"2006 Assisted Reproductive Technology (ART) Report"*, (<http://www.cdc.gov/ART/ART2006/download.htm>), 2009. 05. 15. 検索
- Centers for Disease Control and Prevention(2006), *"2004 Assisted Reproductive Technology (ART) Report"*, (<http://www.cdc.gov/ART/ART2006/download.htm>), 2008. 05. 10. 検索
- CNN, *"States urged to open adoption records"* (<http://cnn.site.printthis.clickability.com/>) 2007. 11. 18. 検索
- Debora L Spar(2004), *"The Baby Business: How Money, Science, and Politics Drive the Commerce of Conception"* (=椎野淳訳(2006)『ベビー・ビジネス 生命を売買する新市場の実態』ランダムハウス講談社)
- Donor Offspring May Feel Betrayal, *"Anger: Study - Medical News Today News Article"* (<http://www.medicalnewstoday.com/>) 2008. 06. 27. 検索
- Donor Sibling Registry(2008), *"Advise, Stories, and Thoughts from Donor Families"* (<http://donesiblingregistry.com/DSR.doc>) 2008. 06. 27. 検索
- Donor Sibling Registry(2006), *"Donor Disclosure: when telling the truth to your child isn't easy, and what to do about it"*, (<http://donesiblingregistry.com/DSR.doc>) 2008. 6. 20. 検索
- Dow Jones, *"Women Line Up To Donate Eggs - for Money"*, (<http://online.wsj.com/article>) 2009. 01. 11. 検索
- 海老原明夫(1998)「自己の出自を知る権利と嫡出否認 - ドイツ連邦憲法裁判所の判決と親子法の改正」『法学協会雑誌』115(3)、349-409
- Ellen Singer (2003), *"Talking with Children Conceived Through Donor Insemination, IVF with Egg Donor or Surrogacy-Should I Tell & When to Tell?"* The Center for Adoption Support and Education, Inc.
- Eric Blyth(2005), *"The challenge of removing donor anonymity in donor conception"* (=慶応大学付属病院内での講演原稿)
- Ethics Committee of the American Society for Reproductive Medicine, *"Informing offspring of their conception by gamete donation"* (<http://www.asrm.org/Media/Ethics/ethicsmain.html>) 2007. 11. 10. 検索
- 福武公子(2003)「生殖医療と人間の権利」『第二東京弁護士会広報』15、2-5
- Fairfax Cryobank, *"Dear Editor"*, (<http://www.fairfaxcryobank.com>) 2006. 10. 19. 検索
- Francis J. Turner (1996), *"Social work treatment: interlocking theoretical approaches"*, The Free Press, A Division of Macmillan, Inc. (=フランシス・J・ターナー編/米本秀仁監訳(1999)『ソーシャルワーク・トリートメント 相互連結理論アプローチ(下)』中央法規出版)
- Federal Interagency Forum on Child and Family Statistics(2007), *"America's Children: Key National Indicators of Well-being 2007"*.
- Genetics & IVF Institute(<http://www.givf.com/index.cfm>) 2007. 08. 10. 検索
- Goran Ewerlof & Tor Sverne(1998), *"Barnets basta Om foraldrars och samhällets ansvar"*, Fjarde upplagen, Stockholm(=ヨラン・エーヴェルリユーフ&トル・スヴェーネ著/菱木昭八朗訳(2000)「子の最善—子どもに対する親と社会の責任—」松田晋哉『厚生科学研究費補助金厚生科学特別研究事業「諸外国の卵子・精子・胚の提供等による生殖補助医療に係る制度及び実情に関する調査研究」(平成 13 年度総括研究報告書)』、236-54)
- 萩原清子(2003)「家族介護者がなぜ虐待者になるのか」『へるす出版生活教育』47(11)、31-37
- 林 弘正(2000)「姦通罪の法制史的一考察(一)」中央大学法学会編『法学新報』中央大学法学会、93-187



- 林 弘正(2000)「姦通罪の法制史的一考察(二)」中央大学法学会編『法学新報』中央大学法学会、77-193
- 林 弘正(2000)「姦通罪の法制史的一考察(三・完)」中央大学法学会編『法学新報』中央大学法学会、115-53
- 早野利明(2001)「判例研究 人工授精子の嫡出推定(大阪地判平成 10. 12. 18 家月 51 巻 9 号 71 頁)」『Artes Liberales』68、189-195
- 春名麻季(2003)「自己の出自をめぐる憲法上の利益についてードイツの「出自を知る権利」を中心にー」『六甲台論集 法学政治学篇』49(3)、19-42
- 菱木昭八朗(2000)「資料 1998 年改正スウェーデン親子法」『専修法学論集』79、85-151
- 菱木昭八朗(1985)「スウェーデン人工授精法と改正親子法における人工授精子の父性」『ジュリスト』835、114-123
- 細川清(1988)『新しい養子法～入門から戸籍・家事審判の実務まで～』(社)民事法情報センター
- 稲熊利和(2007)「生殖補助医療への法規制をめぐる諸問題ー代理懐胎の是非と親子関係法政の整備等についてー」参議院事務局企画調整室編『立法と調査』263、128-36
- 飯塚理八・中村幸雄(1967)「人工授精の適応と方法」『産婦人科治療』15(1)、5-10
- 飯塚理八・高橋輝雄(1966)「人工授精の実際」『産婦人科の実際』15(10)、883-889
- 石井トク(2006)「生殖医療における倫理的問題と対応ー『出自を知る権利』をめぐる諸問題」『日本不妊看護学会誌』(日本不妊看護学会)3(1)、25-8
- 石井トク(2001)「判例にみるジェンダー(1) 非配偶者間人工授精で出生した子と父親の法的関係」『助産婦雑誌』55(1)、84-6
- 石川 准(1999)『人はなぜ認められたいのかーアイデンティティ依存の社会学』旬報社
- 石川 稔(1985)「新・家族法事情 - 11 - 精子銀行-2-アメリカにおける人工授精子法の展開」『法学セミナー』363、54-9
- 石川元春(2005)「生殖補助医療の近未来」『産婦人科の世界』57(8)、5-10
- 岩男寿美子・加藤千恵編(1997)『女性学キーワード』有斐閣双書
- 岩崎美枝子(2007)「提供型生殖補助医療を受けて生まれた子どもとその親への心理的社会的サポートについてⅡー配偶子・胚の提供を受けて生まれた子への告知はいかにあるべきかー」吉村泰典『厚生労働科学研究費補助金 子ども家庭総合研究事業 生殖補助医療の安全管理および心理的支援を含む統合的運用システムに関する研究』248-287
- 岩崎美枝子(2006)「配偶子・胚提供による親子への心理的支援」吉村泰典『厚生労働科学研究費補助金 子ども家庭総合研究事業 生殖補助医療の安全管理および心理的支援を含む統合的運用システムに関する研究』174-224
- Jeffrey M. Berry (1999), *"The New Liberalism: The Rising Power of Citizen Groups"*, The Brookings Institution(=ジェフリー・M・ベリー／松野弘(2009)『新しいリベラリズム 台頭する市民活動パワー』ミネルヴァ書房)
- Joanna E. Scheib, Rachel A. Cushing (2007), *"Open-identity donor insemination in the United States: is it on the rise?"*, Fertility and sterility, American Society for Reproductive medicine、88(1)、231-2
- 加茂陽・大下由美(2001)「エンパワーメント論: ナラティブ・モデルの批判的吟味」『社会福祉学』42(1)、12-22
- 川廷宗之(2008)「なぜ、貧困になるのか・貧困に陥る仕組み」川廷宗之・宮嶋 淳共編著『社会福祉をはじめて学ぶあなたへ社会福祉入門ー』ヘルス・システム研究所、42-62
- 川廷宗之(2007)「社会的虐待の構造とソーシャルワークの課題」日本社会福祉実践理論学会『日本社会福祉実践理論学会第 2 4 回大会プログラム』6
- 金城清子(2003)「子どもの出自を知る権利」『助産婦雑誌』57(3)、
- 金城清子(1998)『生命誕生をめぐるバイオエシックスー生命倫理と法ー』日本評論社

- 「絆の会」(1997)『家族づくりー縁組家族の手記ー』世織書房
- 喜多明人(2009)「日本における子どもの権利の現状・課題・展望」喜多明人・森田明美・荒牧重人・李在然・安東賢・李亮喜編『子どもの権利ー日韓共同研究』日本評論社、19-26
- 木原活信(2009)「社会福祉領域におけるナラティブ論」野口裕二編『ナラティブ・アプローチ』勁草書房、153-76
- 小池隆一(1952)「人工授精とその法律問題」法学研究会『法学研究』25(8)、1-13
- 国際社会福祉協議会スウェーデン国内委員会／大谷リツ子訳(1994)「国内養子縁組のためのガイドライン草案」養子と里親を考える会編『新しい家族』
- 厚生科学審議会先端医療技術評価部会生殖補助医療技術に関する専門委員会「精子・卵子・胚の提供等による生殖補助医療のあり方についての報告書」、2000年12月28日
- 厚生労働省雇用均等・児童家庭局母子保健課(2007)「生殖補助医療に係る調査結果の概要について」
- 厚生労働省雇用均等・児童家庭局母子保健課(2003)「精子・卵子・胚の提供等による生殖補助医療制度の整備に関する報告書」
- 厚生労働省第2回生殖補助医療部会「資料3 精子・卵子・胚の提供等による生殖補助医療に関する制度整備の具体化のための要検討事項(案)」2001年8月15日
- 子どもの人権保障をすすめる各界連絡協議会、反差別国際運動日本委員会編(1999)『子どもの権利条約のこれから』エイデル研究所
- 近藤康子(1995)『コルチャック先生』岩波ジュニア新書
- 古澤頼雄・富田庸子・石井富美子・塚田・城みちる・横田和子(2003)「非血縁家族における若年養子へのテリングー育て親はどのように試みているか?」中京大学心理学研究科・心理学部『紀要』3(1)、1-6
- 日下和代・清水清美・長沖暁子(2006)「非配偶者間人工授精で生まれた人の心理」『慶應義塾大学日吉紀要・言語・文化・コミュニケーション』37、93-101
- 串 信(2003)「生殖補助医療における「子どもの出自を知る権利」についての倫理的考察」『医学哲学医学倫理』21
- 久慈直昭・高垣栄美・福地智恵・他「非配偶者間人工授精により挙児に至った男性不妊患者の意識調査」日本不妊学会『日本不妊学会雑誌』45(3)、41-45
- 久保絃章(1992)「ライフ・ヒストリーとソーシャルワーク」『ソーシャルワーク研究』18(3)、22-28
- Lenore E. Walker(1979), *"The Battered Woman"*, Harper & Row(=レノア・E・ウォーカー／斎藤学監訳(1997)『バタードウーマン』金剛出版)
- Manchester Evening News, *"Men still donating sperm - Health - News - Manchester Evening News"*  
(<http://www.manchestereveningnews.co.uk/news/>) 2007.05.31. 検索
- 松田晋哉(2000)「諸外国の卵子・精子・胚の提供等による生殖補助医療に係る制度及び実情に関する調査研究」『厚生科学研究費補助金厚生科学特別研究事業「諸外国の卵子・精子・胚の提供等による生殖補助医療に係る制度及び実情に関する調査研究(平成13年度総括研究報告書)」』、1-6
- 松倉耕作(2002)「スイス生殖補助医療法と人工授精」『判例タイムズ』53(25)、44-50
- 松倉耕作(1995)「子による嫡出否認の比較-2完-」南山大学法学会『南山法学』18(4)、63-120
- 松倉耕作(1994)「子による嫡出否認の比較-1-」南山大学法学会『南山法学』18(3)、1-56
- 松本信愛(1988)「人工授精および体外受精に関するパチカンの見解」『サピエンチア』22、53-68
- 松岡敏夫・田中基史・砂堀公二・他(1979)「非配偶者間人工授精(AID)の成績について」『日本産科婦人科学会雑誌』31(7)、805-12
- 宮沢浩一(1963)「人工授精と姦通罪ーイタリアの判例、学説からー」『総合法学』6(8)、33-41
- 森 崇高(2005)「体外受精学小史」『医学のあゆみ』213(3)、163-8
- 村瀬嘉代子(1997)『子どもと家族への援助ー心理療法の実践と応用ー』金剛出版

- 永井憲一(1998)「子どもの権利条約と日本の裁判に関する研究の意義」永井憲一編著『子どもの人権と裁判—子どもの権利条約に即して—』法政大学現代法研究所、11-6
- 永井憲一編(1992)『子どもの権利条約の研究』法政大学出版
- 長沖暁子(2002)「語られない不妊：不妊の現状と治療の実態」『助産婦雑誌』56(2)、126-30
- 中川 淳(1973)「現代家族法の諸問題」『法学セミナー』209、60-4
- 新村 出編(1979)『広辞苑』岩村書店
- 日本弁護士連合会(2001)「厚生科学審議会先端医療技術評価部会生殖補助医療技術に関する専門委員会報告書」に対する意見書」
- 仁科進弘(1969)「非配偶者間人工授精第二児に関する研究」『日本不妊学会雑誌』14(4)、361-72
- 野口裕二(2009)「ナラティブ・アプローチの展開」野口裕二編『ナラティブ・アプローチ』勁草書房、1-26
- 野口裕二(2009)「ナラティブ・アプローチの展望」野口裕二編『ナラティブ・アプローチ』勁草書房、257-79
- 日本学術会議(2008)「生殖補助医療のあり方検討委員会報告書」
- 日本学術会議(1999)『生殖医療と生命倫理』(財)日本学術協力財団
- 日本学術会議(1990)『子どもの人権を考える』(財)日本学術協力財団
- Naomi Cahn(2008), *"Necessary Subjects: The Need for a Mandatory National Donor Gamete Registry"*, (<http://www.donorsiblingregistry.com/index.php>) 2009. 04. 20. 検索
- 織田有基子(2005)「アメリカにおける代理出産と母子関係」『学術の動向』10(5)、30-5
- 小野幸二(2005)「アメリカにおける生殖補助医療の現状」『産婦人科の世界』57、45-9
- 奥平康弘(1983)「女と男の関係と国家権力—姦通罪考」『法学セミナー』346、8-11
- Olivia Montuschi(2006), "Telling & Talking" (=オリビア・モンツチ／才村眞理訳(2008)『テリング&トーキング』
- 大野虎之進・椎名正樹・小田高久(1979)「最近の人工授精の問題」『産婦人科の実際』28(5)、21-3
- 大田 堯(1990)『子どもの権利条約を読む』岩波ブックレット No. 156
- Raimond Gaita (1998), *"A common humanity thinking about love and truth and justice"*, The Text Publishing Company, Australia
- 才村眞理(2009)「平成家族考 生殖補助医療で生まれた子どもたちと家族①」『月刊福祉』5、82-3
- 才村眞理(2009)「平成家族考 生殖補助医療で生まれた子どもたちと家族②」『月刊福祉』6、82-3
- 才村眞理(2009)「平成家族考 生殖補助医療で生まれた子どもたちと家族③」『月刊福祉』7、82-3
- 才村眞理(2008)『生殖補助医療で生まれた子どもの権利』福村出版
- 才村眞理(2007)「生殖補助医療で生まれた子どもの自助グループの可能性」『帝塚山大学心理福祉学部紀要』3
- 才村眞理(2005)「子どもの出自を知る権利の必要性—生殖補助医療と養子制度より—」『心理福祉学部紀要』1、29-39
- 才村眞理(2005)「アメリカのビル・コードレイ(Bill Cordray)へのインタビュー記録」平成16年度財団法人三菱財団助成研究『「子どもの出自を知る権利を保障するための福祉教育のあり方に関する研究」報告書』、52-9
- 桜井 厚(1992)「社会学におけるライフ・ヒストリー研究—その手法における特質と問題—」『ソーシャルワーク研究』18(3)、16-21
- 佐藤豊道(1992)「ソーシャルワークにおけるライフ・ヒストリー把握の史的変遷」『ソーシャルワーク研究』18(3)、4-15
- 佐藤欣子(1992)「冗談もほどほどに『子供の人権』」『現代のエスプリ 児童の権利条約』、134-41
- 新保庄三(1996)『コルチャック先生と子どもたち：ポーランドが子どもの権利条約を提案した理由』萌文社
- 下村哲夫(1992)「権利主体としての子ども、そして親、国—権利の構造」『現代のエスプリ 児童の権利条約』、83-96

- (社)家庭養護促進協会(1985)『成人里子の生活と意識調査』
- South Australian Council on Reproductive Technology Parenting SA Child and Youth Health(2003) *"Donor conception-telling your child"* Parent Easy Guide 80
- 須藤次郎(1952)「人工授精に関する法律上の若干問題」『法学研究』法学研究会 25(8)、40-61
- 鈴木啓太郎・左合治彦・林 聡(2005)「生殖補助医療と多胎妊娠・分娩」『周産期医学』35(10)、1342-6
- 玉城 肇(1949)「一夫一婦制の解剖」『婦人の世紀』9、26-36
- 田中 実(1962)「資料 人工授精に関する若干の調査」『法学研究』法学研究会 35(8)、80-5
- 田中 実(1952)「家族の法理からみた『人工授精』の問題」『法学研究』法学研究会 25(8)、14-35
- 高橋重宏(1998)『子ども家庭福祉論』放送大学教育振興会
- 高梨公之監修(1996)『実例民法』自由国民社
- 高梨公之(1969)「人工授精と父」『時の法令』683、11-5
- 高梨公之(1959)「人工授精児十年の歩み」『時の法令』306、23-7
- 武部 啓(2000)「遺伝子解析の生命倫理」『生命倫理』10(1)、11-9
- The Evan B. Donaldson Adoption Institute (2009), *"Applying Adoption Research and Experience to Assisted Reproductive Technology Policy & Practice Perspective"* Funded and Prepared
- The Human Genome Organization International Ethics Committee(2000), *"Benefit sharing"* (=ヒトゲノム解析組織(HUGO)倫理委員会/草間麻子・武部啓訳「利益の共有に関する声明」『生命倫理』10(1)、16-9)
- Thomas K. Sylvester (2002), *"The Case Against Sperm Donor Anonymity"*, Yale Law School
- 千葉華月(2000)「『最善の利益』基準を考える」『生命倫理』10(1)、167-75
- Tobias Heims(1999), *"Die Feststellung der biologischen Abstammung"* Eine rechtsvergleichende Untersuchung zum deutschen und französischen Recht(=トビアス・ヘルムス/野沢紀雄・遠藤隆幸訳(2002)『生物学的出自と親子法—ドイツ・フランス法の比較法的考察—』中央大学出版部)
- 床谷文雄(2003)「匿名出産とBabyklappen - 生への権利と出自を知る権利」『阪大法学』53(3・4)、795-819
- 殿村琴子(2007)「生殖補助医療と親子関係について」『life design report』177、24-31
- 所 彩子(2000)「『AID児の自己の出自を知る権利』について—憲法上の権利と構成する必要性」法政大学大学院法律学専攻委員会『法政法学』25、65-114
- 塚本智宏(2004)『コルチャック子どもの権利の尊重 子どもはすでに人間である』子どもの未来社
- 田垣正晋(2004)「中途障害者を理解する方法としてのライフストーリー研究の意義」『ソーシャルワーク研究』30(3)、54-61
- 高野光子・久慈直昭・持丸佳之・他(2009)「非配偶者間人工授精(AID)の適応の変化について」『日本生殖医学会雑誌』54(1・2)、56
- 植松 正(1964)「人工授精半義通説」『時の法令』516、18-21
- Victoria Clay Wright, Jeani Chang, Gary Jeng, Michael Chen, Maurizio Macaluso, Division of Reproductive Health National Center for Chronic Disease Prevention and Health Promotion(2007), *"Assisted Reproductive Technology Surveillance - United States, 2004"*,  
(<http://www.cdc.gov/mmwr/preview/mmwrhtml/ss5606a1>) 2007.8.10. 検索
- 和田仁孝(2009)「紛争をめぐるナラティブと弾力性 司法へのナラティブ・アプローチ」野口裕二編『ナラティブ・アプローチ』勁草書房、203-30
- 渡辺久子(2002)「生殖補助医療を受ける夫婦と生まれた子への心のケア」(第15回生殖補助医療部会参考資料2)
- 渡邊孝三(1992)「子どもの権利思想の発展と歴史—戦後を中心に」『現代のエスプリ 児童の権利条約』45-50
- 若井弥一(1992)「子どもの人権—その内容と保障の課題」『現代のエスプリ 児童の権利条約』97-102
- ヨラン・エーゲルリフ&トールスガ&エネ著/菱木昭八朗訳(1998)「子の最善—子どもに対する親と社会の責任—」松田



- 晋哉『諸外国の卵子・精子・胚の提供等による生殖補助医療に係る制度及び実情に関する調査研究(厚生科学研究費補助金厚生科学特別研究事業)』平成13年度総括研究報告書 附属資料I-④-①-3
- 吉村泰典(2007)『生殖補助医療の安全管理および心理的支援を含む統合的運用システムに関する研究』厚生労働科学研究費補助金平成18年度研究報告書
- 吉村泰典(2005)『生殖補助医療の安全管理および心理的支援を含む統合的運用システムに関する研究』厚生労働科学研究費補助金平成16年度研究報告書
- 吉村泰典(2002)「生殖補助医療に関するインフォームド・コンセンスト特に非配偶者間体外受精の場合のインフォームド・コンセンストのあり方についての指針」(第15回生殖補助医療部会資料5)
- 山本進一(1958)「人工授精をめぐる法律問題—この子のパパは誰か—」『時の法令』274、20-4
- 山下晋司・船曳建夫編(1997)『文化人類学キーワード』有斐閣双書
- 湯沢雅彦(1995)『図説家族問題の現在』日本放送出版協会
- (財)地域改善啓発センター(1994)「巻末資料」『人権に関する国際資料集—1993—』1-9

### Ⅲ. 研究の方法

- Amartya Sen(1992), *"Inequality Reexamined"*, Oxford University Press (=アマルティア・セン/池本幸夫・野上裕生・佐藤仁訳(1999)『不平等の再検討』岩波書店)
- Arthur J. Vidich, Stanford M. Lyman, Norman K. Denzin and Yvonna S. Lincoln, *"Handbook of qualitative research, second edition"*, Sage Publication, Inc. (=アーサー・J・ヴィディッチ&スタンフォード・M・ライマン(2006)「質的方法：社会学と人類学の歴史」ノーマン・K・デンジン、イヴォンナ・S・リンカン編/平山満義監訳(2006)『質的研究ハンドブック1巻 質的研究のパラダイムと眺望』北大路書房、35-62)
- Clifford G. Cheistians, Norman K. Denzin and Yvonna S. Lincoln, *"Handbook of qualitative research, second edition"*, Sage Publication, Inc. (=クリフォード・G・クリスチャンズ(2006)「質的調査における倫理と政治」ノーマン・K・デンジン、イヴォンナ・S・リンカン編/平山満義監訳(2006)『質的研究ハンドブック1巻 質的研究のパラダイムと眺望』北大路書房、115-36)
- Davydd J. Greenwood, Morten Levin, Norman K. Denzin and Yvonna S. Lincoln, *"Handbook of qualitative research, second edition"*, Sage Publication, Inc. (=デヴィッド・J・グリーンウッド&モーテン・レヴィン(2006)「アクション・リサーチによる大学と社会の関係の再構築」ノーマン・K・デンジン、イヴォンナ・S・リンカン編/平山満義監訳(2006)『質的研究ハンドブック1巻 質的研究のパラダイムと眺望』北大路書房、63-85)
- Donald Brieland/畠山龍郎訳(1978)「歴史的回顧」『ソーシャルワーク研究』4(2)、48-9
- 深谷美枝・大瀧敦子(1995)「実践から理論を導き出すために(1)-グラウンデッド・セオリーによるソーシャルワーク研究の可能性-」『ソーシャルワーク研究』21(1)、39-43
- 濱田嘉昭(2007)『科学的な見方・考え方』放送大学教育振興会
- 平山 尚(2003)「ソーシャルワークと科学的方法」平山尚・武田丈・呉裁喜・藤井美和・李政元『ソーシャルワーカーのための社会調査法』ミネルヴァ書房、1-19
- 平山 尚(2003)「シングル・システム・デザイン」平山尚・武田丈・呉裁喜・藤井美和・李政元『ソーシャルワーカーのための社会調査法』ミネルヴァ書房、128-47
- 岩田正美(2006)「なぜ、何を研究するのか」岩田正美・小林良二・中谷陽明・稲葉昭英編『社会福祉研究法 現実世界に迫る14レッスン』有斐閣アルマ、3-18
- Joe L. Kincheloe, Peter McLaren, Norman K. Denzin and Yvonna S. Lincoln, *"Handbook of qualitative research, second edition"*, Sage Publication, Inc. (=ジョー・L・キンチェロー&ピーター・マクラレーン



- (2006)「批判理論および質的研究再考」ノーマン・K・デンジン、イヴォンナ・S・リンカン編／平山満義監訳(2006)『質的研究ハンドブック 1 巻 質的研究のパラダイムと眺望』北大路書房、243-271)
- 科学技術・学術審議会学術分科会(2009)「人文学及び社会科学の振興について(報告)ー「対話」と「実証」と通じた文明基盤形成への道ー」
- 木原活信(2007)「解放のソーシャルワーク」横田恵子編『解放のソーシャルワーク』世界思想社、41-69
- 木下芳子(2002)「感情の理解ー赤ちゃんからの発達」川浦康至・佐々木龍章編『現代のエスプリ 喜怒哀楽 感情の人間学』105-17
- 北川清一(2009)「ソーシャルワーク研究における批判的分析の方法ー児童養護施設実践を素材にしてー」『ソーシャルワーク研究』34(2)、50-6
- 北川清一・相澤譲治・久保美紀編／志村健一著(2004)『ソーシャルワーク・リサーチの方法』相川書房
- 北島英治(1985)「ソーシャルワーク・リサーチについて」『ソーシャルワーク研究』10(4)、53-61
- 桑田 繁「ソーシャルワークにおける単一事例調査法のデータ評価」『ソーシャルワーク研究』23(4)、51-4
- Lynne W Spencer(2007), "Sperm Donor Offspring - identity and other experiences", Lynne W Spencer
- 盛山和夫(2004)『社会調査法入門』有斐閣ブックス
- 中谷茂一(1997)「子どもへの不適切な関わりに対する専門職の認識構造」『社会福祉学』38(2)、81-96
- 日本学術会議・学術と社会常置委員会(2003)「科学における不正行為とその防止について」
- 日本社会福祉学会(2004)「研究倫理指針」
- 野家啓一(2004)『科学の哲学』放送大学教育振興会
- 野口裕二(2009)「ナラティブ・アプローチの展開」野口裕二編『ナラティブ・アプローチ』勁草書房、1-26
- 小田博志(2009)「エスノグラフィーとナラティブ」野口裕二編『ナラティブ・アプローチ』勁草書房、27-52
- 岡知史(2003)「質的研究法」久田則夫編『社会福祉の研究入門 計画立案から論文執筆まで』中央法規出版、115-47
- 才村真理(2005)『平成 16 年度三菱財団社会福祉助成事業「子どもの出自を知る権利を保障するための福祉教育のあり方に関する研究」報告書』
- 西條剛央(2007)『ライブ講義質的研究とは何か SCQRM ベーシック編』新曜社
- Thomas A. Schwandt, Norman K. Denzin and Yvonna S. Lincoln, "*Handbook of qualitative research, second edition*", Sage Publication, Inc. (=トーマス・A・シュワント(2006)「質的探求の 3 つの認識論的立場: 解釈主義、解釈学、社会構築主義」ノーマン・K・デンジン、イヴォンナ・S・リンカン編／平山満義監訳(2006)『質的研究ハンドブック 1 巻 質的研究のパラダイムと眺望』北大路書房、167-92)
- 鈴木祐子・木村恭子・刀根洋子・及川裕子(2001)「子ども虐待の認識ービネット調査を試みてー」『日本赤十字武蔵野短期大学紀要』14、53-66
- 高橋規子・吉川 悟(2001)『ナラティブ・セラピー入門』金剛出版
- 高橋重宏・庄司順一・中谷茂一・他(1996)「子どもの不適切な関わり(マルトリートメント)のアセスメント基準とその社会的対応に関する研究(3)ー子どもの虐待に関する他職種間の比較を中心にー」『日本愛育研究所紀要』33、127-41
- 山口真里(2006)「ソーシャルワークにおけるストレングス・パワー変容過程の意義ーソーシャルワーク事例の分析からー」『ソーシャルワーク研究』32(1)、49-57
- 米本秀仁(2006)「研究の倫理」岩田正美・小林良二・中谷陽明・稲葉昭英編『社会福祉研究法 現実世界に迫る 14 レッスン』有斐閣アルマ、57-72
- Yvonna S. Lincoln, Egan G. Guba, Norman K. Denzin and Yvonna S. Lincoln, "*Handbook of qualitative research, second edition*", Sage Publication, Inc. (=イヴォンナ・S・リンカン&エゴン・G・グーバ(2006)「パラダイムに関する論争、矛盾、そして合流の兆候」ノーマン・K・デンジン、イヴォンナ・S・リンカン編／平山満義監訳(2006)『質的研究ハンドブック 1 巻 質的研究のパラダイムと眺望』北大路書房、145-66)

Yvonna S. Lincoln, Norman K. Denzin, Norman K. Denzin and Yvonna S. Lincoln, *"Handbook of qualitative research, second edition"*, Sage Publication, Inc. (=イヴォンナ・S・リンカン&ノーマン・K・デンジン (2006)「質的研究の第7期：過去からの脱出」ノーマン・K・デンジン、イヴォンナ・S・リンカン編／平山満義監訳(2006)『質的研究ハンドブック1巻 質的研究のパラダイムと眺望』北大路書房、337-56)

(財)日本児童福祉協会、厚生労働省雇用均等・児童家庭局家庭福祉課監修 (2003)『子どもを健やかに養育するために～里親として子どもと生活をするあなたへ～』

#### IV. 研究の結果[1]

Amitai Etzioni(1996), *"The New Golden Rule : Community and Morality in a Democratic Society"*, Basic Books, A Division of Harper Collins Publishers(=アミタイ・エチオーニ／永安幸正監訳(2001)『新しい黄金律 [善き社会]を実現するためのコミュニタリアン宣言』麗澤大学出版会)

細川清(1988)『新しい養子法～入門から戸籍・家事審判の実務まで～』(社)民事法情報センター

池田清彦(2007)「科学的方法について-構造主義科学論の考え方-」西條剛史・京極真・池田清彦『構造構成主義研究1 現代思想のレボリューション』(株)北大路書房、208-24

池田謙一・村田光二(1991)『心と社会 認知社会心理学への招待』東京大学出版会

岩田正美(2008)『社会的排除 参加の欠如・不確かな帰属』有斐閣 insight

川廷宗之(2008)「社会的虐待の構造とソーシャルワークの課題」『社会福祉実践理論研究』17、29-42

木原活信(2000)「ナラティブ・モデルとソーシャルワーク」加茂陽編『ソーシャルワーク理論を学ぶ人のために』世界思想社、54-84

「絆の会」(1997)『家族づくりー縁組家族の手記』世織書房、392

許末恵監修、養子と里親を考える会訳(1996)「国内養子縁組及び国際養子縁組並びに養育家庭ケアに関するガイドライン草案」『新しい家族』29、81-90

古澤頼雄・富田庸子・石井富美子・塚田・城みちる・横田和子(2003)「非血縁家族における若年養子へのテリングー育て親はどのように試みているか?」中京大学心理学研究科・心理学部『紀要』3(1)、1-6

北島英治(1994)「家族ソーシャルワークとは何か」『ソーシャルワーク研究』20(2)、41-49

Lois Ruskai Melina(1986), *"RAISING ADOPTED CHILDREN: A Manual for Adoptive Parents"*, (=ロイス R. メリーナ／伊坂青司・岩崎暁男監訳(1992)『子どもを迎える人の本』どうぶつ社)

松嶋秀明(2003)「非行臨床におけるナラティブ・プラクティスー少年更生保護施設におけるソーシャルスキルズ・トレーニングの観点から」『現在のエスプリ ナラティブ・プラクティス』至文堂、85-97

Monica McGoldrick, Randy Gerson, Sylvia Shellenberger (1999), *"Genograms Assessment and Intervention 2nd Edition"*, W. W. Norton & Company, Inc. (=M・マクゴールドリック、R・ガーソン、S・シェレンバーガー／石川元、佐野祐華、劉イーリン訳(2009)『ジェノグラム(家系図)の臨床 家族関係の歴史に基づくアセスメントと介入』ミネルヴァ書房)

森敏昭・中條和光(2005)『認知心理学キーワード』有斐閣双書

長倉 功(1976)「逆説的ソーシャルワーク論入門」『ソーシャルワーク研究』2(4)、39-44

岡 知史(2003)「質的研究法」久田則夫編『社会福祉の研究入門 計画立案から論文執筆まで』中央法規出版、115-47

Richard (Rick) deGaris Doble(2009), *"Abusive Love"*  
([http://www.abusivelove.com/abuse\\_types\\_1\\_20.htm](http://www.abusivelove.com/abuse_types_1_20.htm))2009. 05. 01. 検索

SAFE - HOME (2009)  
(<http://www.safehome-ks.org/SiteResources/Data/Templates/>)2009. 05. 01. 検索

- 才村眞理(2005)「子どもの出自を知る権利の必要性—生殖補助医療と養子制度より—」『心理福祉学部紀要』1、29-39
- 西條剛央(2005)『構造主義とは何か 次世代人間科学の原理』北大路書房
- 坂本正子(2008)「D Iで親になるためのレディネスへの支援」主任研究者才村眞理『平成 18・19 年度文部科学研究費補助金(萌芽研究)「生殖補助医療により生まれた子どもの権利用途後ソーシャルワークによる支援のあり方」報告書』126-7
- 坂田周一(2003)『社会福祉リサーチ 調査手法を理解するために』有斐閣アルマ
- 高梨公之監修(1996)『実例民法』自由国民社
- University of Toronto, Counselling and Learning Skills Service, "Counseling and learning skills service" (2009) (<http://www.calss.utoronto.ca/SAInformation/saforms.htm#Social>) 2009. 05. 01. 検索
- Victims by chance, survivors by choice(2009), (<http://au.geocities.com/tigrispoet/abusetypes.htm>) 2009. 05. 01. 検索
- 渡辺久子(2008)「生殖補助医療で生まれた子どもの心」『子育て支援と世代間伝達 母子相互作用と心のケア』金剛出版、132-43
- 渡辺久子(2005)「生殖補助医療で生まれた子の予後」『ホルモンと臨床』53、85-94
- (社)家庭養護促進協会(1995)『特別養子縁組成立家庭に対する調査結果報告書』
- (財)日本児童福祉協会、厚生省児童家庭局育成課監修(1981)『里親になる—制度の解説と養育の手引き—』27

## V. 研究の結果[2]

- 荒川義子(1992)「ワーカーの自己理解とクライアントとの関係—ライフヒストリーを通して—」『ソーシャルワーク研究』18(3)、42-45
- Bill Cordray(2004) 'To Be a Person Born Through Donor Insemination', (=2004 年 9 月 10 日明治安田こころの健康財団児童思春期講座における講演原稿)
- Bill Cordray(2004) 'The Right of a Donor Conceived Person to Know his Genetic Roots' (=2004 年 9 月 11 日慶応大学付属病院での講演原稿)
- Bill Cordray(2008) (=ビル・コードレイ/才村眞理訳「補論2 WAIMHワークショップにおけるビル・コードレイの発表」(2008)才村眞理編著『生殖補助医療で生まれた子どもの出自を知る権利』福村出版、131-88)
- 朴 東〇・茂呂雄二(2006)「談話の進行と状況の定義が作るダイナミクス—社会文化活動の心理学における相互行為、談話、会話、言説」能智正博編『〈語り〉と出会う 質的研究の新たな展開に向けて』ミネルヴァ書房
- Donor Sibling Registry, "Educating, Connecting and Supporting Donor Families" (<http://www.donorsiblingregistry.com/>) 2009. 4. 10. 検索
- Donor Sibling Registry (2007), "Are you thinking of Donating Sperm? Your medical history, past, present and future..." (<http://www.donorsiblingregistry.com/>) 2008. 4. 10. 検索
- 塙 朋子・小松孝至(2000)「児童期における情動経験：怒り・悲しみ・喜び・恥の比較と発達的变化・性差の検討」東京大学『東京大学大学院教育学研究科紀要』39、19-42
- 原 一子(1987)「恥意識に関する文化的考察序説—日本人の恥意識と同質的社会—」聖徳栄養短期大学『聖徳栄養短期大学紀要』17、79-88
- 早川雅子(1996)「恥と相互行為」金城学院大学『金城学院大学大学院文学研究科論集』2、75-95
- 樋口匡貴(2000)「恥の構造に関する研究」日本社会心理学会『社会心理学研究』16(2)、103-13
- 久崎孝浩(2006)「向社会的行動に対する恥・罪悪感の機能」九州ルーテル学院大学『紀要』35、1-15

- 久崎孝浩(2002)「恥および罪悪感とは何か—その定義、機能、発達とは—」九州大学『九州大学心理学研究』3、69-76
- 細川清(1988)『新しい養子法～入門から戸籍・家事審判の実務まで～』(社)民事法情報センター
- 保坂亨(1998)「『おうむ返し』という形の形式化とその流布はなぜ起きたのか？」田畑治編『現代のエスプリ クライアント中心療法』至文堂、187-196
- International Donor Offspring Alliance (<http://web.jaguar paw.co.uk/idoa/>), 2009.07.20. 検索
- John Bowlby(1980), "Attachment and Loss, Vol.3 Loss: Sadness and Depression", The Hogarth Press Ltd. (J・ボウルビィ/黒田実郎・吉田恒子・横浜恵三子訳『母子関係の理論Ⅲ 対象喪失』岩崎学術出版社
- 勝山貴美子(2003)「『暗闇の世界はどうですか』—看護におけるナラティブ・プラクティス—」『現代のエスプリ ナラティブ・プラクティス』至文堂、85-97
- 久保紘章(1990)「利用者からの視点」『ソーシャルワーク研究』16(3)、12-9
- 久保紘章(1982)「セルフ・ヘルプ・グループの台頭」『ソーシャルワーク研究』8(3)、1
- 小森康永・野村直樹(2003)「ナラティブ・プラクティスに向けて」『現代のエスプリ ナラティブ・プラクティス』至文堂、5-12
- Ken Daniels(2007), *"Donor gametes: anonymous or identified?"*, BEST PRACTICE AND RESEARCH CLINICAL OBSTETRICS AND GYNAECOLOGY, 21(1)、113-28
- Kenneth J. Gergen (1994), *"Realities and Relationships Soundings in social construction"*, Harvard University Press (=K・J・ガーゲン/永田素彦、深尾誠訳(2004)『社会構成主義の理論と実際—関係性が現実をつくる—』ナカニシヤ出版)
- 木原活信(2005)「自分史と福祉実践—対抗文章としての記録(ナラティブ・リコード)について—」『ソーシャルワーク研究』31(3)、28-35
- 木野和代(2008)「怒りの表出—怒りはどのように表に出されるのか—」湯川進太郎編『怒りの心理学—怒りとうまく付き合うための理論と方法—』有斐閣、39-58
- 小松源助(2000)「ソーシャルワーク研究における価値と倫理に関する諸問題—ストレングス視点からの考察—」『ソーシャルワーク研究』25(4)、4-10
- 松倉真理子(2000)「ソーシャルワークにおける『ストーリー』の思考」『ソーシャルワーク研究』26(3)、48-55
- マイケル・ルイス(2007)「子どもと家族—ソーシャル・ネットワーク・モデル」マイケル・ルイス、高橋恵子編/高橋恵子監訳『愛着からソーシャル・ネットワークへ 発達心理学の新展開』新曜社、7-38
- マリナス・H・ヴァン・イーゼンドーン(2007)「ソーシャル・ネットワークの中の愛着—進化論的ソーシャル・ネットワーク・モデルへ」マイケル・ルイス、高橋恵子編/高橋恵子監訳『愛着からソーシャル・ネットワークへ 発達心理学の新展開』新曜社、137-42
- Michael Lewis(1992), "Shame: The Exposed Self", Michael Lewis(=M. ルイス/高橋恵子監訳(1997)『恥の心理学—傷つく自己—』ミネルヴァ書房)
- Michael White and David Epston(1990) *"Narrative Means to Therapeutic Ends"* W.W.Norton, New York(=小森康永訳(1992)『物語としての家族』金剛出版)
- 宮嶋淳・才村眞理(2006)「非配偶者間人工授精における人権侵害とソーシャルワーク」『社会福祉学』47(3)、16-28
- 村山正治(1981)「一カウンセラーとセルフヘルプグループ」『ソーシャルワーク研究』6(4)、43-46
- 中野洋・野村雅昭(1979)「日本語の形態素分析」『情報処理』20(10)、857-63
- 中田智恵海(2000)「セルフヘルプ・グループはソーシャルワークとは無縁か—特に家族の支援について—」『ソーシャルワーク研究』26(3)、40-47



- 中田智恵海(1994)「セルフヘルプグループ(家族の会)の機能と専門職との関連」『ソーシャルワーク研究』19(4)、58-65
- 日本社会福祉実践理論学会監修・米本秀仁、高橋信行、志村健一編著(2004)『事例研究・教育法 理論と実践力の向上を目指して』川島書店
- 野口裕二(2003)「社会学とナラティブ・プラクティス」『現代のエスプリ ナラティブ・プラクティス』至文堂、13-21
- 野上丈晴(2008)「補論 Donor Sibling Registry(DSR)-当事者の開設 HP:アメリカ」才村眞理編『生殖補助医療で生まれた子どもの権利』福村出版、118-130
- 能智正博(2006)「“語り”と“ナラティブ”のあいだ」能智正博編『〈語り〉と出会う 質的研究の新たな展開に向けて』ミネルヴァ書房、11-72
- 大柴譲治(2002)「罪 guilt と恥 shame」ルーテル学院大学『ルター研究』8、127-66
- Raimond Gaita(2001), *"A Common Humanity - Thinking about love and truth and justice"*, the Times literary supplement. 5137、30-9
- R. M. MacIver(1924), *"Community"*, Macmillan and Co., Limited, (=R. M. マッキーマー／中久郎、松本通晴訳(1975)『コミュニティ』ミネルヴァ書房)132-6
- ロバート・ピンカー／中村克孝訳(1997)「プライバシーと福祉」『ソーシャルワーク研究』23(1)、49-58
- Sacha Finn (2009), *"#0073"*, Donor Sibling Registry (<http://www.donorsiblingregistry.com/>) 2009. 04. 10. 検索
- 才村眞理編著(2008)『生殖補助医療で生れた子どもの出自を知る権利』福村出版
- 才村眞理・宮嶋淳(2003)「生殖補助医療に伴う子どもの権利性の社会的支援に関する質的研究」『社会福祉学』44(1)
- 坂本正子(2008)「D I で親になるためのレディネスへの支援」主任研究者才村眞理『平成 18・19 年度文部科学研究費補助金(萌芽研究)「生殖補助医療により生まれた子どもの権利用途後ソーシャルワークによる支援のあり方」報告書』126-7
- Shelia McNamee & Kenneth J. Gergen(1992) *"Therapy as Social Construction"* (=野口裕二、野村直樹訳(1997)『ナラティブ・セラピー 社会構成主義の実践』金剛出版)
- 萱間真美(2007)『質的研究実践ノート 研究プロセスを進める clue とポイント』医学書院
- Van Dijk, T. A. (2001) *"Multidisciplinary CDA: A plan for diversity"*, In: R. Wodak & M. Meyer (eds), *Methods of critical discourse analysis*, Sage 95-120
- Wendy Kramer, *"Ryan And Anna, Two Half Siblings Meet"* (<http://www.donorsiblingregistry.com/>) 2009. 04. 10. 検索
- 山崎道子(1994)「今後のソーシャルワーク実践を考える」『ソーシャルワーク研究』20(1)、32-7
- 山崎道子(1981)「自助組織(自助集団)とソーシャルワーク」『ソーシャルワーク研究』6(4)、1
- 米本秀仁(2005)「ソーシャルワーク実践とアセスメントツールは必要なのか？」『ソーシャルワーク研究』31(2)、5-17
- 湯川進太郎(2008)「怒りの理論-怒りとは何か-」湯川進太郎編『怒りの心理学-怒りとうまく付き合うための理論と方法-』有斐閣、3-18
- 渡辺俊太郎(2008)「怒りの健康への影響-怒りは健康を害するののか-」湯川進太郎編『怒りの心理学-怒りとうまく付き合うための理論と方法-』有斐閣、75-96
- (財)日本児童福祉協会、厚生省児童家庭局育成課監修(1981)『里親になる-制度の解説と養育の手引き-』27



